

静岡県掛川市

そがあと
曾我後遺跡発掘調査報告書

1994年8月

掛川市教育委員会
毎日企業株式会社
静岡人類史研究所

静岡県掛川市

そ が あと
曾我後遺跡発掘調査報告書

1994年8月

掛川市教育委員会
毎日企業株式会社
静岡人類史研究所

序

掛川市域は自然に恵まれ、古くから人々が住みつき歴史が重ねられてきた地域です。この大地に刻まれた先人の足跡を知るとき、私たちは祖先への畏敬の念と、その歩みを保存して子孫へ継承し、今日の文化の系譜を伝えていく責務を感じずにはいられません。

地中に眠っている先人の生活の痕跡である埋蔵文化財は最近の開発によりその多くが消滅や破壊の危機にさらされています。昭和25年文化財保護法施行以来、多くの方々の努力により国民の文化財に対する理解が深まっていますが、その保存、活用には不断の努力と熱意が必要です。埋蔵文化財はひとたび破壊されるとその復元は困難で、そこに遺されていた文化のメッセージは永久に失われてしまいます。遺跡や遺物を人類共有の大切な宝として、次の世代に引き継いでいくことができるよう私たちはそれらの文化財を責任をもって愛護していかなくてはなりません。

しかし現代に生きる私たちの生活のため、やむをえず遺跡が姿を変えたり、消滅させられたりすることが多いことも事実です。その場合には、事前に発掘調査を実施し、記録保存というかたちで資料に姿をとどめておいて郷土史やこれからの文化財行政などに役立たせるようにしています。

今回の発掘調査は開発行為に先立ち、用地内に所在する曾我後遺跡について、静岡県教育委員会の指導を得て、掛川市教育委員会が調査主体者となり、静岡人類史研究所が担当して実施されました。

調査の結果、古墳時代の竪穴式住居跡などを検出し、住居跡からは掛川市域では珍しい竈(かまど)が発見されるなど貴重な資料を得ることができました。これらは今後の古代史解明の資料となることはもとより、生涯学習宣言都市掛川市のまちづくりの資料として活用されることが期待されます。

最後に、今回の調査及び本書の刊行にあたり、静岡県教育委員会、事業者、地元の皆様はじめ関係各位のご理解とご協力に厚くお礼申し上げます。

平成6年8月31日

静岡県掛川市教育委員会
教育長 大西 珠枝

例 言

1. 本報告書は静岡県掛川市岡津字伊達方下辻171-1他16筆に計画されているボーリング場建設予定地内に存在する曾我後遺跡の発掘調査記録である。

2. 本調査は毎日企業株式会社の委託により、掛川市教育委員会が調査主体となり、静岡人類史研究所が調査を担当して実施したものである。

3. 調査にあたっては静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、「曾我後遺跡発掘調査連絡会」を設置し、連絡会において発掘方法等の協議を行いながら調査を進行した。

「曾我後遺跡発掘調査連絡会」の構成は以下の通りである。

| | | |
|--------|-----------------|-------|
| ・調査主体者 | 掛川市教育委員会教育長 | 大西 珠枝 |
| ・指導機関 | 静岡県教育委員会文化課指導主事 | 五島 康司 |
| | 指導主事 | 増井 啓太 |
| ・調査担当者 | 静岡人類史研究所所長 | 森 威史 |
| | 静岡人類史研究所調査部長 | 片平 剛 |
| | 静岡人類史研究所学芸員 | 小谷 亮二 |
| ・調査事務局 | 掛川市教育委員会社会教育課課長 | 榛葉 稔 |
| | 社会教育課課長補佐 | 染葉 曜夫 |
| | 社会教育課文化係長 | 澤村 久雄 |
| | 社会教育課主任学芸員 | 松本 一男 |
| ・開発計画者 | 毎日企業株式会社専務取締役 | 吉崎 敬次 |

4. 発掘調査は平成5年9月29日より平成6年2月4日まで実施した。また、遺物の整理と報告書の作成は平成6年2月7日より平成6年7月30日まで実施した。

5. 遺物の実測およびトレースは、小金澤保雄、大倉妙子、田中久美子が行った。写真撮影は小谷亮二が行い、空中写真の撮影は株式会社東日に委託した。

6. 原稿の執筆は、松本一男(掛川市教育委員会、第Ⅰ章)、小谷亮二(第Ⅱ章～第Ⅳ章)、小金澤保雄(第Ⅳ章)、森威史・小金澤保雄(第Ⅴ章)が分担し、編集は森威史・小谷亮二が行った。

7. 発掘調査および遺物の整理においては次の方々に御指導と御助言を賜った。また、中嶋総合設計事務所の大杉課長には発掘調査を進めるにあたり多大な御協力を頂いた。感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

柴田 瞳 鈴木 敏則 鈴木 敏中 芦川 忠利 池谷 初恵 システム提案

8. 本調査における図面・写真・遺物・コンピュータにより処理したデータはすべて掛川市教育委員会で保管している。

9. 発掘調査および遺物整理参加者。

・調査員 森 威史・片平 剛・小金澤 保雄・小谷 亮二

・発掘調査作業員

伊藤 正夫 伊東 みさゑ 堀内 藤一 宮崎 昭太郎 村松 幸雄

安田 小作 山内 誠 山崎 祐代 戸田 増男 木下 治

戸田 寅平 新本 光茂 佐藤 栄吉 伊藤 ちよ子 伊藤 わか子

小野川 算子 築山 廣 長谷川 勇次郎

・遺物整理 大倉 妙子 田中 久美子 鈴木 亮子 海野 佳世子 前川 紀子

10.本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

①遺構挿図の縮尺

各遺構の縮尺はバースケールで示した。

②スクリーントーン



遺構・遺構面



焼土



排水溝

③遺物挿図の縮尺

土器・石製品の実測図の縮尺はバースケールで表示した。

④写真図版の縮尺

土器・石製品の縮尺は任意である。

⑤断面図の水糸レベルは海拔高を示し、単位はメートルである。

⑥遺構の文章中に表記してある標高は遺構確認面の高さを表す。

⑦遺構の断面形状(長径または長軸に対する断面)の表現は下の図に基づくものである。

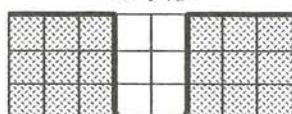
狭いV字形



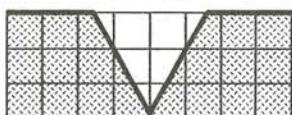
狭い舟底状



U字形



V字形



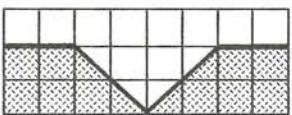
舟底状



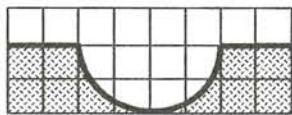
上に開くU字形



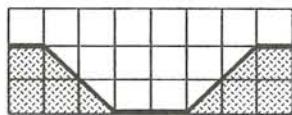
上に開くV字形



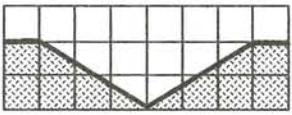
丸底状



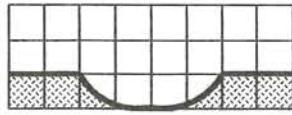
上に広く開くU字形



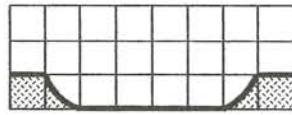
上に広く開くV字形



浅い丸底状



皿状



目 次

序

例言

| | |
|-------------------------|-----|
| 第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯 | 1 |
| 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境 | |
| 第1節 遺跡の立地 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 6 |
| 第Ⅲ章 発掘調査の概要 | |
| 第1節 調査方法 | 8 |
| 第2節 発掘調査の経過 | 10 |
| 第3節 遺跡の層序 | 12 |
| 第Ⅳ章 発掘調査の結果 | |
| 第1節 弥生時代の遺構と遺物 | 16 |
| 第2節 古墳時代の遺構と遺物 | 44 |
| 第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物 | 146 |
| 第4節 その他の遺構と遺物 | 168 |
| 第Ⅴ章 調査の成果と課題 | 176 |

付表 土器観察表

写真図版

挿図目次

| | | |
|---------|------------------|----|
| 図Ⅱ－1－1 | 曾我後遺跡の位置図 | 2 |
| 図Ⅱ－1－2 | 曾我後遺跡周辺の地形区分図 | 2 |
| 図Ⅱ－1－3 | 曾我後遺跡周辺の地質図 | 4 |
| 図Ⅱ－2－1 | 曾我後遺跡周辺の遺跡分布図 | 6 |
| 図Ⅲ－1－1 | 調査対象地のグリッド設定図 | 8 |
| 図Ⅲ－3－1 | 東地区の層序模式図 | 12 |
| 図Ⅲ－3－2 | 西地区の層序模式図 | 14 |
| 図Ⅳ－1－1 | 弥生時代の遺構分布図（溝状遺構） | 16 |
| 図Ⅳ－1－2 | 第8号溝の平面および断面図 | 18 |
| 図Ⅳ－1－3 | 第8号溝の遺物分布図 | 19 |
| 図Ⅳ－1－4 | 第8号溝から出土した土器（1） | 20 |
| 図Ⅳ－1－5 | 第8号溝から出土した土器（2） | 22 |
| 図Ⅳ－1－6 | 第8号溝から出土した土器（3） | 24 |
| 図Ⅳ－1－7 | 第8号溝から出土した土器（4） | 26 |
| 図Ⅳ－1－8 | 第8号溝から出土した土器（5） | 28 |
| 図Ⅳ－1－9 | 第12号溝の平面および断面図 | 30 |
| 図Ⅳ－1－10 | 第12号溝の遺物分布図 | 31 |
| 図Ⅳ－1－11 | 第12号溝から出土した土器（1） | 32 |
| 図Ⅳ－1－12 | 第12号溝から出土した土器（2） | 34 |
| 図Ⅳ－1－13 | 第13号溝の平面および断面図 | 36 |
| 図Ⅳ－1－14 | 第13号溝の遺物分布図 | 37 |
| 図Ⅳ－1－15 | 第13号溝の遺物出土状況図 | 38 |
| 図Ⅳ－1－16 | 第13号溝から出土した土器 | 39 |
| 図Ⅳ－1－17 | 排水溝から出土した土器（1） | 40 |
| 図Ⅳ－1－18 | 排水溝から出土した土器（2） | 42 |
| 図Ⅳ－1－19 | テスト・ピットから出土した土器 | 42 |
| 図Ⅳ－2－1 | 古墳時代の遺構分布図（全体） | 44 |
| 図Ⅳ－2－2 | 古墳時代の遺構分布図（住居址） | 44 |
| 図Ⅳ－2－3 | 古墳時代の遺構分布図（土坑） | 45 |
| 図Ⅳ－2－4 | 古墳時代の遺構分布図（溝状遺構） | 45 |
| 図Ⅳ－2－5 | 第1号住居址の平面および断面図 | 46 |
| 図Ⅳ－2－6 | 第1号住居址の礫の分布図 | 47 |
| 図Ⅳ－2－7 | 第1号住居址の竈平面および断面図 | 48 |
| 図Ⅳ－2－8 | 第1号住居址の遺物分布図 | 49 |
| 図Ⅳ－2－9 | 第1号住居址の遺物出土状況図 | 50 |
| 図Ⅳ－2－10 | 第1号住居址から出土した土器 | 50 |

| | | |
|----------|----------------------------|----|
| 図IV-2-11 | 第2号住居址の平面および断面図 | 52 |
| 図IV-2-12 | 第2号住居址の竈の平面および断面図 | 54 |
| 図IV-2-13 | 第2号住居址の遺物分布図 | 55 |
| 図IV-2-14 | 第2号住居址の遺物出土状況図 | 56 |
| 図IV-2-15 | 第2号住居址から出土した土器（1） | 57 |
| 図IV-2-16 | 第2号住居址から出土した土器（2）と勾玉 | 58 |
| 図IV-2-17 | 第3号住居址の平面および断面図 | 60 |
| 図IV-2-18 | 第3号住居址の竈の平面および断面図 | 62 |
| 図IV-2-19 | 第3号住居址の遺物分布図 | 63 |
| 図IV-2-20 | 第3号住居址の遺物出土状況図 | 63 |
| 図IV-2-21 | 第3号住居址から出土した土器（1） | 64 |
| 図IV-2-22 | 第3号住居址から出土した土器（2） | 66 |
| 図IV-2-23 | 第4号住居址の平面および断面図 | 68 |
| 図IV-2-24 | 第4号住居址内の土坑の平面および断面図 | 69 |
| 図IV-2-25 | 第4号住居址の遺物分布図 | 70 |
| 図IV-2-26 | 第4号住居址から出土した土器 | 70 |
| 図IV-2-27 | 第5号住居址の平面および断面図 | 72 |
| 図IV-2-28 | 第5号住居址内の土坑の平面および断面図 | 73 |
| 図IV-2-29 | 第5号住居址の竈の平面および断面図 | 74 |
| 図IV-2-30 | 第5号住居址の遺物分布図 | 75 |
| 図IV-2-31 | 第5号住居址から出土した土器 | 76 |
| 図IV-2-32 | 第6号住居址の平面および断面図 | 78 |
| 図IV-2-33 | 第6号住居址の遺物分布図 | 79 |
| 図IV-2-34 | 第6号住居址の遺物出土状況図 | 80 |
| 図IV-2-35 | 第6号住居址から出土した土器 | 80 |
| 図IV-2-36 | 第7号住居址の平面および断面図 | 82 |
| 図IV-2-37 | 第7号住居址の竈の平面および断面図 | 84 |
| 図IV-2-38 | 第7号住居址の遺物分布図 | 85 |
| 図IV-2-39 | 第7号住居址から出土した土器 | 85 |
| 図IV-2-40 | 第8号住居址の平面および断面図 | 86 |
| 図IV-2-41 | 第8号住居址の遺物分布図 | 86 |
| 図IV-2-42 | 第8号住居址から出土した土器 | 87 |
| 図IV-2-43 | 第9号住居址の平面および断面図 | 88 |
| 図IV-2-44 | 第9号住居址の遺物分布図 | 89 |
| 図IV-2-45 | 第9号住居址から出土した土器 | 90 |
| 図IV-2-46 | 第10号住居址の平面および断面図 | 92 |
| 図IV-2-47 | 第10号住居址の竈の平面および断面図 | 93 |
| 図IV-2-48 | 第10号住居址の遺物分布図 | 94 |
| 図IV-2-49 | 第10号住居址の遺物出土状況図 | 95 |
| 図IV-2-50 | 第10号住居址から出土した土器（1） | 96 |

挿図目次

| | | |
|----------|--------------------|-----|
| 図IV-2-51 | 第10号住居址から出土した土器（2） | 98 |
| 図IV-2-52 | 第11号住居址の平面および断面図 | 100 |
| 図IV-2-53 | 第11号住居址の竈の平面および断面図 | 101 |
| 図IV-2-54 | 第11号住居址の遺物分布図 | 102 |
| 図IV-2-55 | 第11号住居址から出土した遺物 | 102 |
| 図IV-2-56 | 第12号住居址の平面および断面図 | 104 |
| 図IV-2-57 | 第12号住居址の竈の平面および断面図 | 105 |
| 図IV-2-58 | 第4号土坑の平面および断面図 | 106 |
| 図IV-2-59 | 第4号土坑の遺物分布図 | 106 |
| 図IV-2-60 | 第4号土坑から出土した土器 | 107 |
| 図IV-2-61 | 第5号土坑の平面および断面図 | 108 |
| 図IV-2-62 | 第5号土坑の遺物分布図 | 108 |
| 図IV-2-63 | 第5号土坑の遺物出土状況図 | 108 |
| 図IV-2-64 | 第6号土坑の平面および断面図 | 108 |
| 図IV-2-65 | 第5号土坑から出土した土器 | 109 |
| 図IV-2-66 | 第8号土坑の平面および断面図 | 110 |
| 図IV-2-67 | 第11号土坑の平面および断面図 | 110 |
| 図IV-2-68 | 第12号土坑の平面および断面図 | 112 |
| 図IV-2-69 | 第12号土坑の遺物分布図 | 113 |
| 図IV-2-70 | 第12号土坑から出土した土器 | 114 |
| 図IV-2-71 | 第13号土坑の平面および断面図 | 116 |
| 図IV-2-72 | 第13号土坑の遺物分布図 | 117 |
| 図IV-2-73 | 第13号土坑から出土した土器 | 118 |
| 図IV-2-74 | 第11号溝の平面および断面図 | 120 |
| 図IV-2-75 | 第11号溝の遺物分布図 | 120 |
| 図IV-2-76 | 第11号溝から出土した土器 | 122 |
| 図IV-2-77 | 第12号溝の平面および断面図 | 124 |
| 図IV-2-78 | 第12号溝の遺物分布図 | 125 |
| 図IV-2-79 | 第12号溝から出土した土器（1） | 126 |
| 図IV-2-80 | 第12号溝から出土した土器（2） | 128 |
| 図IV-2-81 | 第8号溝から出土した土師器（1） | 130 |
| 図IV-2-82 | 第8号溝から出土した土師器（2） | 132 |
| 図IV-2-83 | グリッドから出土した土器（1） | 134 |
| 図IV-2-84 | グリッドから出土した土器（2） | 136 |
| 図IV-2-85 | グリッドから出土した土器（3） | 138 |
| 図IV-2-86 | 排水溝から出土した土器（1） | 140 |
| 図IV-2-87 | 排水溝から出土した土器（2） | 142 |
| 図IV-2-88 | 排水溝から出土した土器（3） | 144 |
| 図IV-2-89 | テスト・ピットから出土した土器 | 144 |

| | | |
|----------|---------------------------|-----|
| 図IV-3-1 | 奈良・平安時代の遺構分布図（全体） | 146 |
| 図IV-3-2 | 奈良・平安時代の遺構分布図（土坑） | 146 |
| 図IV-3-3 | 奈良・平安時代の遺構分布図（溝状遺構） | 147 |
| 図IV-3-4 | 第1号土坑の平面および断面図 | 148 |
| 図IV-3-5 | 第2号土坑の平面および断面図 | 149 |
| 図IV-3-6 | 第3号土坑の平面および断面図 | 149 |
| 図IV-3-7 | 第7号土坑の平面および断面図 | 150 |
| 図IV-3-8 | 第10号土坑の平面および断面図 | 150 |
| 図IV-3-9 | 第9号土坑の平面および断面図 | 152 |
| 図IV-3-10 | 第9号土坑の遺物分布図 | 153 |
| 図IV-3-11 | 第9号土坑から出土した土器 | 153 |
| 図IV-3-12 | 第6号溝の平面および断面図 | 154 |
| 図IV-3-13 | 第6号溝の遺物分布図 | 155 |
| 図IV-3-14 | 第6号溝から出土した土器 | 155 |
| 図IV-3-15 | 第9号溝の平面および断面図 | 156 |
| 図IV-3-16 | 第9号溝の遺物分布図 | 157 |
| 図IV-3-17 | 第9号溝から出土した土器 | 158 |
| 図IV-3-18 | 第10号溝の平面および断面図 | 160 |
| 図IV-3-19 | 遺構外から出土した土器—グリッド（1） | 162 |
| 図IV-3-20 | 遺構外から出土した土器—グリッド（2） | 164 |
| 図IV-3-21 | 遺構外から出土した土器—グリッド（3） | 166 |
| 図IV-4-1 | その他の遺構分布図（全体） | 168 |
| 図IV-4-2 | その他の遺構分布図（溝状遺構） | 168 |
| 図IV-4-3 | その他の遺構分布図（ピット） | 169 |
| 図IV-4-4 | 第1号溝の平面および断面図 | 170 |
| 図IV-4-5 | 第3号溝の平面および断面図 | 171 |
| 図IV-4-6 | 第4号溝の平面および断面図 | 172 |
| 図IV-4-7 | 第5号溝の平面および断面図 | 173 |
| 図IV-4-8 | 第1号～6号ピットの平面図 | 174 |
| 図IV-4-9 | 第1号～6号ピットの遺物分布図 | 174 |
| 図IV-4-10 | 第5号ピットから出土した土器 | 175 |
| 図IV-4-11 | 遺構以外から出土した遺物 | 175 |
| 図V-1-1 | 弥生時代の溝状遺構から出土した土器の集成図 | 177 |
| 図V-2-1 | 古墳時代の第1群住居址より出土した土器の集成図 | 178 |
| 図V-2-2 | 古墳時代の第2・3群住居址より出土した土器の集成図 | 180 |
| 図V-2-3 | 古墳時代の土坑・溝状遺構より出土した土器の集成図 | 183 |
| 図V-2-4 | 遺構以外から出土した古墳時代の土器の集成図 | 184 |
| 図V-3-1 | 奈良・平安時代の土器集成図 | 186 |

表 目 次

| | |
|----------------------------|-----|
| 表V－2－1 古墳時代の土坑一覧表 | 182 |
| 表V－3－1 奈良・平安時代の土坑一覧表 | 187 |

写真図版目次

| | |
|--|--------------------------|
| 1.遺跡の全景 | 2.第8号溝 |
| 3.第12号溝 | 4.第12号溝の遺物出土状況（弥生土器） |
| 5.第13号溝 | 6.第13号溝の遺物出土状況(遺物No5693) |
| 7.第13号溝の遺物出土状況(遺物No5698) | 8.第1号住居址 |
| 9.第2号から第6号住居址 | 10.第1号住居址の竈 |
| 11.第1号住居址内の礫出土状況 | 12.第2号住居址の竈と甌 |
| 13.第2号住居址の遺物出土状況 | 14.第3号住居址の竈 |
| 15.第3号住居址の遺物出土状況 | 16.第5号住居址の竈 |
| 17.第7号住居址 | 18.第7号住居址の竈（掘り方） |
| 19.第8号から第10号住居址 | 20.第8号住居址の竈 |
| 21.第10号住居址の竈 | 22.第10号住居址の遺物出土状況（1） |
| 23.第10号住居址の遺物出土状況（2） | 24.第11号住居址と第12号住居址 |
| 25.第11号住居址の竈 | 26.第12号住居址の竈 |
| 27.第5号土坑と第6号土坑 | 28.第11号溝 |
| 29.第12号溝の遺物出土状況（土師器） | 30.第3号溝 |
| 31.第1号溝と第4号から第6号ピット（確認時プラン） | |
| 32.弥生時代の溝状遺構から出土した土器 | |
| 第8号溝 遺物No6001 遺物No6003 遺物No6004 遺物No6006 遺物No6008 | |
| 遺物No6020 遺物No6021 遺物No6029 遺物No6035 | |
| 第12号溝 遺物No5648.2 | |
| 第13号溝 遺物No5693 遺物No5698 遺物No5703 | |
| 33.古墳時代の住居址から出土した遺物（1） | |
| 第1号住居址 遺物No4801 遺物No4805 遺物No4806 | |
| 第2号住居址 遺物No4836他 遺物No5545 遺物No4952 遺物No5147.1 遺物No5523 | |
| 遺物No4949 遺物No5016 | |
| 第3号住居址 遺物No5293.1 遺物No5293.2 遺物No969 | |
| 34.古墳時代の住居址から出土した遺物（2） | |
| 第4号住居址 遺物No5410 | |
| 第6号住居址 遺物No5289 遺物No4289他 | |
| 第7号住居址 遺物No5014 | |
| 第10号住居址 遺物No5532 遺物No5122 遺物No5123他 遺物No5121 遺物No5533 | |
| 遺物No5141 遺物No5125 遺物No5135.1 | |

第11号住居址 遺物No5586

35.古墳時代の土坑・溝状遺構から出土した土器

第5号土坑 遺物No2623

第12号土坑 遺物No5497 遺物No5498 遺物No5491 遺物No5284.1

第13号土坑 遺物No5284.3 遺物No5287.2

第8号溝 遺物No5632

第11号溝 遺物No5602.1

第12号溝 遺物No5683 遺物No5680 遺物No5681 遺物No5491

36.古墳時代の遺構以外から出土した土器

遺物No211 遺物No4317 遺物No4972 遺物No2563 遺物No5502 遺物No1750

遺物No3467他 遺物No6080 遺物No6081

37.奈良・平安時代の土器

第9号溝 遺物No4833

遺構以外 遺物No3463 遺物No2667 遺物No4318 遺物No182他 遺物No1739他

遺物No1478 遺物No2218 遺物No4826

38.その他の遺物

遺物No823 遺物No3861

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯

曾我後遺跡付近に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が所在することが、知られるようになったのは随分と久しいことである。昭和5年頃に出された『曾我の古代文化』によると、調査地の南東にある曾我小学校北側の領家橋から西側に所在する八幡橋までの間3地点において、弥生時代から古墳時代の土器が出土していることが紹介されている。所在地については遺跡名でなく、A・B・Cの地点名で記載されている。そして、それ以後に作製した『掛川市遺跡地図』(昭和57年度)では、「曾我後遺跡」として登録された。

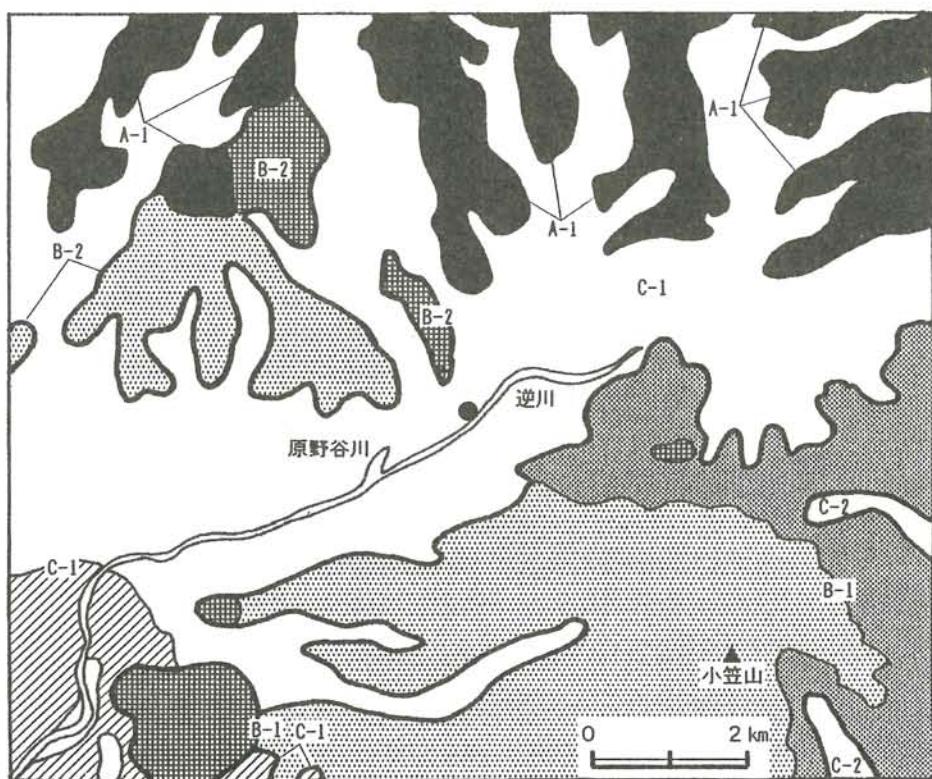
付近での発掘調査には、昭和58年8月に実施した曾我小学校屋内運動場建設に伴う領家遺跡発掘調査、昭和63年1～3月に実施した給油所建設に先立つ曾我後遺跡発掘調査がある。前の調査では奈良時代の柱穴・溝を不規則な状態で確認、後の調査では弥生時代後期の土器、古墳時代中期の土師器、平安時代の須恵器・土師器などの出土とあわせて、柱穴列・土坑などの遺構を確認した。これらの調査結果から、曾我後遺跡が弥生時代後期、古墳時代中期から後期、そして平安時代において営まれた集落跡であることがわかつってきた。

平成5年2月、今回調査の対象となった地点にボーリング場建設が計画され、計画地における「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて(照会)」(平成5年2月4日付受付)が提出された。計画地に曾我後遺跡が所在することから、掛川市教育委員会と事業者である毎日企業株式会社(浜松市)との間で、開発行為における遺跡の取り扱いについての協議が始まった。協議では、まず「遺跡所在確認調査」を実施して遺跡の所在状況を確認し、その結果に基づいて遺跡の取り扱いを決めることになった(平成5年2月24日付掛教社第883号受付「確認調査依頼書」に基づき平成5年5月11日確認調査実施)。その結果、曾我後遺跡が計画地の南域に寄って分布し、北域には所在しないことが判明した。それを受け、当初計画地の南域に予定していた建物を北側に寄せて建て、できる限り地下に所在する埋蔵文化財に影響のないようにすることで調整が成された。しかし、計画する建物の一部が遺跡所在範囲に及んでしまうことから、その部分においてのみ本発掘調査を実施することになった。

本発掘調査については、事業者から掛川市教育委員会に実施の依頼があったが、年度途中で即応できないことから静岡人類史研究所に依頼して実施することになった(平成5年9月28日「曾我後遺跡発掘調査に関する協定書」締結)。現地の調査については、調査主体者：掛川市教育委員会、調査指導機関：静岡県教育委員会、調査実施機関：静岡人類史研究所、事務局：掛川市教育委員会、事業者：毎日企業株式会社により構成する「曾我後遺跡発掘調査連絡会」を設置し、実施した。連絡会は毎月1回開催し、発掘調査の進捗状況の報告、遺構・遺物の検出状況を踏まえ発掘調査方法の検討、次月における調査の進め方・予定について、事業者側からの意向・要望について等を議題として討議した。そして最終的には6回の連絡会を行い、現地作業を終えた。



図II-1-1 曾我後遺跡の位置図



凡例

| | |
|------------|--------------|
| A 赤石山地 | 山麓地 |
| -1 志太・春野山地 | |
| B 遠州台地・丘陵地 | 大起伏丘陵地 |
| -1 小笠山丘陵地 | |
| -2 袋井丘陵地 | 小起伏丘陵地 |
| C 遠州平地 | 砂礫台地(低地)・段丘地 |
| -1 太田川平野 | |
| -2 菊川平野 | 扇状地性低地 |
| ● 曾我後遺跡 | 三角州性低地 |

資料：土地分類図（静岡県）1991年

図II-1-2 曾我後遺跡周辺の地形区分図

第II章 遺跡の立地と歴史的環境

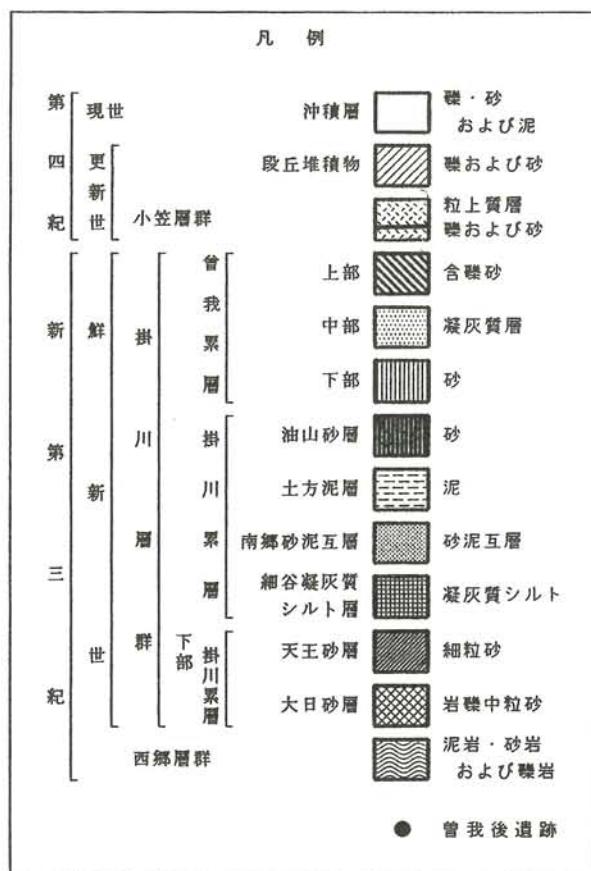
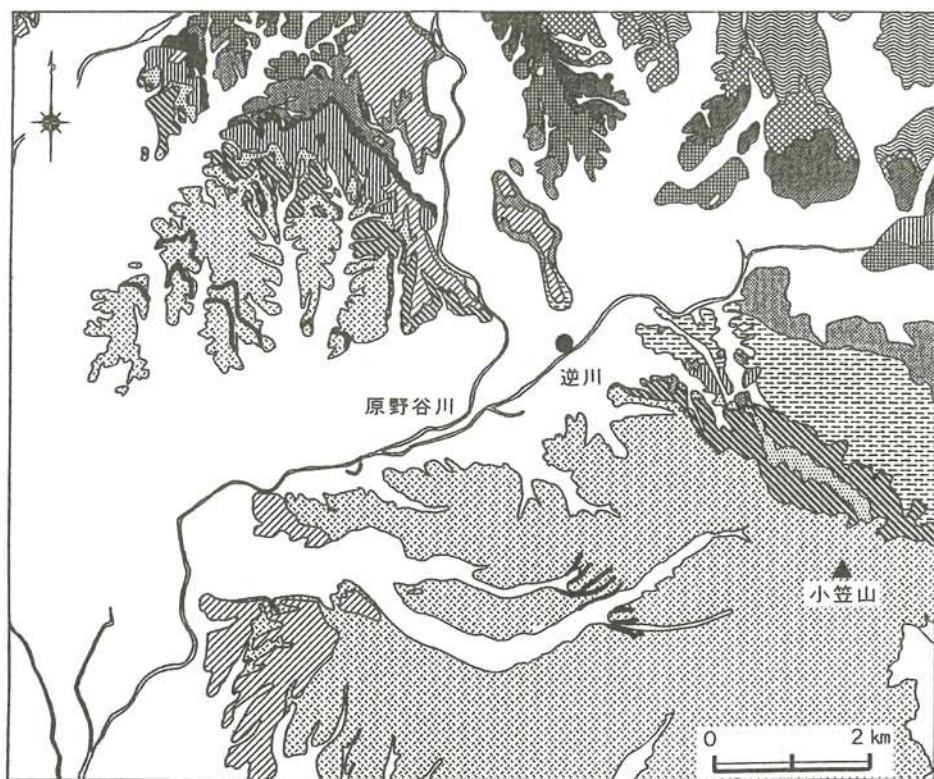
第1節 遺跡の立地

曾我後遺跡は掛川市の南西部で袋井市との市域界に近接し、遺跡の北側は一般国道1号線(掛川バイパス)が北東から南西に走り、遺跡の南側は逆川が北東から南西方向に流下している(図II-1-1)。

曾我後遺跡の周辺の地形は図II-1-2に示す通り、北側は起伏量（地表の最高点と最低点の高度差）が100m以下の山麓地である志太・春野山地と起伏量100m以下の袋井丘陵地が分布している。遺跡の南側には小笠山(標高264m)があり、山頂を通る地質の境界線(北西-南東方向)から東部は起伏量200~100mの大起伏丘陵地で、西部は起伏量が100m以下の小起伏丘陵地である小笠山丘陵地が広がっている。

これらの地域は開析が進み、扇状地性の低地や三角州性の低地によって埋められている。また、逆川や原野谷川などによって形成された扇状地性の低地（太田川平野ともいわれている）が広範囲に分布している。

曾我後遺跡はこの扇状地性の低地上に位置している。



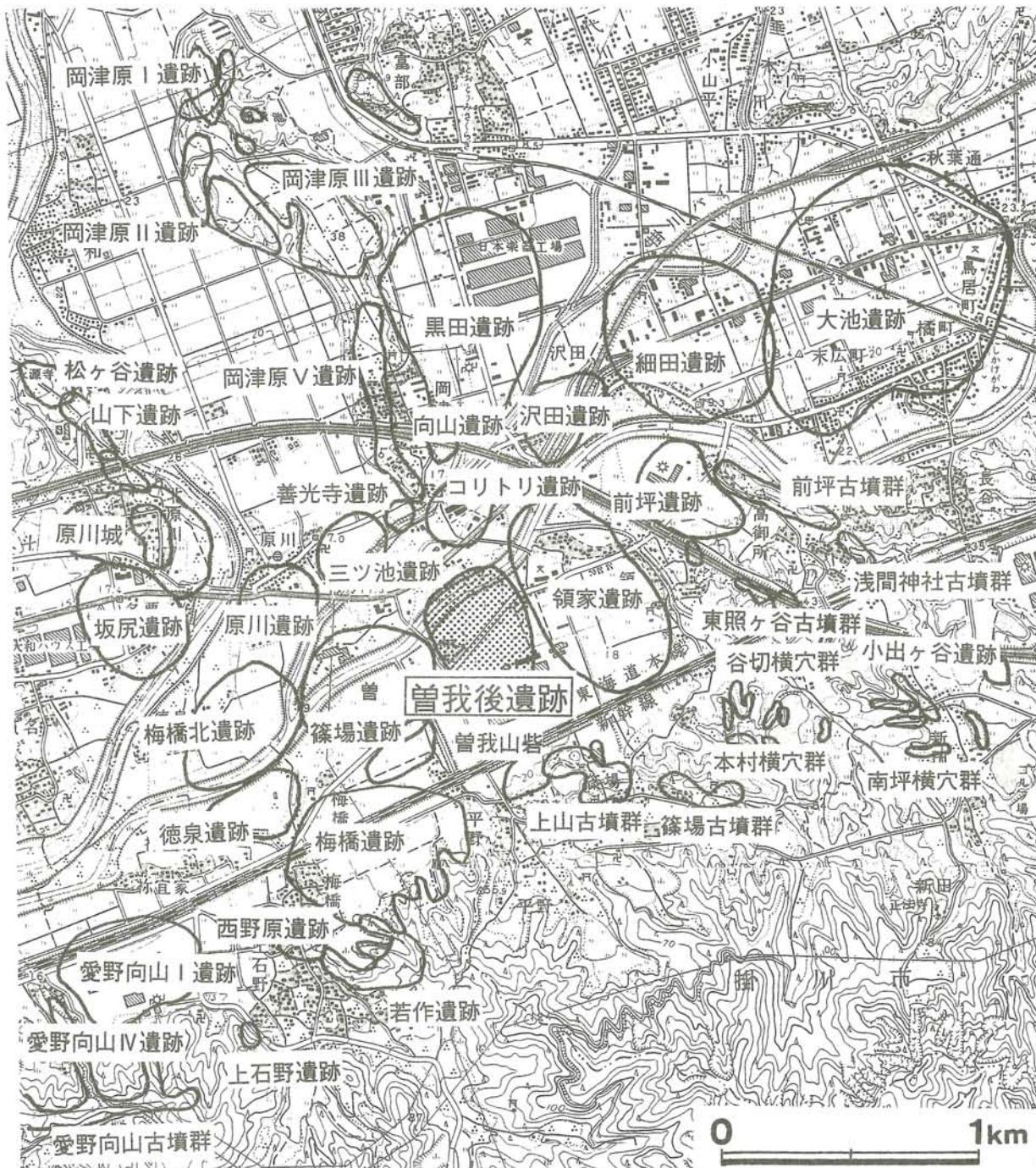
資料：日本地質図体系 中部地方 1991年

図II-1-3 曽我後遺跡周辺の地質図

曾我後遺跡の周辺の地質は図II-1-3に示す通り、北側は新第三紀の掛川層群と西郷層群、第四紀更新世の小笠層群や段丘堆積物から成っている部分などが分布している。曾我後遺跡は扇状地に分布する沖積層(礫・砂および泥からなる)上に位置している。

一方、南側には掛川層群の掛川累層(土方泥層と南郷砂泥互層)と曾我累層および小笠層群が広く分布しているが、小笠山の山頂付近を北西-南東方向に通る地質境界線で大きく区分される。

北西-南東線の西部には礫層を主とする小笠層群がみられ、東部には掛川累層と小笠山を支える基盤の部分である曾我累層が見られる。新第三紀鮮新世の曾我累層は礫・砂層を主とし、泥層をはさむ地層であるため、この地層の違いは丘陵の地形に反映され、浸食されやすい西部の小笠層群が小起伏丘陵地となり、浸食されにくい東部の掛川累層・曾我累層が大起伏丘陵地となっている。



図II-2-1 曾我後遺跡周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的環境

曾我後遺跡は逆川に沿った扇状地性の低地上に位置しており、本遺跡の北方にある袋井丘陵地や岡津丘陵と呼ばれる低地性の段丘地には古墳時代の遺跡が多く、特に古墳や横穴が群集している。さらに本遺跡の東・西・南側には弥生～奈良・平安時代、中世から近世に至るまでの複合遺跡が分布している(図II-2-1)。

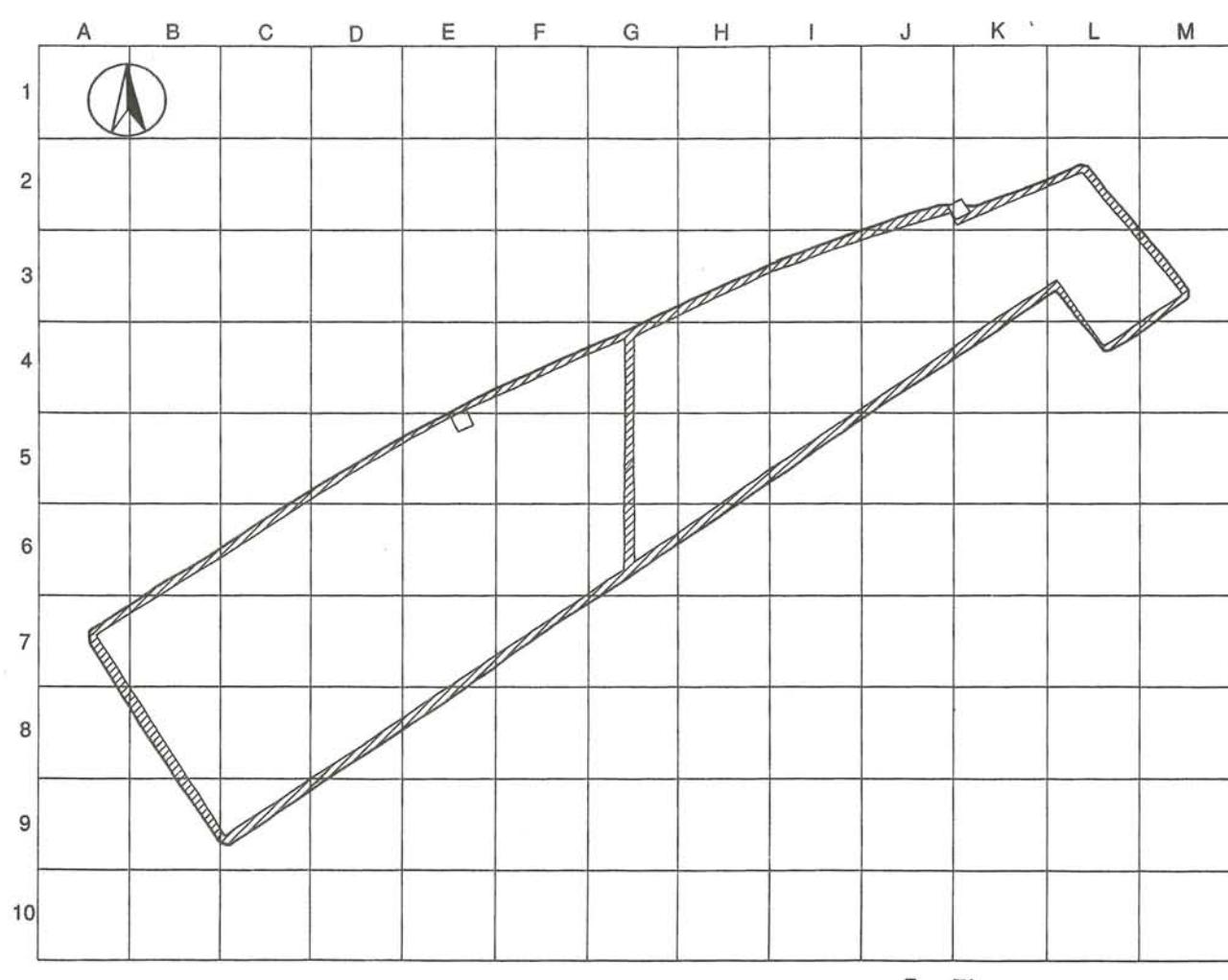
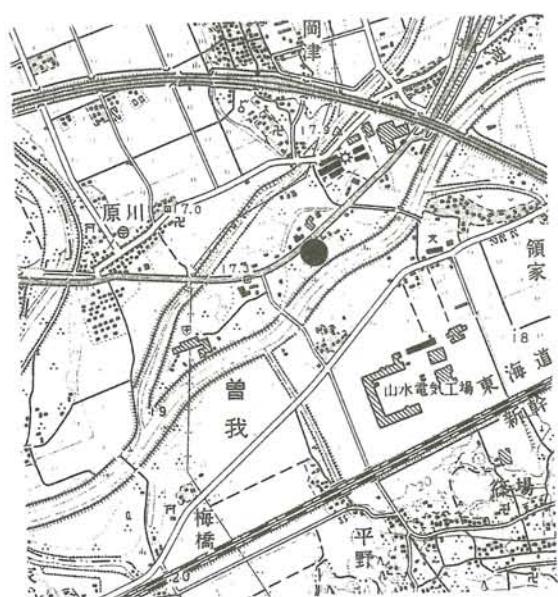
縄文時代から弥生・古墳時代の複合遺跡として、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡があげられる。これらの遺跡の内容については明確にされていないが、岡津原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は曾我後遺跡の北西方向の丘陵地に立地しており、縄文土器や弥生土器、土師器や須恵器などが出土している。黒田遺跡は岡津丘陵の東側に接する扇状地性低地に立地し、この遺跡からも縄文土器・弥生土器・土師器が出土している。

弥生時代の遺跡としては原川遺跡がある。原川遺跡は原野谷川が形成した自然堤防上に立地するもので、その初現は弥生時代中期初頭とされており、それ以後古墳・奈良・平安時代と幾度かの断絶を経ながら近世までに至る複合遺跡である。確認された集落跡は弥生時代の掘立柱建物群と土器棺墓群からなる居住域と墓域が区別された集落跡で、丸子式土器をはじめとする弥生時代中期初頭の遺物が確認されており、中遠地方における最初の農耕集落と考えられているほか、当時の墓制を解明する新たな資料となっている。同遺跡からは古墳時代中期から後期にかけての竪穴式住居跡と掘立柱建物群からなる集落跡も確認されている。中世から近世に関しても、旧東海道の存在から交易、その他の面において重要な位置をしめていたことがうかがえる。このほか、弥生時代の遺跡として篠場遺跡や梅橋遺跡があるほか、弥生時代～古墳時代の遺跡として沢田遺跡・細田遺跡・前坪遺跡が、弥生時代～古代にかけての遺跡として大池遺跡・領家遺跡・平野遺跡があげられる。これらの遺跡はいずれも垂木川と逆川に沿った沖積平野部に立地している。

古墳時代になると岡津丘陵上には中・後期の遺物が散布する岡津原V遺跡が分布し、それに重なるように北側から庚申塚古墳(円墳)・奥ノ原古墳(円墳)・堀田古墳(円墳)・西岡津古墳が点在し、その東側に八幡平古墳群(円墳5基)・東ノ山古墳(円墳)・岡津横穴群(A群: 8基、B群: 16基)・ワゴ横穴群(5基)・向山古墳群(円墳4基)と、丘陵上はほとんど古墳と横穴によって占められている。さらに、岡津丘陵の西北方に位置する和田岡台地には和田岡古墳群があるが、これらを含め約40基からなる原野谷川中流域の古墳群は『先代旧事本紀』の「国造本紀」に見られる“素賀国”に関連する古墳群と考えられている。

また、岡津丘陵下の南側の沖積平野部、すなわち本遺跡の北側には古墳時代から古代にかけての遺物が散布する三ツ池遺跡・善光寺遺跡・コリトリ遺跡が分布している。このほか本遺跡に隣接する坂尻遺跡や梅橋北遺跡も古墳時代から平安時代にかけての遺跡で、墨書土器・灰釉陶器・綠釉陶器などが多く出土しており、坂尻遺跡は遠江国佐野郡の郡衙跡の一部とされている。

以上のように、本遺跡の周辺の低地には集落跡が、さらにその周辺の丘陵・段丘地には古墳・横穴群が多く分布し、それらを統合した一大集落群、すなわち“素賀国”的存在を示唆しており、本遺跡とそれら周辺部の遺跡との関連性が注目されている。



凡 例

| | |
|---|-----|
| □ | 排水升 |
| ▨ | 排水溝 |

0 5m

図III-1-1 調査対象地のグリッド設定図

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第1節 調査方法

調査対象地区(約745m²)の表土を重機により排除した後、作業員を導入して調査地の周囲および調査区中央の南北方向に排水溝(幅・深さ約50cm)をめぐらせ、排水升2ヵ所に水中ポンプを設置し調査地内の水位を下げた。その後調査区全体に5m×5mグリッドを設定した。

全面精査によって遺構および遺物の確認を行い、確認された遺構や遺物については実測図(平面図・断面図・遺物の出土状況図等)を作成し、写真撮影を行った。なお、排土はベルト・コンベヤを使用し調査地外へ搬出する方法をとった。

さらに下層は、排水溝の掘り下げ時およびテスト・ピットで遺構や遺物が確認された場合は上層と同様の処理を行い、遺構や遺物が確認されず無遺物層と判断された場合はその無遺物層を重機により除去した後、再度周囲に排水溝をめぐらせ当該層の全面精査を実施し、遺構および遺物の有無を確認し、確認された遺構や遺物に関しては記録をとった。

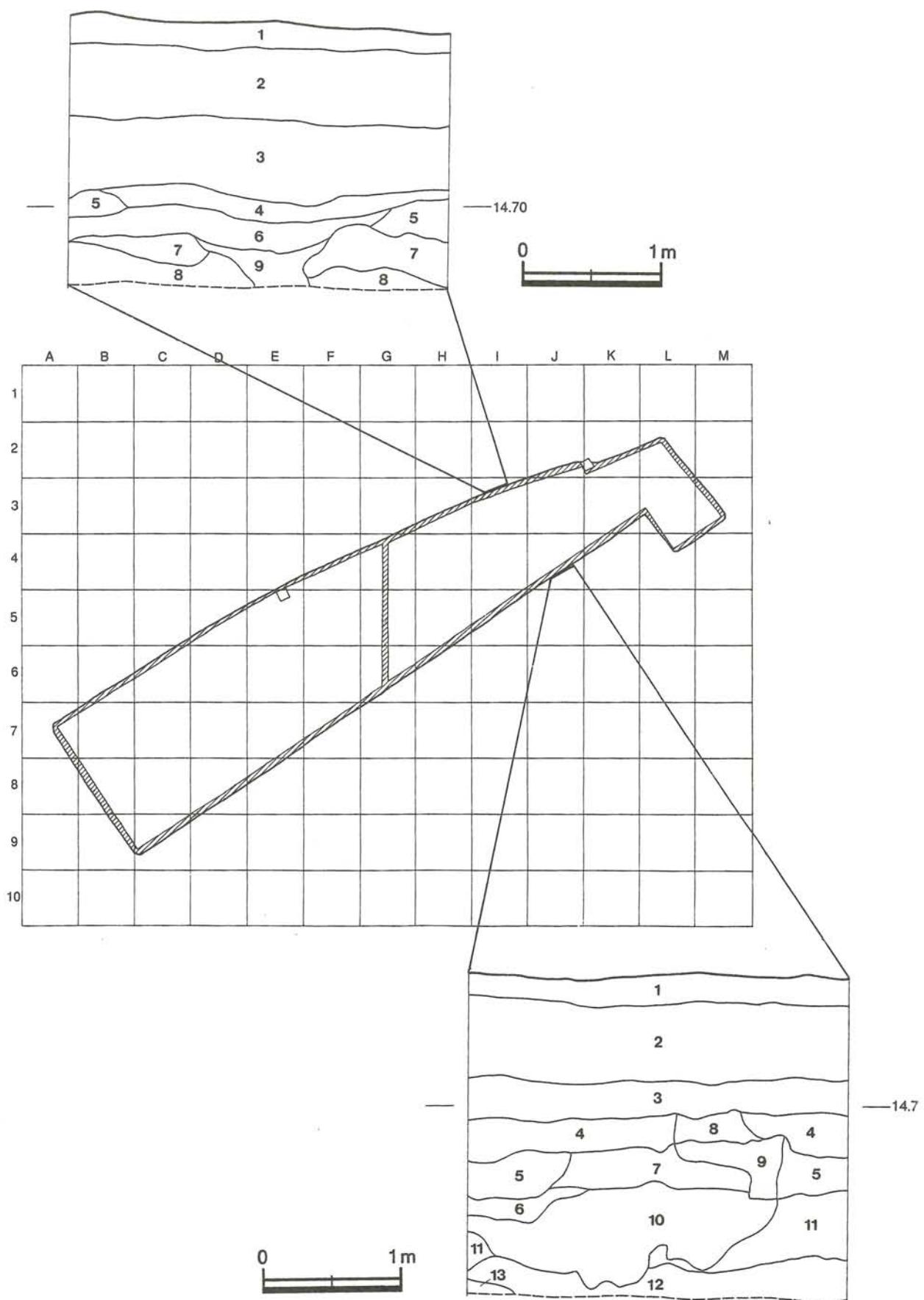
なお、遺構および遺物の記録には光波測距儀とパーソナル・コンピュータを組み合わせたトータル・ステーション・システム(遺跡図形処理システムソフト)を導入した。

第2節 発掘調査の経過

曾我後遺跡の現地調査(準備および発掘調査)は平成5年9月27日より平成6年2月4日まで実施した。以下にその経過を略記する。

- 9月27日（月）重機による表土層の除去作業を開始する。表土層は予想より薄く約20cm前後で、須恵器・土師器・陶器片などが混在している。
- 9月28日（火）第1回連絡会が開かれ、調査方法などについて検討される。
- 9月29日（水）本日より作業員を導入し、排水溝掘りを開始する。排水溝の中からかなりの量の遺物が出土し始めている。調査区のグリッドを設定し、ベンチ・マーク(標高15.234m)を設定する。
- 10月5日（火）最東部地区(L-2～4、M-2・3グリッド)の精査を始める。L-4グリッドから土師器が一括して出土する。発掘対象区中央部に層序の確認と排水のため南北方向の排水溝(平均的深さ約40cm)を掘り始める。
- 10月6日（水）外周の排水溝(平均深さ約30cm)を掘る作業はほぼ終了する。
- 10月15日（金）西地区(Gグリッド以西)の精査を始める。
- 10月18日（月）西地区のC-8グリッドから完形にちかい甕が一括して出土しB-8グリッドで遺構が確認される。
- 10月21日（木）西地区の精査、溝状遺構の完掘、遺構精査を行った。
- 10月22日（金）溝状遺構のセクション図を取り、第1・5号溝は完掘する
- 10月26日（火）第6号溝を完掘し、東地区(Gグリッド以東)の精査を開始する。特に遺構は確認されないが、遺物はかなりの量が出土している。
- 10月27日（水）第4号土坑の精査を行う。
- 10月29日（金）東地区のK-3・4、J-3・4グリッド付近で遺物が多量に出土している。
- 11月2日（火）I-4～J-4グリッドの精査を行う。I-4グリッドから遺物が集中して出土する。排水溝が浅くなってきたため、北西側の排水溝を掘り下げる。
- 11月4日（木）H-4～L-3グリッドの精査を行う。Kグリッド以西では南側部分に遺物が分布しており、北側からはほとんど出土しない。Lグリッド以東ではL-3グリッド南側に遺構が確認され、その精査を行う。
- 11月5日（金）G～H、L～Mグリッドの精査を行う。引き続きKグリッド以西では南側に遺物が分布している。Lグリッド以東では明確な遺構の形状は把握出来ない。遺物は全体に分布している。第2回連絡会が開かれる。
- 11月12日（金）G-5、I-4、J-3およびL-2～4グリッドの精査を行う。
- 11月15日（月）H-3、H-4～I-4グリッド、J-3～K-3グリッドの精査を行う。H-4グリッドから須恵器の高壙上部が、J-3グリッドから土師器の高壙が出土するL-3グリッドにおいて自然流路(旧河川)のプランを確認する。
- 11月18日（木）第7号土坑を完掘し、写真・記録をとる。

- 11月22日（月） K－3・4、L－3・4(第8号溝)、G－5～H－5(第9号住居址)、B～Eグリッドの精査を行う。
- 11月25日（木） 前日の地区に加え新たにE～Gグリッドの精査を開始する。
- 11月26日（金） 第10号土坑の実測を行う。
- 11月29日（月） B－9、C－8・9、D－8グリッドに住居址のプランを確認する。
- 11月30日（火） B～Eグリッドの精査を引き続き行う。第3回連絡会を行う。5軒の住居址を確認したことを報告する。また、見学会を行うことが決定する。
- 12月2日（木） Fグリッドに住居址のプランを確認する。
- 12月9日（木） G～Jグリッドの精査および第9号住居址の精査、Hグリッドの住居址プランの確認、住居址プランの写真撮影および実測を行う。
- 12月13日（月） 第9号住居址の精査、排水作業および住居址の精査を行う。
- 12月15日（水） 第1号住居址の精査、Fグリッドの溝状遺構の精査、中央部の住居址プランの確認、Iグリッドの住居址プランの確認を行う。
- 12月17日（金） 第10号土坑を完掘し、実測する。
- 12月18日（土） 遺跡見学会を行う。地元の人たちが約100名ほど見学に訪れる。
- 12月21日（火） 第4回連絡会を行う。
- 12月23日（木） 第2号住居址、第7号住居址、第9号溝、C－6・7、D－6・7グリッドの精査を精査を行う。
- 12月24日（金） 最東部に2m幅のトレーナーを設定し掘り始める。
- 12月28日（火） 第2号住居址を完掘し、第1・7号住居址の竈を精査する。
- 1月6日（木） 第2号住居址の竈を精査する。
- 1月7日（金） 第2・7号住居址の竈が完掘する。最東部の旧河川の精査を行う。
- 1月8日（土） 第3・4号住居址の精査を行う。
- 1月13日（木） 第3号住居址の実測と写真撮影を行う。第4号住居址の精査と第10号住居址の掘り下げを始める。
- 1月17日（月） 第5回連絡会を行う。
- 1月22日（土） すべての住居址の掘り下げを終了する。
- 1月23日（日） 午前中(株)東日による空中写真撮影を行う。
- 1月25日（火） 下層の状況を見るためテスト・ピットにより確認したが遺構や遺物は確認できなかったため、さらに下層を調査することにする。
- 1月26日（水） 住居址関係の精査はすべて終了する。
- 1月27日（木） 重機による掘りが終わった所から精査を行う。
- 1月31日（月） 第12・13号溝を完掘し、遺物出土状況を撮影する。
- 2月2日（水） 発掘調査に係わるすべての作業を終了する。稼働日数は81.2日、作業員の延べ人数は825.6人であった。
- 2月3日（木） 最終の連絡会が行われる。
- 2月4日（金） 現場事務所の撤収作業を行う。



図III-3-1 東地区の層序模式図

第3節 遺跡の層序

曾我後遺跡はいわゆる低湿地に立地するため、水田耕作などによる削平を受けている。

発掘対象区域内では東側と西側、さらにその北と南では層序が異なっているため各地区に分けて層序の状況を述べることにする。

(東地区)

北壁の層序

第1層は青灰色土で、水田の耕作土と床土である。

第2層は黄褐色土で、炭化物・炭化粒を微量に含み、粘性も締まりもやや強い。奈良・平安時代に相当する。

第3層は暗黄褐色土で、炭化物を微量に含み、粘性はやや強く、締まりは強い。古墳時代後期に相当する。

第4層は暗黄褐色土で、炭化物を微量に含み、粘性も締まりも強い。無遺物層。

第5層は暗黄褐色土で、青灰色土が混じる。炭化物を微量に含み、粘性は強く、締まりはやや強い。無遺物層。

第6層は暗青灰色土で、やや黄色が混じる。炭化物を微量に含み、粘性も締まりも強い。古墳時代中期に相当する。

第7層は暗青灰色土で、粘性は強く、締まりはやや弱い。無遺物層。

第8層は暗青灰色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まりは強い。第13号溝を確認した層で、土器片がわずかに出土する。弥生時代に相当する。

第9層暗青灰色土で、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。無遺物層。

南壁の層序

第1層は青灰色土で、水田の耕作土と床土である。

第2層は茶褐色土で、炭化物を微量に含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。奈良・平安時代に相当する。

第3層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや弱く、締まりは強い。住居址を確認した層で、古墳時代後期に相当する。

第4層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まりは強い。無遺物層。

第5層は暗黄褐色土で、粘性も締まりもやや強い。第7層まで古墳時代中期に相当する。

第6層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まりは強い。

第7層は暗茶褐色土で、青灰色が混じる。粘性は強く、締まりはやや強い。

第8層は暗茶褐色土で、粘性も締まりもやや弱い。第9層まで無遺物層である。

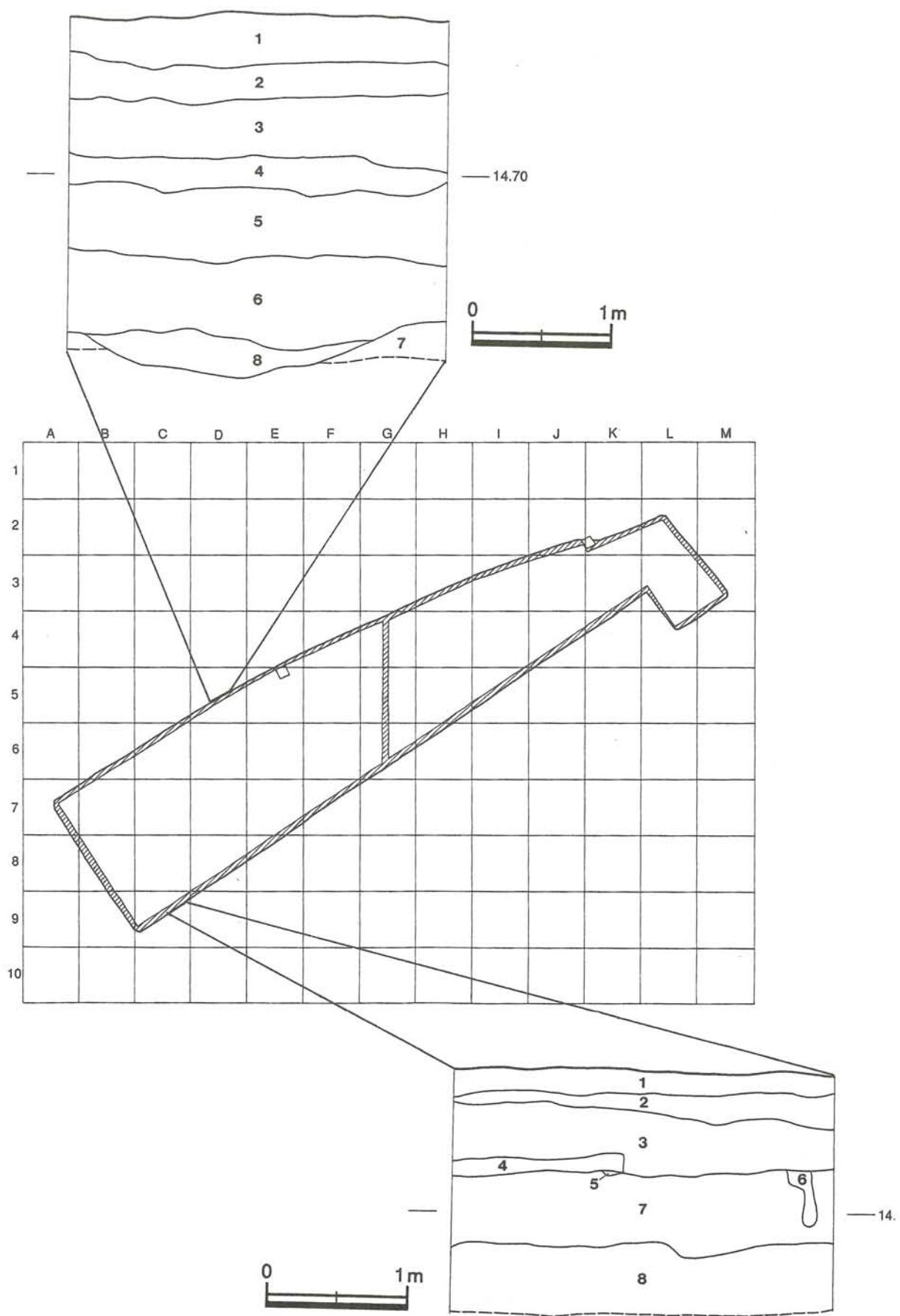
第9層は暗青灰色土で、炭化物を少量含み、粘性は強く、締まりはやや強い。

第10層は黒灰褐色土で、炭化物をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。弥生土器が多く出土する。

第11層は暗茶褐色土で、炭化物を微量に含み、粘性はやや強く、締まりは強い。第13層まで無遺物層である。

第12層は暗茶褐色土で、やや青灰色が混じる。炭化物を微量含み、粘性はやや強く、締まりは強い。

第13層は青灰色土で、砂質が強い。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。



図III-3-2 西地区の層序模式図

(西地区)

北壁の層序

第1層は青灰色土で、水田の耕作土と床土である。

第2層は暗茶褐色土で、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。奈良・平安時代に相当する。

第3層は暗茶褐色土で、炭化物を微量に含み、粘性は弱く、締まりは強い。古墳時代後期に相当する。

第4層は暗茶褐色土で、やや黄色味を帯びている。炭化物を微量に含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第5層まで無遺物層である。

第5層は暗茶褐色土で、全体に黒みがかる。第4層との境に炭化物と焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや弱い。

第6層は暗茶褐色土で、炭化物を微量に含む。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。

第11号溝を確認した層で、古墳時代中期に相当する。

第7層は暗茶褐色土で、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第8層まで無遺物層である。

第8層は暗黄褐色土で、粘性も締まりもやや強い。

南壁の層序

第1層は青灰色土で、水田の耕作土と床土である。

第2層は暗青灰色の礫層である。無遺物層。

第3層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まり強い。土器片が出土する。住居址を確認した層で、古墳時代後期に相当する。

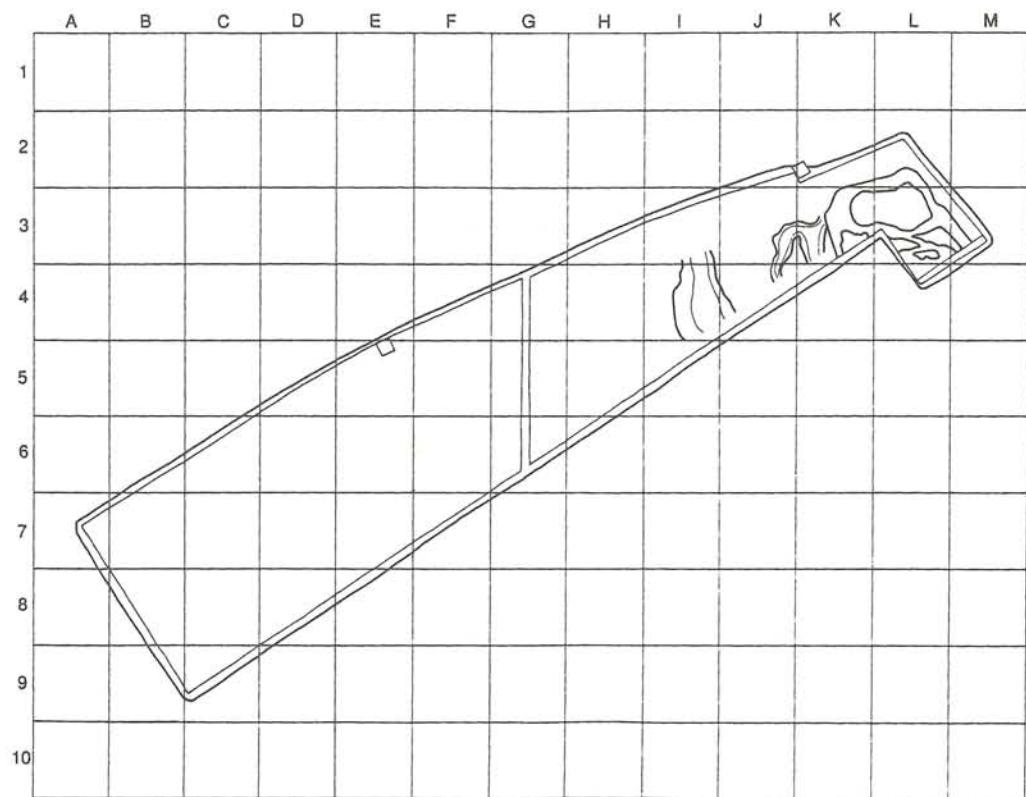
第4層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第6層までは住居址の覆土である。

第5層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。

第6層は暗茶褐色土で、炭化物を少量含み、粘性も締まりもやや強い。

第7層は暗茶褐色土で、やや黄色を帯びている。炭化物を微量に含み、粘性も締まりもやや強い。第8層まで無遺物層である。

第8層は暗青灰色土で、粘性も締まりも強い。



図IV-1-1 弥生時代の遺構分布図（溝状遺構）

第IV章 発掘調査の結果

今回の発掘調査においては弥生時代から奈良・平安時代に至る遺構と遺物が確認された。

弥生時代の遺構は溝状遺構が3条、古墳時代の遺構は住居址が12軒、土坑が7基、溝状遺構が2条、奈良時代から平安時代にかけての遺構は土坑が6基、溝状遺構が3条、その他溝状遺構が4条、柱穴状(ピット)遺構が6基確認された。

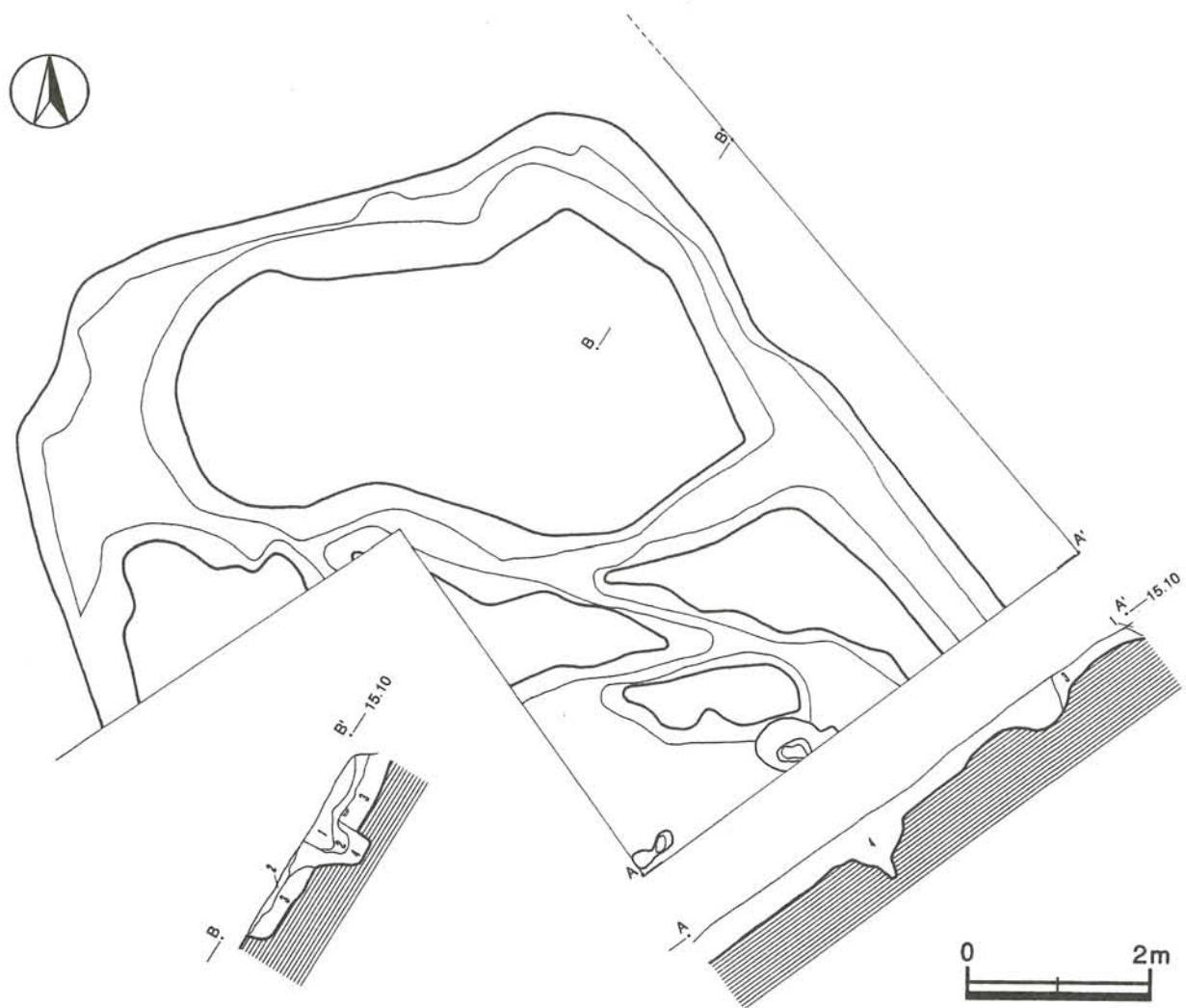
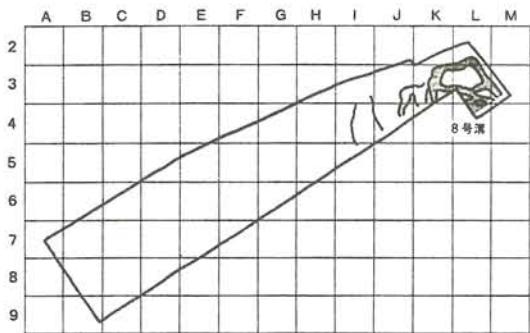
また、これらの遺構に伴う遺物以外に各グリッドおよび調査用の排水溝やテスト・ピットから多くの遺物が出土している。

以下、それらの遺構と遺物について述べる。

第1節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 溝状遺構

弥生時代の遺構は調査区の東側において、溝状遺構が3条(第8号溝・第12号溝・第13号溝)確認された。



図IV-1-2 第8号溝の平面および断面図

①第8号溝

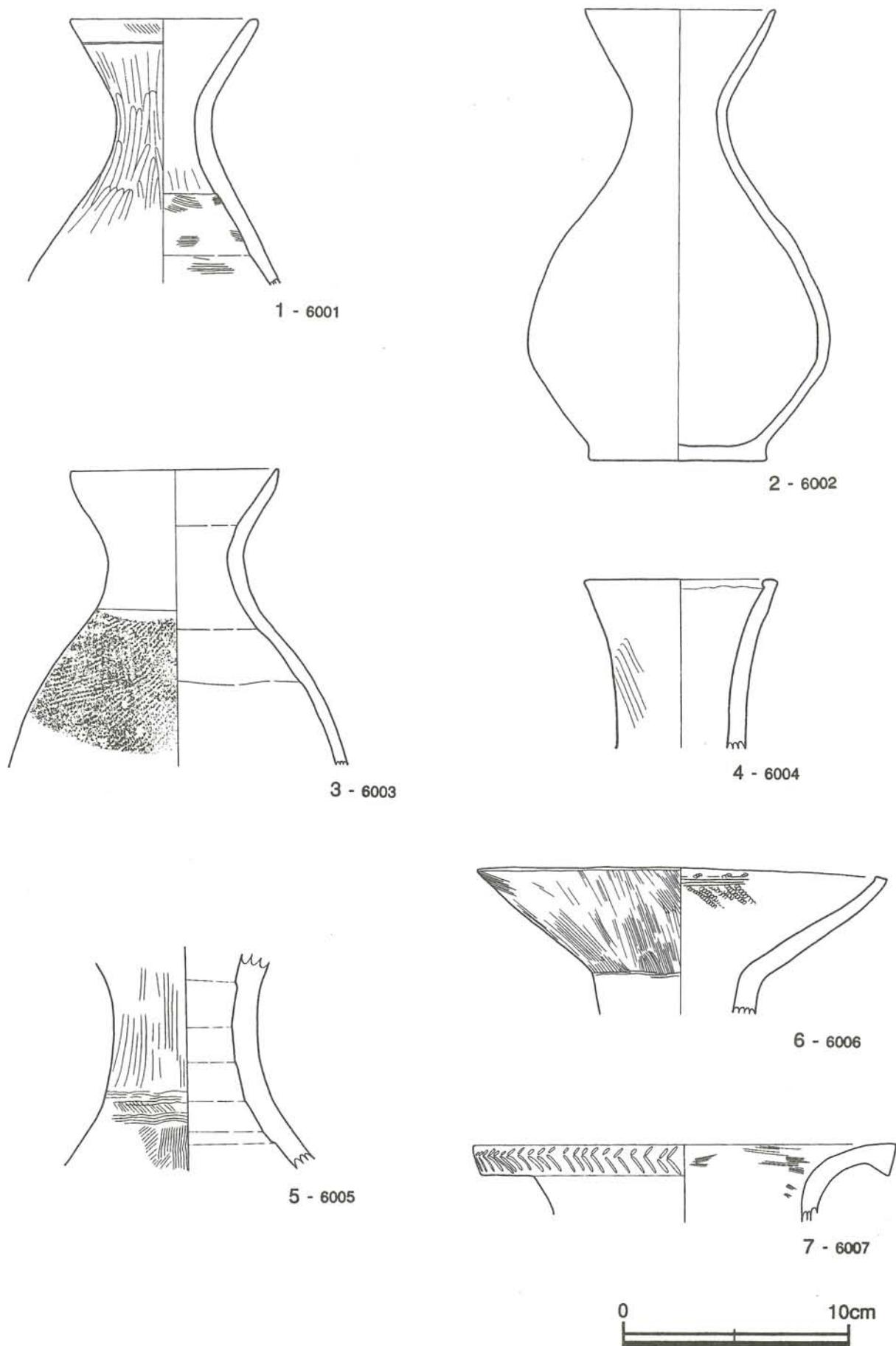
K-3・4、L-2・3・4、M-3グリッドに位置し、南側は発掘対象区域外に延びている。平面形状は環状を呈し、断面形状はV字形～U字形を呈し定まったものではない。

覆土は4層に分けられ、第1層は茶褐色土で粘性は弱く、締まりはやや強い。第2層は暗茶褐色土で粘性はやや強く、締まりは強い。第3層も暗茶褐色土であるが炭化物を少量含み、粘性も締まりもやや強い。大量の土器片を含んでいる。第4層は暗灰茶褐色土で、0.3～5.0cm大の礫をやや多く含み、炭化物・焼土を少量含んでいる。粘性も締まりも強い。

遺物は覆土から弥生時代後期の土器片と古墳時代の土師器片が渾然と、しかも多量に出土している。遺物の出土状況からこの遺構は旧河川と考えられ、これらの遺物は河川内に流入したものと思われる。なお、古墳時代の遺物に関しては第V章第II節(3)で取り扱うこととする。



図IV-1-3 第8号溝の遺物分布図



図IV-1-4 第8号溝から出土した土器（1）

第8号溝から出土した弥生土器の内、特徴のあるものを以下に示す。

1（遺物No6001）は長頸の壺の口縁部から胴部上半で、推定口径は8.3cmある。直線的に内傾して立ち上がり、頸部で直立し口縁部で直線的に開き口唇部は丸めている。外面は上位から斜位の細い櫛描き紋、横位の区画紋を施し、以下全面にヘラ磨きが施され、胴部内面は横ナデ調整、頸部はヘラ削りが施されている。

2（遺物No6002）は受口口縁の壺で、口径は8.6cm、器高は21.0cm、底径は7.8cmある。平底の底部から下膨れする無花果(いちじく)形を呈し、頸部から口縁部は直線的に開いてから僅かに直立気味となる。

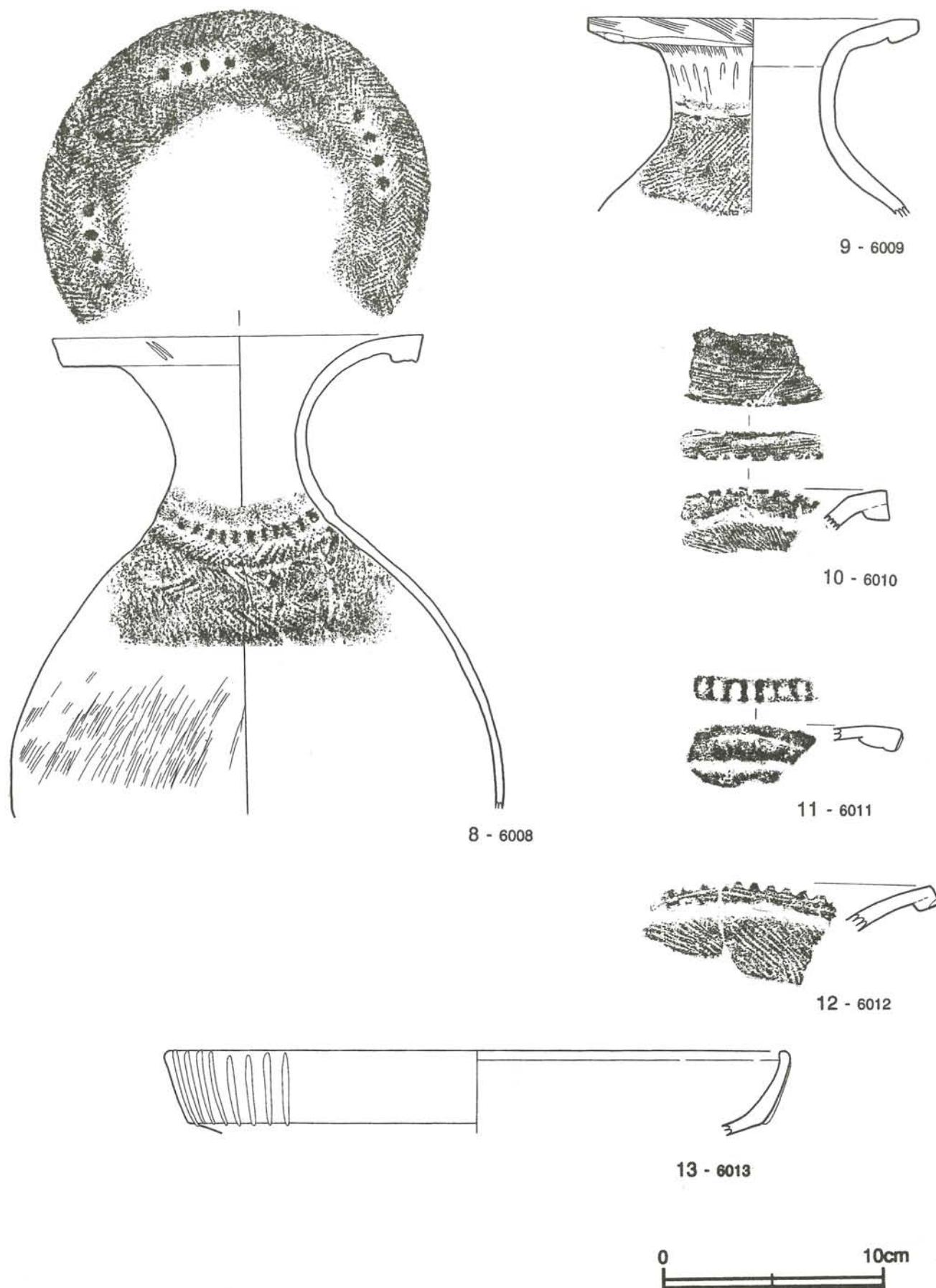
3（遺物No6003）は受口口縁の壺の胴部上半から口縁部で、推定口径は9.2cmある。内弯気味に内傾して立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲して直線的に短く開いている。外面は頸部に磨きによる無紋帶、下位にR L単節の斜縄紋が施されている。内面には輪積み痕が認められる。

4（遺物No6004）は長頸の壺の口縁部で、推定口径は8.8cmある。僅かに外反気味に立ち上がり、口唇部を平坦に僅かに外傾させ、内側は肥厚している。外面はヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りにナデ（？）調整が施されている。

5（遺物No6005）は壺の頸部で、頸部の最小径は6.3cmある。緩やかに外反し、器壁は1.0cmとやや厚い。外面は上位から下位へ縦位のヘラ磨き、櫛歯状の施具による横位の波状紋と縦位の波状紋が施されている。

6（遺物No6006）は広口口縁の壺の口縁部で、口径は18.2cmある。頸部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で僅かに内傾気味になり端部は平坦となる。外面は細いハケメ、頸部に横位の籠描き沈線による区画紋、内面は羽状縄紋に横位の籠描き沈線紋が施されている。

7（遺物No6007）は広口口縁の壺の口縁部で、推定口径は18.8cmある。外反し大きく開いて折返し口縁となっている。口縁部の外側には櫛刺突羽状紋が連続に施されている。内面は横位・斜位の細いハケメが見られる。



図IV-1-5 第8号溝から出土した土器（2）

8（遺物No6008）は広口口縁の壺の口縁部から胴部上半で、口径は16.8cmある。胴部は内彎して立ち上がり頸部で緩やかに外反に転じ、口縁部は大きく開いて折返しとなっている。口縁部の内面には櫛刺突による羽状紋とボタン状の円形浮紋が4個4単位に施されている。外面は頸部から胴部にかけて隆帶上に丸棒状施具による連續刺突紋、櫛刺突による羽状紋、斜位のハケメが施されている。

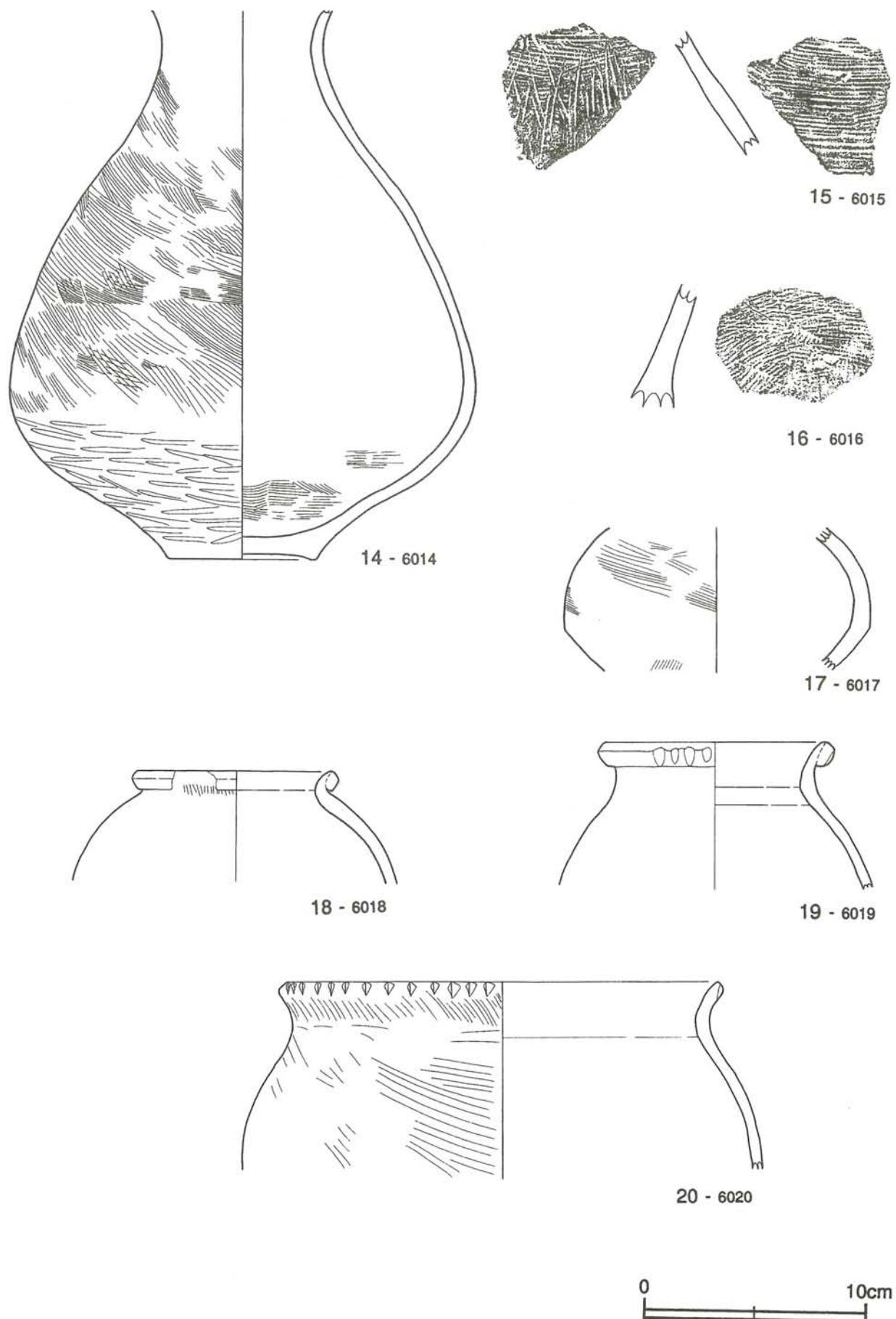
9（遺物No6009）は広口口縁の壺の口縁部から頸部にかけて、推定口径は10.2cmある。頸部が緩やかに外反し、口縁部にかけて大きく直線的に開いて折返しとなっている。口唇部は縦位の櫛描き直線紋がハケメ状に施されている。頸部は上位から縦位のヘラ磨き、横位の範状施具による連續刺突紋、斜繩紋が施されている。

10（遺物No6010）は広口口縁の壺の口縁部の破片で、推定口径は15.6cmある。内面に段を有し、大きく外反して端部を折返している。端部は櫛歯状施具によるキザミと直線紋、外面は斜位のハケメ状の直線紋、内面は稜の上位に横位のハケメ状の直線紋、下位に磨きがそれぞれ施されている。

11（遺物No6011）は広口口縁の壺の口縁部の破片で、端部は折返しとなり、棒状浮紋が施されている。

12（遺物No6012）は広口口縁の壺の口縁部の破片と思われる。折返し口縁となり口唇部の下位に棒状施具によるキザミがあり、外面に櫛描き紋が施されている。内面はヘラ磨きと思われる。

13（遺物No6013）は複合口縁の壺の口縁部の破片で、推定口径は28.0cmある。直線的に僅かに開いて立ち上がり、口縁部の外面に縦位の棒状浮紋を施紋している。



図IV-1-6 第8号溝から出土した土器（3）

14（遺物No6014）は壺の頸部から底部にかけてで、胴部の最大径は21.0cm、底径は6.7cmある。ややあげ底の底部から下膨れする無花果形の胴部を呈し、頸部は緩やかに外反している。外面は斜位のハケメ、下位には横位のヘラ磨きが施されている。

15（遺物No6015）は壺の胴部上半の破片で、直線的に内傾している。外面は籠状施具による横位・縦位・斜位方向の沈線紋、内面は櫛歯状施具による横位のハケメが施されている。

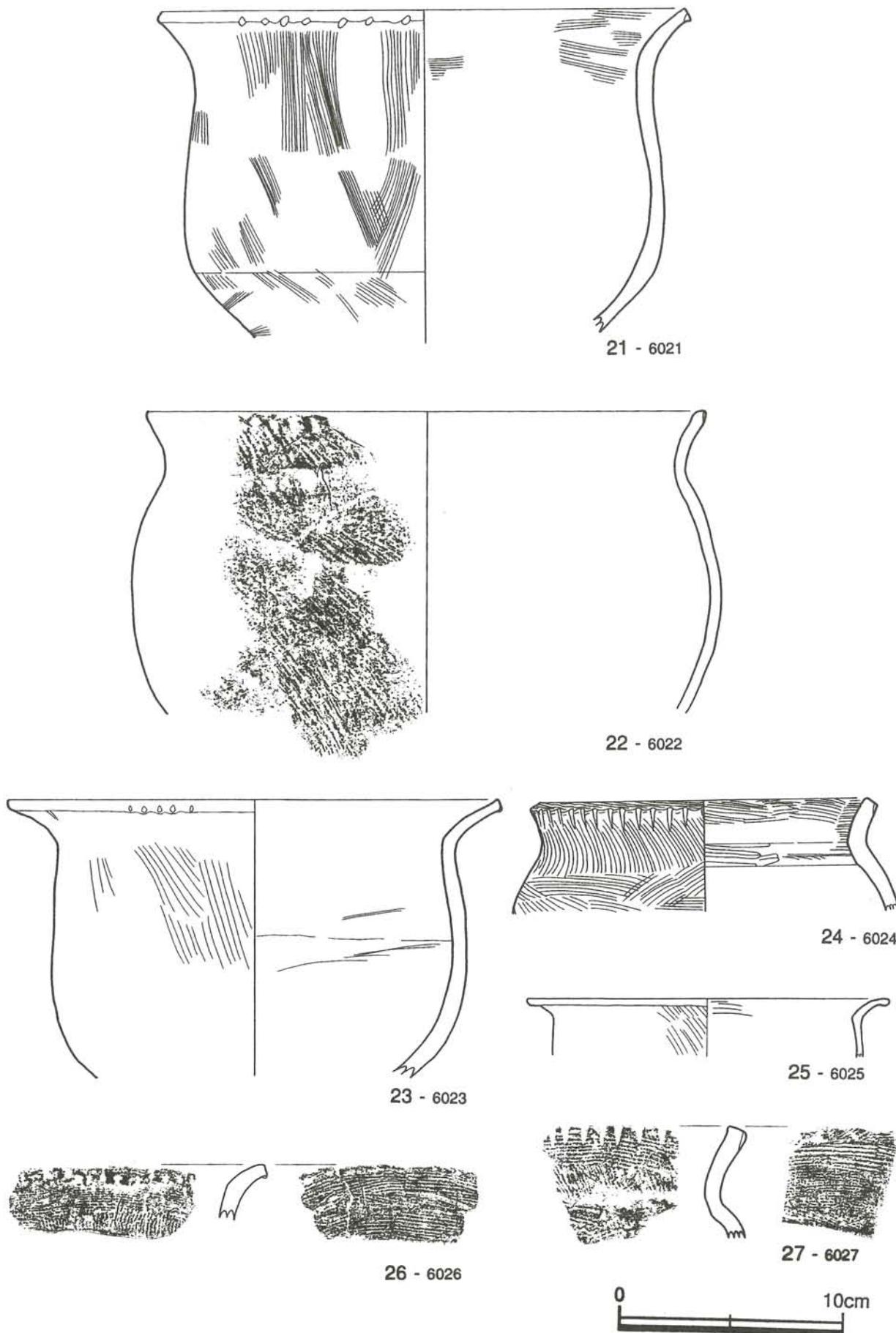
16（遺物No6016）は壺の底部脇の破片で、直線的にやや開いて立ち上がっている。内面は櫛描きによる直線と刺突状の施紋がやや粗く見られる。

17（遺物No6017）は壺の胴部で、推定最大径は14.0cmある。下膨れする無花果形を呈すると思われる。外面は斜位・縦位のハケメ、内面はナデ調整が施されている。黒斑が見られる。

18（遺物No6018）は小型の壺の口縁部から胴部上半で、推定口径は9.0cmある。球形と思われる胴部から短い頸部で「く」の字に屈曲し、端部を折返している。端部の下位は丸棒状施具によるキザミ、外面は縦位のハケメ、内面は横ナデ調整が施されている。

19（遺物No6019）は小型の短頸の壺の口縁部で、推定口径は10.0cmある。最大径が胴部にあり内彎気味に内傾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲して外反し、端部は折返している。また端部には丸棒状施具によるキザミが施されている。

20（遺物No6020）は台付甕の口縁部から胴部上半で、推定口径は19.5cmある。胴部から緩やかに内彎・内傾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲して外反している。端部には籠状施具によるキザミ、外面は櫛歯状施具による斜位の粗いハケメ調整が施されている。



図IV-1-7 第8号溝から出土した土器(4)

21（遺物No6021）は台付甕と思われる口縁部から胴部上半で、推定口径は23.5cmある。最大径は口縁部にあり、胴部は緩やかに内彎した後、頸部で外反して立ち上がる。口唇部には棒状施具によるキザミ、外面には縦位・斜位のやや粗いハケメ、内面には横位のハケメが施されている。

22（遺物No6022）は台付甕と思われる口縁部から胴部で、推定口径は25.0cmある。最大径は胴部中位にあり、内彎して頸部で屈曲し、直線的に開いて立ち上がる。端部には籠状施具によるキザミ、胴部には斜位のやや粗いハケメが全体に施されている。頸部には籠描きによる横位の直線紋（？）が1条施されている。

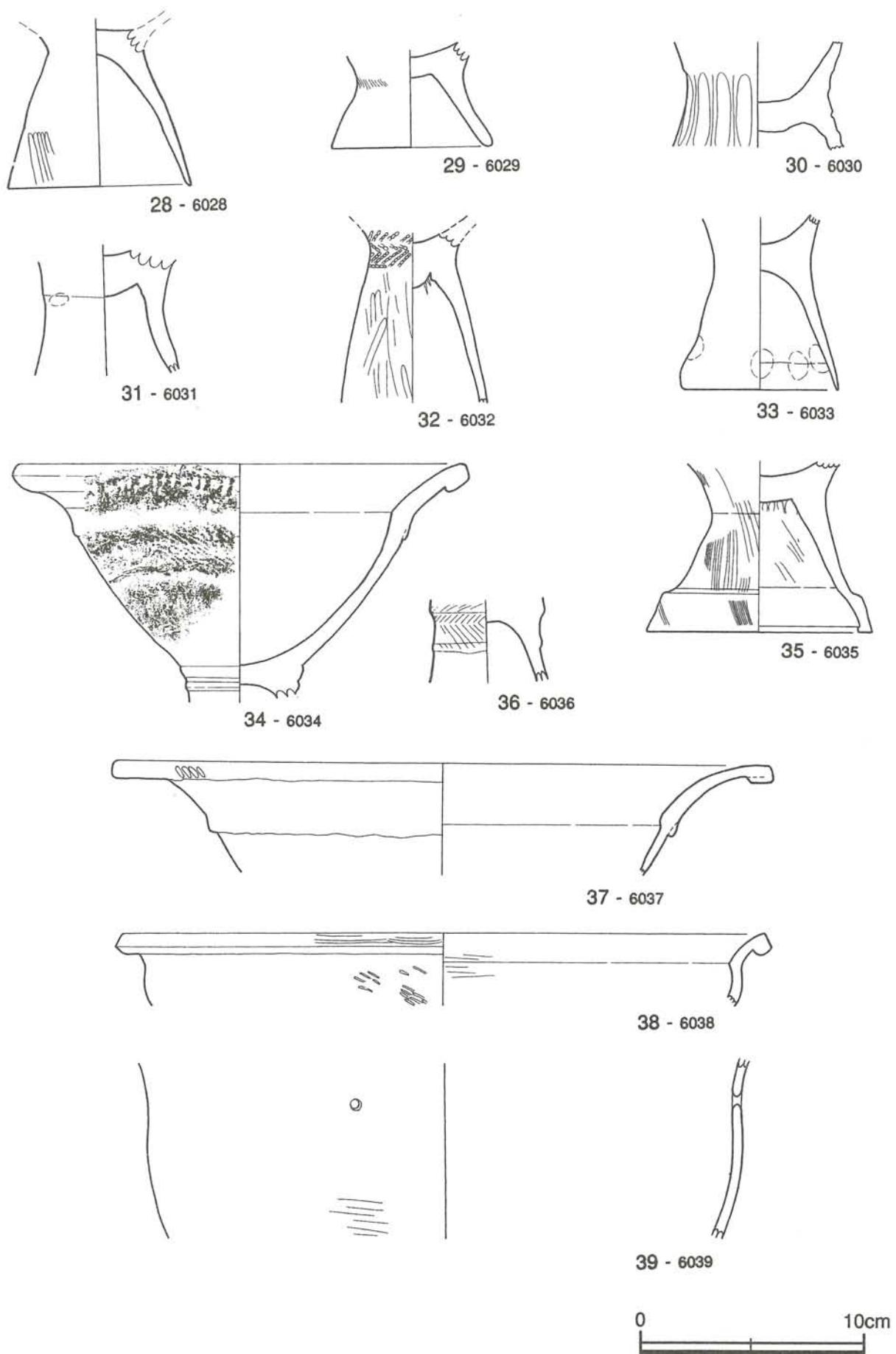
23（遺物No6023）は台付甕と思われる口縁部から胴部で、推定口径は22.0cmある。胴部は内彎して立ち上がり、頸部で屈曲して直線的に斜めに開いている。端部は籠状施具によるキザミ、外面は斜位のハケメ、内面は横位のヘラ削りにナデ調整が施されている。

24（遺物No6024）は甕の口縁部で、推定口径は15.6cmある。頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲し、端部は平坦で外傾している。なお頸部の内面には段を有している。外面は下位から櫛歯状施具によるハケメ状の斜位・横位の直線紋帯、縦位・斜位の直線紋帯、端部は直線紋の下位に丸棒状施具によるキザミ、内面は頸部にヘラ削り、口縁部に横位のハケメが施されている。

25（遺物No6025）は小型の甕の口縁部で、推定口径は16.0cmある。直線的な立ち上がりから頸部で「く」の字状に屈曲して大きく外反し、端部は丸く僅かに肥厚している。外面は斜位のやや粗いハケメ、内面は横位のハケメが施されている。

26（遺物No6026）は甕の口縁部の破片で、外反して開いている。端部は籠描き紋の下位を丸棒状施具によるキザミ、外面は横位・縦位の籠描き紋、内面は横位の籠描き紋が施されている。

27（遺物No6027）は甕の口縁部の破片で、推定口径は19.6cmある。頸部から口縁部にかけて「く」の字状を呈し、端部は平坦になっている。端部下位には籠状施具による連続のキザミ、外面は上位より横位・斜位・横位の櫛描き紋が施され、内面は横位に籠描き紋が施されている。



図IV-1-8 第8号溝から出土した土器（5）

28（遺物No6028）は台付甕の台部で、ほぼ直線的に開いて裾端部まで下りている。裾部の径は8.2cmある。空洞部は高い。外面は縦位の磨きが施されている。

29（遺物No6029）は台付甕の台部で、直線的に開いている。裾部の推定径は7.0cmある。外面は縦位のハケメ、内面はナデが施されている。

30（遺物No6030）は台付甕の接合部と思われ、接合部の径は6.2cmある。縦位に棒状施具による押引きの凹線が推定26条施されている。台付甕に見られる使用時のススの付着は見られない。

31（遺物No6031）は台付甕の台部で、直線的にやや開いている。外面は磨きが施されている。

32（遺物No6032）は高坏の脚部で、ほぼ直線的に開いて下りている。接合部の外面は櫛刺突羽状紋に1条横位に櫛刺突が区画紋として施されている。脚部の外面は縦位のヘラ磨きが見られる。内面は坏部の底が凸状になり中空の脚と接合させている。

33（遺物No6033）は高坏の脚部で、直線的に開いて端部まで下りる。裾部の径は7.0cmある。裾部の内・外面に指頭痕が認められる。

34（遺物No6034）は高坏の坏部と脚部の上半で、推定口径は19.8cm、接合部の径は5.0cmある。坏部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、頸部で開きをやや強くし、口縁部を折返している。頸部の外面に粘土紐の貼付による突帶状の段、内面には稜を有している。口唇部に櫛刺突のキザミ、外面は斜位の櫛描き紋、内面は磨き（？）が施されている。

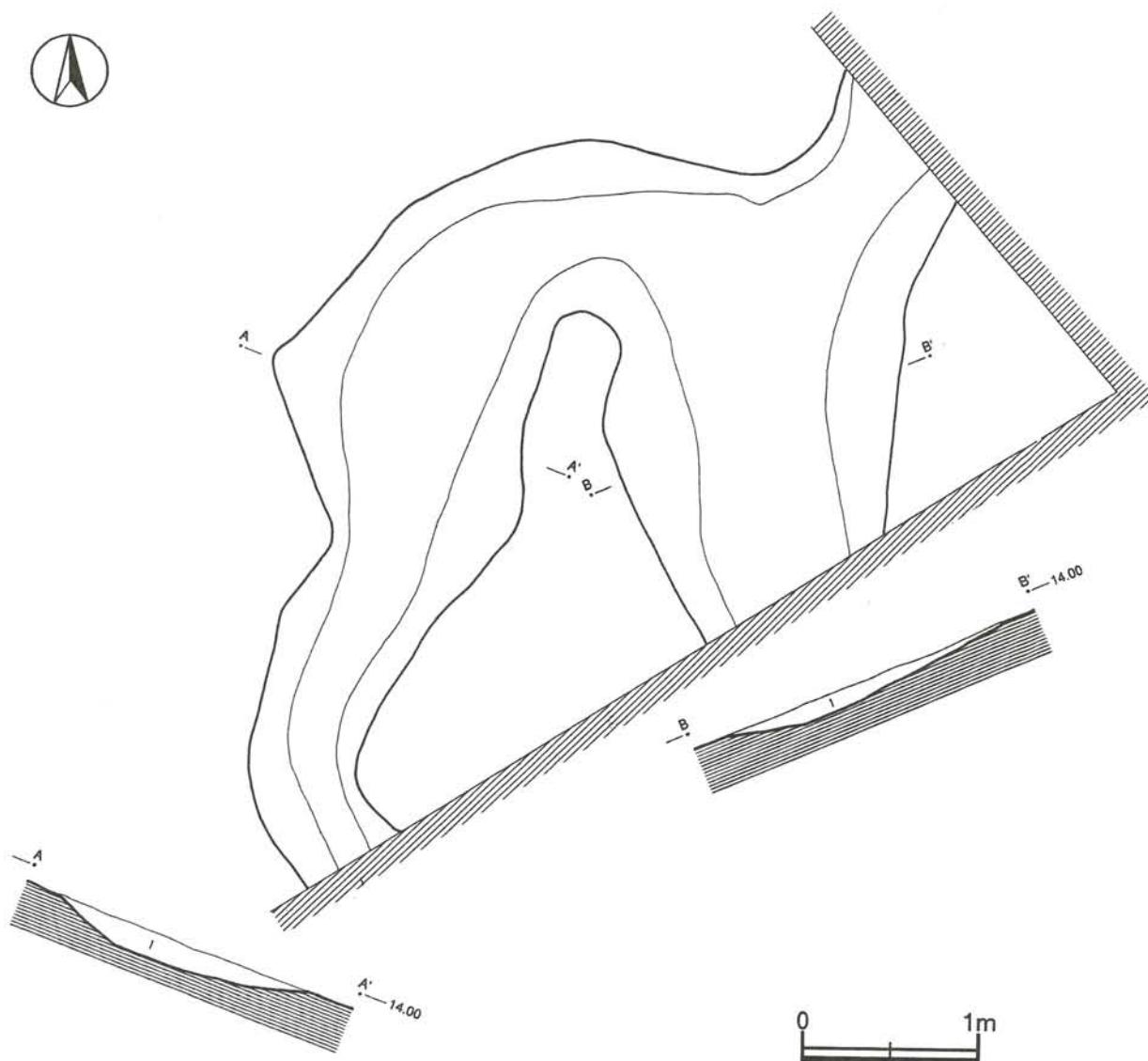
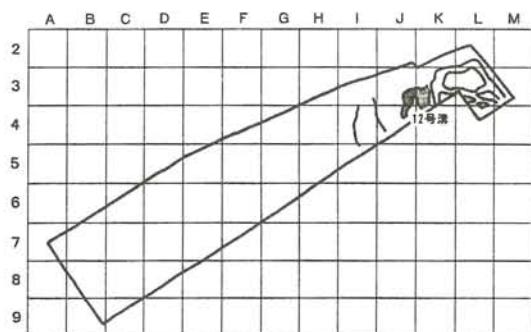
35（遺物No6035）は高坏の脚部で、裾部の径は10.0cm、残存部の器高7.0cmある。直線的に開いて下り、脚端部を折り曲げて段を付けている。外面は縦位のハケメ、内面の接合部にヘラ削り、下位に磨き（？）が施されている。

36（遺物No6036）は高坏の脚部で、接合部下位の径が4.7cmある。横位に2条の細い突帶が走り、櫛刺突羽状繩紋が施され、内面はナデ調整が施されている。空洞部は高い。

37（遺物No6037）は高坏の口縁部で、推定口径は29.0cmある。突帶状の稜を有して大きく開いて外反し、端部は折り返して、いわゆる鰐状口縁となっている。端部には縦位に連続刺突紋（？）が施されている。

38（遺物No6038）は鉢の頸部から口縁部と思われ、推定口径は28.4cmある。胴部上位の内彎気味から頸部で屈曲して外反気味に開き、口縁部は複合口縁となっている。端部は櫛描き直線紋、胴部の外面は斜位の短い櫛描き紋、内面は横位の櫛描き紋にナデ（？）調整が施されている。

39（遺物No6039）は有孔付の鉢で、推定の最大径は27.0cmある。緩やかに彎曲して立ち上がり、頸部で僅かに外反気味となる。また、頸部には径が0.5cm程の孔が開けられている。

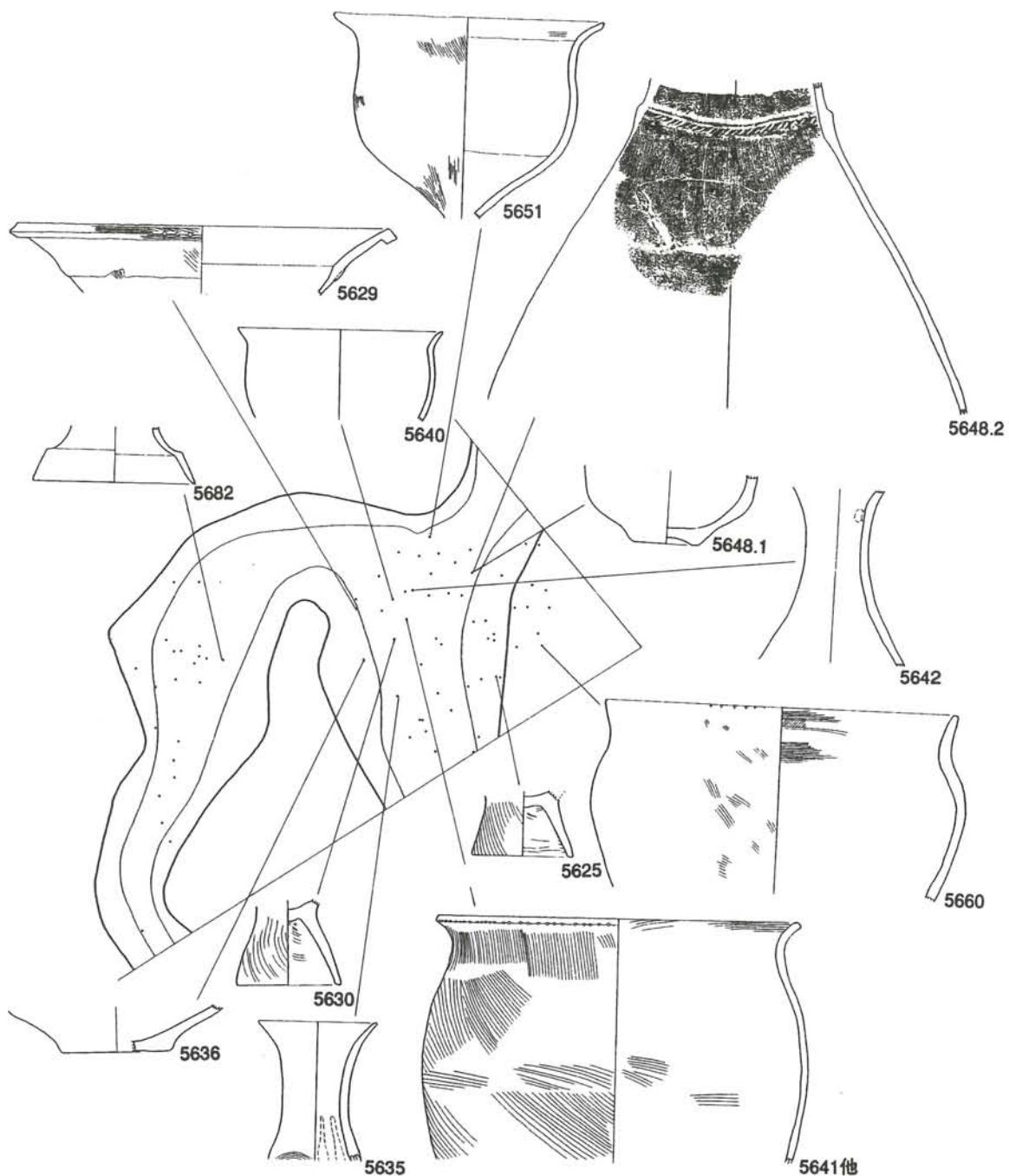


図IV-1-9 第12号溝の平面および断面図

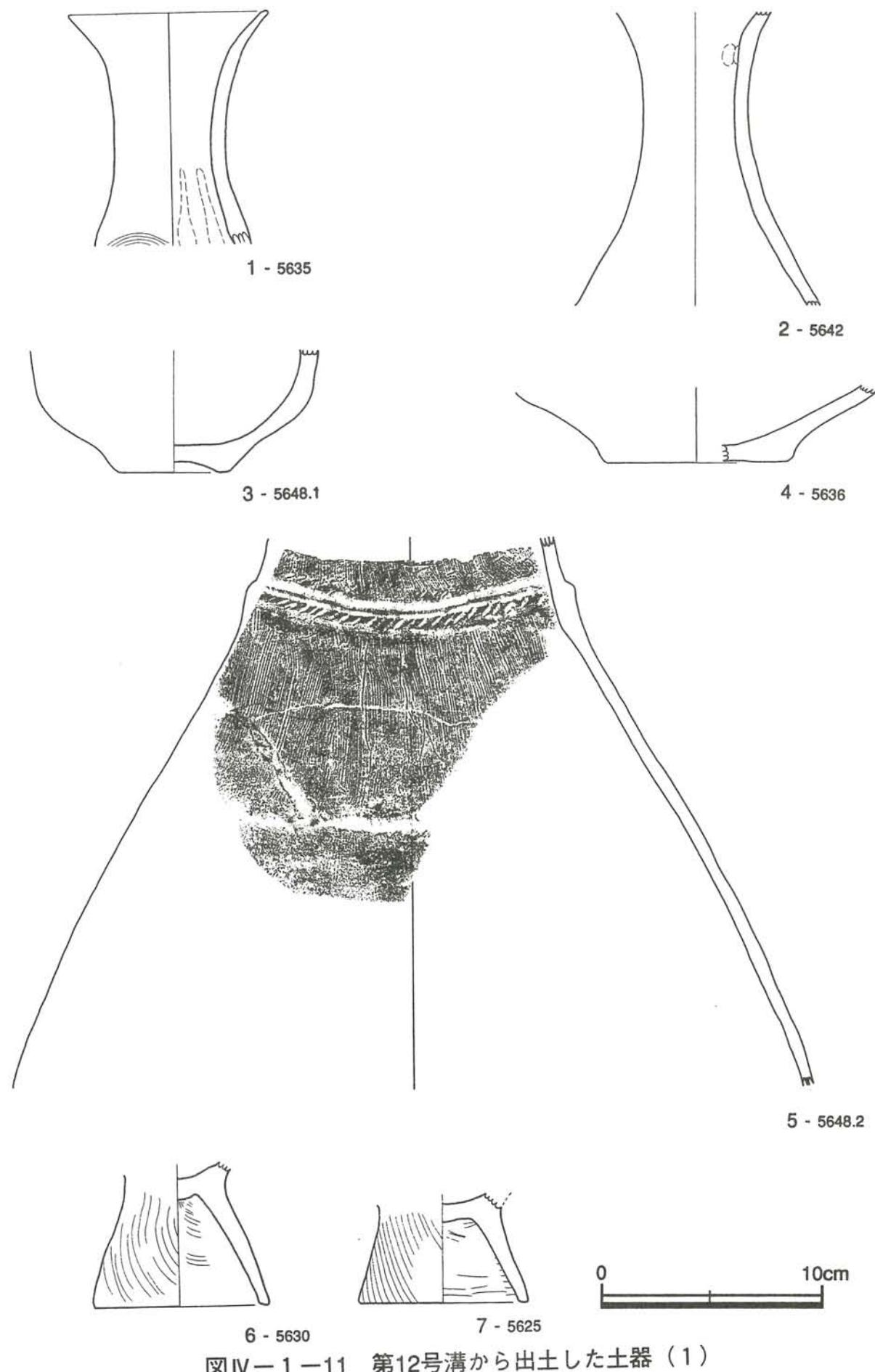
②第12号溝

J-3・4、K-3グリッドの標高13.6mに位置し、南側は発掘対象区域外に伸びている。平面形状は環状を呈していると思われる。確認できた溝の総延長は800.0cm、幅60.0～160.0cm、深さは10.0～30.0cmである。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。覆土は黒灰褐色土が1層で、炭化物をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。

遺物は溝の東側と西側に集中しており、いずれも傾斜の緩やかな壁面と溝底から出土しているが、東側は溝底に流れ込んでいるような状態で弥生土器が多く出土しているのに對し、西側は比較的良好な状態で土師器が多く出土している。出土した土器片の総数は73点で様々な器種が出土しており、ここでは弥生土器について述べることとする。



図IV-1-10 第12号溝の遺物分布図（弥生土器）



図IV-1-11 第12号溝から出土した土器（1）

1 (遺物No5635) は長頸の壺の口縁部から頸部にかけての破片で、推定口径は9.2cmある。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がる。頸部の外面に櫛歯状施具による連弧紋(波状?)が施されている。頸部の内面にはヘラ削りの後にナデ調整が認められる。

2 (遺物No5642) は長頸の壺の頸部である。口縁部にかけて徐々に外反を強くして立ち上がっている。内面の上部に指頭痕が認められる。

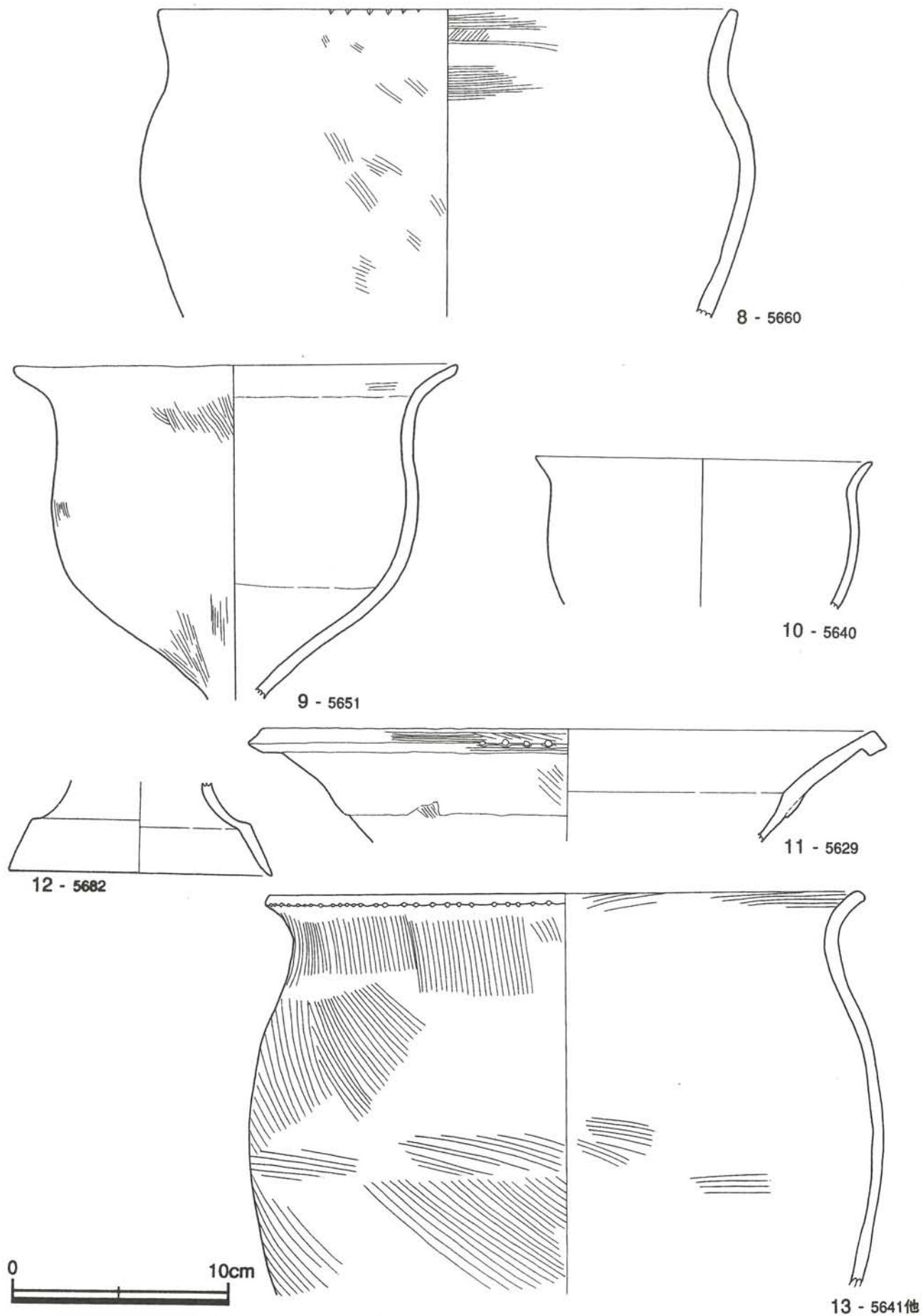
3 (遺物No5648.1) は小型の壺の底部から胴部下半で、底径は5.0cmある。底部はあげ底となり、胴部の下半が膨れる無花果形を呈すると思われる。内外面に横位のヘラ磨きが施されている。

4 (遺物No5636) は壺の底部で、推定底径は8.3cmある。平底の底部から直線的に大きく開いて立ち上がっている。内面はハケメ、外面は横位のナデが施されている。

5 (遺物No5648.2) は大型の壺で、推定の最大径は36.0cmある。胴部下半から直線的に内傾して頸部へ立ち上がっている。頸部には突帶(浮線紋)が1条横位に走り、その上に櫛刺突が連続に施されている。櫛歯状施具による細かいハケメが施されている。

6 (遺物No5630) は台付甕の台部で、裾部の推定径は8.0cmある。ほぼ直線的に開いている。内外面ともに斜位のやや粗いハケメ調整が施されている。

7 (遺物No5625) は台付甕の台部で、裾部の推定径は7.7cmある。ほぼ直線的に短めに開いている。外面に斜位のやや粗いハケメ、内面には横位のハケメ調整が施されている。外面に黒斑が認められる。



図IV-1-12 第12号溝から出土した土器（2）

8（遺物No5660）は甕の口縁部から胴部上半で、推定口径は26.6cmある。胴部上半に最大径を持ち、頸部は緩やかに屈曲し、口縁部はやや開いている。口唇部は角棒状施具によるキザミが施されている。外面は斜位のハケメ、内面は横位・斜位のハケメに磨きが施されている。

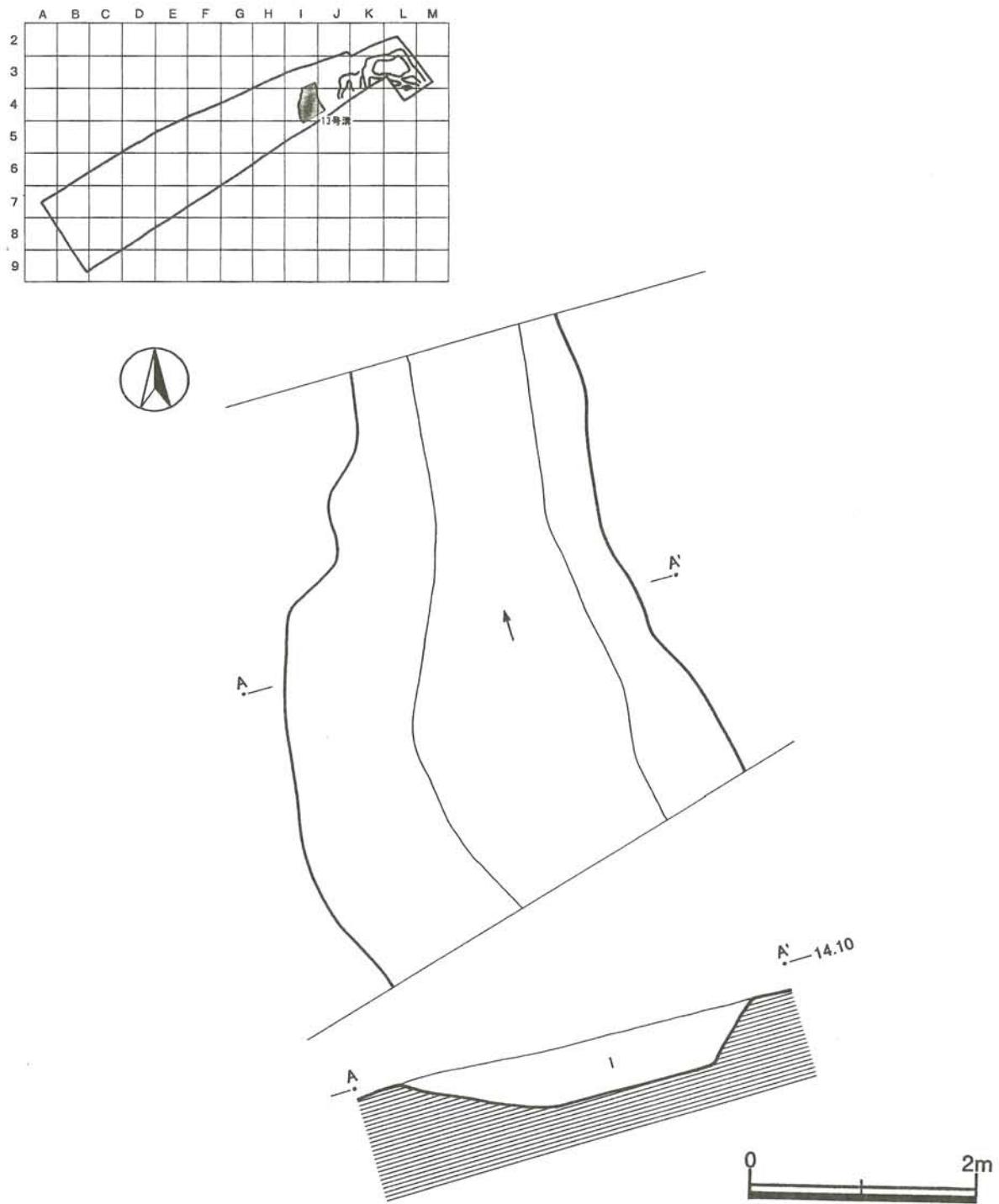
9（遺物No5651）は台付甕で、口径は15.5cmある。胴部は直線的に開き、やや膨らみをもって彎曲している。頸部から口縁部にかけて緩やかに外半して開いている。外面は斜位・縦位のハケメ、内面は横位のハケメが施されている。

10（遺物No5640）は甕の口縁部から胴部上半で、推定口径は15.5cmある。内彎して立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は斜めに開いて端部を丸めている。

11（遺物No5629）は高坏の坏部で、推定口径は28.0cmある。斜めに大きく開いて立ち上がり、口唇部で折り返している。端部は細丸棒状施具による連續のキザミとやや粗いハケメが施されている。外面には横位に薄い粘土紐を貼付した突帯と斜位のハケメが施されている。

12（遺物No5682）は高坏の裾部で、裾端部の推定径は12.2cmある。脚部は裾部を屈折させている。

13（遺物No5641+5668）は台付甕の口縁部から胴部上半で、推定口径は27.0cm、胴部の推定最大径は29.0cmある。緩やかに彎曲しながら立ち上がり、頸部から口縁部にかけて屈曲気味に外半している。口唇部には棒状施具による連續のキザミ、外面は斜位・縦位のハケメ、内面は横位のハケメ調整が施されている。



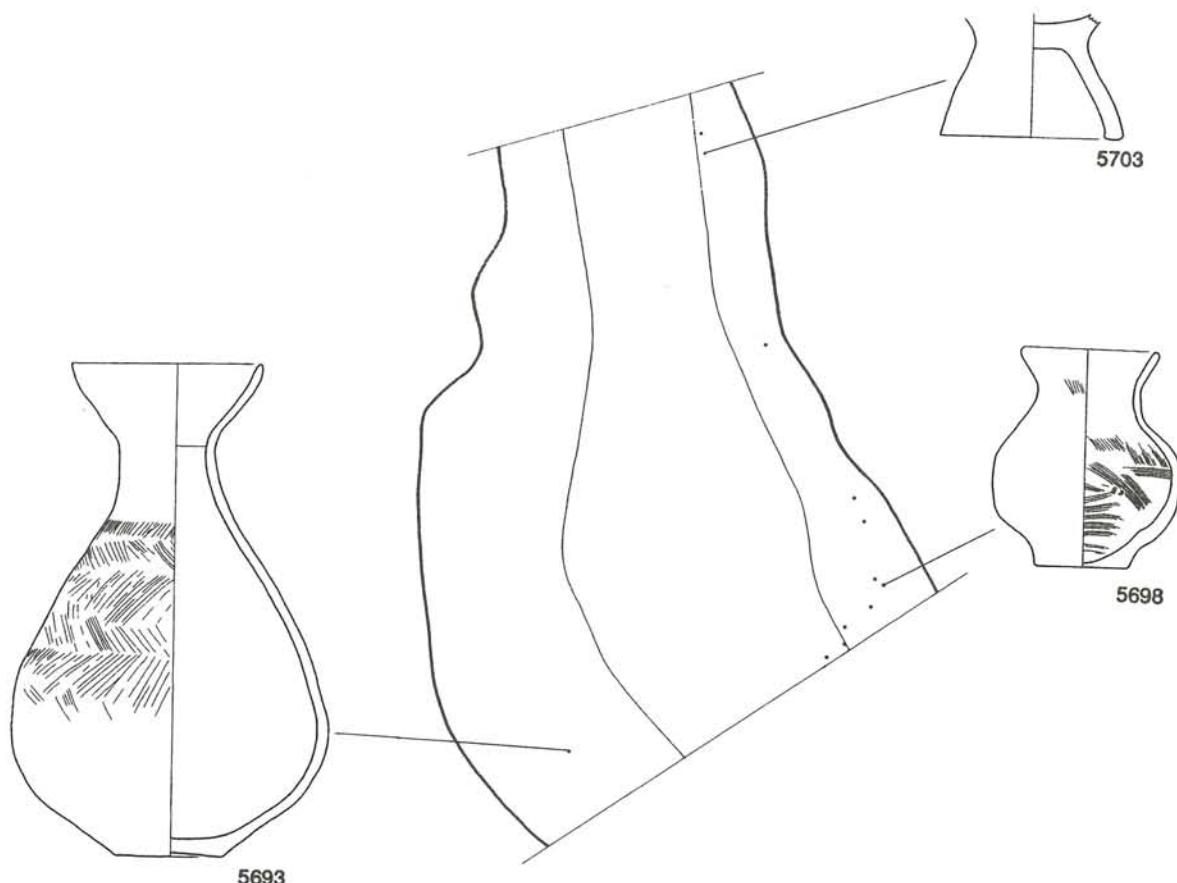
図IV-1-13 第13号溝の平面および断面図

②第13号溝

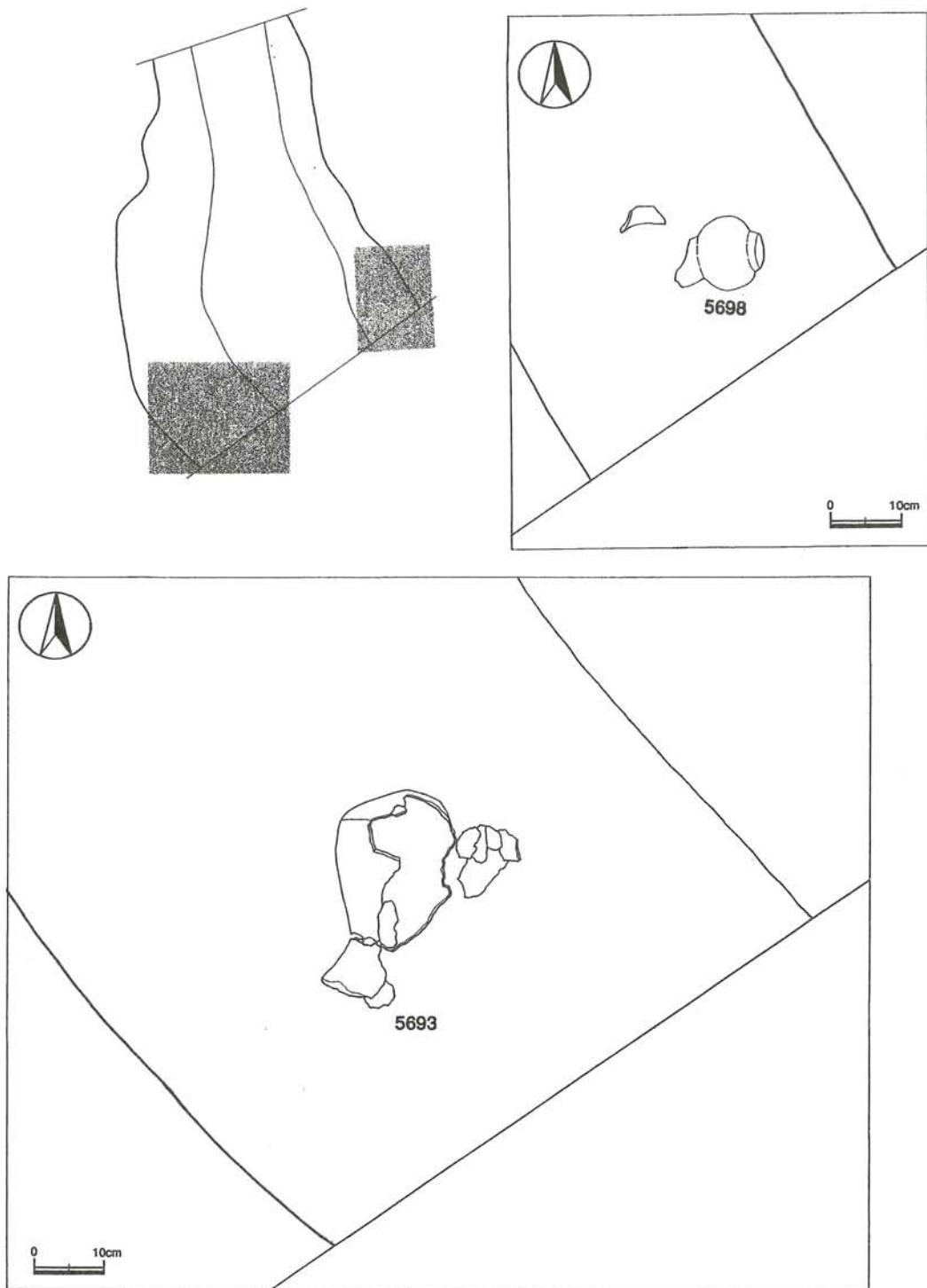
I-3・4・5、J-4 グリッドに位置し、南南東～北北西方向に延びる形で確認され、両端とも発掘対象区域外に延びている。平面形状はほぼ直線状を呈しており、I-4 グリッドの中央で最も幅が広くなるが、北に行くにしたがって幅は狭くなり、さらに北に向かって傾斜している。確認できた溝の長さは488.0cm、最大幅は I-4 グリッドの中央で392.0cm、最小幅は最北部で190.0cm、深さは最深部が48.0cmで、溝の方向はN-12°-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は黒灰褐色土が1層で、炭化物をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。

遺物は溝の南東側に集中し、いずれも溝の緩やかな壁面と溝の底面から弥生土器が出土している。そのうち西側の1点(遺物No5693)は中型の壺で南東側の土器(遺物No5698)に比べ時代は古く、緩やかな壁面から完全な形で出土した。南東側の1点(遺物No5703)は小型の壺で溝の底に近い壁面から完全な形で出土している。



図IV-1-14 第13号溝の遺物分布図

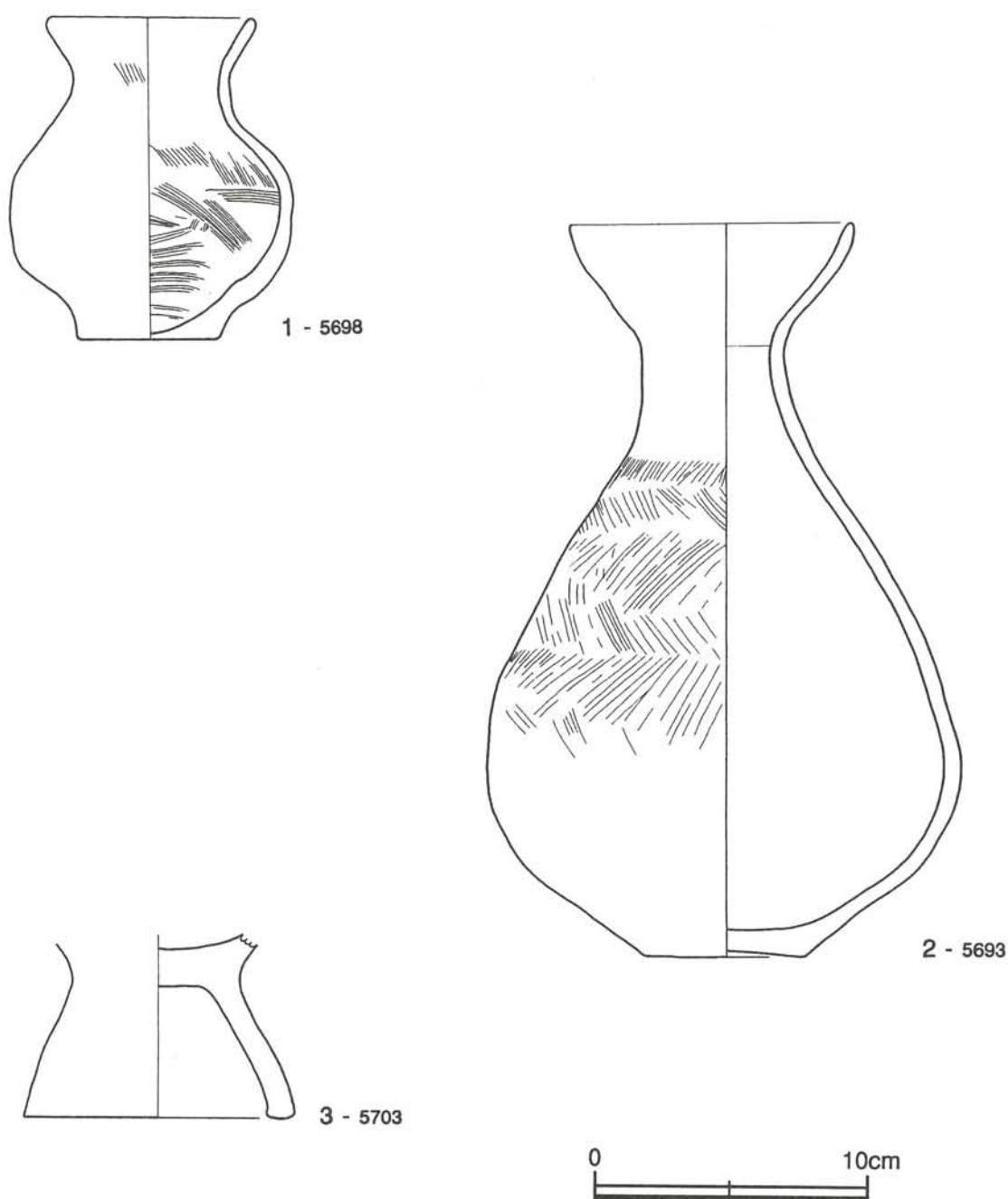


図IV-1-15 第13号溝の遺物出土状況図

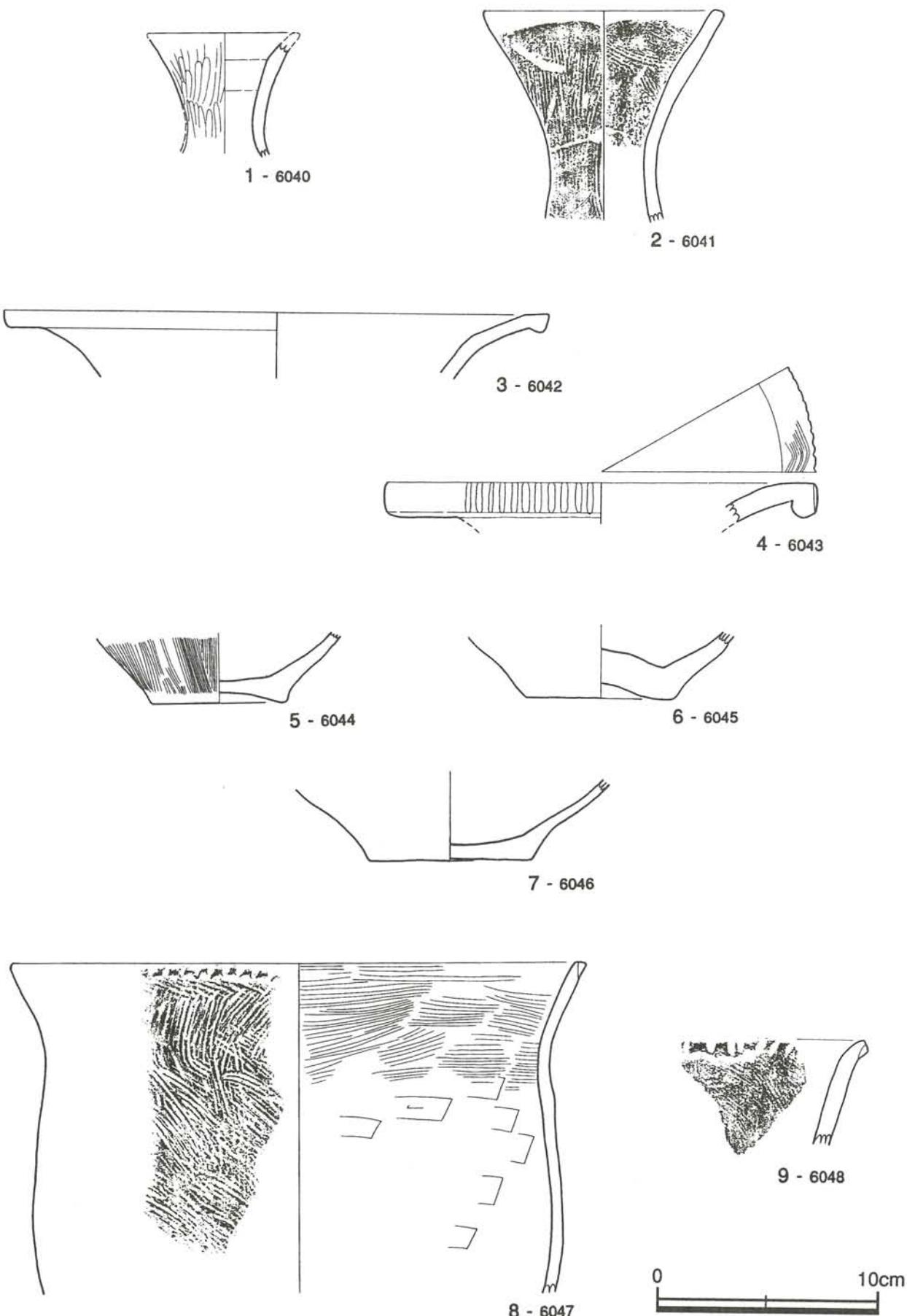
1 (遺物No.5698) は小型の壺で、推定口径は7.2cm、器高は11.2cm、底径は5.0cmある。平底の底部から張りのある胴部、頸部は緩やかにくびれ口縁部にむかってほぼ直線的に開いている。内面は横位・斜位のハケメ調整、外面は斜位のハケメ調整が施されている。

2 (遺物No.5693) は中型の壺で、口径は10.2cm、器高は26.7cm、底径は5.8cmある。底部はあげ底氣味で、胴部下位に最大径があり、口縁部はやや内彎氣味である。外面に斜位のハケメ調整が、胴部下位の一部と頸部に磨きが施されている。

3 (遺物No.5703) は台付甕の台部で、裾部の径は10.0cmある。裾部が僅かに内彎して開き、端部は平坦に面取りしている。器壁は0.8~1.0cmと厚い。



図IV-1-16 第13号溝から出土した土器



図IV-1-17 排水溝から出土した土器（1）

(2) 遺構以外から出土した遺物

遺構以外から出土した弥生時代の遺物として、調査対象地区の周囲に掘った調査用の排水溝と層序を確認するために掘ったテスト・ピットより土器片が出土したため、そのうち、特徴のある土器片をここに紹介する。

①排水溝から出土した土器

1（遺物No6040）は長頸の壺の頸部と思われる破片で、推定口径は6.5cm、頸部の径は3.5cmある。やや細い頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がっている。外面は縦位のヘラ磨きが施されている。

2（遺物No6041）は広口口縁の壺の口縁部で、推定口径は10.3cmある。緩やかに外反して開き、直線的な口縁部となっている。外面は縦位のやや粗いハケメと口縁部に横ナデ調整が施され、頸部には竹管による円形の刺突紋が施されている。内面は斜位のハケメが施されている。

3（遺物No6042）は広口口縁の壺の口縁部である。推定口径は24.4cmある。外反して大きく開き、口縁部は折返しとなっている。端部は縦位のキザミが施されていたと思われる。

4（遺物No6043）は広口口縁の壺の口縁部で、推定口径は19.0cmある。外反気味に大きく開き、折返し口縁となっている。端部は丸棒状施具でのキザミ、内面は櫛描き波状紋が施されている。

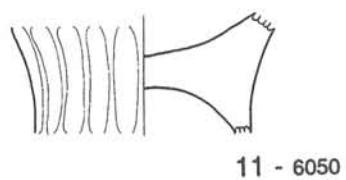
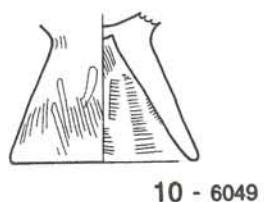
5（遺物No6044）は壺の底部で、底径は6.0cmある。あげ底の底部から外反気味に胴部下半が立ち上がっている。底部の外面は丁寧な磨きが施され、胴部の外面は櫛歯状施具によるハケメ調整が施されている。

6（遺物No6045）は壺の底部で、底径は6.8cmある。あげ底の底部から直線的に胴部下半が立ち上がっている。

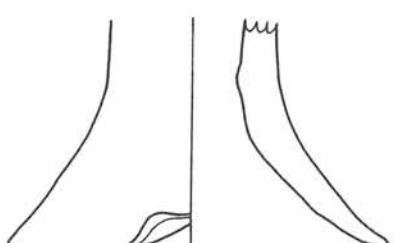
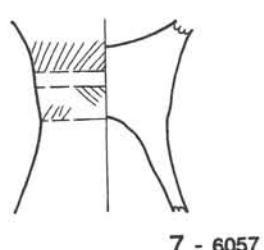
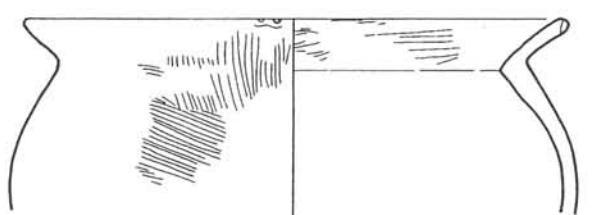
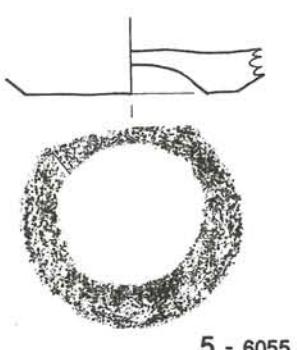
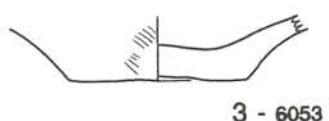
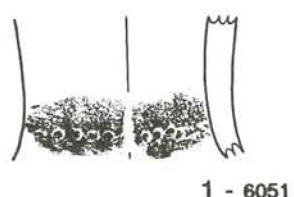
7（遺物No6046）は壺の底部で、底径は7.5cmある。平底の底部から直線的に大きく開きながら胴部が立ち上がっている。胴部の器壁は0.3~0.4cmと薄い。底部の外面に黒斑が見られる。

8（遺物No6047）は台付甕と思われる口縁部から胴部で、推定口径は26.8cmある。胴部から僅かに内彎気味に立ち上がり、頸部から緩やかに外反して直線的にやや開く口縁部となっている。胴部の外面は櫛歯状施具による粗いハケメ状の斜位の直線紋、頸部から口縁部にかけては羽状に施されている。端部下位は櫛刺突によるキザミが見られる。胴部の内面はヘラ削りにナデ調整、頸部から口縁部はハケメ状の横位の直線紋が施されている。

9（遺物No6048）は甕の口縁部の破片で、推定口径は19.0cmある。直線的にやや開いて立ち上がり口縁部で外反している。端部下位に櫛歯状施具によるキザミが施され、外面は斜位のハケメ状の施紋である。内面は横位の施紋にナデ調整が施されている。



図IV-1-18 排水溝から出土した土器（2）



図IV-1-19 テスト・ピットから出土した土器

10（遺物No6049）は小型の台付甕の台部と思われ、裾部の推定径は6.2cmある。直線的に開き、空洞部は高い。外面は縦位のハケメに削りが施され、内面は縦位・斜位のハケメが施されている。

11（遺物No6050）は台付甕の接合部と思われ、接合部の径は7.2cmある。縦位に丸棒状施具による押引きの凹線が26条施されている。器壁が1.0cmとやや厚い。台付甕に見られるススの付着はない。

②K-4 グリッド内のテスト・ピットから出土した土器

1（遺物No6051）は壺の頸部と思われる破片で、僅かに内彎気味に立ち上がっている。外面には竹管による円形の連続刺突紋が1条横位に施されている。

2（遺物No6052）は壺の胴部上半の破片で、縦位のハケメを施した後に、横位に5条の沈線紋が施されている。

3（遺物No6053）は壺の底部で、底径は5.8cmある。ややあげ底気味の底部から外反気味に胴部下半が立ち上がることから下膨れする形状と思われる。

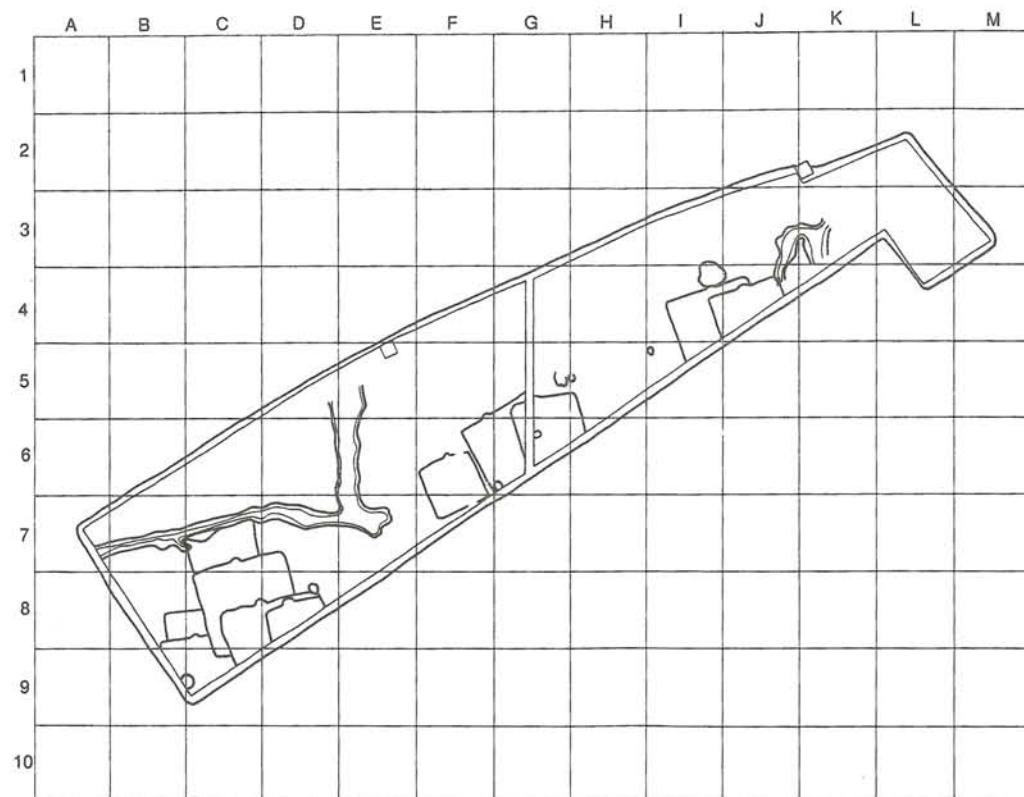
4（遺物No6054）は壺の底部で、底径は6.0cmある。平底の底部から直線的に立ち上がっている。外面は縦位のハケメにナデ調整が施され、内面は左回転のヘラ削りに櫛齒状施具による横位のハケメが施されている。

5（遺物No6055）は壺の底部で、底径は7.0cmある。底部の外面の中央部が扁平な半円状に窪んでおり、俗に言うドーナツ形の底部となっている。外面にはヘラ削りが施され、指頭痕が残っている。

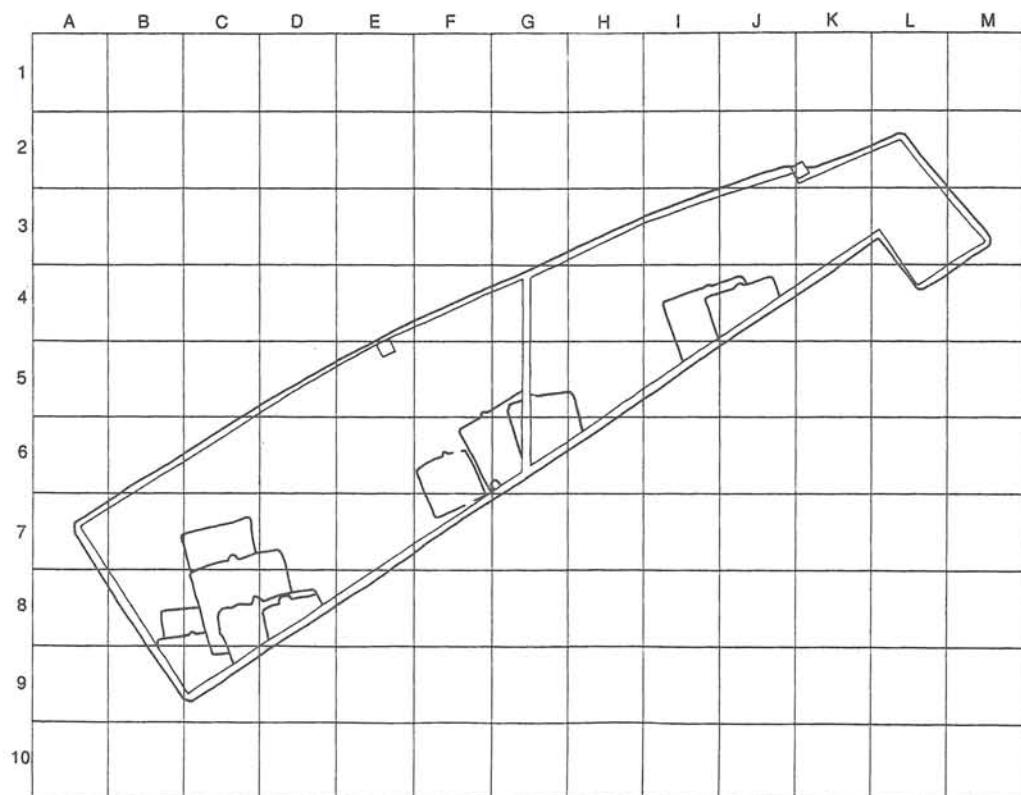
6（遺物No6056）は甕の口縁部で、推定口径は17.9cmある。胴部から内彎して「く」の字状に頸部が屈曲している。端部下位には丸棒状施具によるキザミ、胴部の外面には斜位のハケメ、頸部には縦位のハケメ、口縁部の内面は横位のハケメがそれぞれ施されている。

7（遺物No6057）は高壺の接合部で、接合部の径は4.5cmある。外面は櫛刺突か櫛描きによる羽状紋が施され、その中間に隆帯が1条横位に走っている。

8（遺物No6058）は高壺の脚部と思われ、裾部の推定径は12.5cmある。直線的に下りて裾部で「ハ」の字状に開いている。裾部の一部に片口状に返りが見られる。空洞部は高い。



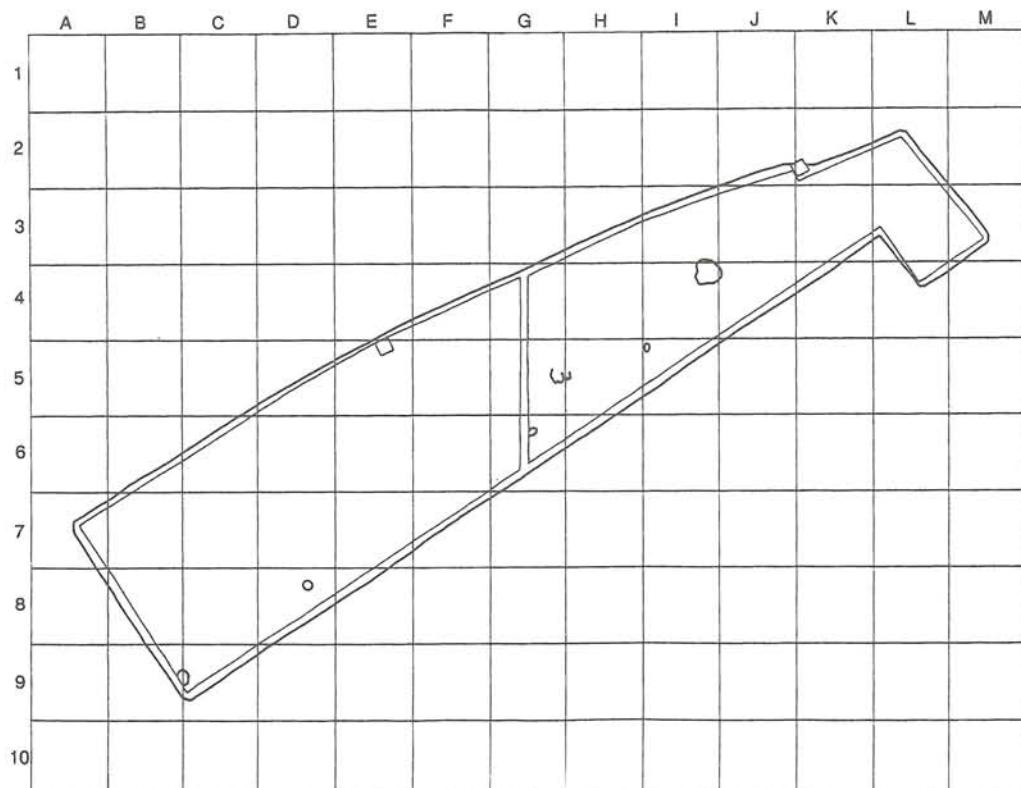
図IV-2-1 古墳時代の遺構分布図(全体)



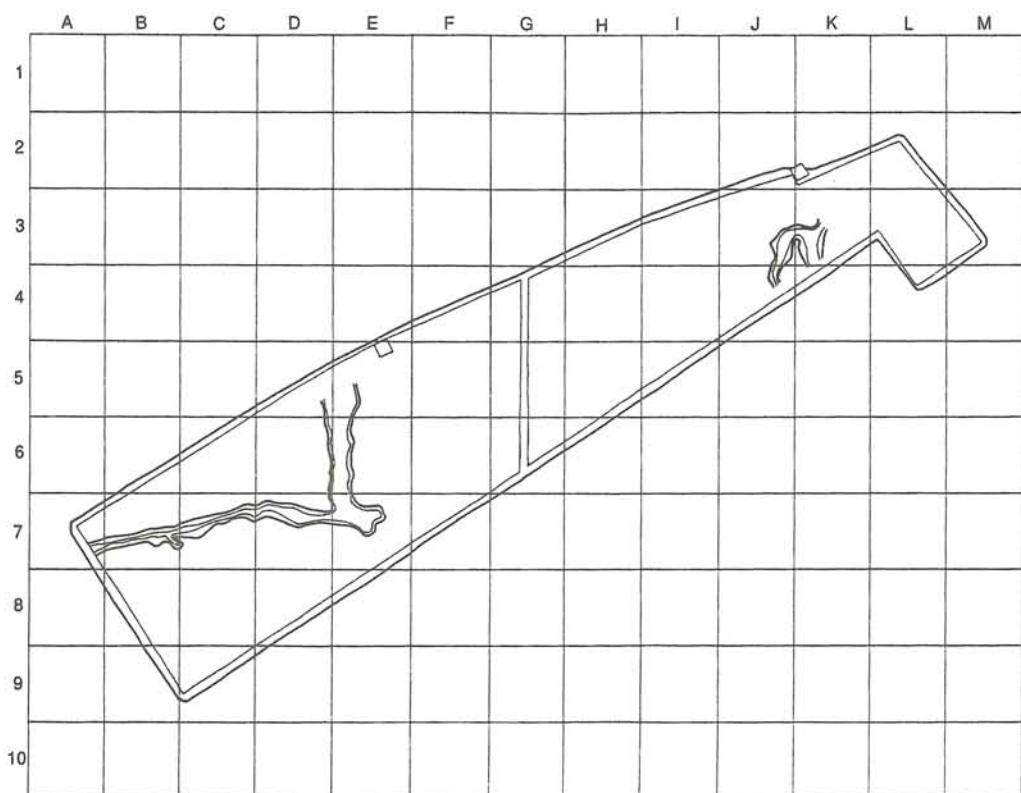
図IV-2-2 古墳時代の遺構分布図(住居址)

第2節 古墳時代の遺構と遺物

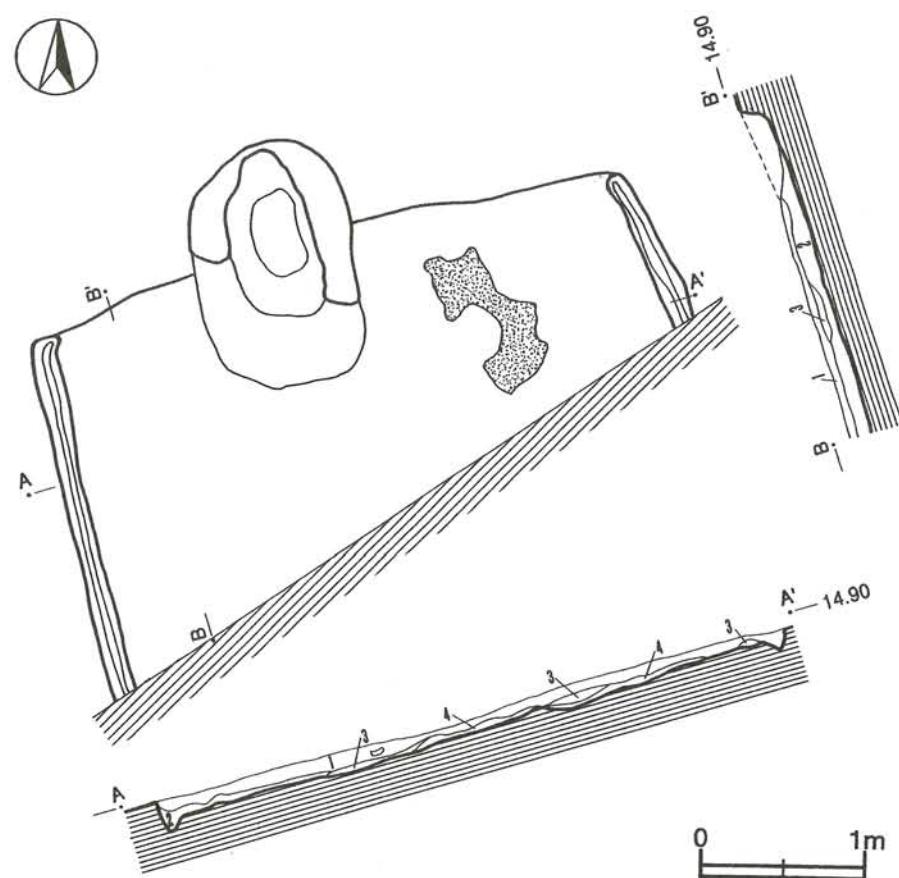
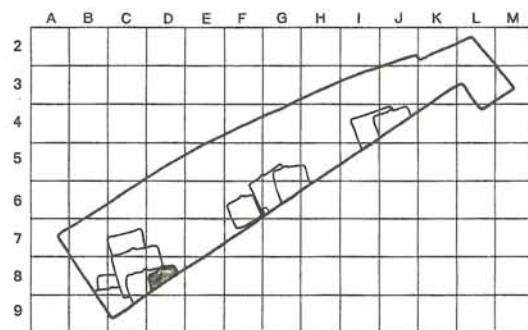
古墳時代の遺構は住居址が12軒、土坑が7基、溝状遺構が2条確認された。第4～6、8号土坑は住居址よりやや高いレベルで確認され、第11～13号土坑は住居址とほぼ同じレベルで確認された。2条の溝状遺構は住居址よりやや下のレベルで確認されている。



図IV-2-3 古墳時代の遺構分布図（土坑）



図IV-2-4 古墳時代の遺構分布図（溝状遺構）



凡例



図IV-2-5 第1号住居址の平面および断面図

(1) 住居址

① 第1号住居址

D-8グリッドの標高14.89mに位置し、第2号住居址と重複関係にあり、本住居址が第2号住居址を掘り込んでいることから、第2号住居址(旧)→第1号住居址(新)の関係が認められる。

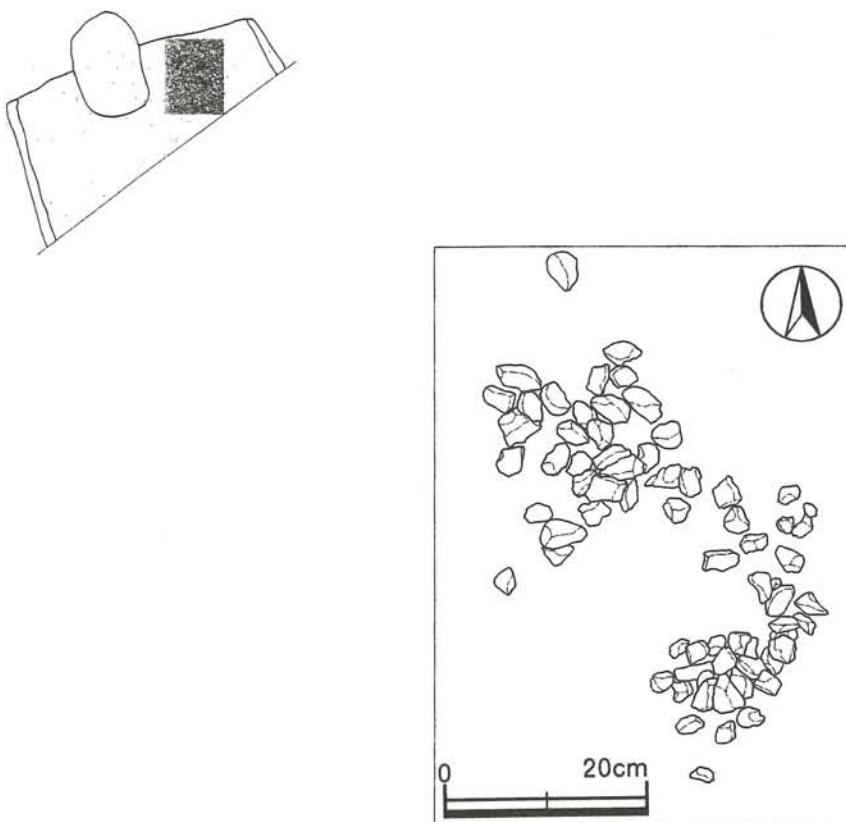
平面形状は南側が発掘対象区域外に広がっているため不明なところもあるが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが3.9m、確認できた南北の最大長は2.2mあり、主軸の方位はN-17°-Wを指している。

壁高は北側が17.0cm、東側が14.0cm、西側が21.0cm、南側は発掘対象区域外のため確認できない。壁溝は北側では確認できなかったが、確認できた東西の壁溝の規模は幅14.0～17.0cm、深さ8.0～11.0cmある。

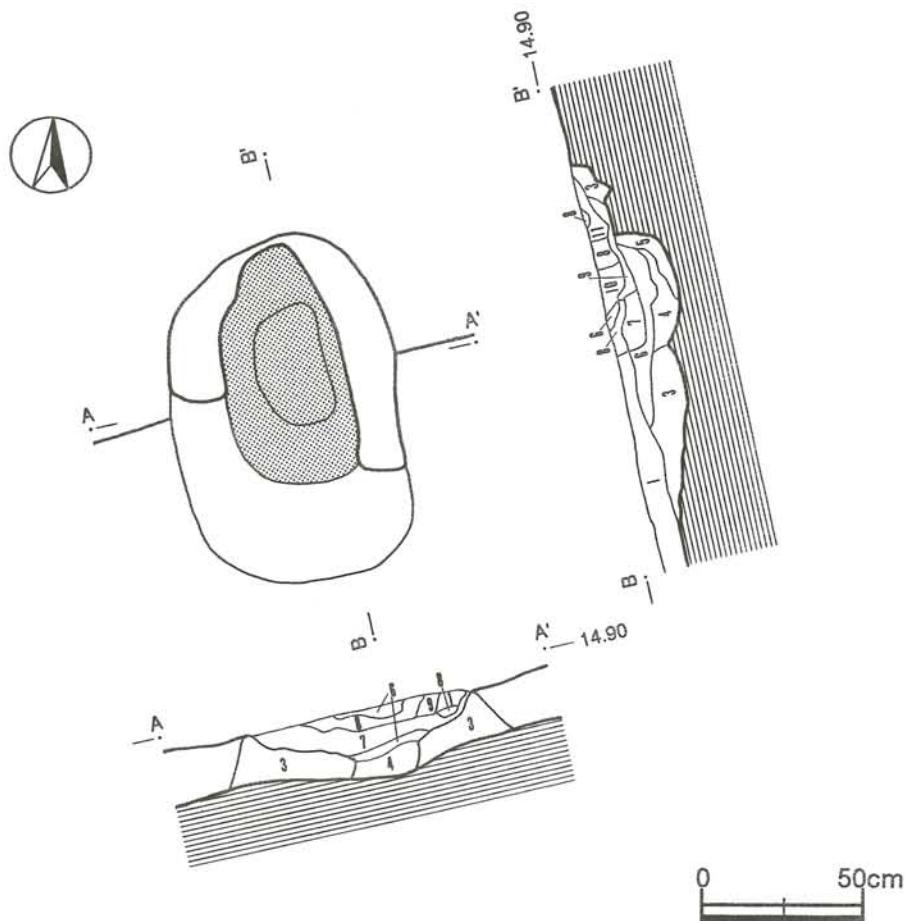
床面は暗茶褐色土で、中央部東側に凹凸がみられるほかはほぼ平坦である。また中央部東側には5.0cm大の礫が約30.0×50.0cmの範囲で敷かれている。さらに東側床面には炭化物が認められた。

柱穴は確認できなかった。

覆土は4層に分けられ、第1層は茶褐色土で炭化粒、焼土粒を少量含んでおり、粘性も締まりもやや弱い。第2層は黒褐色土で炭化粒を多く含んでおり、焼土粒および小ブロック状になった焼土をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で焼土粒をやや多く含んでいる。床面に敷くような状態で礫を含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は黄茶褐色土で粘性も締まりもやや強い。



図IV-2-6 第1号住居址の礫の分布図



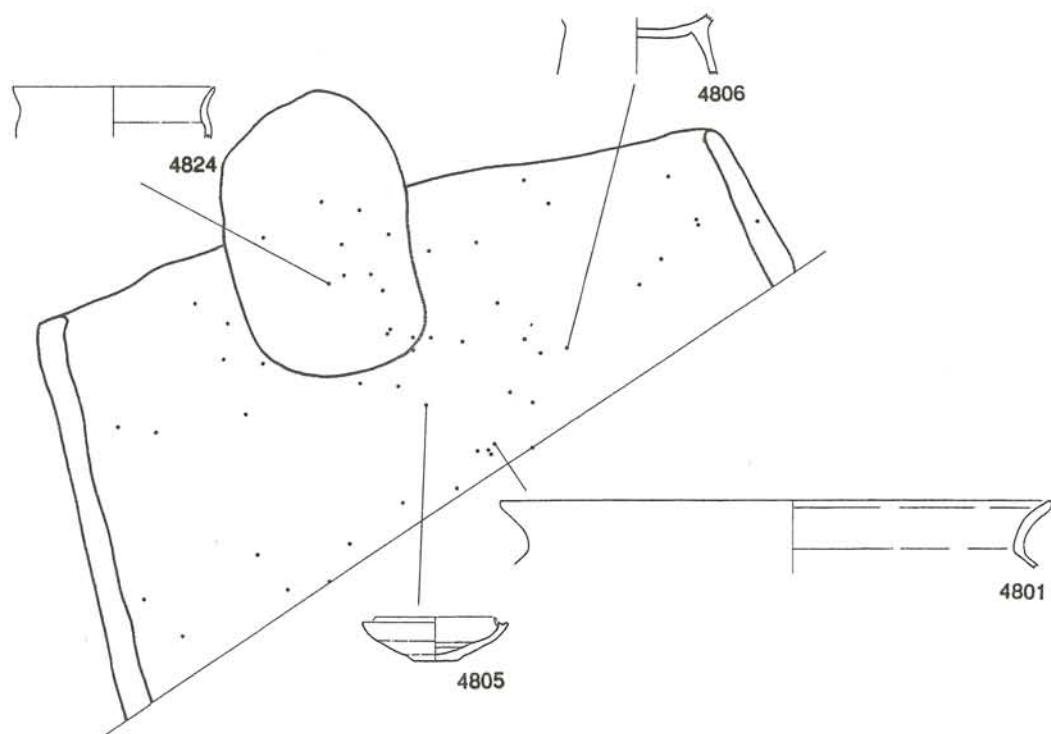
図IV-2-7 第1号住居址の竈の平面および断面図

竈は北壁のやや西よりに位置し、N-12°-Wを向き、全長113.0cm、幅88.0cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、竈の中央部北寄りの部分に南北方向73.8cm、東西方向37.1cmの長楕円形の範囲で煙道～燃焼部と思われる焼土の分布が見られ、さらにその中央部分に南北方向35.9cm、東西方向21.5cmの範囲で掛口と思われる痕跡が見られる。袖部も僅かに痕跡を示す程度で、右袖は長さ76.9cm、幅15.2cm、左袖は長さ44.9cm、幅16.8cmが残存している。

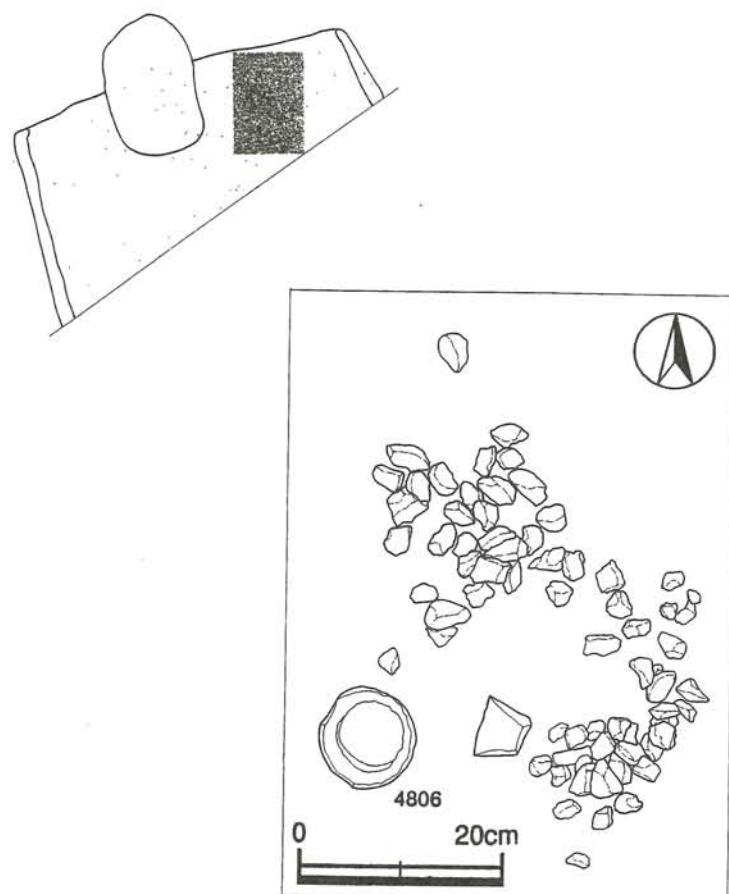
竈の層序は11層に分けられる。第1層は茶褐色土で、粘性も締まりもやや弱い。第2層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや弱い。第3層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒を少量含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。第5層は暗茶褐色土で第4層に比べやや明るく、炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第6層は黒灰褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土のブロックを多く含んでいる。第7層は暗褐色土で炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、礫も含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第8層は暗赤褐色土で炭化粒を少量含み、焼土のブロック・焼土粒を多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第9層は暗赤褐色土で焼土のブロック・焼土粒を多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第10層は暗茶褐色土で炭化粒・焼土粒を微量に含み、粘性も締まりもやや強い。第11層は暗茶褐色土で焼土のブロック・焼土粒をやや多く含み、下部で炭化物・炭化粒が僅かに層を形成している。粘性も締まりもやや強い。

遺物は、住居址の北側に位置する竈および竈周辺部と、住居址の中央部から須恵器の破片が2点、土師器の破片が50点出土している。

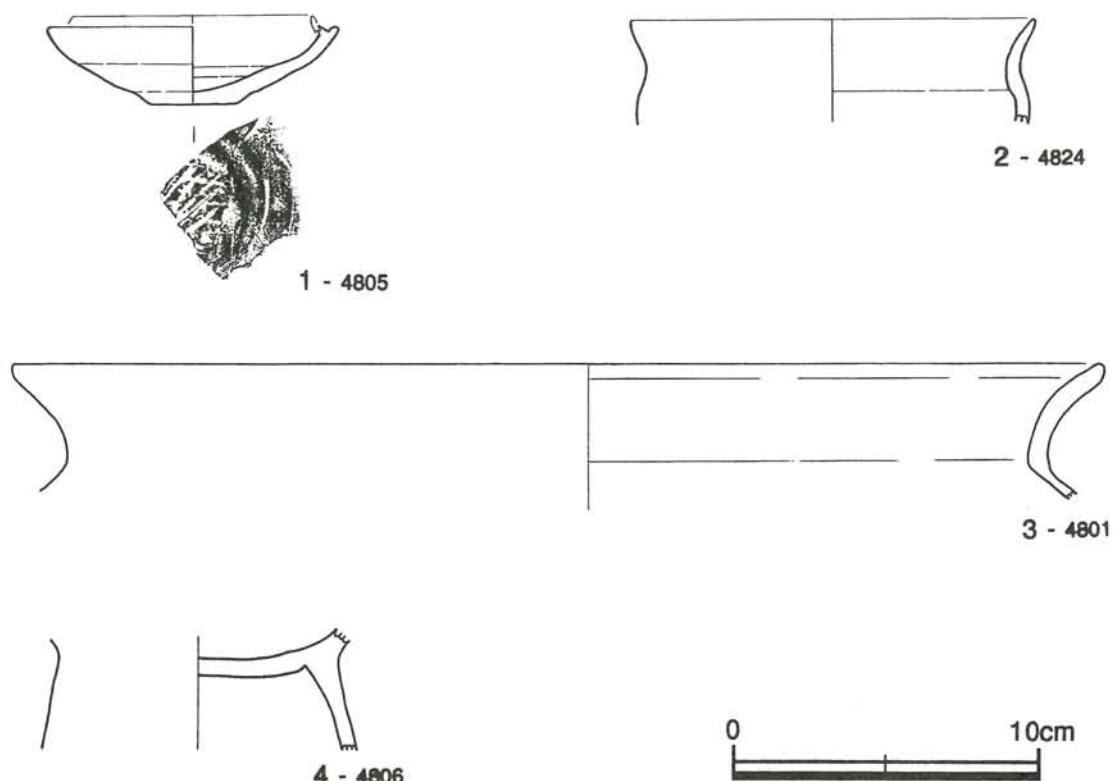
そのうち遺物No4805は須恵器の坏身、遺物No4824は土師器の甕の口縁部、遺物No4801は土師器の台付甕の口縁部、遺物No4806は土師器の甕の接合部である。



図IV-2-8 第1号住居址の遺物分布図



図IV-2-9 第1号住居址の遺物出土状況図



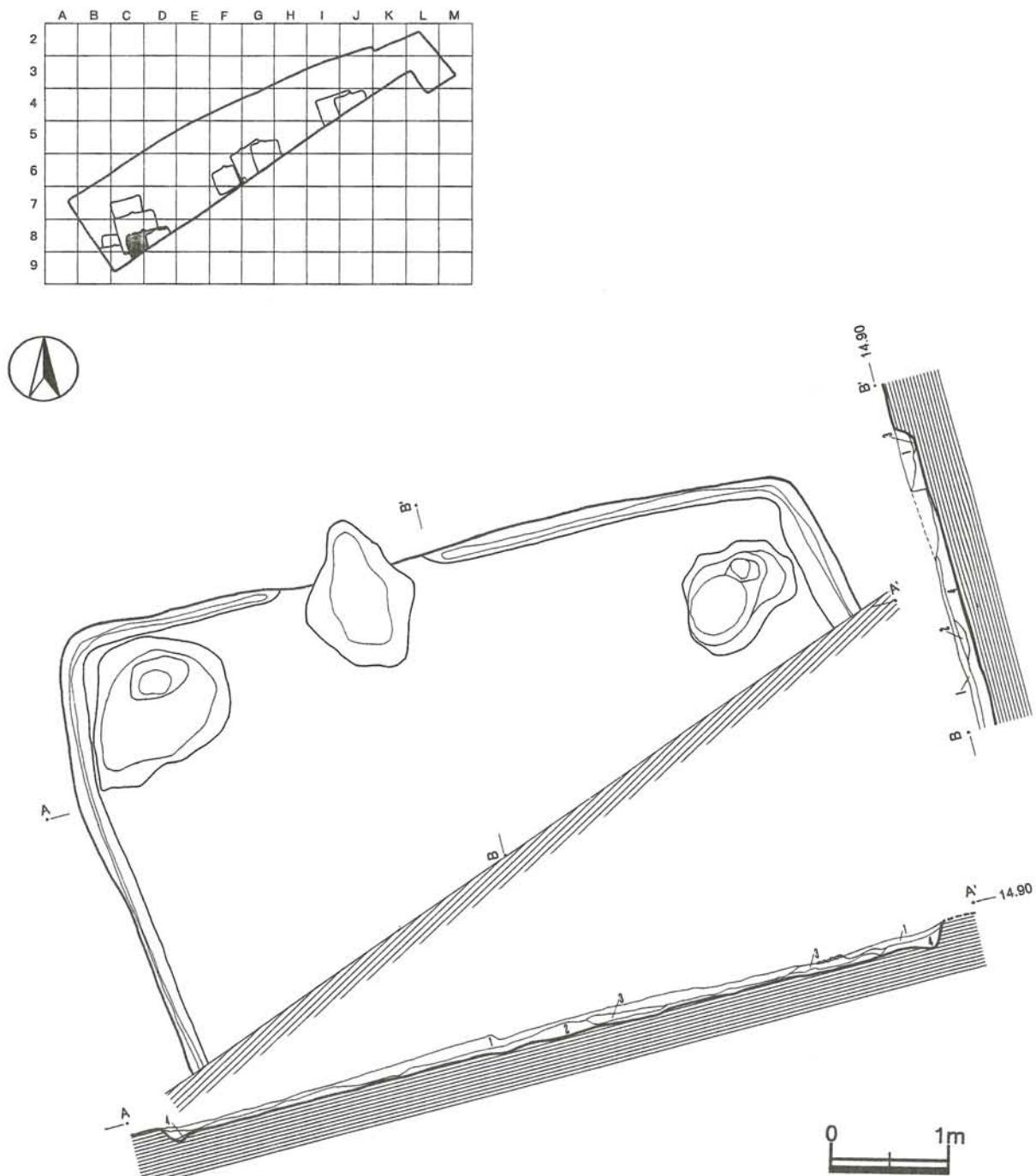
図IV-2-10 第1号住居址から出土した土器

1（遺物No4805）は中央部の北側より出土した須恵器の壊身の破片である。推定最大径は9.6cm、推定口径7.8cm、推定器高は3.0cm前後と小型である。底部からやや丸みを帯びた弓張り状となり、口縁部を内傾させ低く立ち上がる。受部は上方に僅かに伸びている。底部の外面はヘラ切りが未調整で、全体にナデ調整が施されている。

2（遺物No4824）は竈の中央部より出土した土師器の甕の口縁部で、推定口径は13.3cmある。頸部から外反しながら立ち上がり、頸部の内面に段を有している。

3（遺物No4801）は中央部寄りの、ほぼ東西方向に細長い範囲で分散して出土した土師器の台付甕の口縁部で、推定口径は34.0cmある。「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら立ち上がり、口縁部で僅かに直立気味となり、口唇部を丸めている。全体に丁寧な調整が施され、ハケメは見られない。

4（遺物No4806）は土師器の台付甕の接合部で、径は9.2cmある。台部の裾はほぼ直線的に外に開いている。全体に丁寧な調整が施され、ハケメは見られない。台部の外側にはススが付着している。



図IV-2-11 第2号住居址の平面および断面図

②第2号住居址

C-8・9、D-8グリッドの標高14.75mに位置し、第1号・第3号住居址と重複関係にあり、第1号住居址が本住居址を掘り込み、本住居址が第3号住居址を掘り込んでいることから、第3号住居址(旧)→第2号住居址→第1号住居址(新)の関係が認められる。なお、第1号住居址の掘り込み状況は第2号住居址の床面には影響を与えていない。

平面形状は、南側が発掘対象区域外に広がっているため不明なところもあるが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが6.9m、確認できた南北の最大長は3.9mあり、主軸の方位はN-14° -Wを指している。

壁高は北側が17.0cm、東側が22.9cm、西側が15.7cm、南側は発掘対象区域外のため確認できない。壁溝は幅14.0~34.0cm、深さ5.0~8.5cmあり、竈の部分を除き住居址を全周していたと思われる。

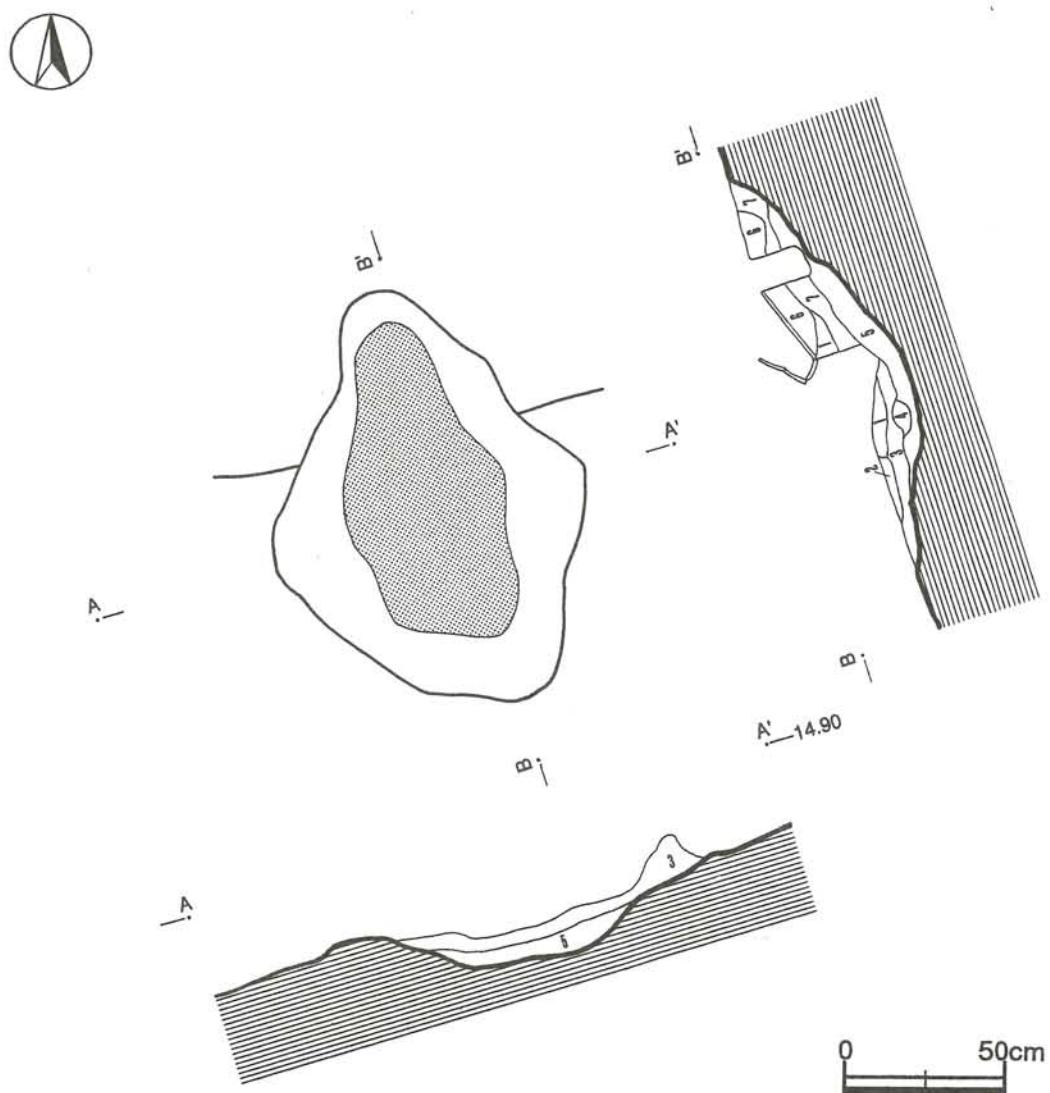
床面は暗茶褐色土で、僅かに凹凸があるが平坦である。竈の周辺は踏み固められやや硬質であるが、北東側の柱穴の周囲はやや軟質である。

柱穴は2ヵ所確認され、柱穴1(北東側)は長径108.2cm、短径67.0cm、最深部の深さ71.5cm、柱穴2(北西側)は長径154.0cm、短径118.2cm、最深部の深さ51.8cmである。

住居址の覆土は4層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で炭化粒・焼土粒を少量含んでおり、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層も暗茶褐色土であるが、第1層に比べやや明るく、床面近くに炭化粒・焼土粒を含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第3層は暗茶褐色土で焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第4層も暗茶褐色土であるが色調は4層の中で最も暗く、炭化粒・焼土粒を多く含み、粘性も締まりもやや強い。

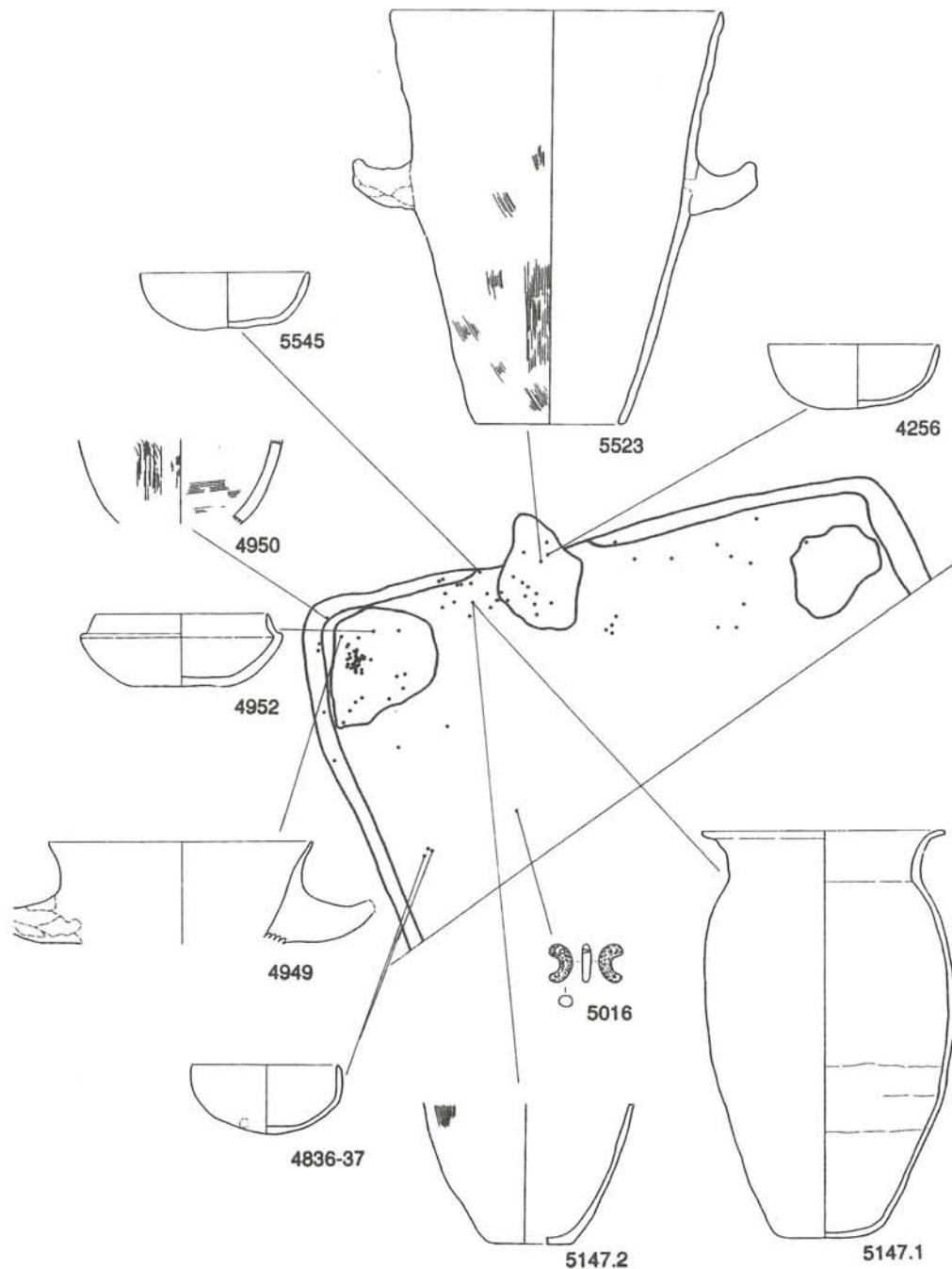
竈は北壁の西寄りに位置し、N-13°-Wを向き、全長131.5cm、最大幅は98.0cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、僅かに竈の中央部分に南北方向100.7cm、東西方向50.1cmの不整な長楕円形の範囲で煙道～燃焼部と思われる焼土の分布が見られる。

竈の層序は一部搅乱を受けているが、7層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗赤褐色土で炭化物・炭化粒をやや多く含み、焼土粒・焼土のブロックを多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第3層は暗茶褐色土で第1層に比べやや暗く、炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第4層は暗茶褐色土で炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性は強く、締まりはやや強い。第5層は暗赤茶褐色土で、炭化粒を少量含み、焼土粒はやや多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや強い。第6層は暗赤茶褐色土で、炭化粒は少量含み、焼土粒をやや多く含んでいる。粘性も締まりもやや強い。第7層は暗赤茶褐色土で第6層に比べ暗く、炭化粒を少量含み、焼土粒をやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

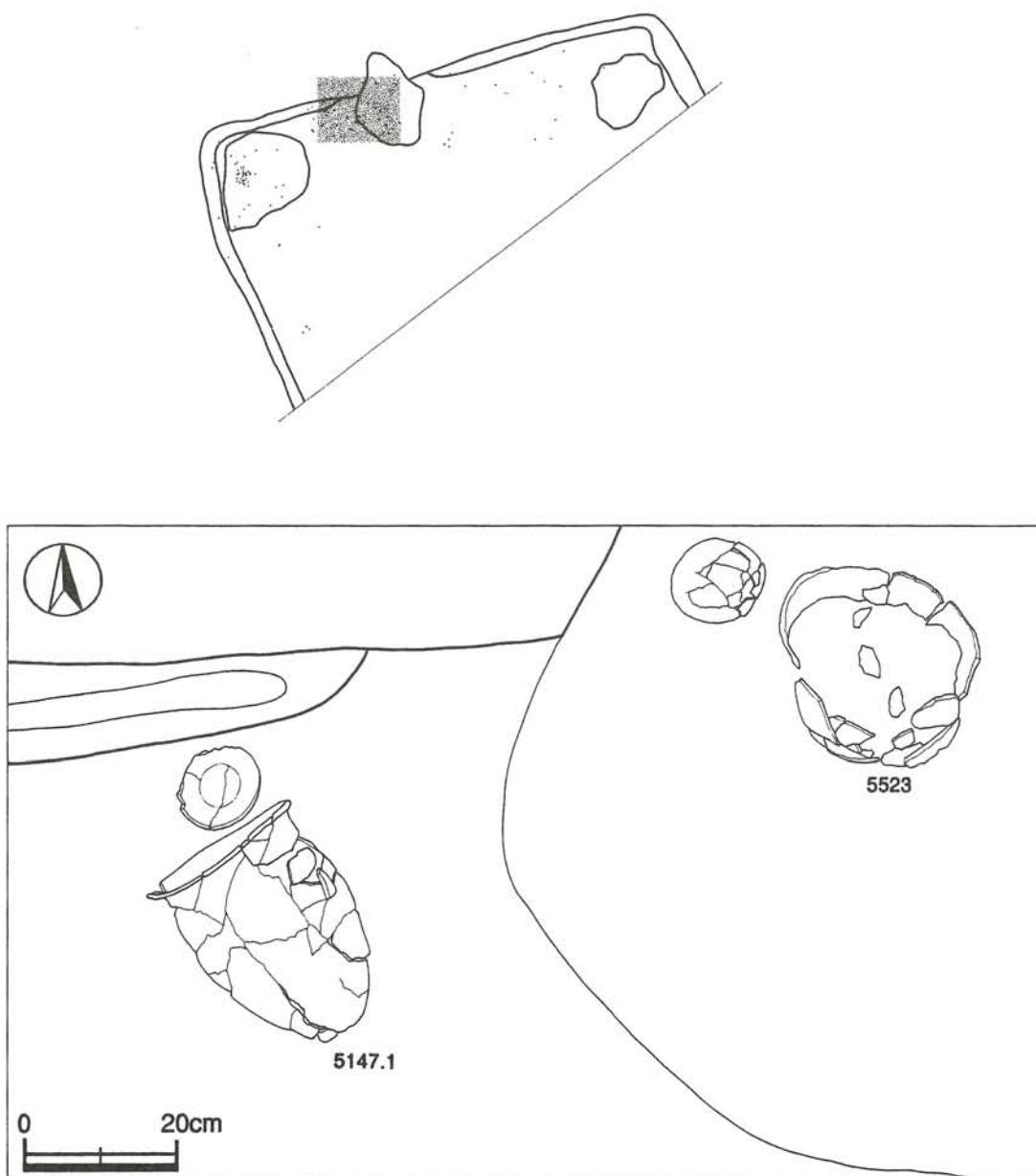


図IV-2-12 第2号住居址の竈の平面および断面図

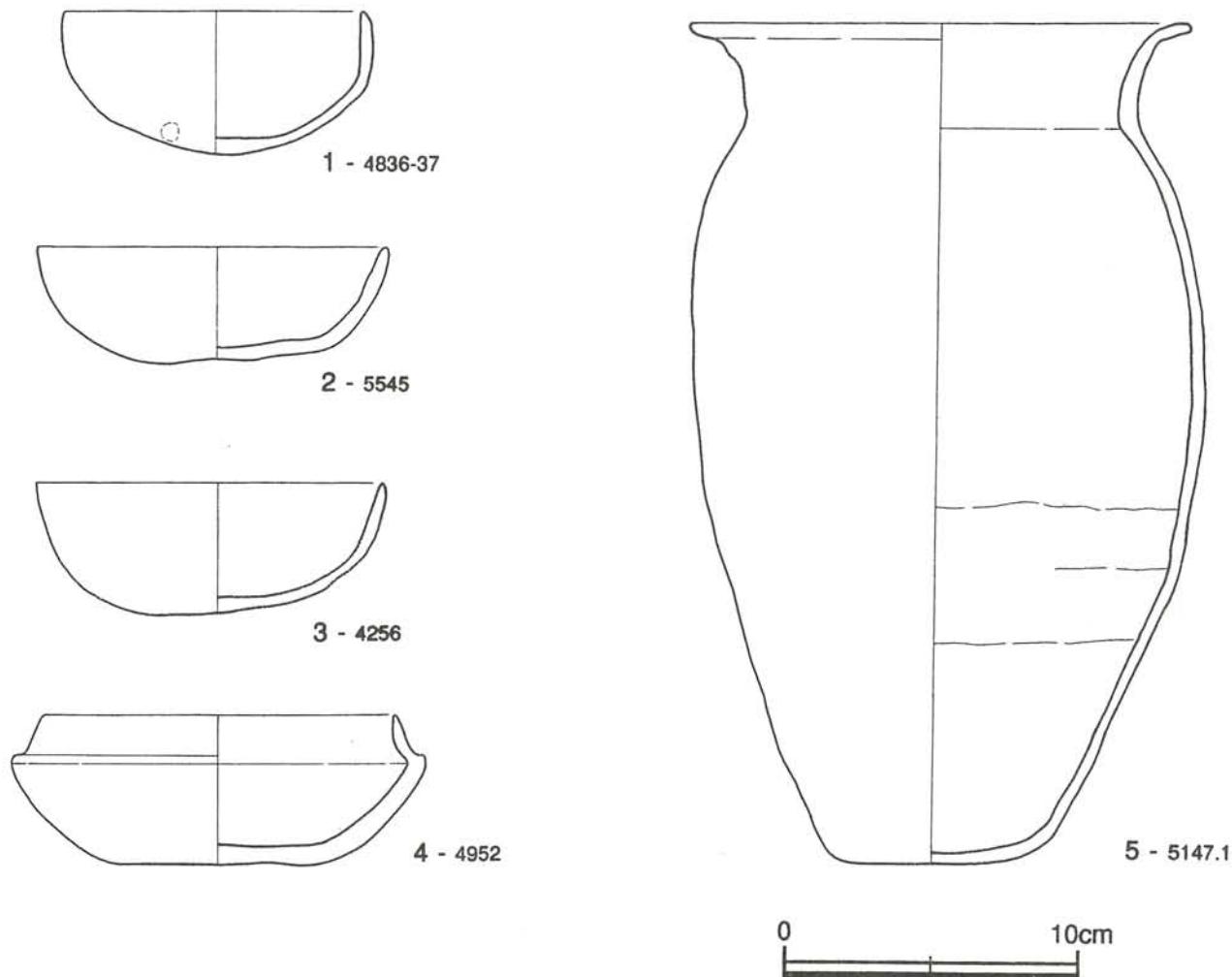
遺物は住居址の北側に位置する竈および竈の周辺部と、北西隅の柱穴内に集中して出土している。土師器の完形品が6点と破片が57点、勾玉が1点出土している。そのうち遺物No4256、遺物No4836+4837、遺物No4952、遺物No5545は壺の完形品、遺物No5523は甌の完形品、遺物No5147.1は甌の完形品、遺物No5147.2は甌の底部から胴部下半の破片、遺物No4942は壺の胴部上半の破片、遺物No4950は壺の胴部下半の破片、遺物No4949は把手付鉢の口縁部から胴部上半の破片、遺物No5016は勾玉である。



図IV-2-13 第2号住居址の遺物分布図



図IV-2-14 第2号住居址の遺物出土状況図



図IV-2-15 第2号住居址から出土した土器（1）

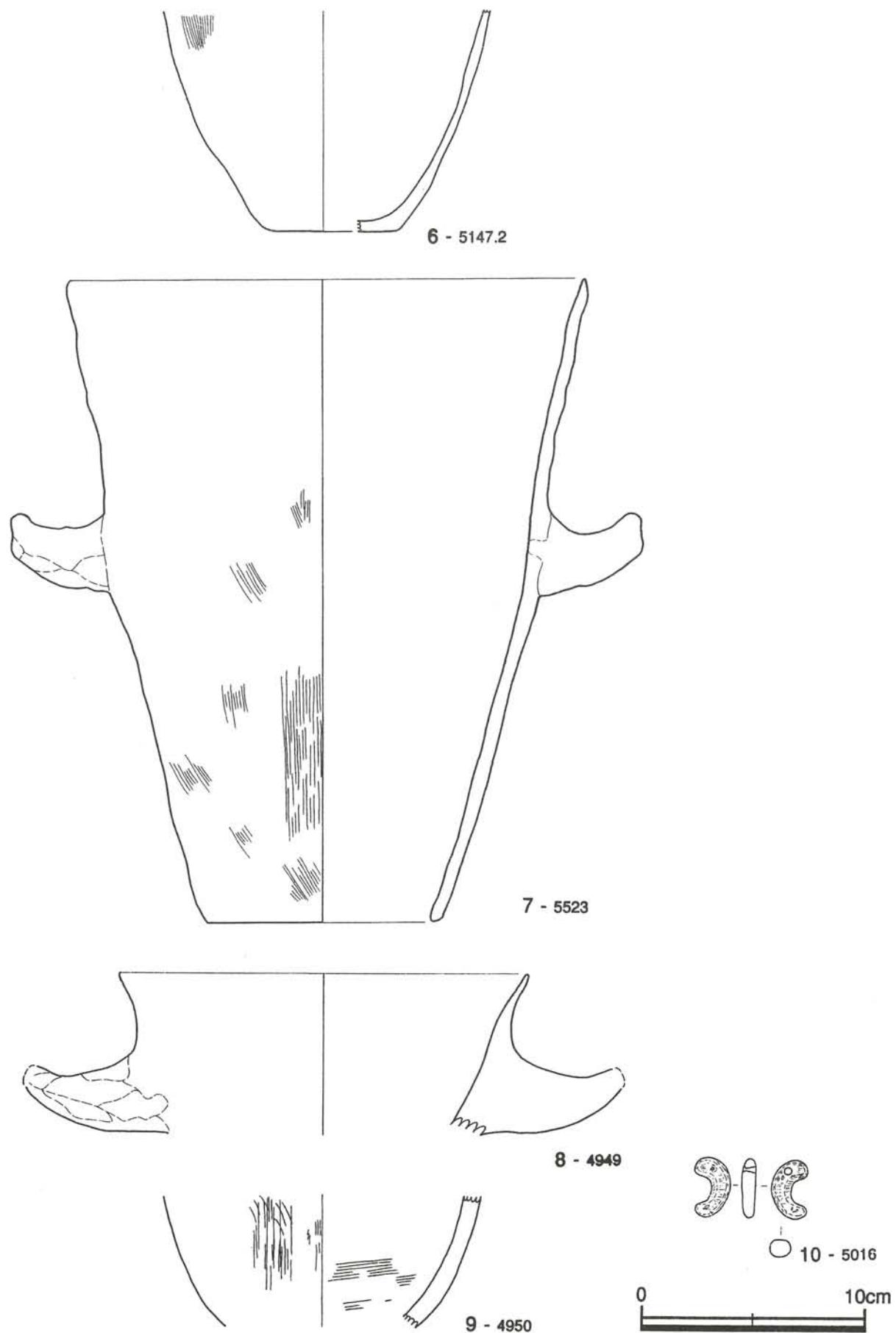
1（遺物No4836+4837）は中央部西側より出土した土師器の壊で、口径は10.6cm、器高は4.8cmある。底部は丸味を帯びる半円球を呈し、外面に指頭痕が残っている。

2（遺物No5545）は竈の西側より出土した土師器の甕（遺物No5147.1）の北に並んで出土した土師器の壊である。推定口径は12.0cm前後、器高は4.4cmある。底部からやや丸味を帯びて立ち上がり、口唇部をやや細く丸めている。

3（遺物No4256）は竈の中央部で把手付甕（遺物No5523）の下に重なるように出土した土師器の壊である。口径は12.2cm、器高は3.8cmある。丸味を帶びた底部をから内彎して立ち上がり、端部をやや細く丸めている。

4（遺物No4952）は北西部の土坑から出土した土師器の模倣壊である。推定口径2.0cm、器高は5.0cm、最大径は14.0cmある。平底気味の底部から弓張り状を呈し、口縁部は内傾して立ち上がり、端部はやや細く尖る。

5（遺物No5147.1）は竈の西側より出土した土師器の甕で、口径は16.8cm、器高は28.5cm、底径は5.5cmある。長胴型で最大径が胴部の上半にあり、頸部から口縁部にかけて「コ」の字状を呈し、頸部の内面に稜を有している。胴部には輪積み痕が残り、胴部の下半にはススが付着している。



図IV-2-16 第2号住居址から出土した土器(2)と勾玉

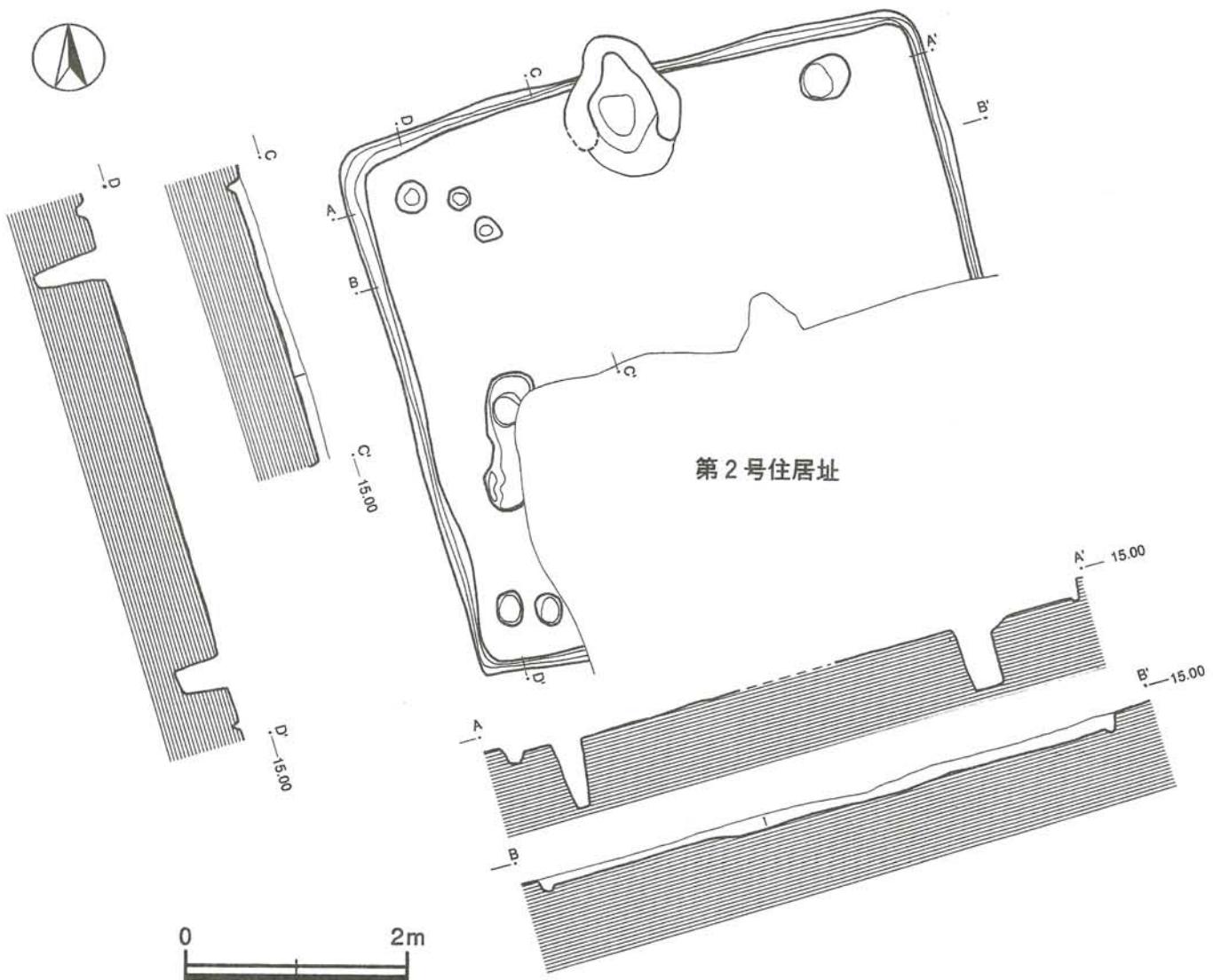
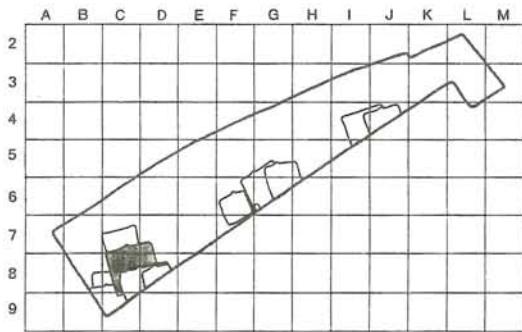
6（遺物No5147.2）は竈の西側より出土した甕（遺物No5147.1）の西隣に位置する土師器の甕の底部から胴部下半にかけてのもので、底径は5.6cmある。僅かに内彎気味に開きながら立ち上がる長胴型と思われる。胴部の外面は縦位のハケメ調整が施され、胴部下半にはススが付着している。

7（遺物No5523）は竈の中央部より出土した土師器の把手付甕で、推定口径は23.0cm、器高は29.0cm、底径は10.3cmある。底部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる直胴型を呈し、把手は角状である。胴部の外面は縦位・斜位のハケメが施されている。底部の脇の内外面にススが付着している。

8（遺物No4949）は北西部の土坑から出土した土師器の把手付鉢の口縁部から胴部上半で、推定口径は15.2cmある。胴部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で僅かに開きを強くし、端部は細く尖っている。把手は角状である。調整は丁寧なナデ調整と思われる。

9（遺物No4950）は北西部の隅より出土した土師器の甕の胴部下半である。緩やかに内彎し開きながら立ち上がる。底部はやや丸味をおびる平底状を呈すると推定される。器壁が0.8cmとやや厚い。外面は縦位のやや粗いハケメ、下部（底部）はナデ、内面は横位のハケメ調整が施されている。

10（遺物No5016）は南側の第9号土坑に隣接して出土した瑪瑙製の勾玉で、長さ2.6cm、幅0.6cm、厚み0.9cmある。断面は橢円形となり、孔は二方向より開けており、表面はよく研磨されている。



図IV-2-17 第3号住居址の平面および断面図

③第3号住居址

C-7・8・9、D-7・8グリッドの標高14.75mに位置し、第2号・第4号・第5号・第6号住居址と重複関係にあり、第2号住居址が本住居址を掘り込み、本住居址が第4号・第5号・第6号住居址を掘り込んでいることから、第4、5、6号住居址(旧)→第3号住居址→第2号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は南東側が第2号住居址によって掘り込まれているが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが6.2m、南北は5.8mあり、主軸の方位はN-15.5°-Wを指している。

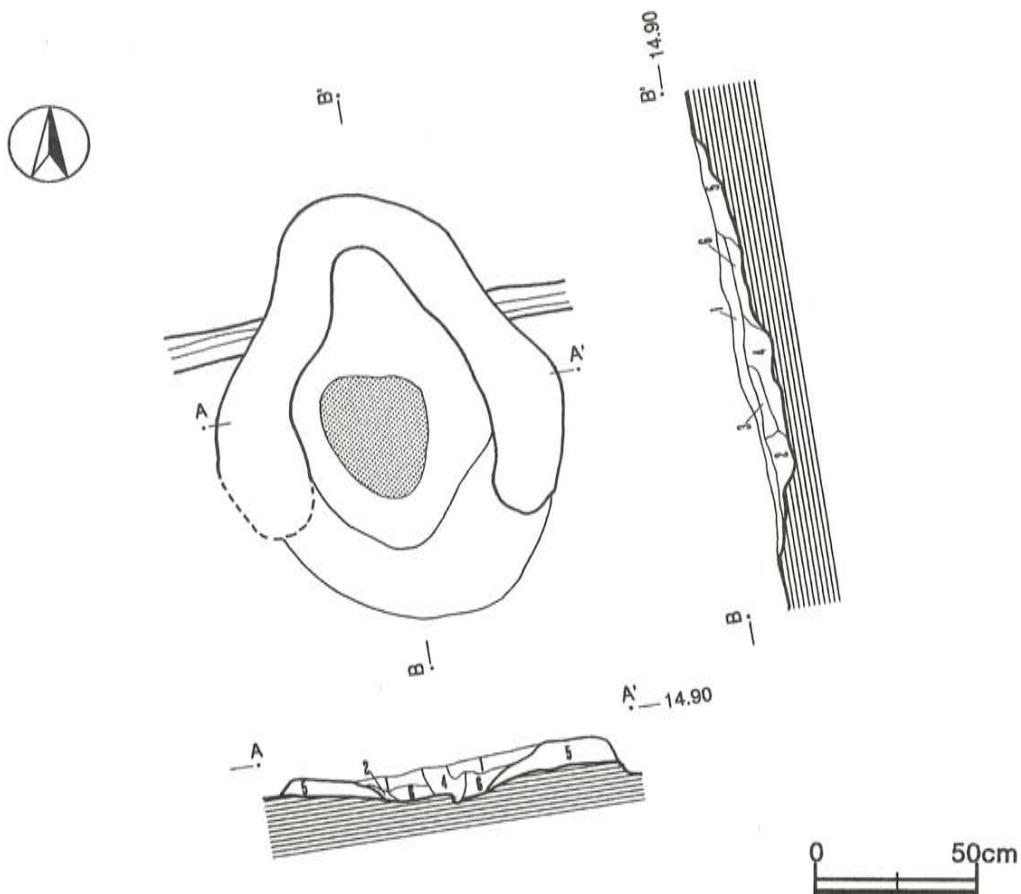
壁高は北側が10.8cm、南側が8.0cm、東側が23.2cm、西側が20.0cmある。壁溝は幅11.0～21.0cm、深さ6.0～11.0cmあり、竈の部分を除き住居址を全周していたと思われる。

床面は暗茶褐色土で、北側から中央にかけて僅かに高くなっているが、全体に平坦で踏み固められやや硬質である。

柱穴は3ヵ所確認され、柱穴1(北東側)は長径54.0cm、短径40.1cm、最深部の深さ70.0cm、柱穴2(北西側)は長径33.0cm、短径30.0cm、最深部の深さ74.0cm、柱穴3(南西側)は長径33.0cm、短径27.0cm、最深部の深さは48.0cmある。

住居址の覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化物・炭化粒・焼土粒を微量に含んでおり、粘性はやや強く、締まりはやや強い。

その他、北西側柱穴の東側にピットが2基、西側中央部には第2号住居址によって一部が掘り込まれた土坑が1基、南西側柱穴の東側にピットが1基確認されている。



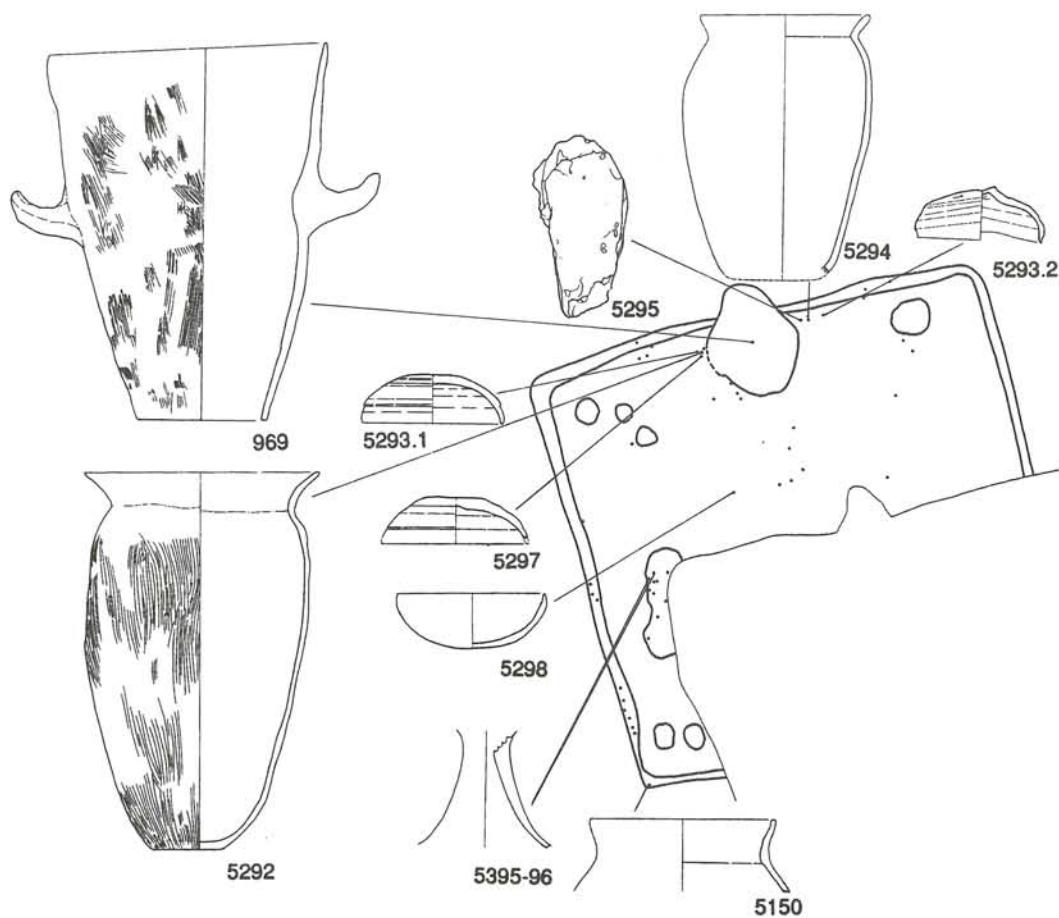
図IV-2-18 第3号住居址の竈の平面および断面図

竈は北壁のほぼ中央に位置し、N-15°-Wを向き、全長148.5cm、最大幅116.9cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、竈の中央部分に南北方向36.9cm、東西方向31.0cmの範囲で焼土の分布が見られる。袖部は右袖が長さ102.6cm、幅23.0cm、左袖は残存部の長さ84.0cm、幅22.5cmある。

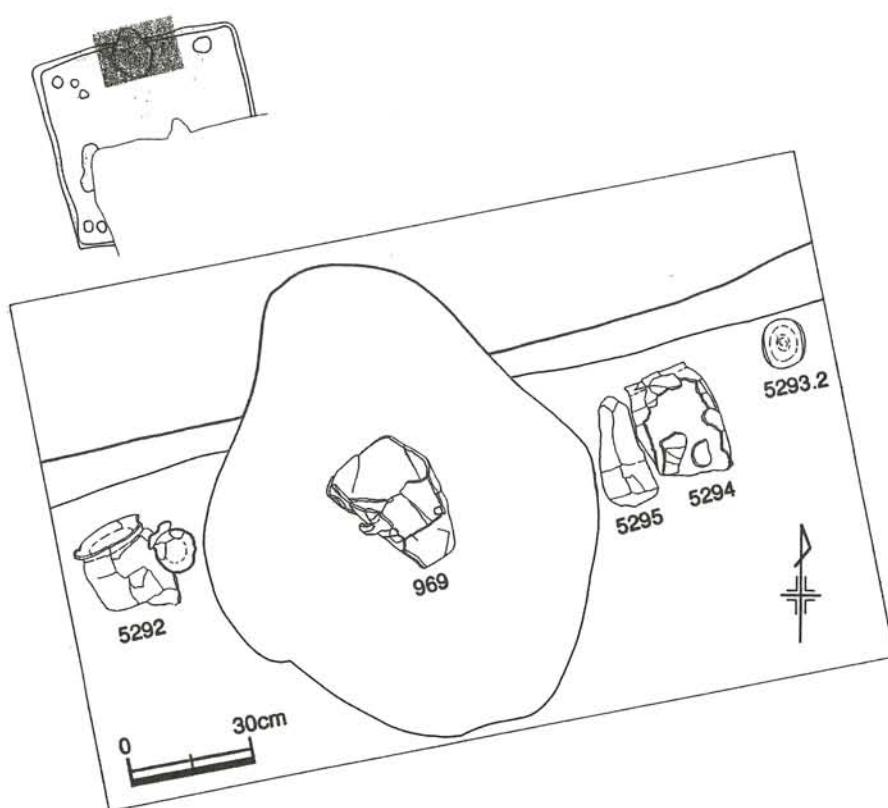
竈の層序は6層に分けられる。第1層は暗赤茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒・焼土の小ブロックをやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第3層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第4層は暗赤褐色土で炭化物・炭化粒・焼土粒・焼土の小ブロックを多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第5層は茶褐色土で、炭化物・炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第6層は暗赤褐色土で、炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒・焼土の小ブロックをやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

遺物は住居址の北側に位置する竈および竈の周辺部を中心に、須恵器の完形品が3点、土師器の完形品が4点と破片が45点出土している。

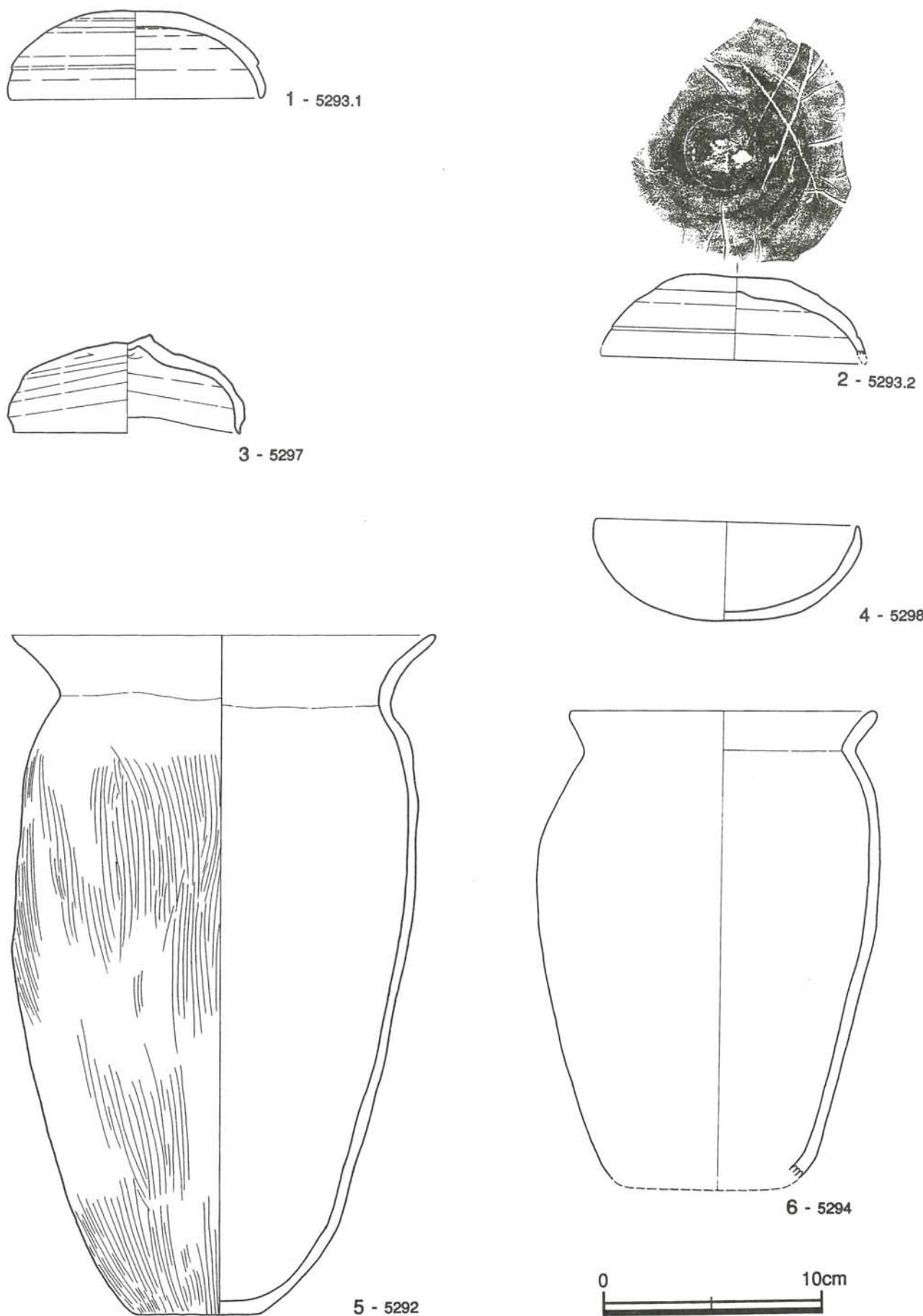
そのうち、遺物No5293.1、遺物No5293.2、遺物No5297は須恵器の壺の蓋の完形品、遺物No5298は土師器の壺の完形品、遺物No5395+5396は土師器の高壺の脚部、遺物No969は土師器の甌の完形品、遺物No5292、遺物No5294は土師器の甌の完形品、遺物No5150は土師器の壺の口縁部の破片、遺物No5295は土製支脚である。



図IV-2-19 第3号住居址の遺物分布図



図IV-2-20 第3号住居址の遺物出土状況図



図IV-2-21 第3号住居址から出土した土器（1）

1（遺物No5293.1）は竈の西側脇より出土した須恵器の壺蓋で、口径は11.3cm、器高は4.0cmある。全体に半円球を呈し、口縁部を垂直に下ろし、端部を丸めている。天井部と口縁部の境には沈線による稜を設けている。天井部の外面の1/3がヘラ削りされ、その他はナデ調整されている。

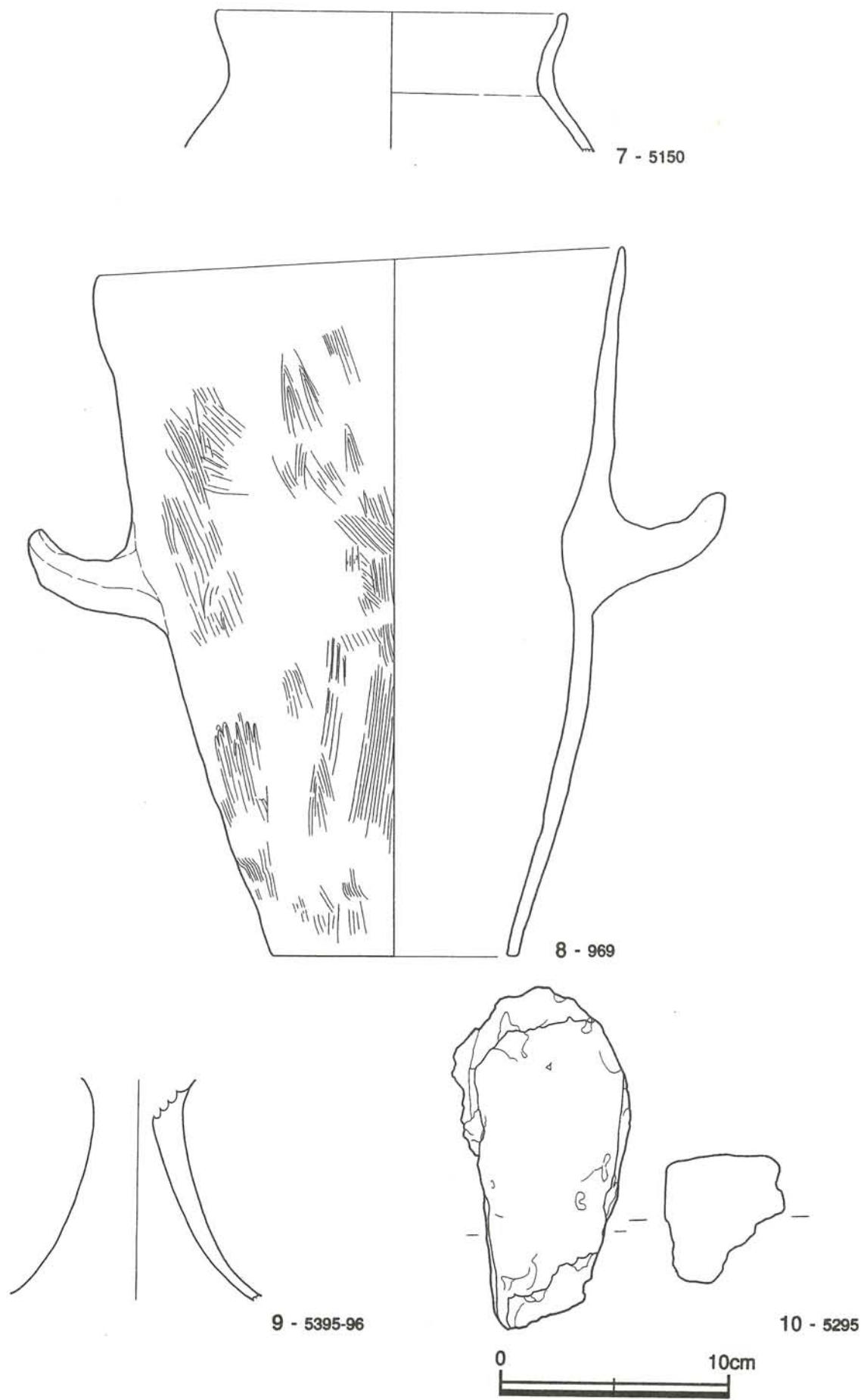
2（遺物No5293.2）は竈の東側脇より出土した須恵器の壺蓋で、推定口径は12.0cm前後、推定器高は4.0cm前後ある。天井部を弓張り状にし、口縁部を垂直気味に下ろし、天井部と口縁部の境には沈線を設けている。天井部の外面にはヘラ切り痕が残り、1/2がヘラ削りされ、他はナデ調整されており、ヘラ記号「×」がある。

3（遺物No5297）は竈の西側より出土した須恵器の壺蓋で、全体に歪みがあり、口径は12.1cm、器高は4.1cmある。やや丸味のある弓張り状の天井部を持ち、口縁部で垂直に下り、端部をやや細く丸めている。天井部と口縁部の境には明瞭な沈線を施していない。ヘラ切りの未調整な天井部はヘラ削りが約1/2、残りはナデ調整が施されている。

4（遺物No5298）は中央部西寄りから出土した土師器の壺で、口径は12.0cm、器高は4.5cmある。丸味を帯びた底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部で直立気味となり、端部を尖らせている。また、わずかではあるが内面に赤彩を施した痕跡が認められる。

5（遺物No5292）は竈の西側脇より出土した土師器の甕である。口径は19.2cm、器高は31.1cm、底径は5.6cmある。最大径を口縁部に持つ長胴型で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状気味に屈曲し、端部を丸めている。頸部の外面に横位のヘラ調整、胴部の外面は縦位のやや粗いハケメ調整が施されている。胴部には輪積み痕が残っている。外面の全体にススが付着している。

6（遺物No5294）は竈の東側より出土した土師器の甕である。口径は14.0cm、推定器高は22.0cm前後、推定底径は7.0cm前後ある。最大径が胴部上半にある長胴型で、頸部から口縁部は「く」の字状を呈し、端部は肥厚気味に丸めている。胴部の外面は縦位のハケメ調整が施されている。胴部には輪積み痕が残っている。



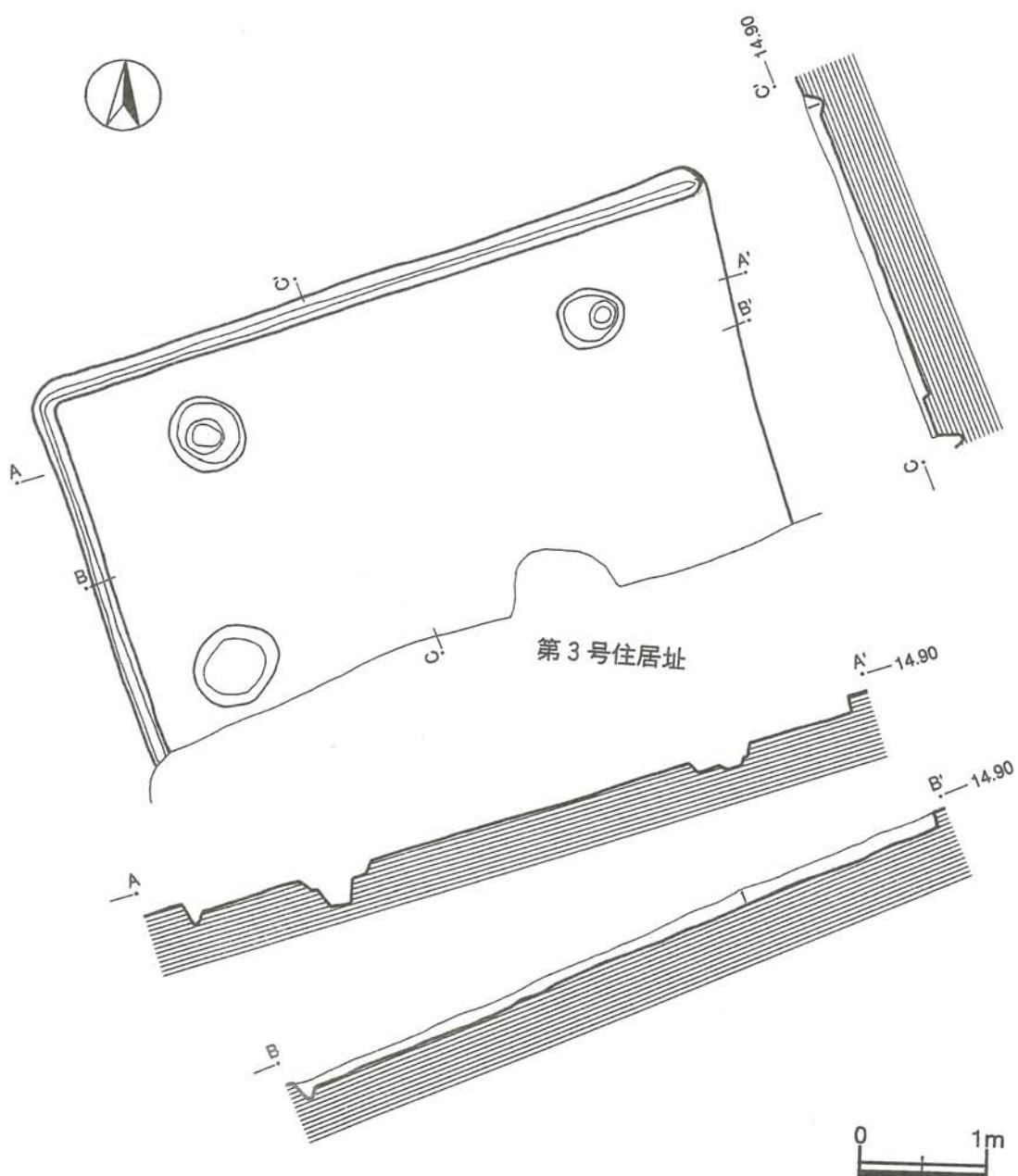
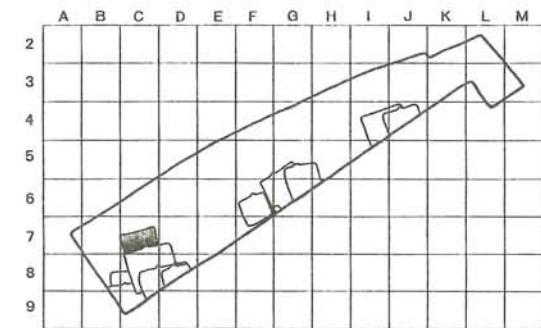
図IV-2-22 第3号住居址から出土した土器(2)

7 (遺物No5150) は南西角の壁溝より出土した土師器の壺の口縁部と思われ、推定口径は15.0cmある。胴部が内彎・内傾して立ち上がり、頸部の内面に僅かな稜を有して屈曲している。口縁部は僅かに外反し端部を丸めている。

8 (遺物No969) は竈の中央より出土した土師器の甌で、口径は22.6cm、器高は30.6cm、底径は10.5cmある。底部から直線的に立ち上がる直胴型を呈し、把手は角状である。外面は縦位・斜位のハケメ調整が施されている。

9 (遺物No5395+5396) は中央西側のピットより出土した土師器の高壺の脚部である。脚部は直線的に開き、裾部は「ハ」の字状を呈している。空洞部は高い。

10 (遺物No5295) は竈の東脇から出土した甌(遺物No5294)の東側に隣接して出土した土製支脚である。原型は長方体に近い形状であったと思われる。胎土には纖維が含まれている。



図IV-2-23 第4号住居址の平面および断面図

④第4号住居址

B-7、C-7・8グリッドの標高14.7mに位置し、第3号住居址と重複関係にあり、第3号住居址が本住居址を掘り込んでいることから、第4号住居址(旧)→第3号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は南側が第3号住居址によって掘り込まれているが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが4.6m、確認できた南北の最大長は2.4mあり、主軸の方位はN-13.5°-Wを指している。

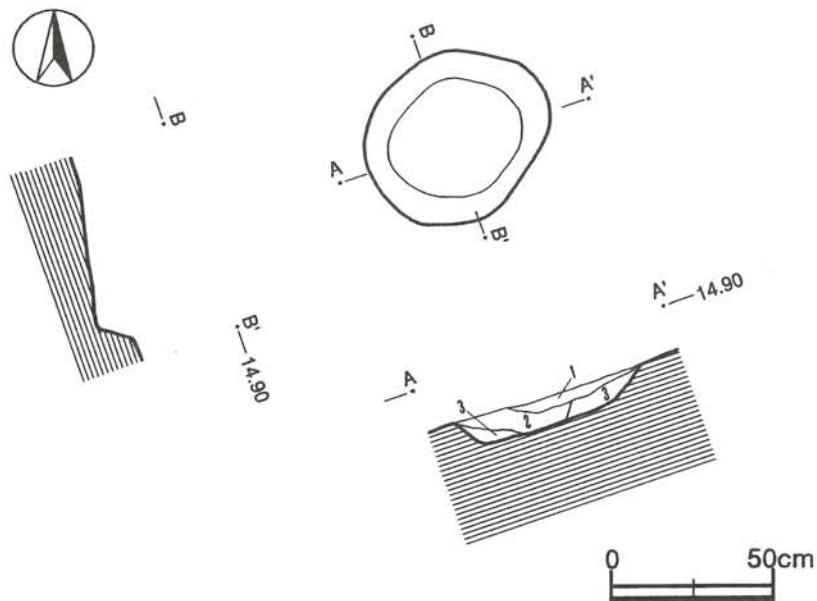
壁高は北側が12.9cm、東側が11.4cm、西側が14.3cmある。壁溝は北側と西側で確認でき、幅13.0~17.0cm、深さ7.0~8.5cmある。

床面は暗茶褐色土で、西側から南側にかけて低くなっているが、全体に平坦でやや軟質である。

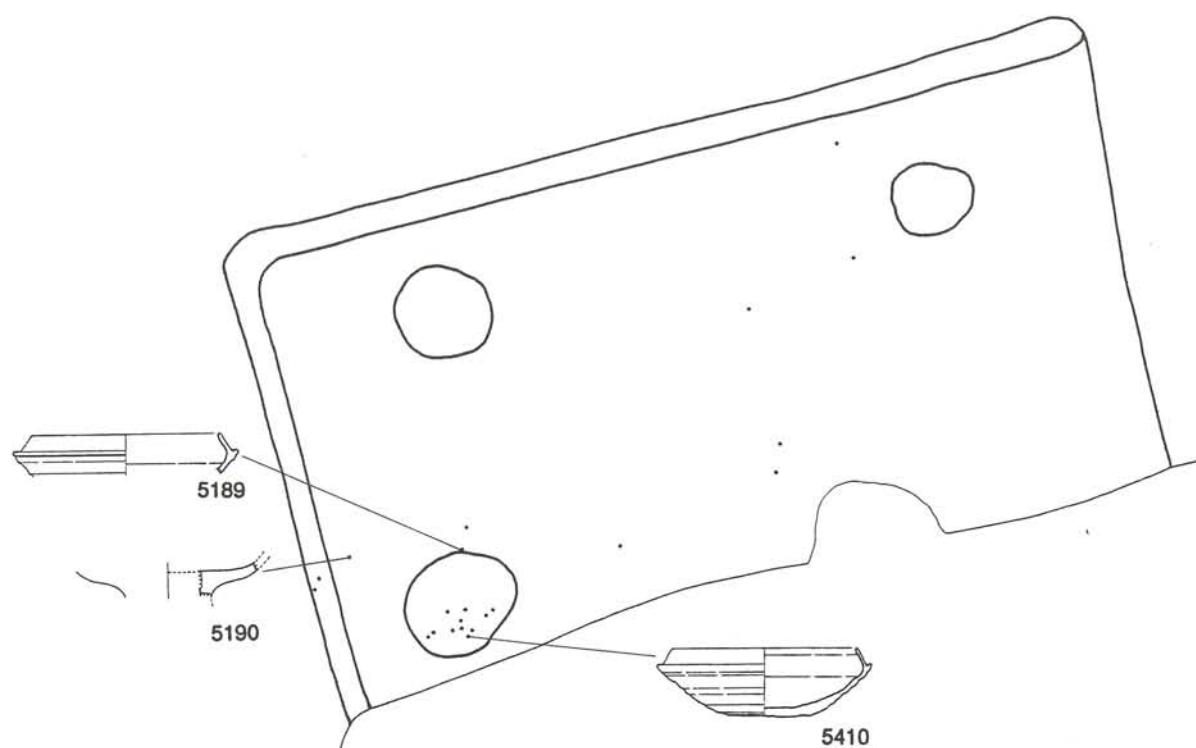
柱穴は2ヵ所確認され、柱穴1(北東側)は長径43.0cm、短径38.5cmの楕円形で、最深部の深さ11.6cm、柱穴2(北西側)は径48.7cmの円形で、最深部の深さは22.9cmある。

住居址の覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりは弱い。

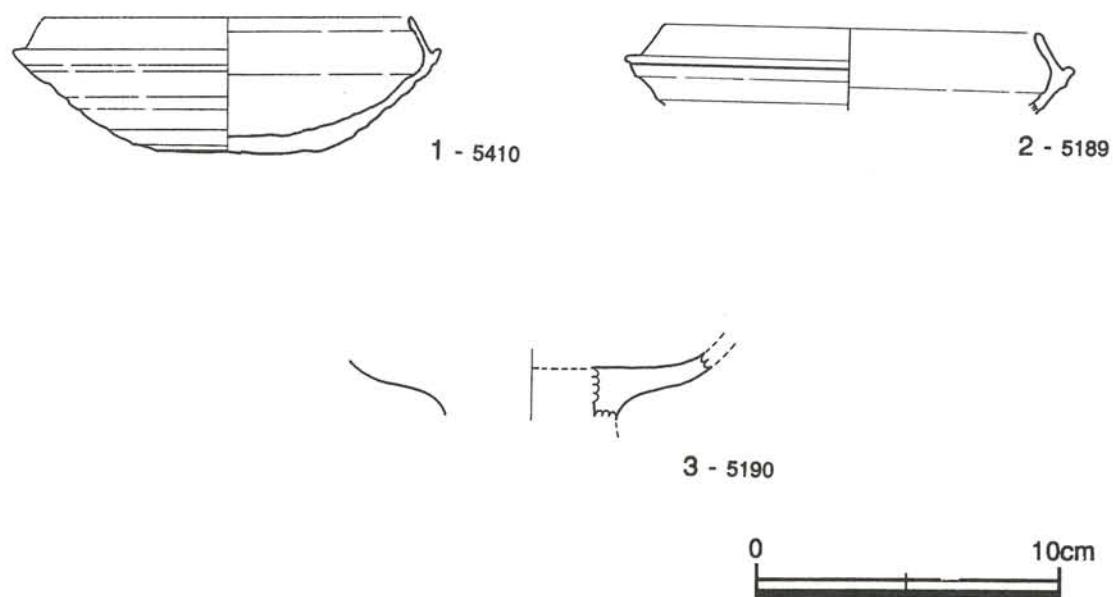
また、西側中央部から土坑が1基確認された。平面形状は不整な円形を呈し、長径は58.9cm、短径は52.6cm、最深部の深さは10.6cmある。断面形状は皿状を呈しているが、北側に向かって緩やかに立ち上がっている。覆土は3層に分けられ、第1層は暗茶褐色土で炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は黒茶褐色土で炭化粒を多く含み、焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第3層は茶褐色土で炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。



図IV-2-24 第4号住居址内の土坑の平面および断面図



図IV-2-25 第4号住居址の遺物分布図



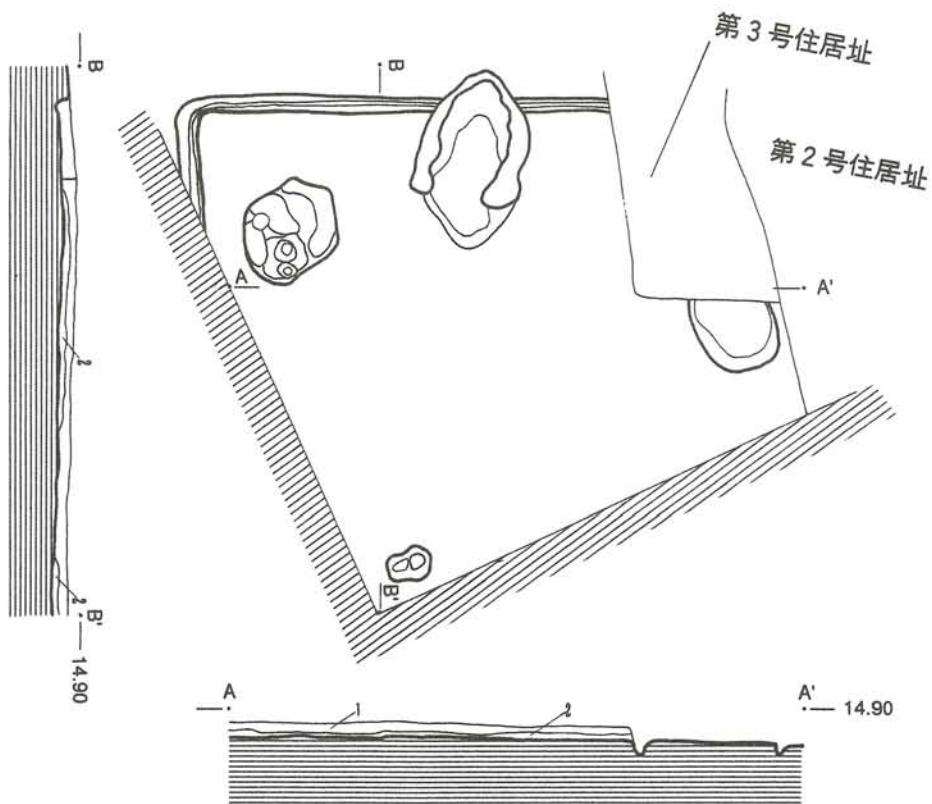
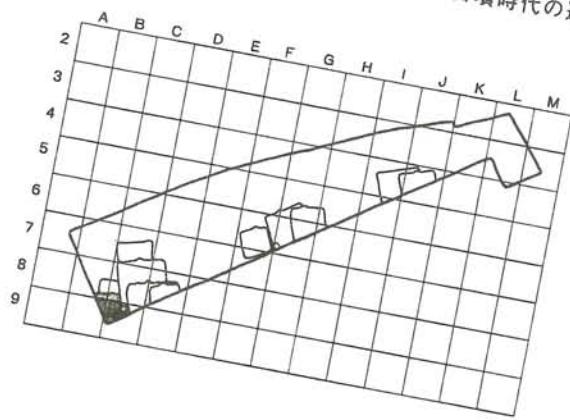
図IV-2-26 第4号住居址から出土した土器

遺物は住居址の中央部西側の土坑の周辺を中心に出土している。須恵器が2点、土師器が17点出土している。

1（遺物No5410）は住居址内の土坑より出土した須恵器の壊身で、推定最大径は14.0cm前後、器高は4.5cm、推定口径は12.0cm前後ある。底部はやや丸味を帯びた弓張り状を呈し、口縁部は内傾している。口縁部の上半を直立気味に立ち上げ、段の名残を示し、端部は細く丸めている。底部の外面はヘラ切りが未調整で、1/2にヘラ削りが施されている。

2（遺物No5189）は住居址内の土坑の北側より出土した須恵器の壊身である。推定最大径は15.0cm前後、推定口径は12.0cm前後ある。口縁部は内傾し、端部は細く丸めている。器壁は薄い。外面はヘラ削りが施されている。

3（遺物No5190）は西端より出土した土師器の高壊の脚部で、壊部は平底状を呈し、脚部は空洞部が高く壊部まで達している。



図IV-2-27 第5号住居址の平面および断面図

⑤第5号住居址

B-8・9、C-8・9グリッドの標高14.7mに位置し、第2号・第3号・第6号住居址と重複関係にある。第2号・第3号住居址が本住居址を掘り込み、本住居址は第6号住居址を掘り込んでいることから、第6号住居址(旧)→第5号住居址→第3号住居址→第2号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は東北側を他の住居址に切られ、さらに西側と南側は発掘対象区域外に広がっているため不明なところもあるが、方形を呈していると思われる。確認できた東西の最大長は4.2m、南北の最大長は3.9mで、主軸の方位はN-9°-Wを指している。

壁高は北側が12.0cm、西側が15.0cm、東側と南側は確認できない。壁溝は北側の一部と西側で確認され、確認できた壁溝は幅11.0~14.0cm、深さ4.5~5.0cmである。

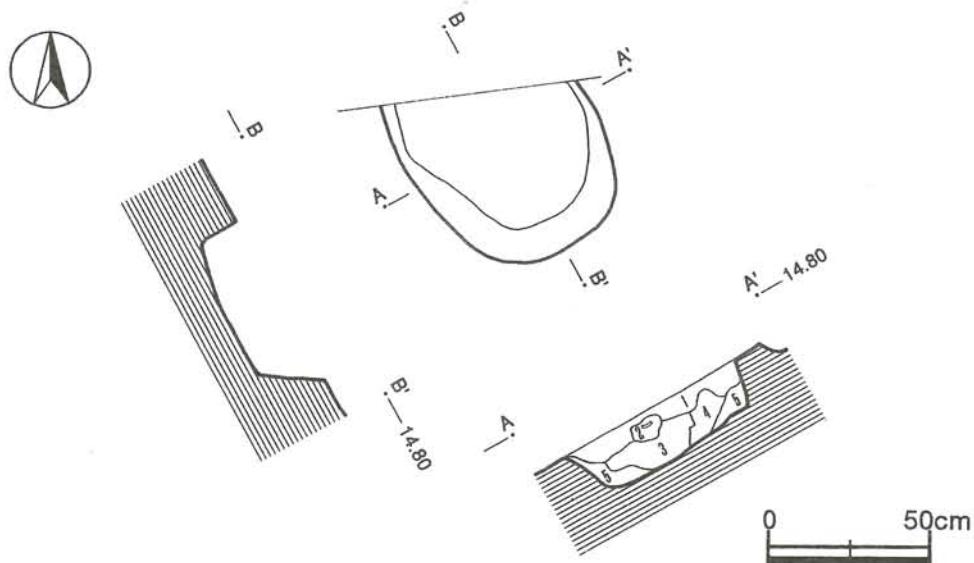
床面は暗茶褐色土で北側から南側にかけて低くなっているが、全体に平坦で、踏み固められやや硬質である。

柱穴は1ヵ所確認され、長径82.5cm、短径67.0cm、最深部の深さは34.0cmある。

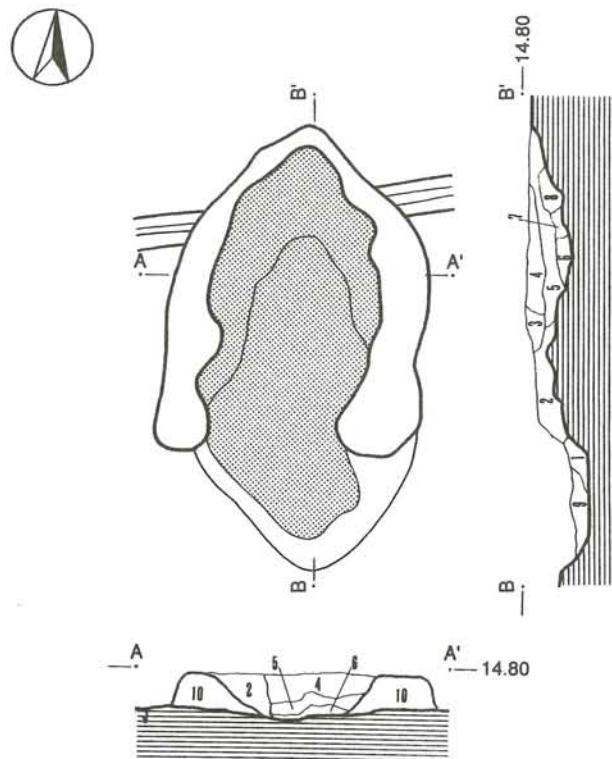
住居址の覆土は2層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で炭化物と焼土粒を少量含んでおり、粘性も締まりもやや強い。北東側の床面付近に礫が集中している。第2層は暗灰茶褐色土で炭化粒・炭化物・焼土粒をやや多く含んでおり、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。床面全体に炭化粒・炭化物が多く認められる。

また、住居址の東側中央部から土坑が1基確認された。この土坑は北側を第3号住居址によって切られているが、平面形状は橢円形を呈していると思われる。残存している長径は55.0cm、短径59.5cm、最深部の深さは18.1cmあり、主軸はN-28°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

覆土は5層に分けられ、第1層は黒褐色土で炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒を少量含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は黒茶褐色土で炭化物・炭化粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第3層は茶褐色土で炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第4層は茶褐色土で炭化粒を少量含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第5層は暗茶褐色土で粘性は強く、締まりはやや強い。



図IV-2-28 第5号住居址内の土坑の平面および断面図

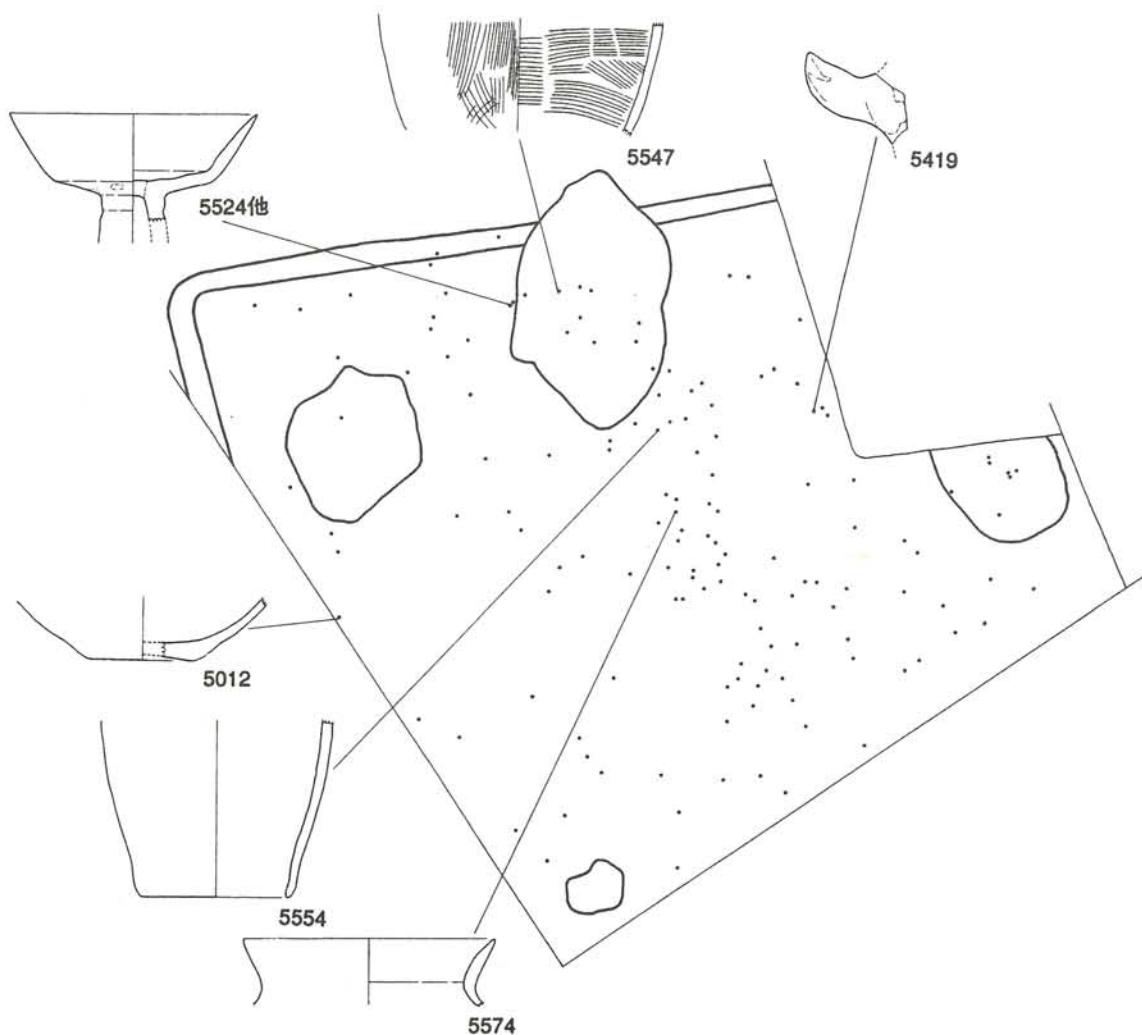


図IV-2-29 第5号住居址の竈の平面および断面図

竈は北壁のほぼ中央に位置し、N-3°-Wを向き、全長135.9cm、最大幅79.8cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、竈の中央部分に南北方向119.5cm、東西方向51.6cmの範囲で焼土の分布が見られる。袖部は明瞭ではないが、右袖は長さ100.7cm、幅14.0cm～25.0cm、左袖は長さ99.9cm、幅14.0cm～17.0cmが残存している。

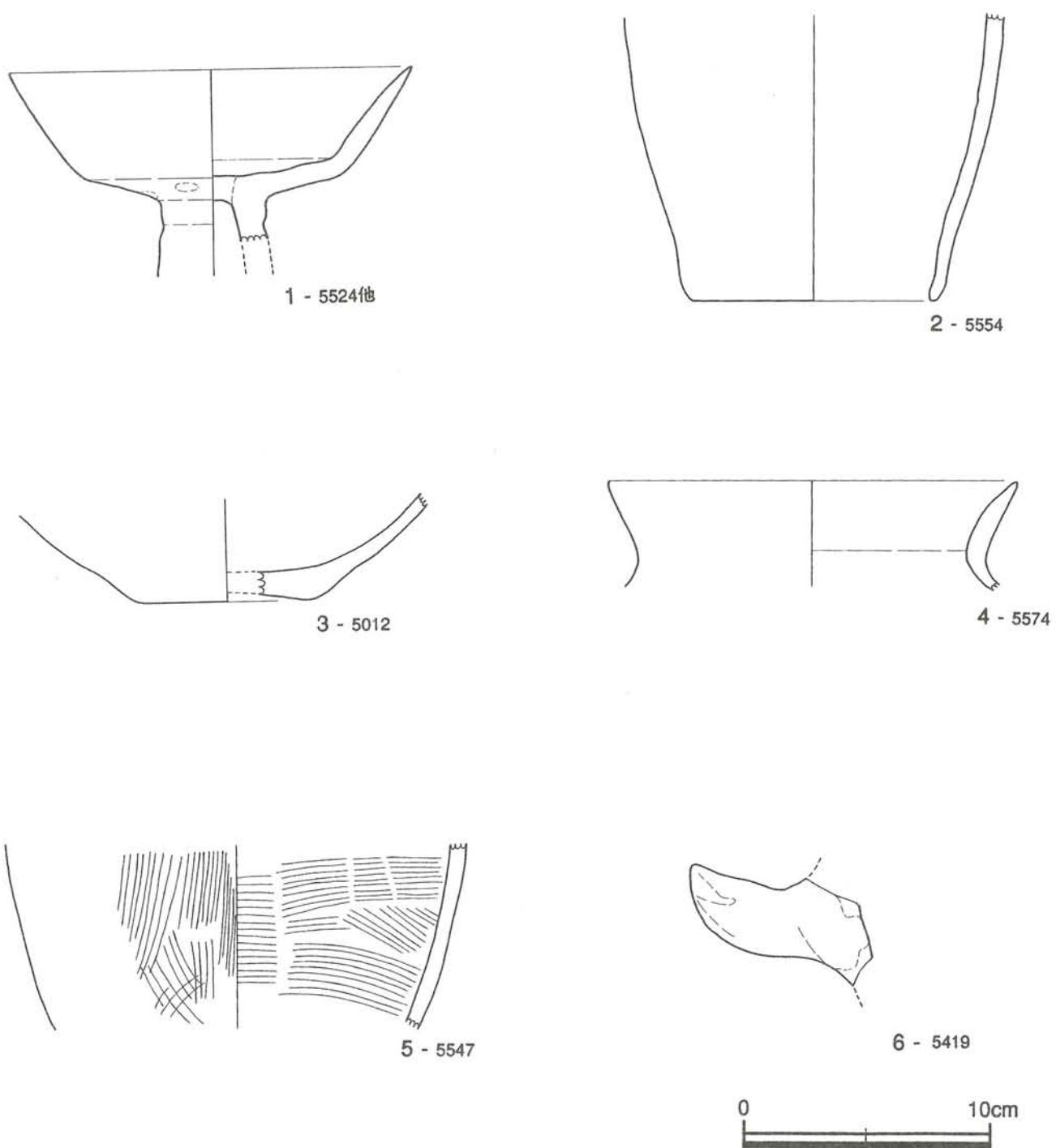
竈の層序は9層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗茶褐色土で炭化粒を少量含み、焼で、炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。第3層は暗茶褐色土で炭化粒を少量含み、焼土粒をやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

第4層は暗茶褐色土で、炭化粒を多く含み、焼土粒はやや多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第5層は黒灰褐色土で、灰粒を伴う炭化粒を多く含み、焼土粒はやや多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第6層は粒子の細かい黒灰褐色土で、炭化粒・焼炭化粒をやや多く含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第7層は暗赤褐色土で、炭化物・締まりはやや弱い。第8層は暗茶褐色土で、炭化粒をやや多く含み、焼土粒を少量含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや弱い。第9層は暗茶褐色土で、灰・炭化物をやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。



図IV-2-30 第5号住居址の遺物分布図

遺物は、住居址の中央部を中心に散在している。そのうち、遺物No5554は土師器の甌の胴部下半の破片、遺物No5469+5484+5491+5524は土師器の高壺の口縁部から底部の破片、遺物No5419は土師器の甌の把手、遺物No5547は土師器の甌の胴部下半の破片、遺物No5012は土師器の壺の底部の破片、遺物No5574は土師器の口縁部の破片である。



図IV-2-31 第5号住居址から出土した土器

1 (遺物No5524+5469+5484+5491) は竈の西脇より出土した土師器の高坏である。推定口径は16.2cm、坏部の器高は5.3cmある。坏部は稜を有し、口縁部は直線的に開きながら立ち上がっている。底部の外面に指頭痕が残っている。底部には坏部と脚部を連続的に成形することによって生じた孔に円盤を埋め込む方法をとっていると思われる。

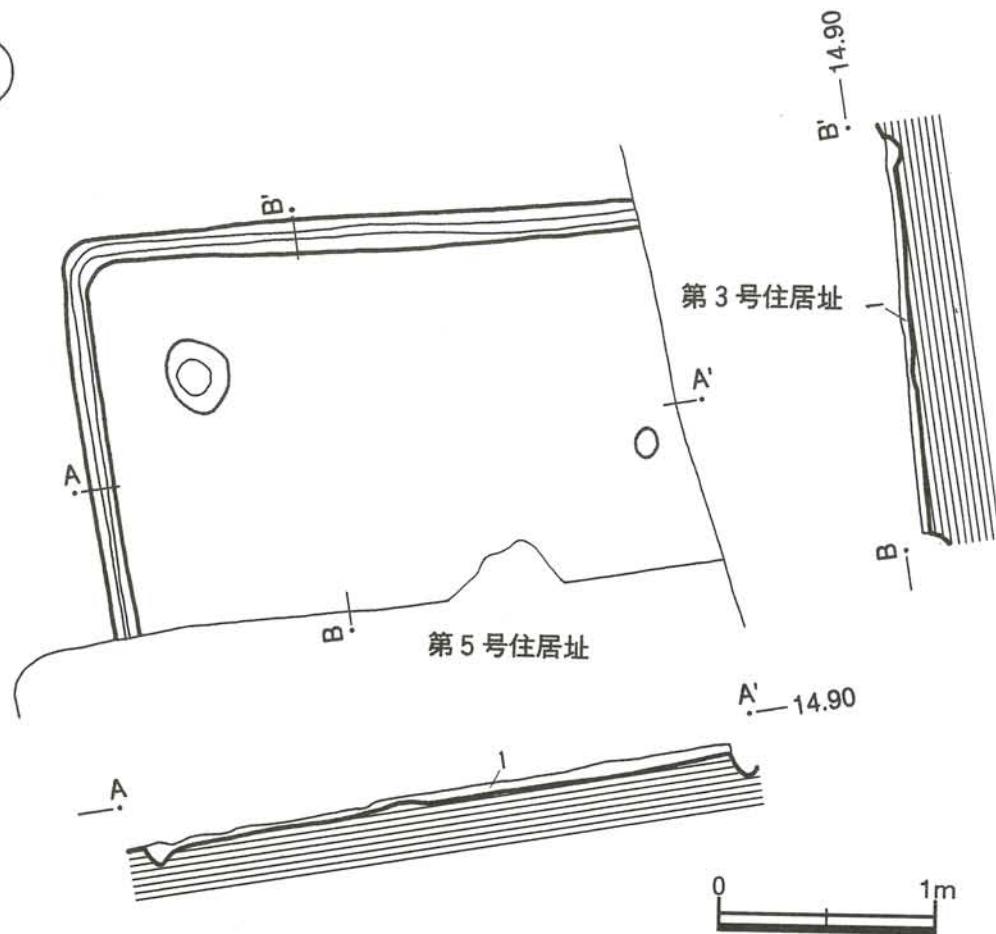
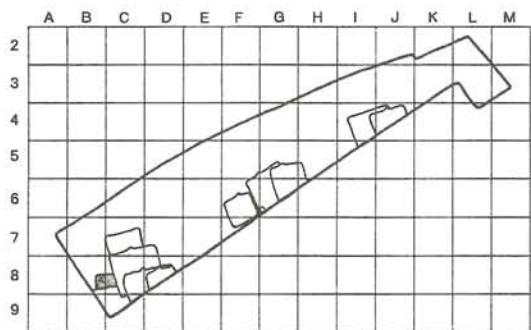
2 (遺物No5554) は竈の南側より出土した土師器の甌の胴部下半である。推定底径は10.0cm前後ある。ほぼ直線的に立ち上がる直胴型と思われる。内外面にナデ調整が施されている。内面の全体にススが付着している。

3 (遺物No5012) は住居址内の西側中央部より出土した土師器の壺の底部で、推定底径は7.0cmある。ややあげ底気味の底部から、直線的に大きく開いて立ち上がっている。

4 (遺物No5574) は中央部より出土した土師器の口縁部で、推定口径は16.5cmある。頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部にかけて器壁が薄くなり、端部を丸めている。内面にナデ調整が施されている。

5 (遺物No5547) は土師器の甌の胴部下半である。胴部はほぼ直線的に立ち上がっている。外面は縦位・斜位のやや粗いハケメ、内面は横位のやや粗いハケメが施されている。

6 (遺物No5419) は中央部やや東寄りから出土した土師器の甌の把手で、長さは胴部から5.5cm前後ある。把手の根元を僅かに凸状にして胴部と接合させている。



図IV-2-32 第6号住居址の平面および断面図

⑥第6号住居址

B-8、C-8グリッドの標高14.7mに位置し、第3号・第5号住居址と重複関係にあり、第3号・第5号住居址が本住居址を掘り込んでいることから、第6号住居址(旧)→第5号住居址→第3号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は東側が第3号住居址に切られ、南側は第5号住居址に切られているため不明なところもあるが、方形を呈していると思われる。規模は確認できた東西の最大長が2.7m、南北の最大長は1.8mで、主軸の方位はN-9°-Wを指している。

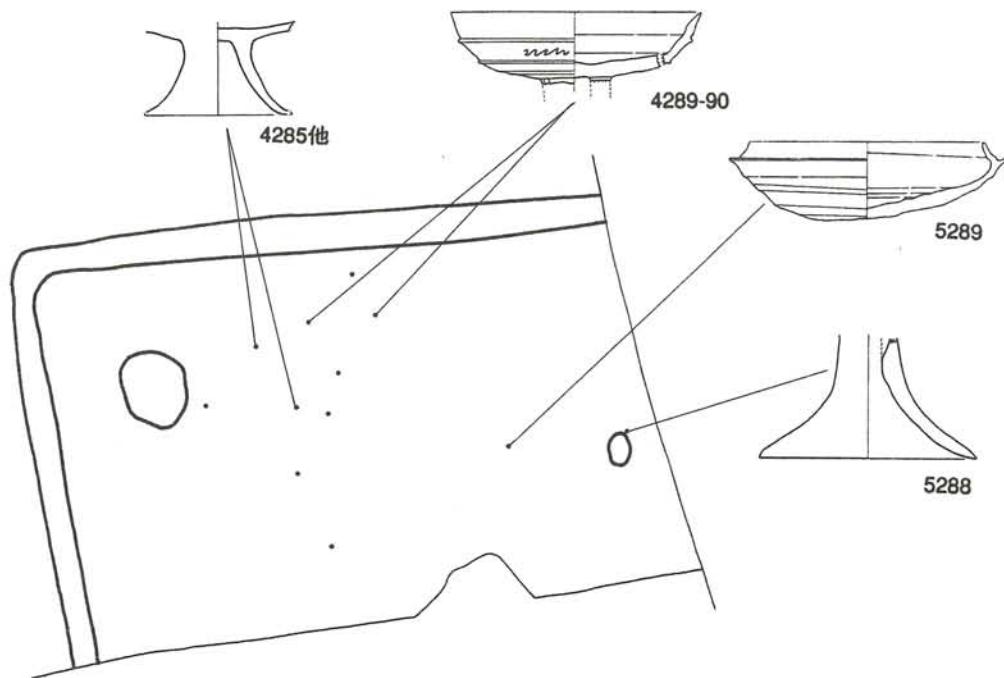
壁高は北側が8.5cm、西側が11.4cm、東側と南側は確認できない。壁溝は幅10.0~17.0cm、深さは5.0~6.0cmあり、住居址を全周していたと思われる。

床面は暗茶褐色土で、北側から南側にかけて高くなっている。全体に僅かに凹凸が見られ、やや軟質である。

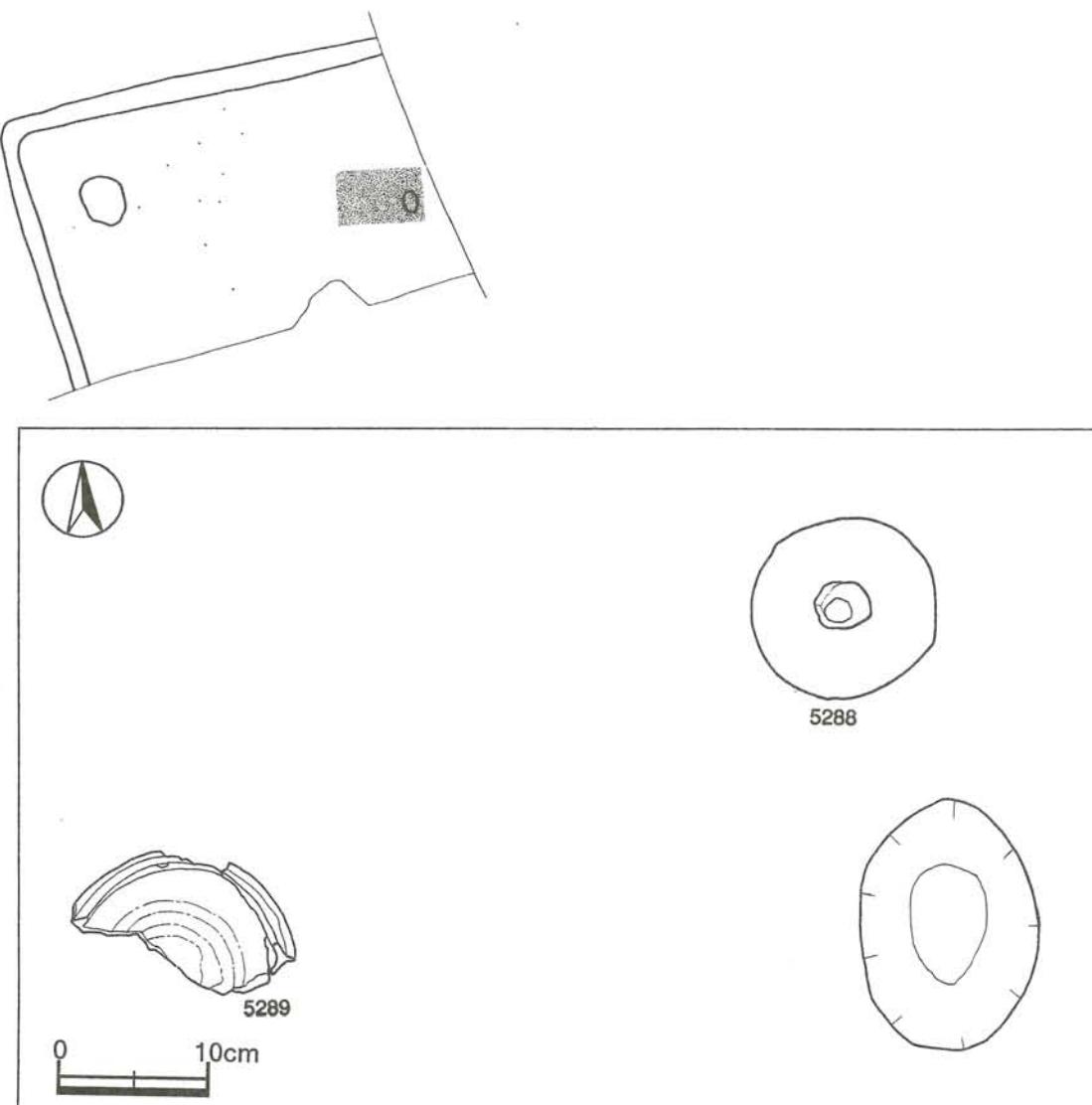
柱穴は1ヵ所確認され、長径34.6cm、短径28.5cm、最深部の深さは18.0cmある。

住居址の覆土は暗茶褐色土が1層で炭化物・焼土粒を少量含み、粘性はやや強く、締まりはやや強い。

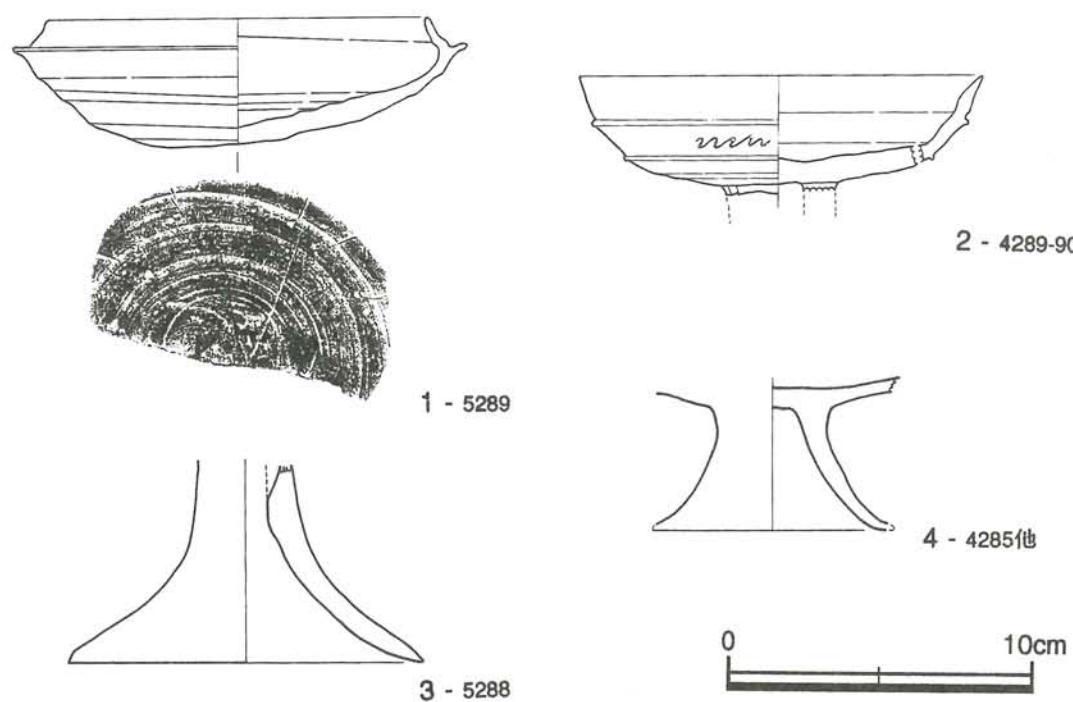
その他、東側中央部にピットが1基確認されている。



図IV-2-33 第6号住居址の遺物分布図



図IV-2-34 第6号住居址の遺物出土状況図



図IV-2-35 第6号住居址から出土した土器

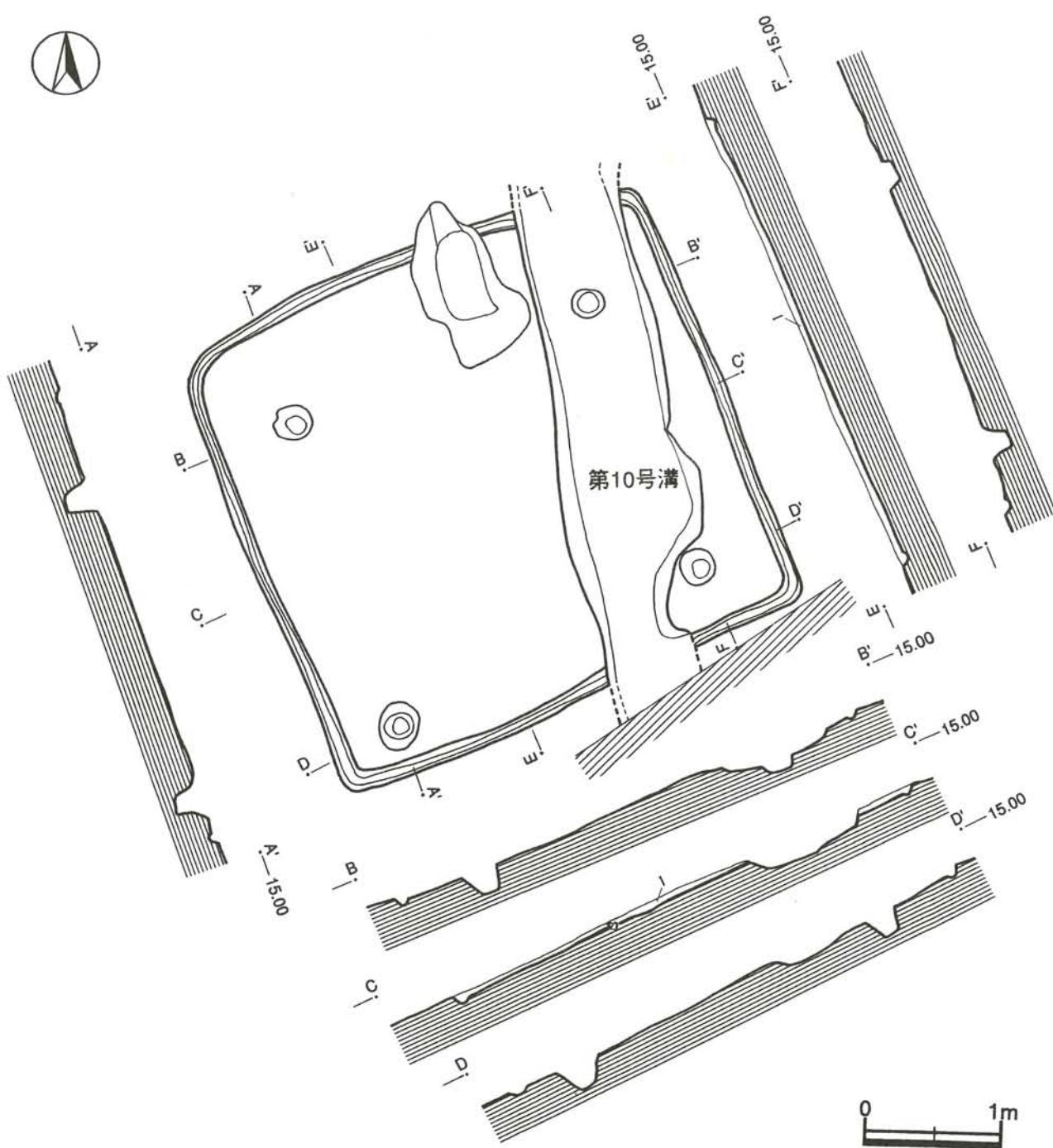
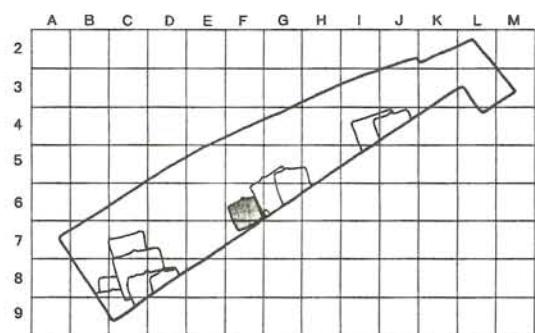
遺物は住居址の中央部を中心に散在し、須恵器の完形品が1点と破片が1点、土師器の破片が10点出土している。

1（遺物No5289）は中央部東側より出土した須恵器の壺身である。推定最大径は14.5cm前後、器高は4.2cm、推定口径は12.5cm前後ある。底部は丸味を帯びた弓張り状を呈し、口縁部は内傾してやや低く立ち上がり、端部は丸くなっている。外面は2/3にやや粗いヘラ削り調整が施されている。

2（遺物No4289+4290）は北側中央部より出土した須恵器の無蓋高壺の壺部で、推定口径が13.0cm前後ある。外反が大きく、きわめて浅い。2条の稜線の間に櫛描き波状紋が施されている。脚部には三方向に透かし窓があったと思われる。

3（遺物No5288）は中央部東側より出土した土師器の高壺の脚部である。裾端部の径は11.8cmある。裾部は「ハ」の字状に開き、脚部の空洞部は高く、胴部の外面に赤彩痕が残っている。

4（遺物No4285+5160）は中央部西側より出土した土師器の高壺の脚部で、脚部高は4.0cmある。脚部は「ハ」の字状に開き、端部はつまむように引き出している。



図IV-2-36 第7号住居址の平面および断面図

⑦第7号住居址

F-6・7グリッドの標高14.7mに位置している。

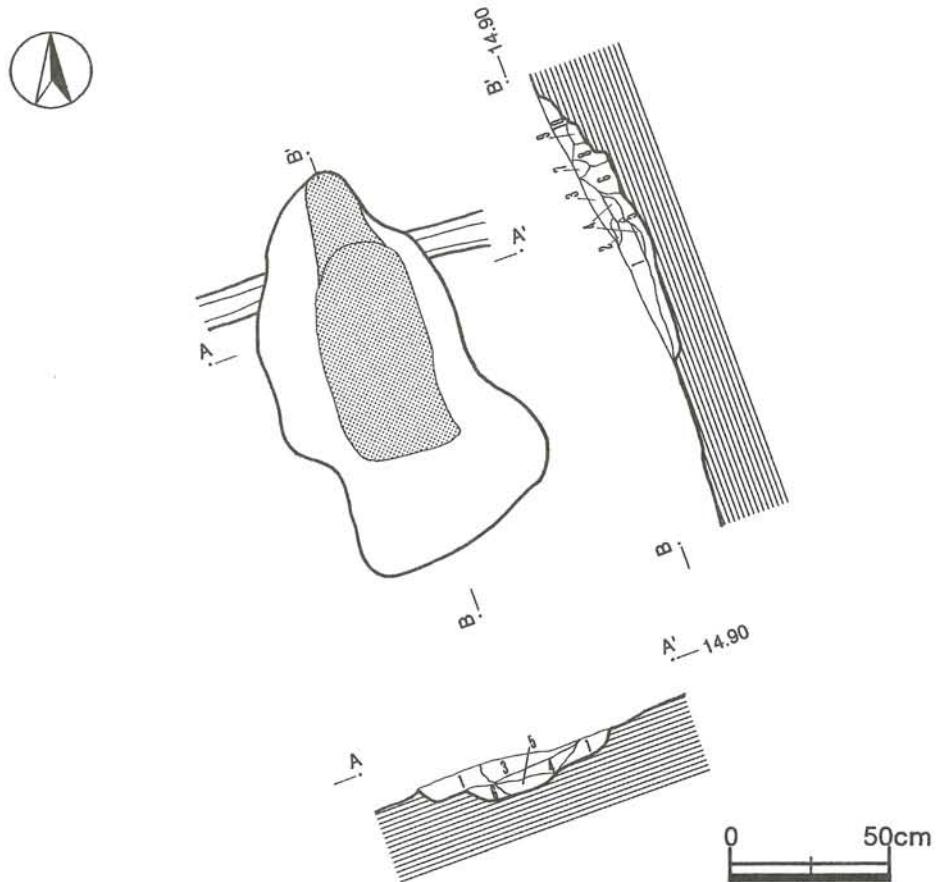
平面形状は東側を南北に走る第10号溝によって床面が一部削られているが、隅丸方形を呈している。規模は東西の長さが3.7m、南北の長さが3.6mで、主軸の方位はN-24°-Wを指している。

壁高は北側が6.0cm、南側が5.5cm、東側が4.0~8.5cm、西側が5.0~9.0cmある。壁溝は幅8.0~14.0cm、深さ2.0~4.5cmで、住居址を全周していると思われる。

床面は暗茶褐色土で、全体に緩やかな凹凸が見られるが、ほぼ平坦で踏み固められ硬質である。

柱穴は4ヵ所確認された。柱穴1(北東側)は長径25.0cm、短径22.0cm、最深部の深さ10.0cmで第10号溝によって上部は削られている。柱穴2(北西側)は長径28.1cm、短径25.7cm、最深部の深さは20.0cmある。柱穴3(南東側)は径25.3cmの円形で、最深部の深さは16.0cmある。柱穴4(南西側)は長径34.9cm、短径33.1cm、最深部の深さは20.2cmある。

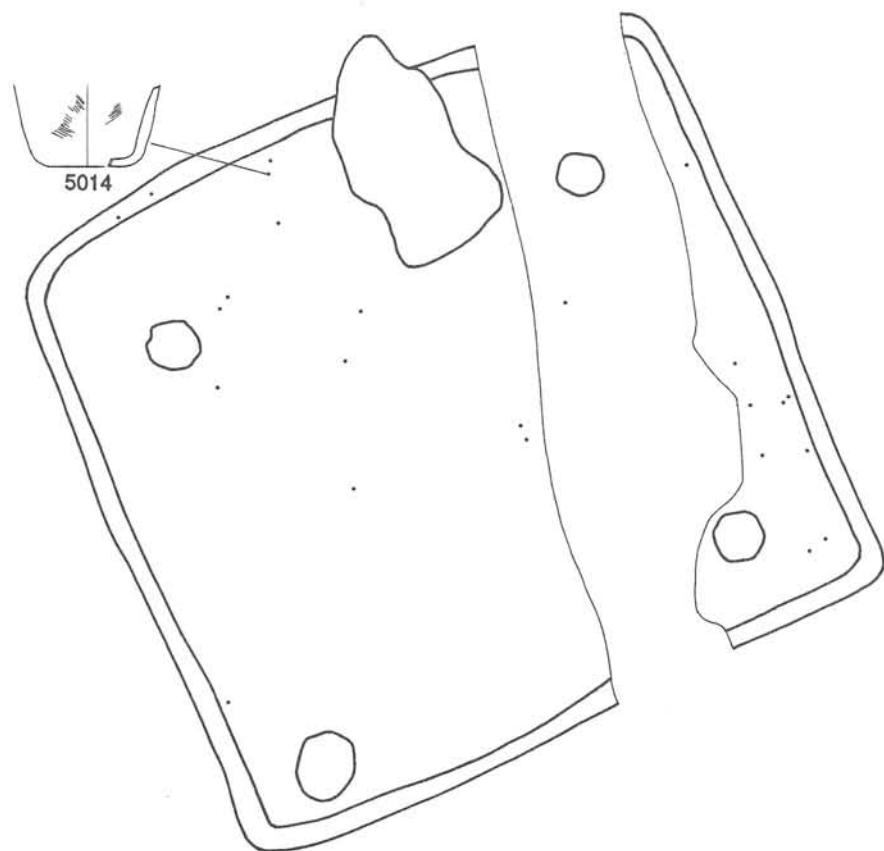
住居址の覆土は茶褐色土が1層で、床面付近で炭化物・焼土粒をやや多く含んでおり、粘性はやや強く、締まりはやや強い。



図IV-2-37 第7号住居址の竈の平面および断面図

竈は北壁のやや東よりに位置し、N-24°-Wを向き、全長121.9cm、最大幅61.3cmである。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、竈の中央部分に南北方向89.9cm、東西方向32.8cmの範囲で焼土の分布が見られる。袖部は不明である。また、煙道部と思われる部分の長さは23.4cmで、住居址の外に位置している。

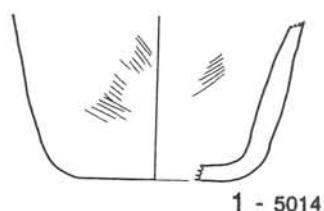
竈の層序は10層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒、焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗赤褐色土で焼土粒・焼土の小ブロックを多く含み、粘性も締まりもやや弱い。第3層は暗茶褐色土で第1層に似ており、炭化物・炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第4層は暗赤褐色土で第2層に似ているがやや赤色が強い。焼土粒・焼土の小ブロックを多く含み、粘性も締まりもやや弱い。第5層は暗赤茶褐色土で、炭化物・炭化粒をやや多く含み、焼土粒・焼土の小ブロックを多く含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。第6層は暗黒褐色土で、炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒を少量含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。第7層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第8層は暗赤褐色土で、炭化物・炭化粒をやや多く含み、焼土粒・焼土の小ブロックを多く含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。第9層は暗赤褐色土で、炭化物・炭化粒を少量含み、焼土粒・焼土の小ブロックを多く含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。第10層は暗茶褐色土で、赤色がやや強く、焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。



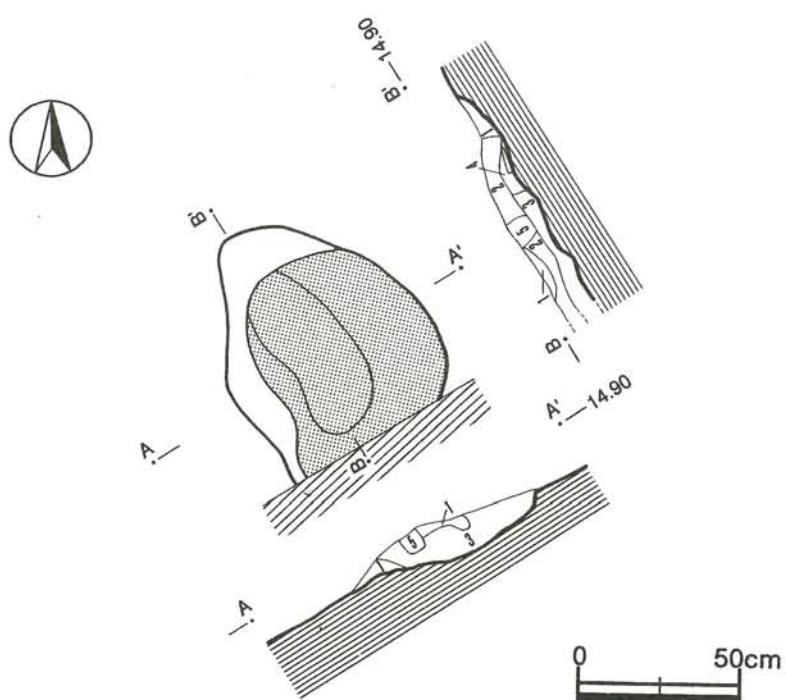
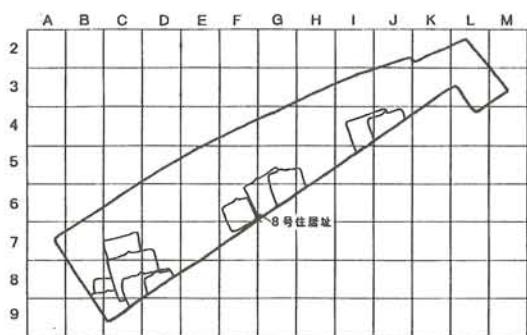
図IV-2-38 第7号住居址の遺物分布図

遺物は住居址の中央部を中心に散在するように土師器の破片が24点出土している。

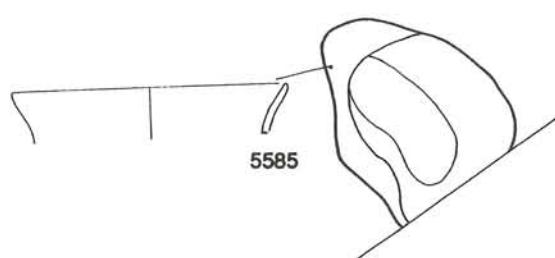
1（遺物No5014）は竈の西側より出土した土師器の甕の底部で、推定底径は5.0cmである。胴部が直線的に立ち上がる長胴型を呈すると思われる。胴部には輪積み痕が残っている。胴部の外面は縦位・斜位のハケメ、内面は斜位のハケメ調整が施されている。外面に黒斑状にススが付着している。



図IV-2-39 第7号住居址から出土した土器



図IV-2-40 第8号住居址の平面および断面図



図IV-2-41 第8号住居址の遺物分布図

⑧第8号住居址

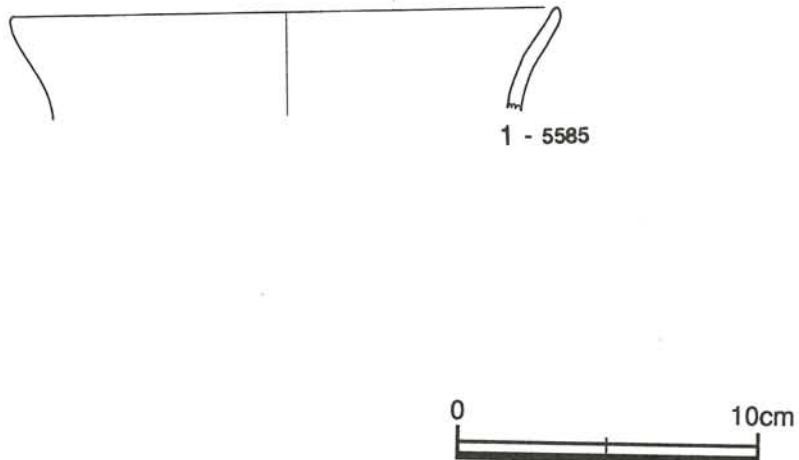
G-6グリッドの標高14.8mに位置し、焼土の痕跡が竈として考えられるため、一応住居址として扱ったが、住居址自体は南側の発掘対象区域外に存在すると思われる。さらに本遺構は南側を排水溝に切られ、また後世の削平を受けているため保存状態は良くない。竈としては、北壁に位置していると思われ、N-33°-Wを向き、残存部の長さ75.0cm、最大幅は62.7cmある。中央から東側部分に南北方向59.1cm、東西方向50.8cmの範囲で焼土の分布が見られる。

層序は5層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化粒を僅かに含み、粘性も締まりもやや強い。第2層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第3層は暗茶褐色土で炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は暗茶褐色土で第3層に似ているが、締まりがやや強くなる。第5層は黒茶褐色土で、炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒・焼土の小ブロックを少量含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。

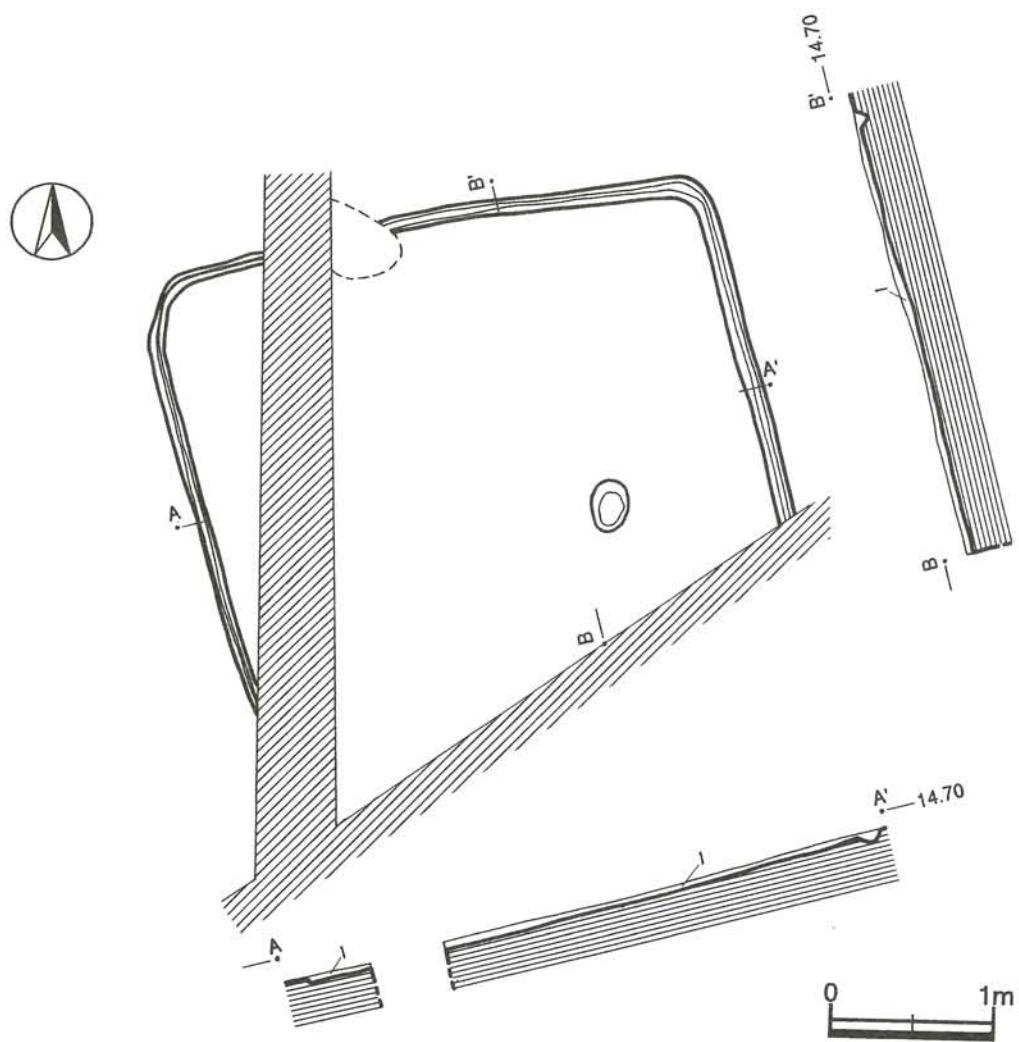
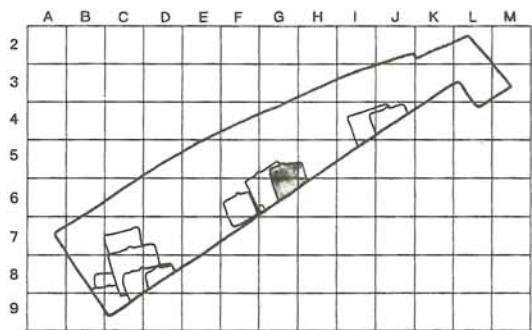
なお、この第8号住居址は竈のみが確認されているため、第7号・第10号住居址との切り合い関係は不明である。

遺物は竈の北側部分から土師器の破片が1点出土している。

1（遺物No5585）は土師器の甕の口縁部の破片で、推定口径は18.0cmあり、僅かに外反気味に開いて立ち上がり、口唇部を丸めている。口縁部に黒斑がみられる。



図IV-2-42 第8号住居址から出土した土器



図IV-2-43 第9号住居址の平面および断面図

⑨第9号住居址

G-5・6、H-5・6グリッドの標高14.5mに位置し、第10号住居址と重複関係にあり、本住居址が第10号住居址を掘り込んでいるため、第10号住居址(旧)→第9号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は西側を南北に走る排水溝によって一部削られ、南側は発掘対象区域外に広がっているが、方形を呈している。規模は東西の長さが4.4m、確認できた南北の最大長は3.7mあり、主軸の方針はN-13°-Wを指している。

壁高は上部が削平を受けているためほとんど残っていないが、北側が1.0~2.0cm、東側が2.0cm、西側が3.0cm確認できる。壁溝は幅10.0~15.0cm、深さ1.0~7.0cmあり、住居址を全周していると思われる。

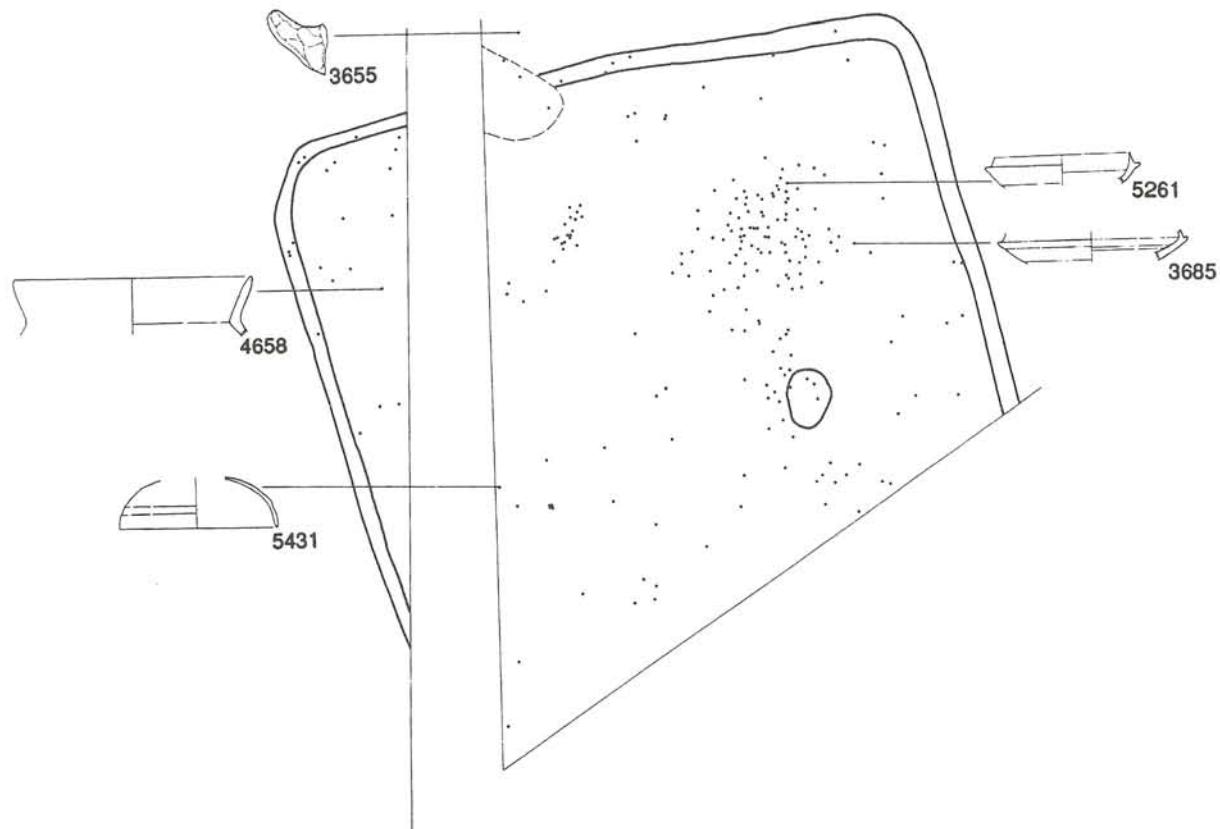
床面は暗茶褐色土で、全体に平坦で硬質である。また、北壁の中央やや西よりの位置に、炭化物・焼土が分布しており、南北に走る排水溝によって西側を削平されているが竈と思われる。

柱穴は確認できなかった。

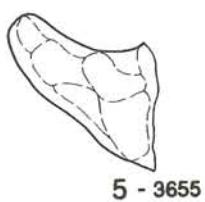
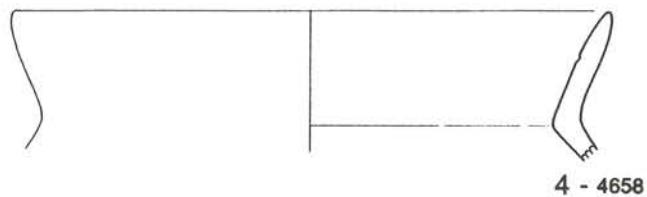
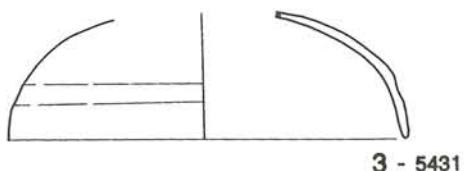
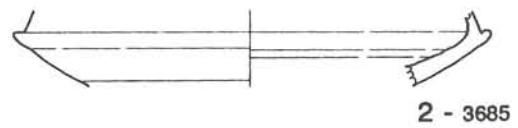
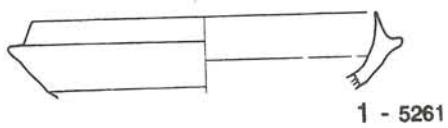
住居址の覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化物・焼土粒をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。

その他、南東側でピットが1基確認されている。

遺物は住居址全体に散在しているが、特に東側に集中している。



図IV-2-44 第9号住居址の遺物分布図



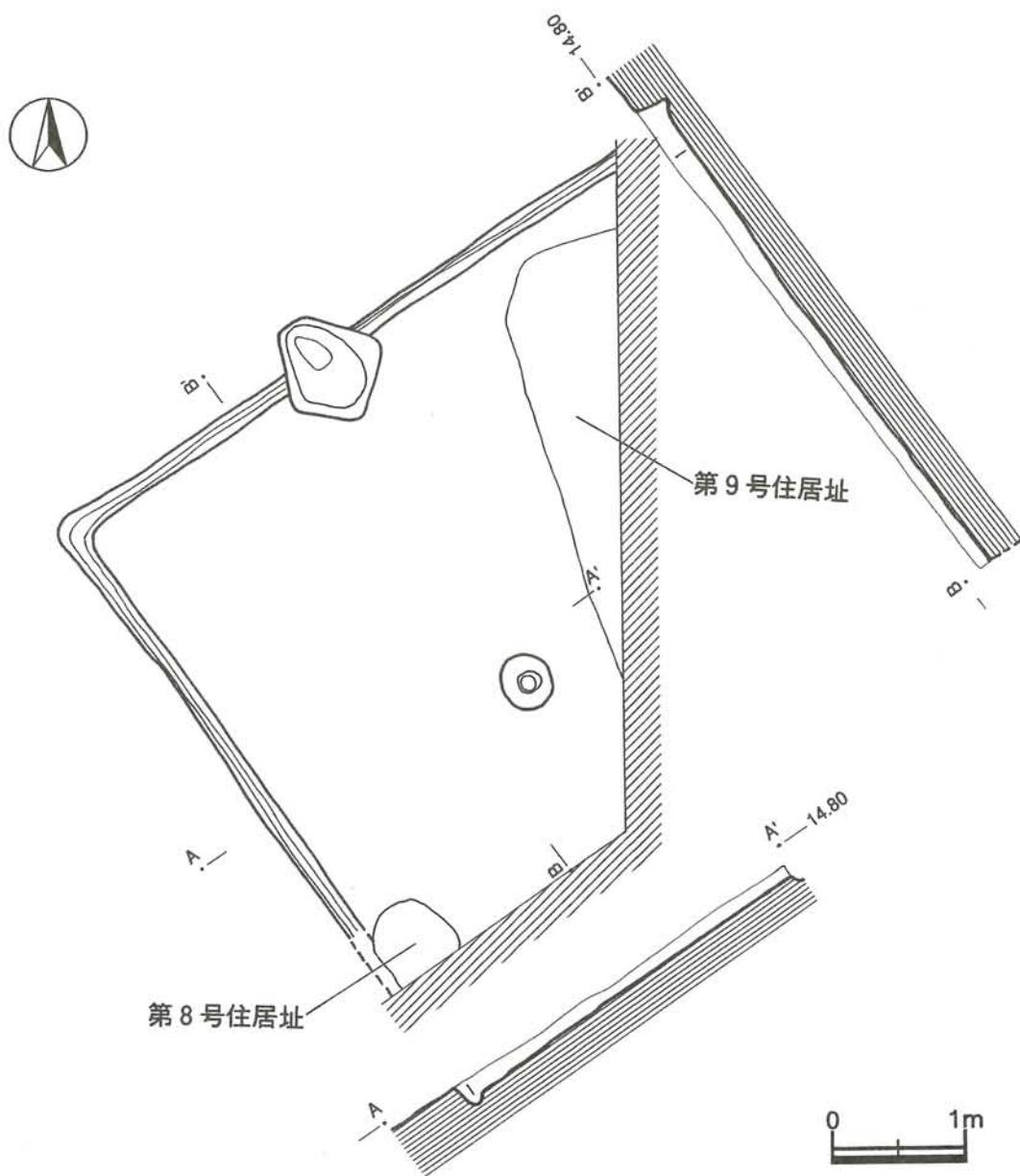
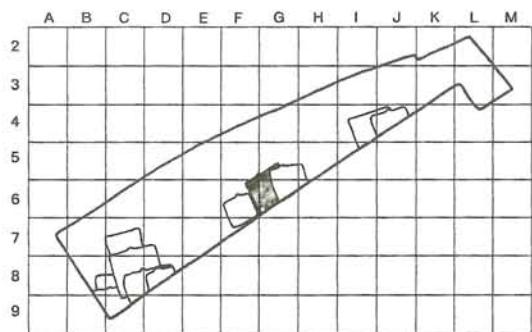
図IV-2-45 第9号住居址から出土した土器

1 (遺物No5261) と 2 (遺物No3685) は北東部より出土した須恵器の坏身である。1の推定口径は11.0cm前後で、口縁部の立ち上がりが低く内傾し、受部は水平に伸びている。2の推定最大径は15.5cm前後で、底部は弓張り状を呈すると思われる。口縁部は内傾し、受部は上方へ短く伸ばしている。

3 (遺物No5431) は北西部より出土した土師器の坏で、口径は13.0cmある。弓張り状の底部から内彎しながら立ち上がり、僅かな稜を持ち、口縁部は直立気味となっている。

4 (遺物No4658) は中央部北側より出土した土師器の甕の口縁部で、推定口径は19.5cmある。頸部が「く」の字状を呈し、口縁部は直線的に開いている。

5 (遺物No3655) は竈と想定される部分の北側から出土した土師器の把手である。断面は扁平な楕円形で、上面は凹状をなしている。



図IV-2-46 第10号住居址の平面および断面図

⑩第10号住居址

F-5・6、G-5・6グリッドの標高14.8mに位置し、第9号住居址と重複関係にあり、第9号住居址が本住居址を掘り込んでいることから、第10号住居址(旧)→第9号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は東側を第9号住居址が掘り込み、さらに南側は発掘対象区域外に広がっているため不明なところもあるが、方形を呈していると思われる。規模は確認された東西の最大長は5.4m、南北の最大長は4.5mあり、主軸の方位はN-33°-Wを指している。

壁高は北側が25.3cm、西側が22.0cmある。確認できた壁溝は北側と西側で幅12.0~16.0cm、深さは4.0~6.0cmある。

床面は暗茶褐色土で、全体に平坦で、硬質である。

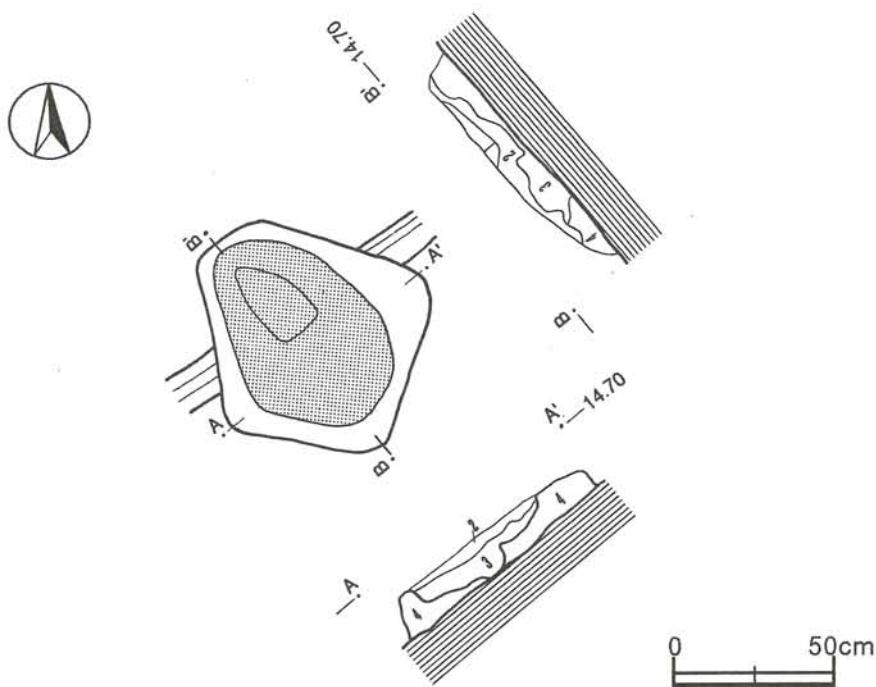
柱穴は確認できなかった。

覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化物・焼土粒をやや多く含み、粘性も締まりもやや強い。

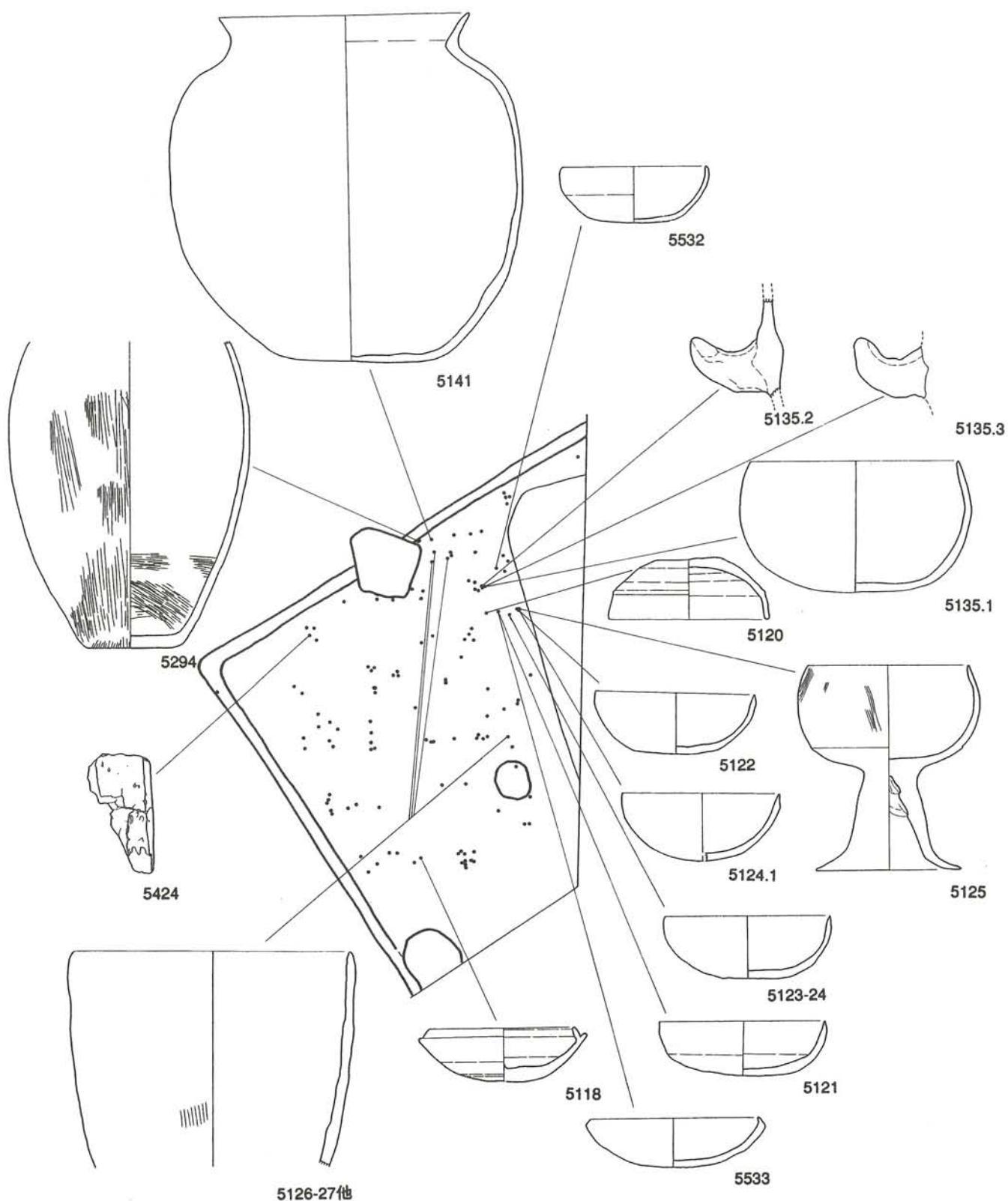
その他、中央部の南寄りにピットが1基確認されている。

竈は北壁に位置し、N-39°-Wを向き、全長80.1cm、最大幅は72.3cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、竈の中央部分に南北方向67.9cm、東西方向45.2cmの範囲で焼土の分布が見られる。

層序は4層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗赤褐色土で炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒・焼土の小ブロックをやや多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第3層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第4層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒を僅かに含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。



図IV-2-47 第10号住居址の竈の平面および断面図

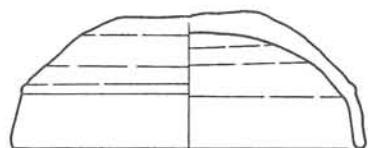


図IV-2-48 第10号住居址の遺物分布図

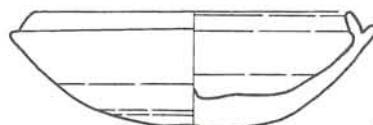
遺物は住居址の全面より出土しているが、竈の周辺は完形品が多く、須恵器が2点、土師器が9点出土している。そのうち、遺物No5120は須恵器の壺蓋、遺物No5118は須恵器の壺身、遺物No5121、遺物No5122、遺物No5123+5124.2、遺物No5533、遺物No5124.1、遺物No5532は土師器の壺、遺物No5125は土師器の脚付の碗、遺物No5126+5127他は土師器の甌の口縁部の破片、遺物No5135.2、遺物No5135.3は土師器の甌の把手、遺物No5294は土師器の甌の胴部から底部、遺物No5141は土師器の壺、遺物No5135.1は土師器の鉢、遺物No5424は土製支脚である。



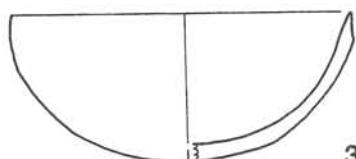
図IV-2-49 第10号住居址の遺物出土状況図



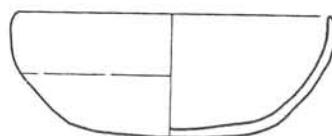
1 - 5120



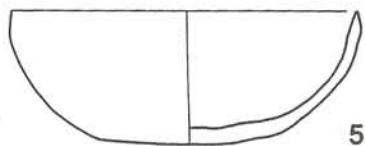
2 - 5118



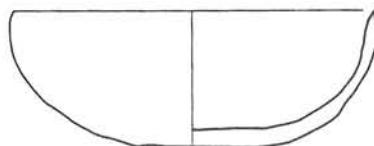
3 - 5124.1



4 - 5532



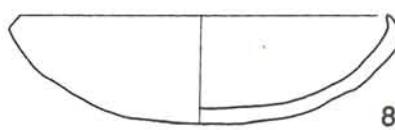
5 - 5122



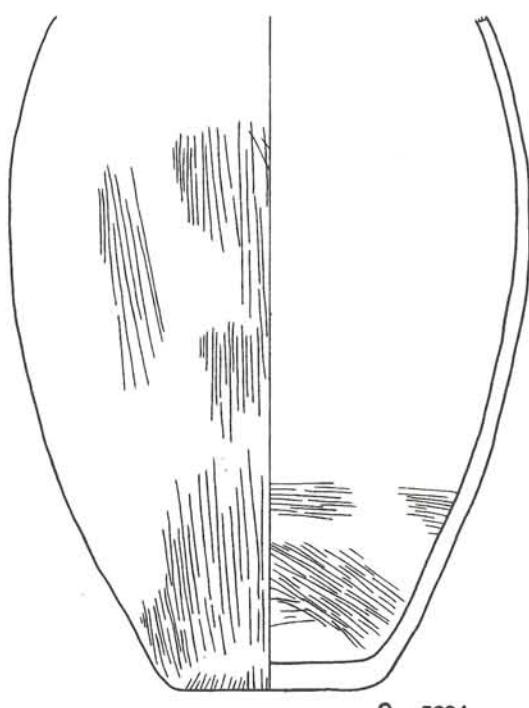
6 - 5123-24



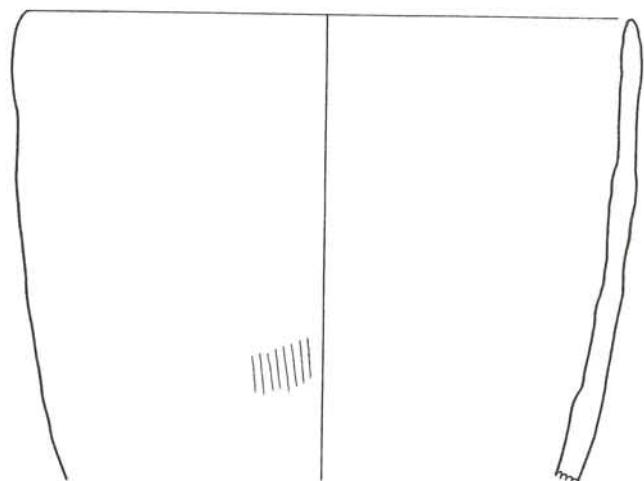
7 - 5121



8 - 5533



9 - 5294



10 - 5126-27他



図IV-2-50 第10号住居址から出土した土器(1)

1 (遺物No5120) は中央部北側から出土した須恵器の壺蓋で、口径は11.6cm、器高は4.3cmある。底部はやや弓張り状となるが、全体は半円球を呈し、口縁部をやや内彎気味に下ろしている。天井部と口縁部の境には稜を設けているが明瞭ではない。色調は暗オリーブ灰色で全体がススけたようになっている。

2 (遺物No5118) は南西側から出土した須恵器の壺身で、最大径は12.0cm、口径は10.4cm、器高は3.7cmある。底部はやや丸みを帯びた弓張り状となり、口縁部は内傾し低く立ち上がり、端部は丸くしている。ヘラ削りは天井部の1/3程である。

3 (遺物No5124.1) は中央部北側から出土した土師器の壺で、口径は11.2cm、推定器高は5.0cm前後ある。丸みを帯びた底部から半円球に立ち上がり、口縁部を直立させ端部を尖らせている。

4 (遺物No5532) は中央部北側から出土した土師器の壺で、口径は10.2cm、器高は4.0cm前後ある。やや丸みを帯びた底部から3(遺物No5124.1)と同様の形態となる。

5 (遺物No5122) は中央部北側から出土した土師器の壺で、口径は11.4cm、器高は4.4cmで、器形は3(遺物No5124.1)と同様である。

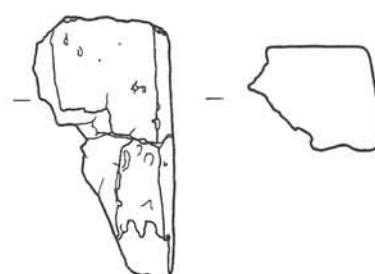
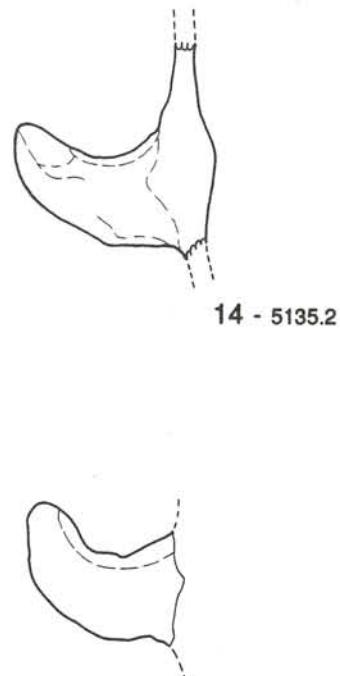
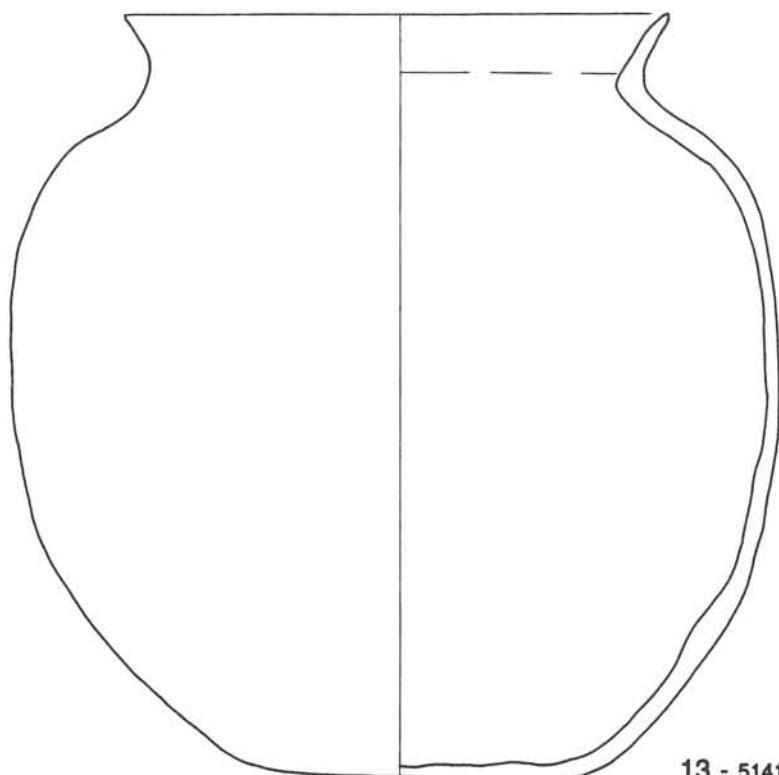
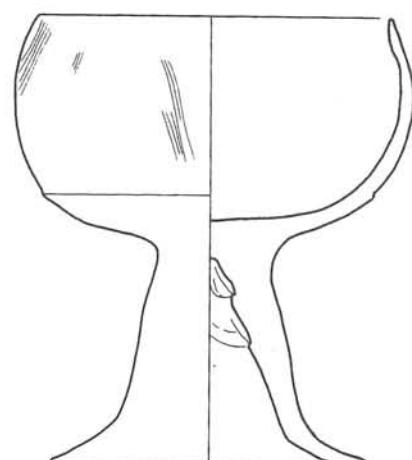
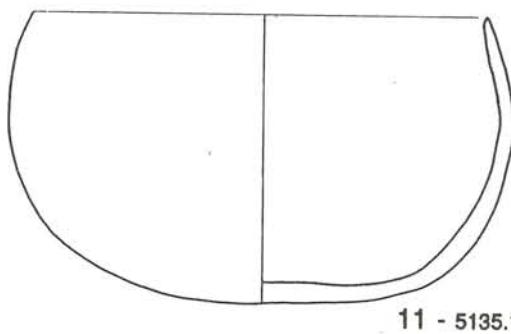
6 (遺物No5123+5124.2) は中央部北側から出土した土師器の壺で、口径は11.8cm、器高は4.0cmある。器形は3(遺物No5124.1)と同様の形態となる。

7 (遺物No5121) は、中央部北側より出土した土師器の壺で、口径は11.8cm、器高は4.0cmある。やや丸みを帯びた底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部で直立気味となり端部を尖らせている。

8 (遺物No5533) は中央部北側から出土した土師器の模倣壺で、口径は12.0cm、器高は3.6cmある。やや丸みを帯びた底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部を内傾させて端部を尖らせている。

9 (遺物No5294) は竈の東側に隣接して出土した土師器の甕で、胴部の最大径は17.0cmある。ほぼ直線的に立ち上がる長胴型を呈している。胴部の外面は縦位・斜位のハケメ、内面は横位・斜位のハケメ調整が施されている。胴部の外面にはススが付着している。

10 (遺物No5126+5127他) は竈脇の東側から出土した土師器の甕の口縁部から胴部にかけて、推定口径は20.0cmある。胴部は直線的に立ち上がる直胴型となっている。外面には縦位のハケメが施されている。



16 - 5424



図IV-2-51 第10号住居址から出土した土器（2）

11（遺物No5135.1）は竈の南東側より出土した土師器の鉢で、口径は15.0cm、器高は9.5cmある。やや丸みを帯びた底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部で内傾して端部を細く丸めている。

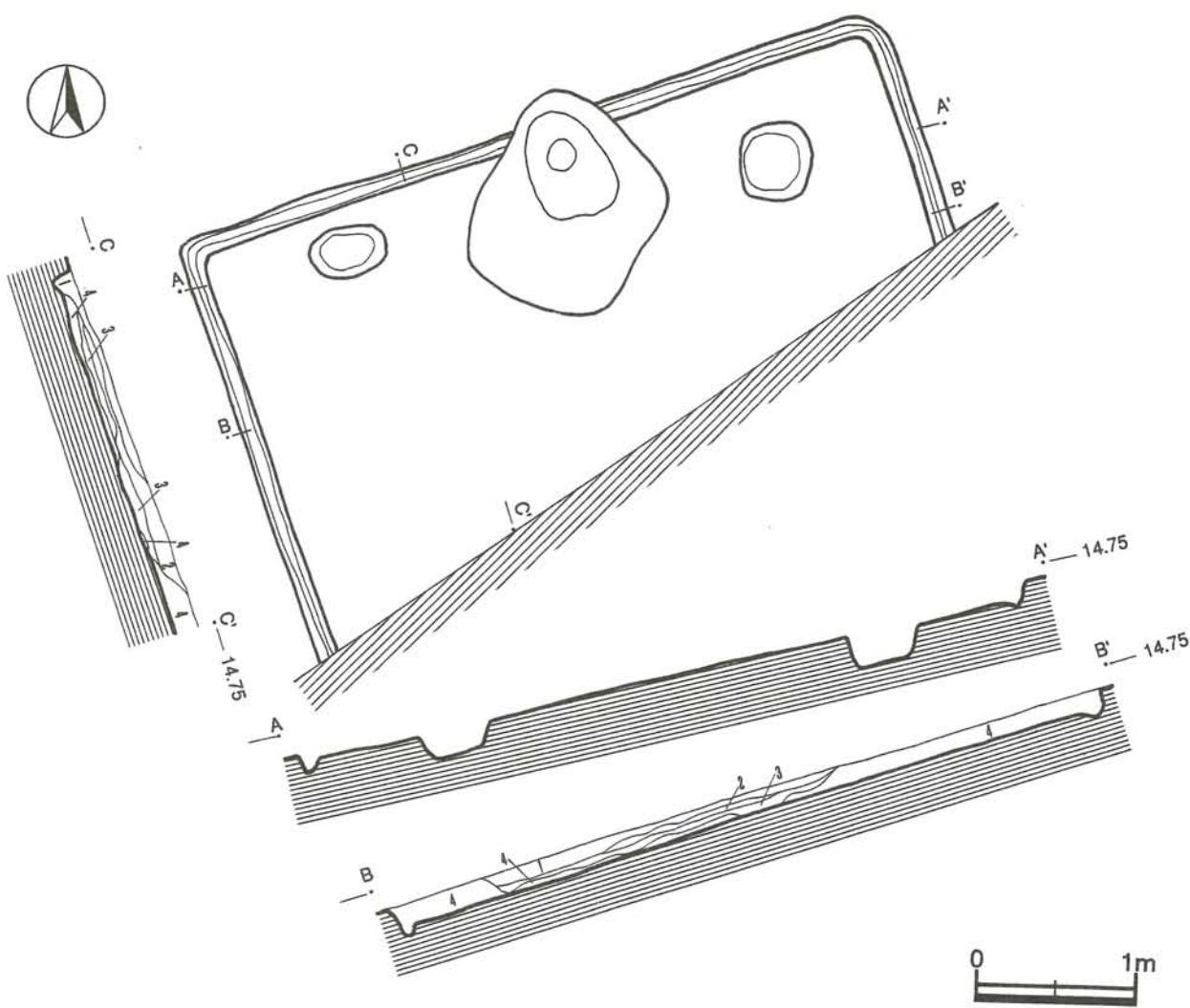
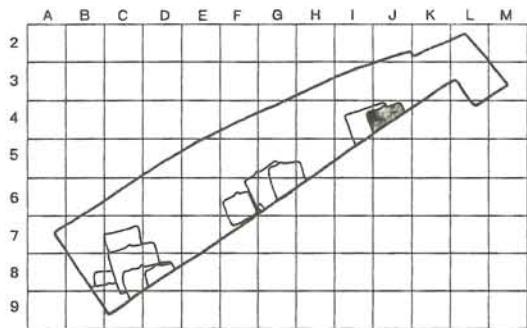
12（遺物No5125）は中央部北側から出土した土師器の脚付碗で、口径は11.5cm、器高は14.2cmある。坏部は丸みを帯びて内彎しながら立ち上がり、口縁部で内傾を弱めて端部を細く尖らせている。底部と胴部の境に沈線化した稜を持っている。脚部は胴部にやや膨らみを持ち裾の端部を水平に引き出している。空洞部は高くなり、渦巻き状になる。

13（遺物No5141）は竈の東側に隣接して出土した土師器の壺で、口径は18.0cm、器高は25.2cmある。やや丸みを帯びた底部から内彎しながら立ち上がり、頸部が「く」の字状を呈し、口唇部を細く丸めている。

14（遺物No5135.2）は竈の南東側より出土した土師器の甌の把手で、形態は角状である。

15（遺物No5135.3）も竈の南東側より出土した土師器の甌の把手で、形態は角状である。

16（遺物No5424）は竈の南西側より出土した土製支脚で、原形は長方体であったと思われる。



図IV-2-52 第11号住居址の平面および断面図

⑪第11号住居址

I-4、J-4グリッドの標高14.55mに位置し、第12号住居址と重複関係にあり、本住居址が第12号住居址を掘り込んでいることから、第12号住居址(旧)→第11号住居址(新)の関係が認められる。

平面形状は南側が発掘対象区外に広がっているため不明な点もあるが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが3.9m、確認できた南北の最大長は2.2mあり、主軸の方位はN-17°-Wを指している。

壁高は北側が17.0cm、東側が14.0cm、西側が21.0cmある。確認できた壁溝は幅14.0~17.0cm、深さ8.0~11.0cmある。

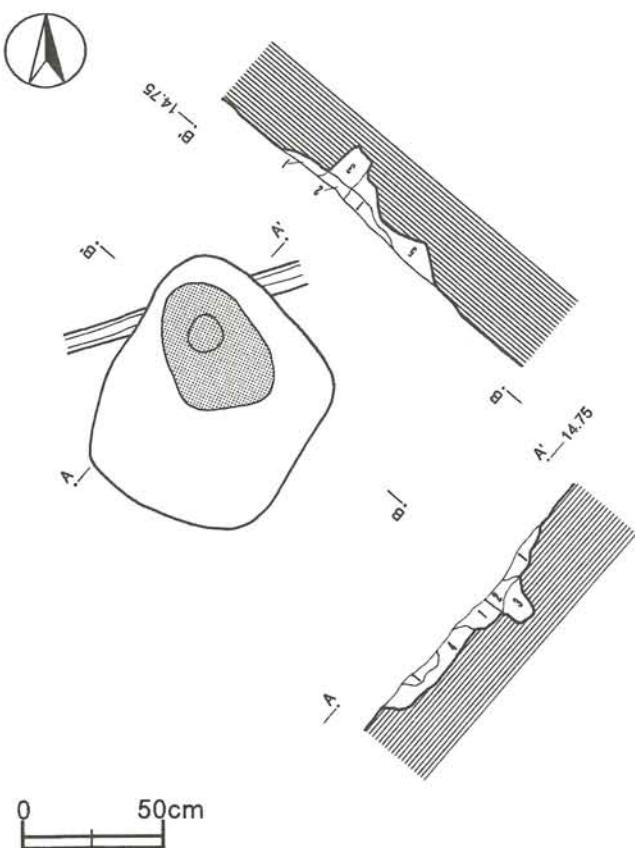
床面は暗茶褐色土で、全体に緩やかな凹凸が見られるがほぼ平坦で、中央部から東側は硬質であるが、北東部角付近はやや軟質である。

柱穴は2ヵ所確認され、柱穴1(北東側)は長径が48.2cm、短径が44.2cm、深さは10.0cm、柱穴(北西側)は長径が49.4cm、短径が31.9cm、深さは8.0cmである。

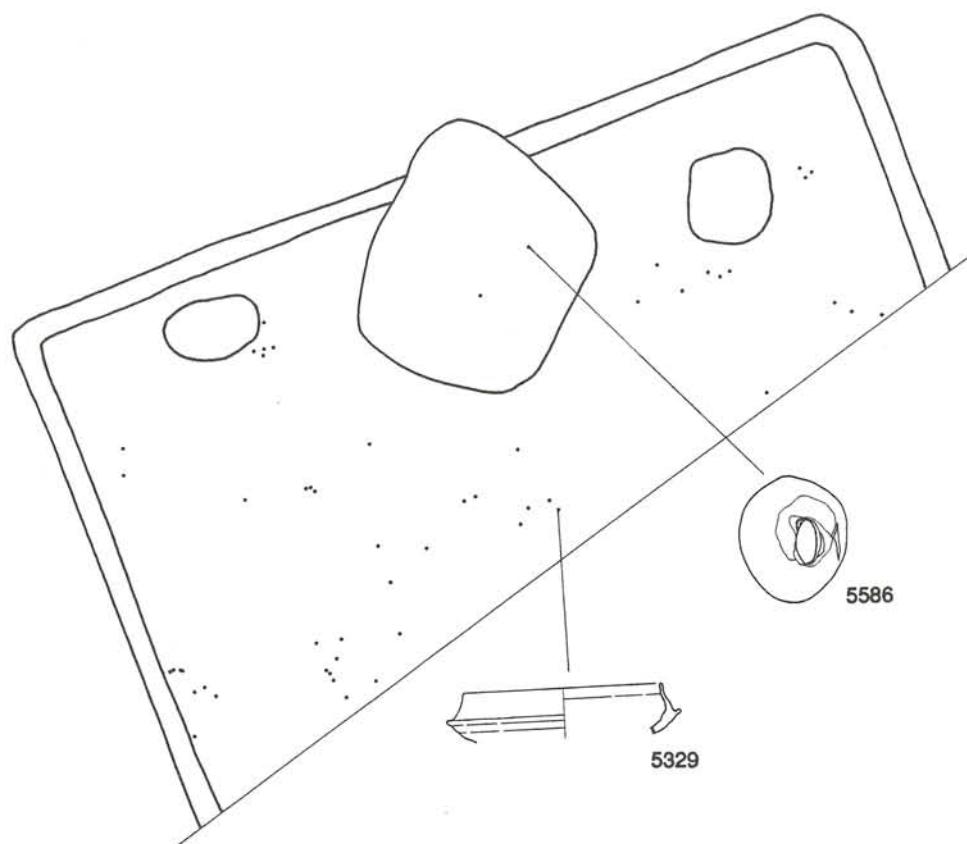
覆土は4層に分けられる。第1層は茶褐色土で炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや弱い。第2層は黒褐色土で炭化粒を多く含んでおり、焼土粒および小ブロック状になった焼土をやや多く含んでいる。第3層は暗褐色土で焼土粒をやや多く含み、床面に敷くような状態で礫を含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は黄茶褐色土で粘性も締まりもやや強い。

竈は北壁のほぼ中央に位置し、N-17°-Wを向き、全長が111.2cm、最大幅が86.0cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、北側に南北方向42.6cm、東西方向35.0cmの楕円形の範囲に焼土の分布が見られる。

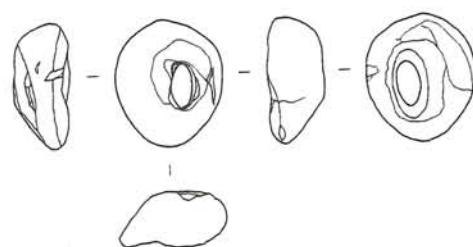
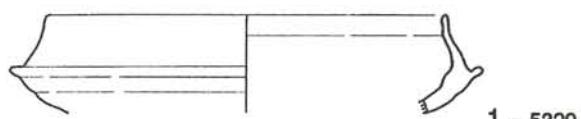
竈の層序は5層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性も締まりもやや弱い。第2層は暗茶褐色土で炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第3層は黒茶褐色土で、炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒を少量含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は暗茶褐色土で、炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第5層は暗茶褐色土で、炭化粒をやや多く含み、焼土粒を少量含む。粘性も締まりもやや弱い。



図IV-2-53 第11号住居址の竈の平面および断面図



図IV-2-54 第11号住居址の遺物分布図

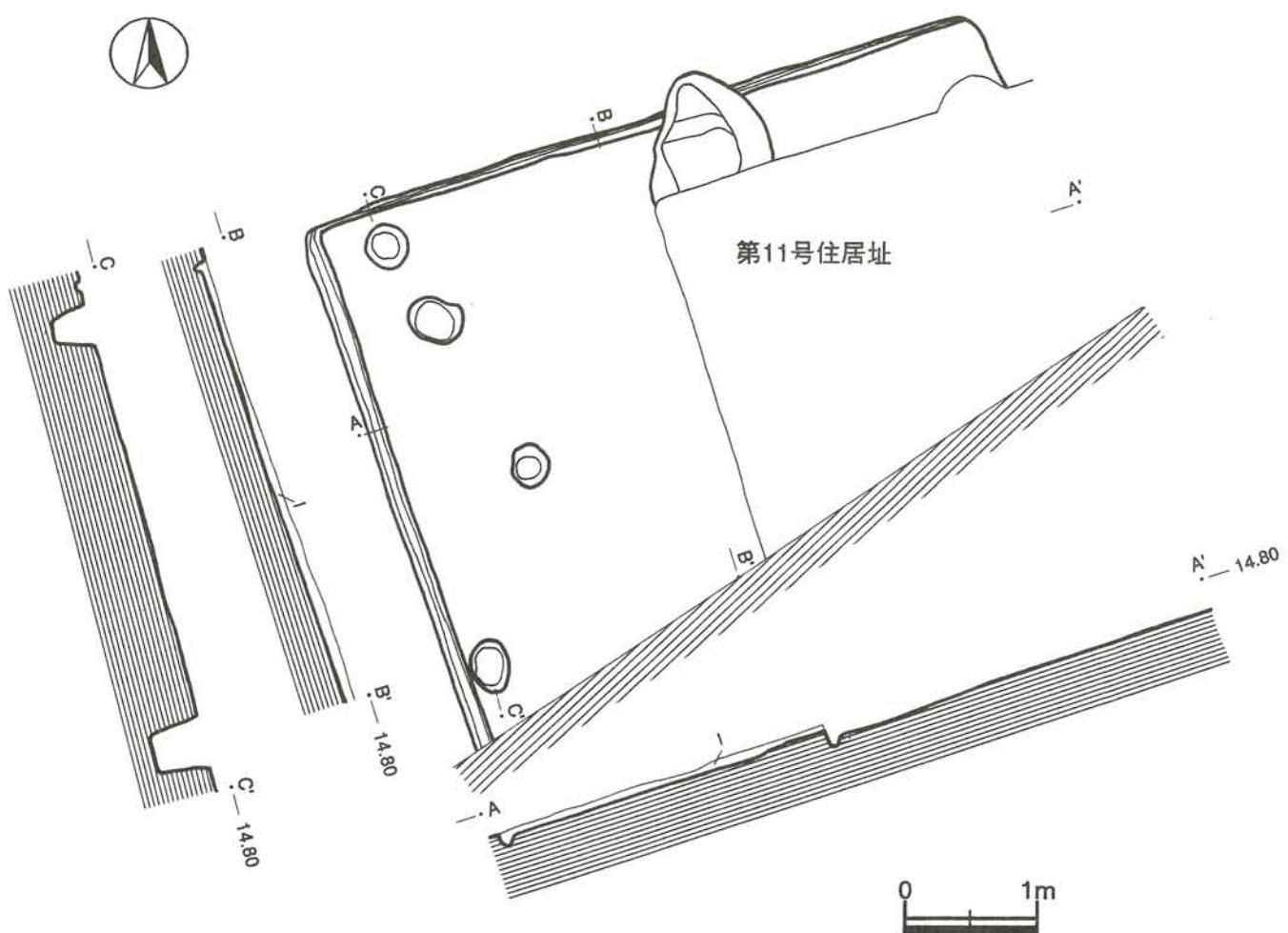
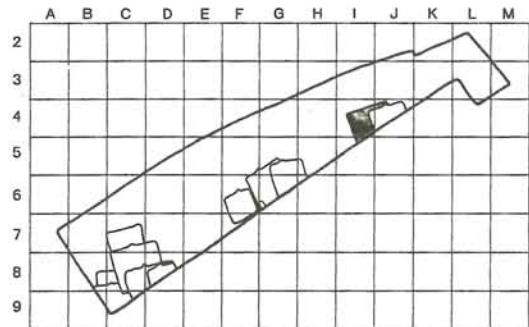


図IV-2-55 第11号住居址から出土した遺物

遺物は住居址の全面に散布している。

1（遺物No5329）は中央部より出土した須恵器の坏身で、推定最大径は15.5cm前後、推定口径は13.0cm前後ある。口縁部を内傾させ、上半を垂直に高く立ち上がらせて端部を少し屈曲させ段の名残りを示して丸めている。

2（遺物No5586）は竈から出土した有孔石器で、長径は5.5cm、短径は4.8cm、厚さ約2.0cmの扁平な自然石を用いている。石のほぼ中央部を楕円形にくり抜き、凸面側は約2.0cm・凹面側は2.8cmある。孔のつくりは丁寧で、孔の内部は使用によると思われる磨耗の跡が認められる。



図IV-2-56 第12号住居址の平面および断面図

⑫第12号住居址

I-4・5、J-4グリッドの標高14.6mに位置し、第11号住居址と重複関係にあり、本住居址が第11号住居址を掘り込んでいることから、第12号住居址（旧）→第11号住居址（新）の関係が認められる。

平面形状は東側が第11号住居址に掘り込まれ、南側が発掘対象区域外に広がっているため不明な点もあるが、方形を呈していると思われる。規模は東西の長さが5.6m、確認できた南北の最大長が4.1mあり、主軸の方位はN-20°-Wを指している。

壁高は北側が12.0cm、西側が13.0cmある。確認できた西から北側にかけての壁溝は幅6.0～17.0cm、深さが5.0～8.0cmある。

床面は暗茶褐色土で、北側から南側にかけて高くなっているが、全体に平坦でやや硬質である。

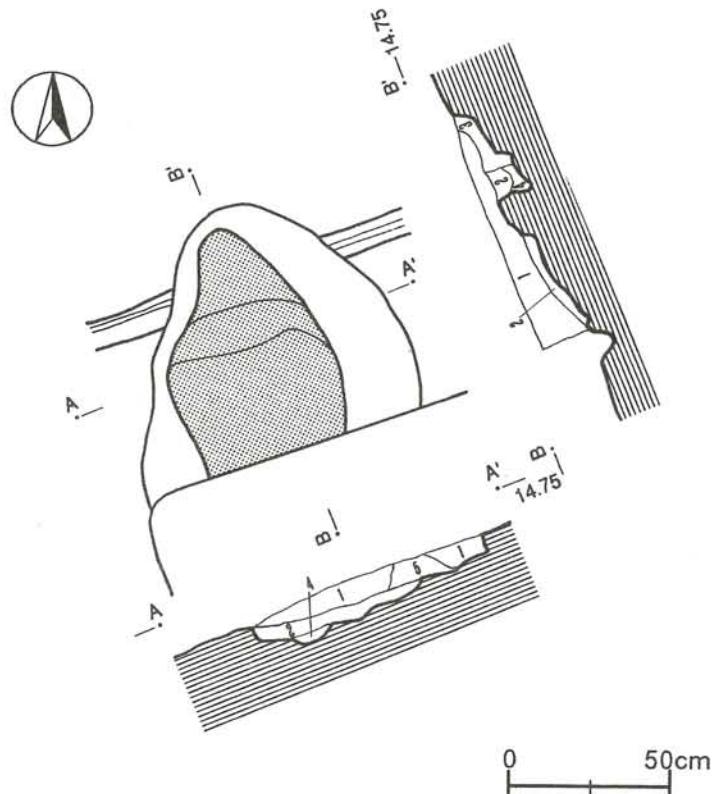
柱穴は2ヵ所確認され、柱穴1（北西側）は径33.9cmの円形で、最深部の深さが32.0cm、柱穴2（南西側）は長径が41.0cm、短径が30.0cm、最深部の深さが44.0cmある。

住居址の覆土は茶褐色土が1層で、炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性も締まりもやや弱い。

その他、北西側と西側中央部でピットが2基確認された。

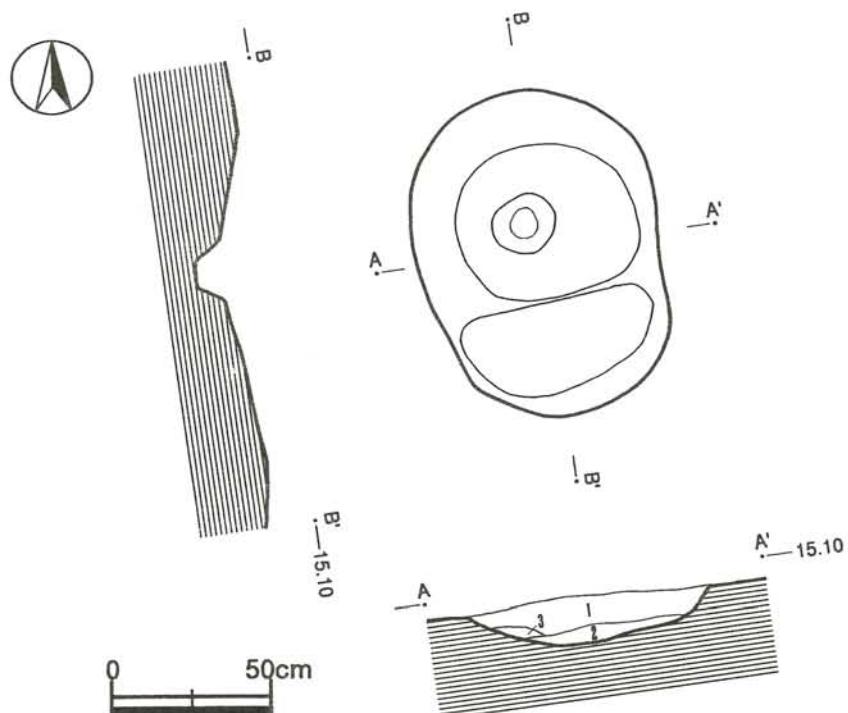
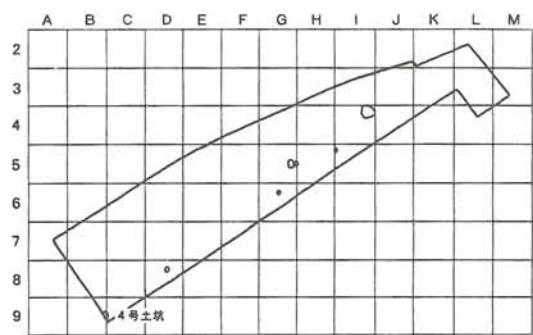
遺物は土師器の細片が3点出土したのみである。

竈は北壁のやや東よりに位置しているが、第11号住居址によって南側を欠いている。N-14°-Wを向き、残存している長さは76.4cm、最大幅は83.8cmある。後世の削平をうけているため保存状態は良好ではないが、中央部分に南北方向71.0cm、東西方向49.2cmの範囲で焼土が分布している。

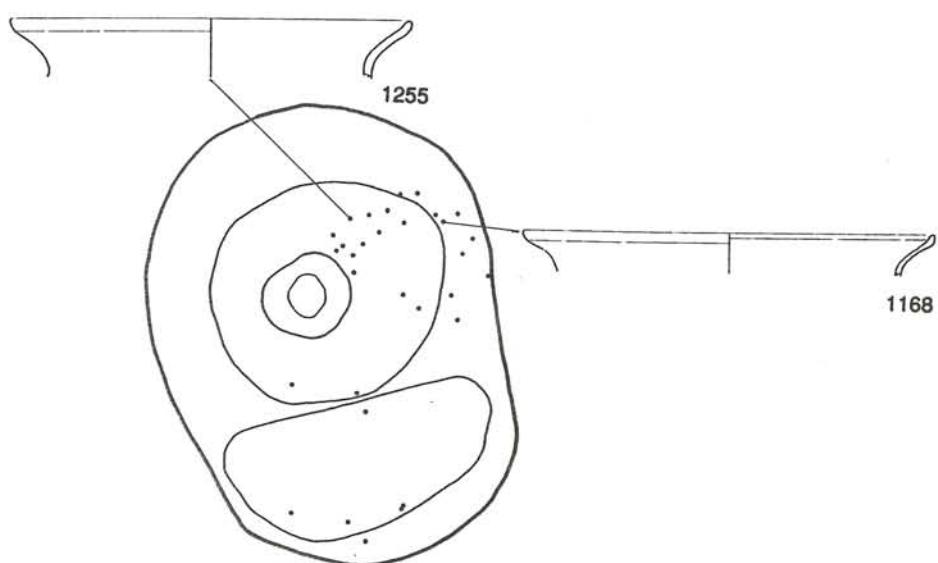


竈の層序は5層に分けられる。第1層は暗茶褐色土で、炭化物・焼土粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗赤褐色土で焼土粒・焼土の小ブロックが層を成している。炭化物を少量含み、粘性も締まりもやや弱い。第3層は黒茶褐色土で黒色に近い。炭化物・炭化粒・焼土粒をやや多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第4層は黒褐色土で、炭化物・炭化粒を多く含み、焼土粒をやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第5層は暗赤茶褐色土で、焼土粒をやや多く含み、粘性はやや強く、締まりはやや強い。

図IV-2-57 第12号住居址の竈の平面および断面図



図IV-2-58 第4号土坑の平面および断面図



図IV-2-59 第4号土坑の遺物分布図

(2) 土坑

古墳時代の土坑は第5号土坑・第6号土坑が隣接している以外は、調査区の南西から北東に分散している。

①第4号土坑

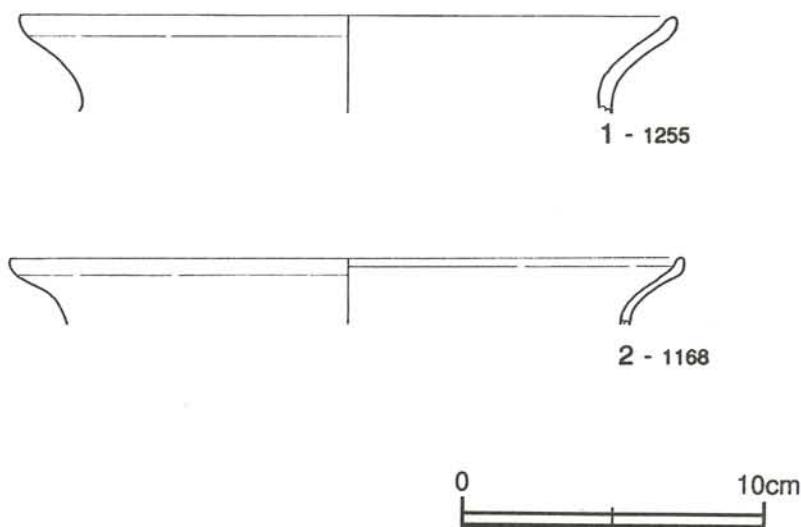
B-9、C-9グリッドの標高15.05mに位置し、平面形状は橢円形で、長径は99.5cm、短径は73.5cm、深さは最深部が18.5cmあり、主軸はN-11.5°-Wを指している。断面形状は皿状を呈しているが、中央部でやや深くなっている。

覆土は3層に分けられ、第1層は青暗赤茶褐色土で焼土粒と炭化物を多く含み、粘性は弱く、締まりはやや強い。土器片を多く含んでいる。第2層は暗茶褐色土で焼土粒と炭化物を含んでいる。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第3層は青暗赤茶褐色土で、粘性も締まりもやや強い。

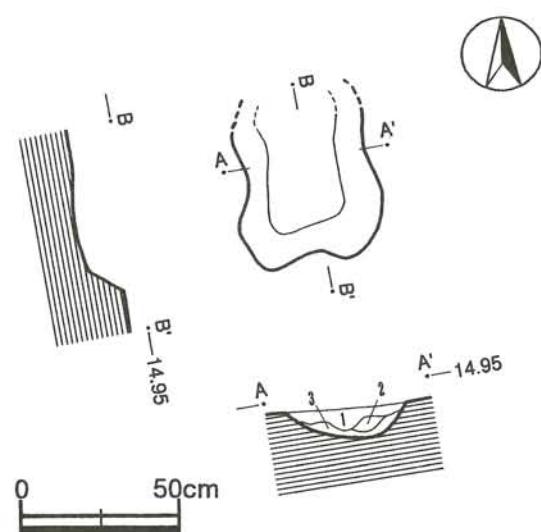
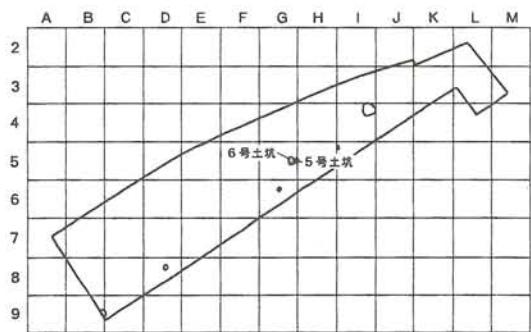
遺物は中央部東側の覆土の中位および底面から土器片が集中して出土しているが、最深部には落ち込んでいない。出土した土器片は土師器の破片が30点である。

1(遺物No1255)は土師器の甕の口縁部で、推定口径は21.0cm前後ある。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がり、端部は僅かに肥厚して直立気味となっている。

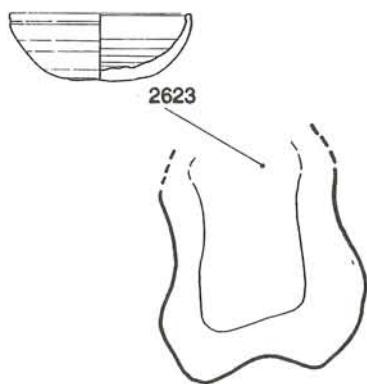
2(遺物No1168)は土師器の甕の口縁部で、推定口径は21.0cm前後ある。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がり、端部は僅かに肥厚して直立している。器壁は0.2~0.3cmと薄い。



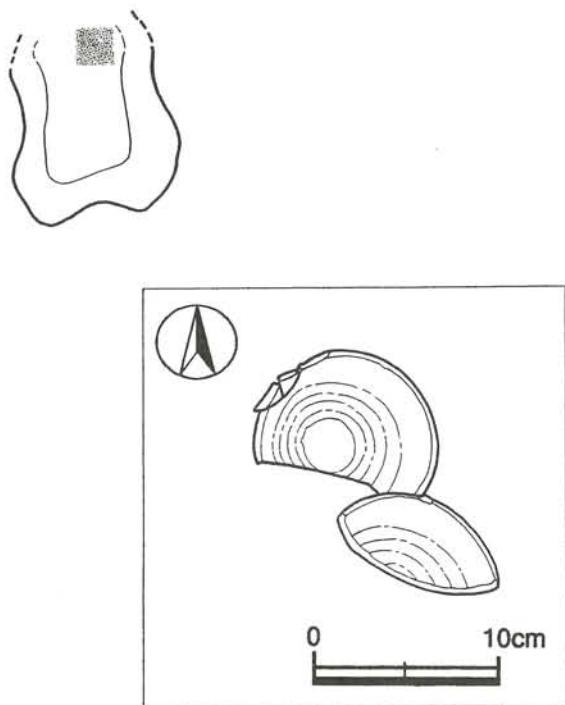
図IV-2-60 第4号土坑から出土した土器



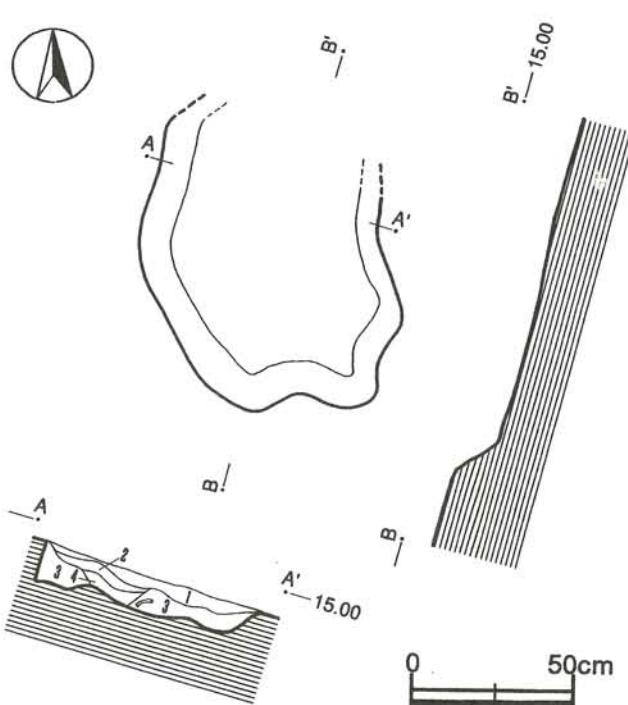
図IV-2-61 第5号土坑の平面および断面図



図IV-2-62 第5号土坑の遺物分布図



図IV-2-63 第5号土坑の遺物出土状況図



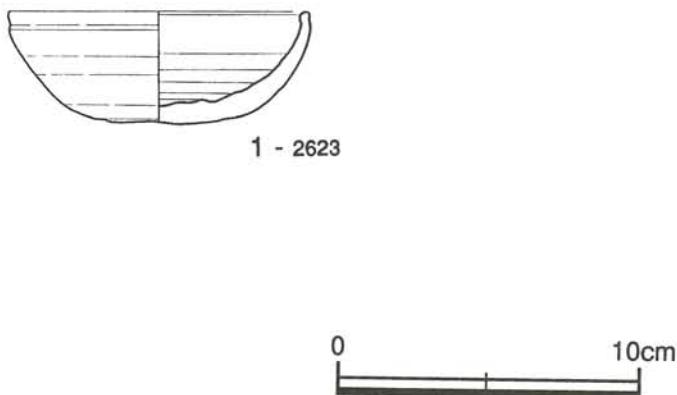
②第5号土坑

G-5、H-5グリッドの標高14.9mに位置し、平面形状は北側が試掘坑によって切られているが、不整な方形を呈していると思われる。残存している部分の長さは41.0cm、短径は31.5cm、深さは最深部で9.5cmあり、主軸はN-10°-Wを指している。断面形状は上に開くU字状を呈しているが、西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は3層に分けられ、第1層は淡黄茶褐色土で炭化粒を少量含み、粘性は弱く、締まりはやや強い。第2層は淡黄茶褐色土で炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや弱い。第3層は暗茶褐色土で、炭化粒・炭化物を多く含み、焼土粒を少量含んでいる。粘性も締まりもやや弱い。

遺物は北側の床面から須恵器の完形品が1点出土している。

1（遺物No2623）は須恵器の坏身で、口径は9.8cm、器高は3.6cmある。底面がやや平底気味であるがほぼ半円球を呈し、口縁部を横ナデによって垂直に立ち上げている。



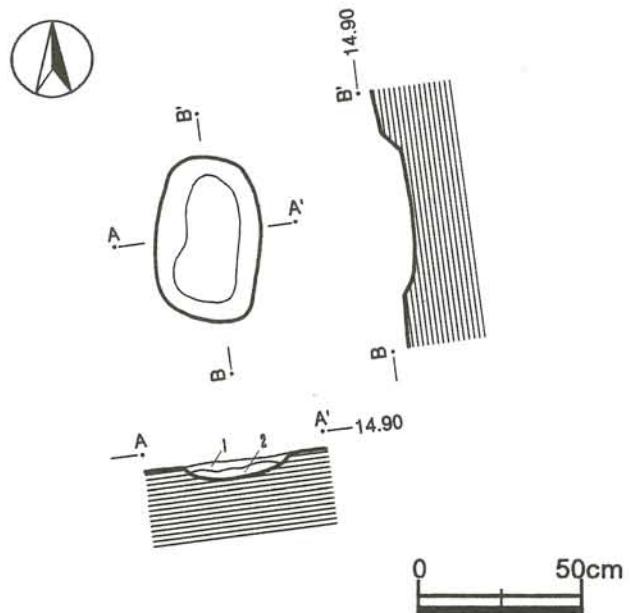
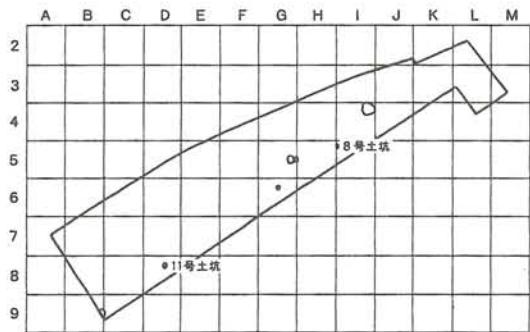
図IV-2-65 第5号土坑から出土した土器

③第6号土坑

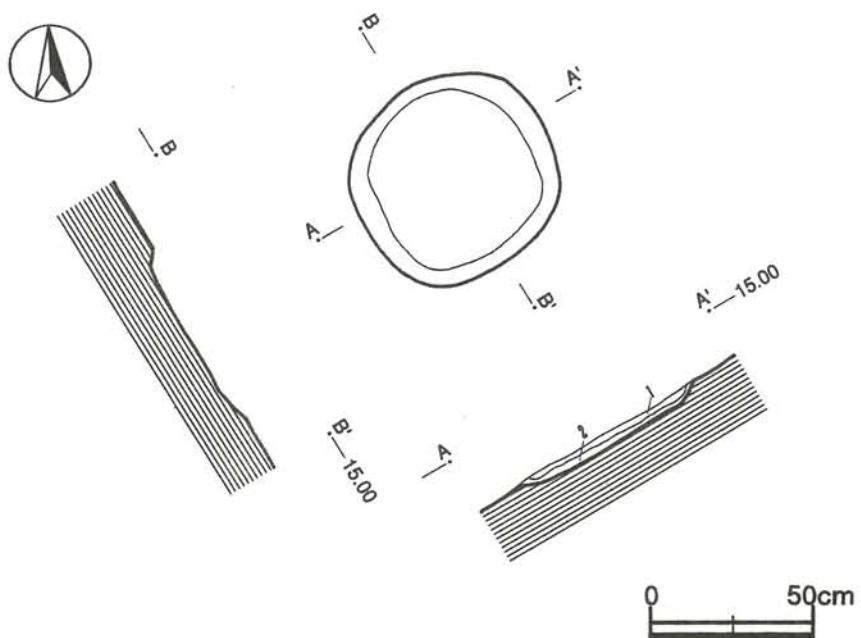
G-5グリッドに位置し、北側が試掘坑によって切られているが、不整な橢円形を呈していると思われる。残存している部分の長さは77.5cm、短径は68.0cm、深さは最深部で11.5cmあり、主軸はN-17°-Eを指している。断面形状は皿状で底は波状を呈している。

覆土は4層に分けられ、第1層は淡黄茶褐色土で粘性は弱く、締まりはやや強い。第2層は淡黄茶褐色土で第1層に比べやや暗く、炭化粒・焼土粒を少量含み、粘性は弱く、締まりはやや強い。第3層は暗茶褐色土で、炭化粒・焼土粒を多く含み、粘性は弱く、締まりはやや強い。土師器の細片を含んでいる。第4層は暗茶褐色土で、炭化粒を少量含み、粘性は弱く、締まりはやや弱い。

遺物は覆土第3層から土師器の細片が2点出土しただけである。



図IV-2-66 第8号土坑の平面および断面図



図IV-2-67 第11号土坑の平面および断面図

④第8号土坑

I-5グリッドの標高14.85mに位置し、平面形状は楕円形で、長径は50.0cm、短径は32.5cm、深さは最深部が5.0cmあり、主軸はN-7°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗赤茶褐色土で炭化粒・炭化物・焼土粒を多く含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は暗茶褐色土で炭化粒を少量含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

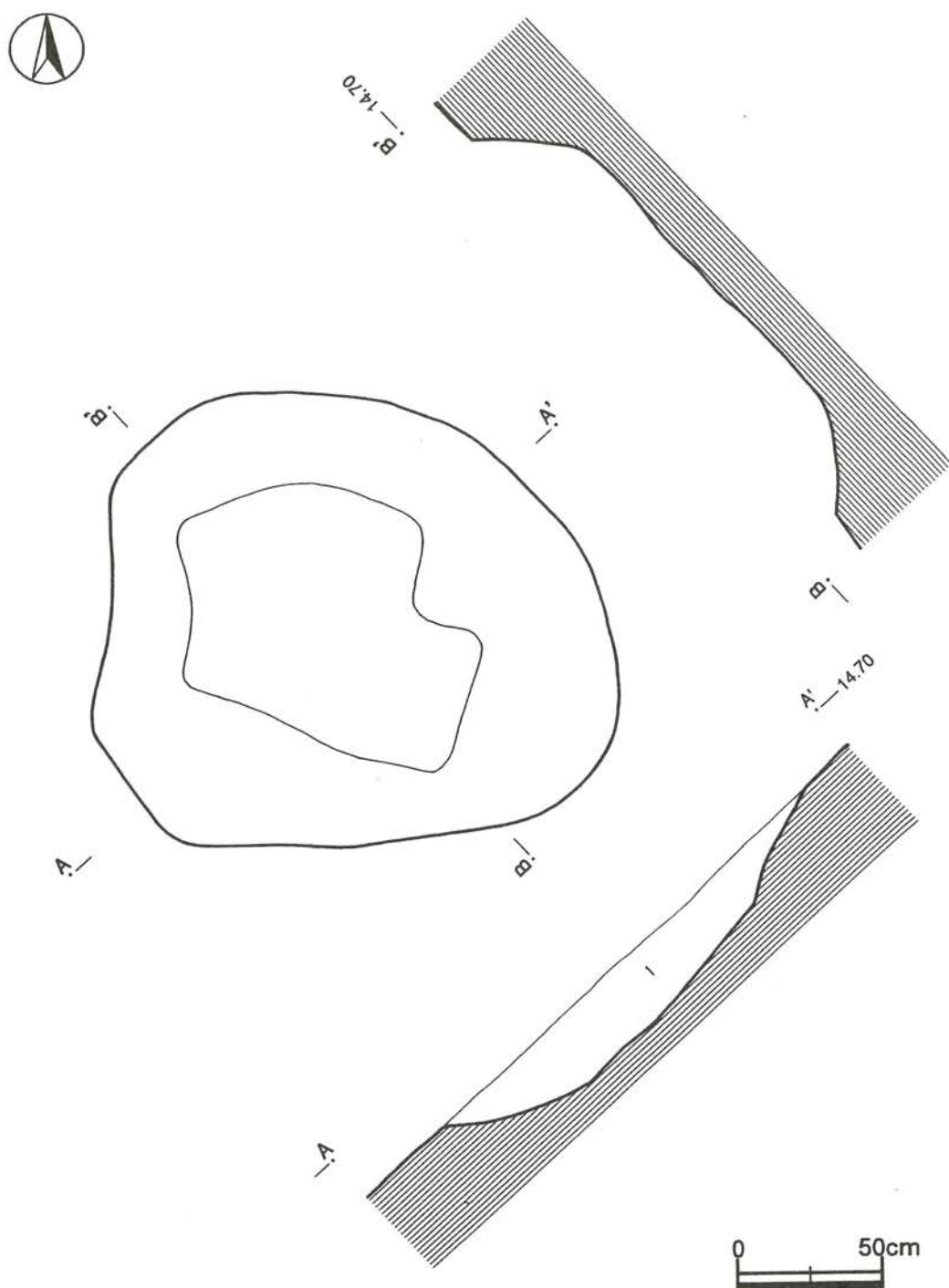
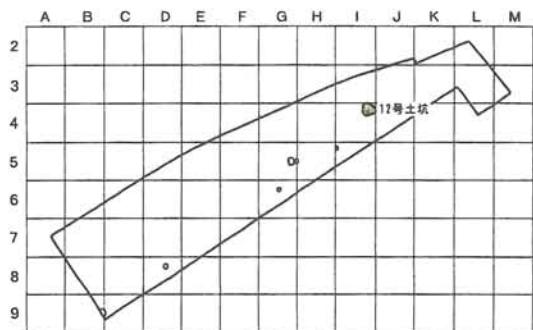
遺物は覆土から土師器の細片が1点出土している。

⑤第11号土坑

D-8グリッドの標高14.8mに位置し、平面形状は円形で、径は60.0cm、深さは最深部が4.0cmある。断面形状は皿状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は茶褐色土で粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。

遺物は確認されなかった。



図IV-2-68 第12号土坑の平面および断面図

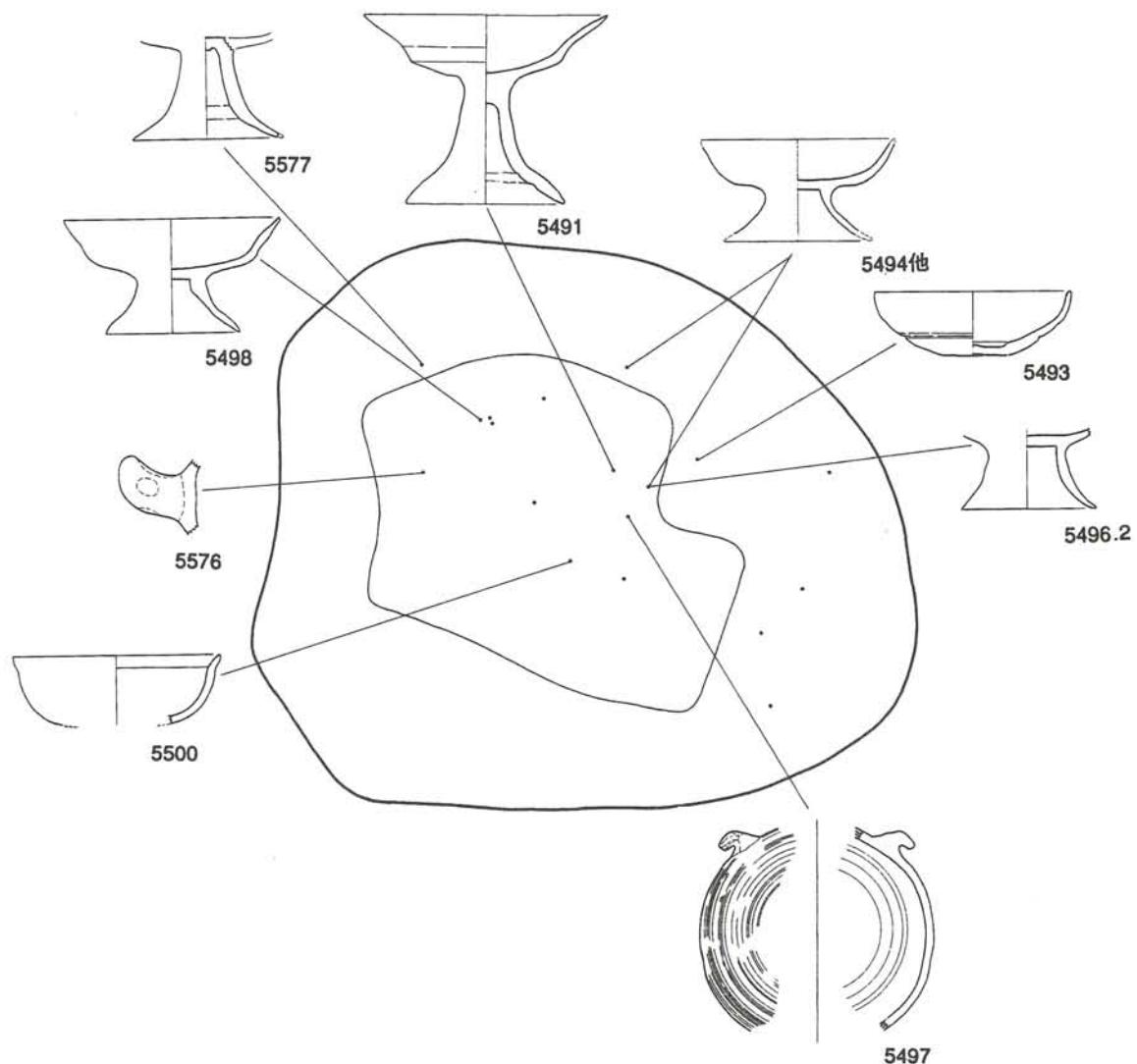
⑥第12号土坑

I-4グリッドの標高14.5mに位置し、平面形状は不整な円形で、長径は186.1cm、短径は156.0cm、深さは最深部が23.0cmあり、主軸はN-34°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

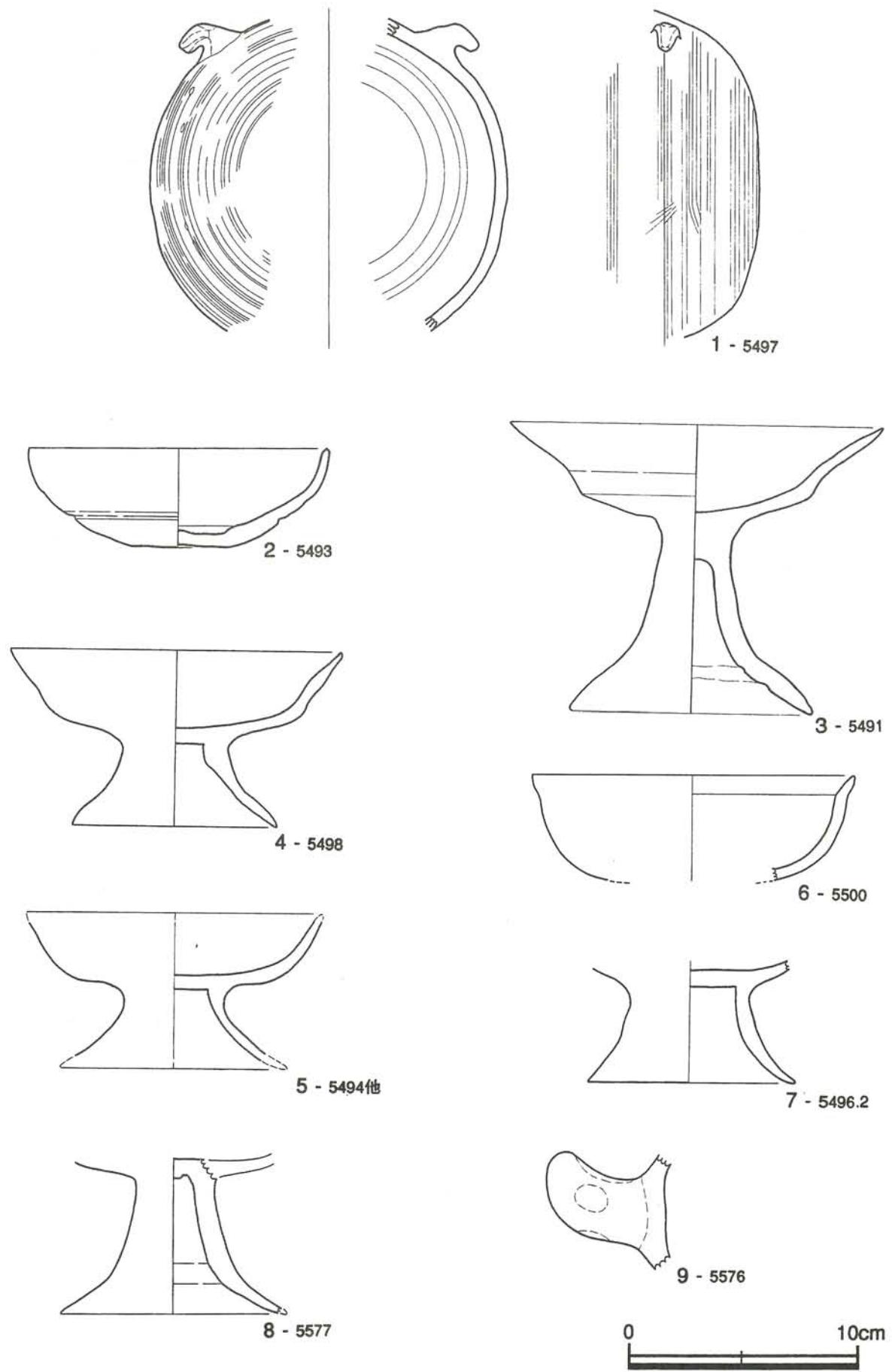
覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化物をやや多く含んでいる。粘性はやや弱く、締まりは強い。

遺物は中央から東側にかけての覆土から、須恵器が1点と土師器が16点一括廃棄したように重なりあって出土している。そのうち、須恵器の提瓶が1点、土師器の壺が1点、高壺が6点、把手が1点ある。

遺物の出土状況とその内容から祭祀に関連した土坑と思われる。



図IV-2-69 第12号土坑の遺物分布図



図IV-2-70 第12号土坑から出土した土器

1（遺物No5497）は中央部より出土した須恵器の提瓶の破片である。胴部の推定径は15.0cmある。胴部は同心円の細いカキメとヘラ削り調整が施されている。肩には鉤形の把手をつけている。

2（遺物No5493）は中央部東側より出土した土師器の坏で、推定口径は13.0cm、器高は4.3cmある。底部は丸味を帯びた弓張り状を呈し、口縁部で直立し、端部は内傾させている。外面は回転のヘラ削りによる稜線状の沈線が残っている。

3（遺物No5491）は中央部より出土した土師器の高坏で、推定口径は16.2cm、器高は12.7cm、底径は10.0cmで、坏部は浅く稜を有しており、外反して大きく開いている。稜線は器高の1/4から1/5に位置している。脚部は長脚で、直線的に「ハ」の字状に開いている。

4（遺物No5498）は中央部北西側より出土した土師器の模倣高坏である。推定口径は14.3cm、器高は7.2cmある。坏部はやや浅い碗型を呈し、口縁部がやや外反気味となっている。脚部は接合部から「ハ」の字に開いている。脚部の器高は坏部よりやや短い。

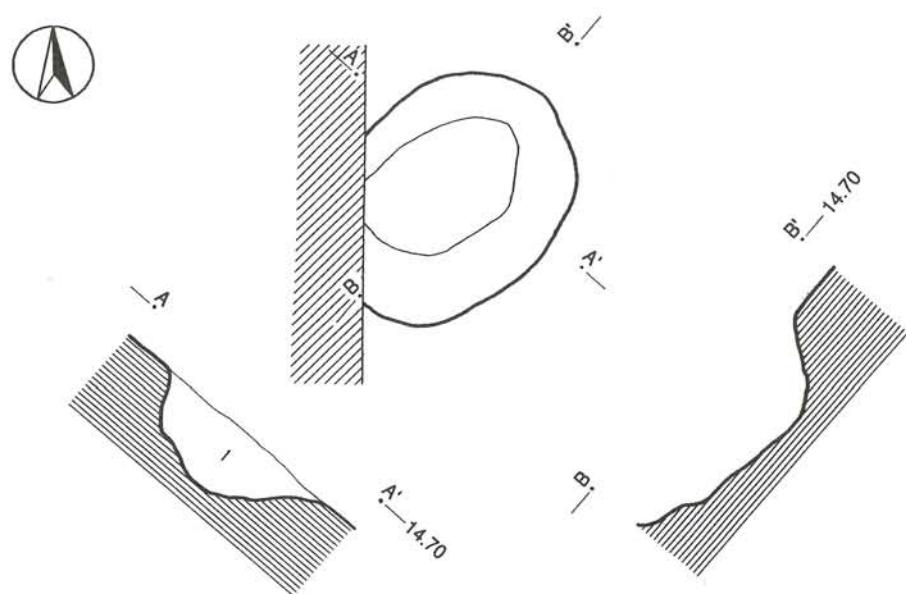
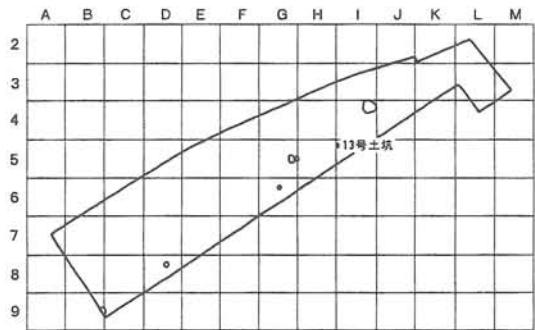
5（遺物No5494+5496.1）は北東側と中央部東側に破片が分かれて出土した土師器の模倣高坏で、推定口径は13.0cm、器高は6.8cmある。坏部はやや浅く、口縁部が僅かに外反気味となっている。脚部は接合部から「ハ」の字に開いている。

6（遺物No5500）は中央部より出土した土師器の模倣高坏の坏部で、推定口径は14.0cmある。坏部はやや浅い碗型を呈し、口縁部がやや外反気味となっている。

7（遺物No5496.2）は中央部東側より出土した土師器の模倣高坏の底部から脚部で、脚部は接合部から「ハ」の字に開いている。

8（遺物No5577）は北西側より出土した土師器の高坏の脚部で、裾端部の推定径が10.0cmある。坏部の接合部から直線的に下り、裾部で「ハ」の字状を呈している。

9（遺物No5576）は中央部西側より出土した土師器の甌の把手と思われる。



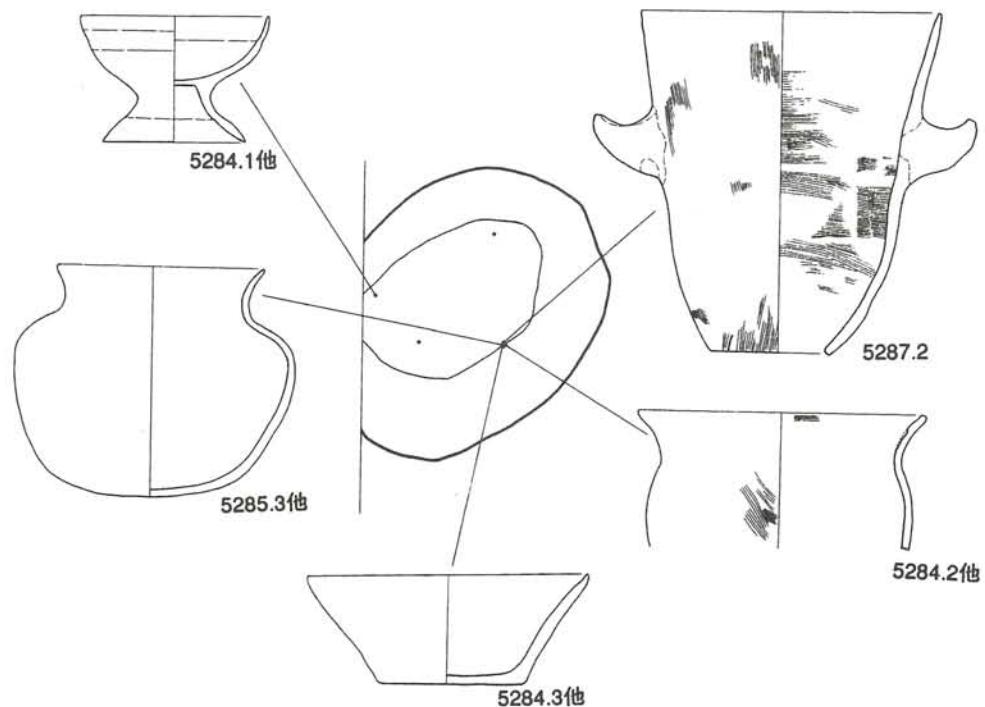
図IV-2-71 第13号土坑の平面および断面図

⑦第13号土坑

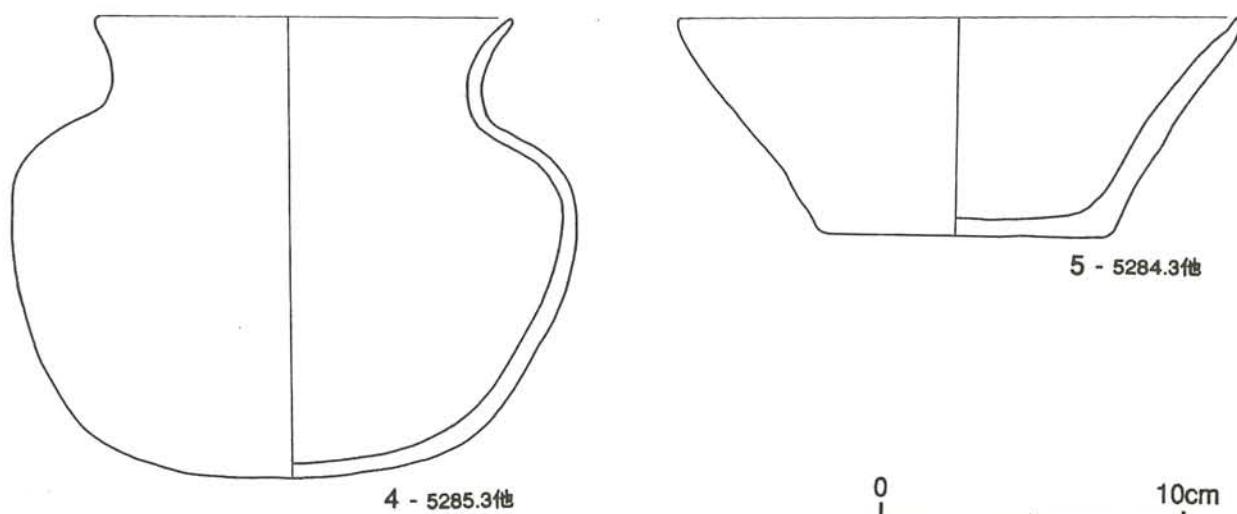
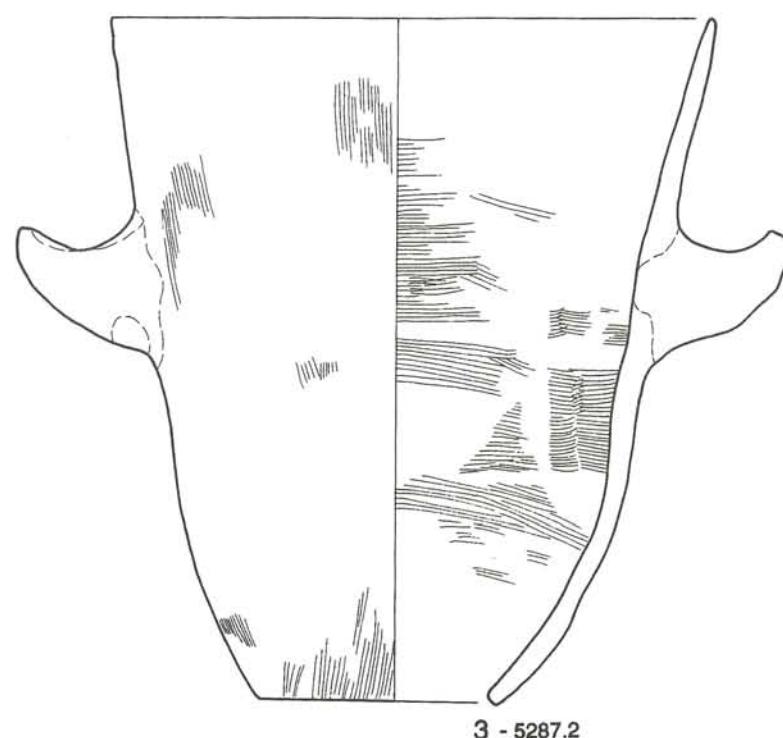
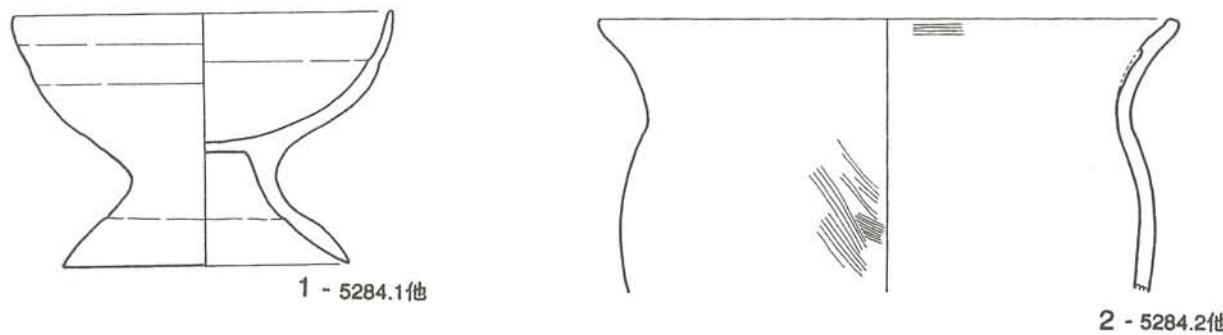
G-6グリッドの標高14.6mに位置し、南西側を排水溝で切られているが、平面形状は橢円形を呈していると思われ、長径は80.0cm、短径は66.0cm、深さは最深部が21.6cmあり、主軸はN-40°-Eを指している。断面形状は丸底状を呈している。

覆土は暗茶褐色土が1層で、炭化粒はやや多く含み、焼土粒は少量含んでいる。粘性はやや強く、締まりはやや弱い。

遺物は底から一括廃棄したように重なりあって出土している。そのうち、遺物No 5284.1+5285.1は土師器の模倣高壺、遺物No 5284.2+5285.2+5287.1は土師器の甕、遺物No 5287.2は土師器の甌、遺物No 5285.3+5287.3は土師器の壺、遺物No 5285.3+5287.3は土師器の鉢である。



図IV-2-72 第13号土坑の遺物分布図



図IV-2-73 第13号土坑から出土した土器

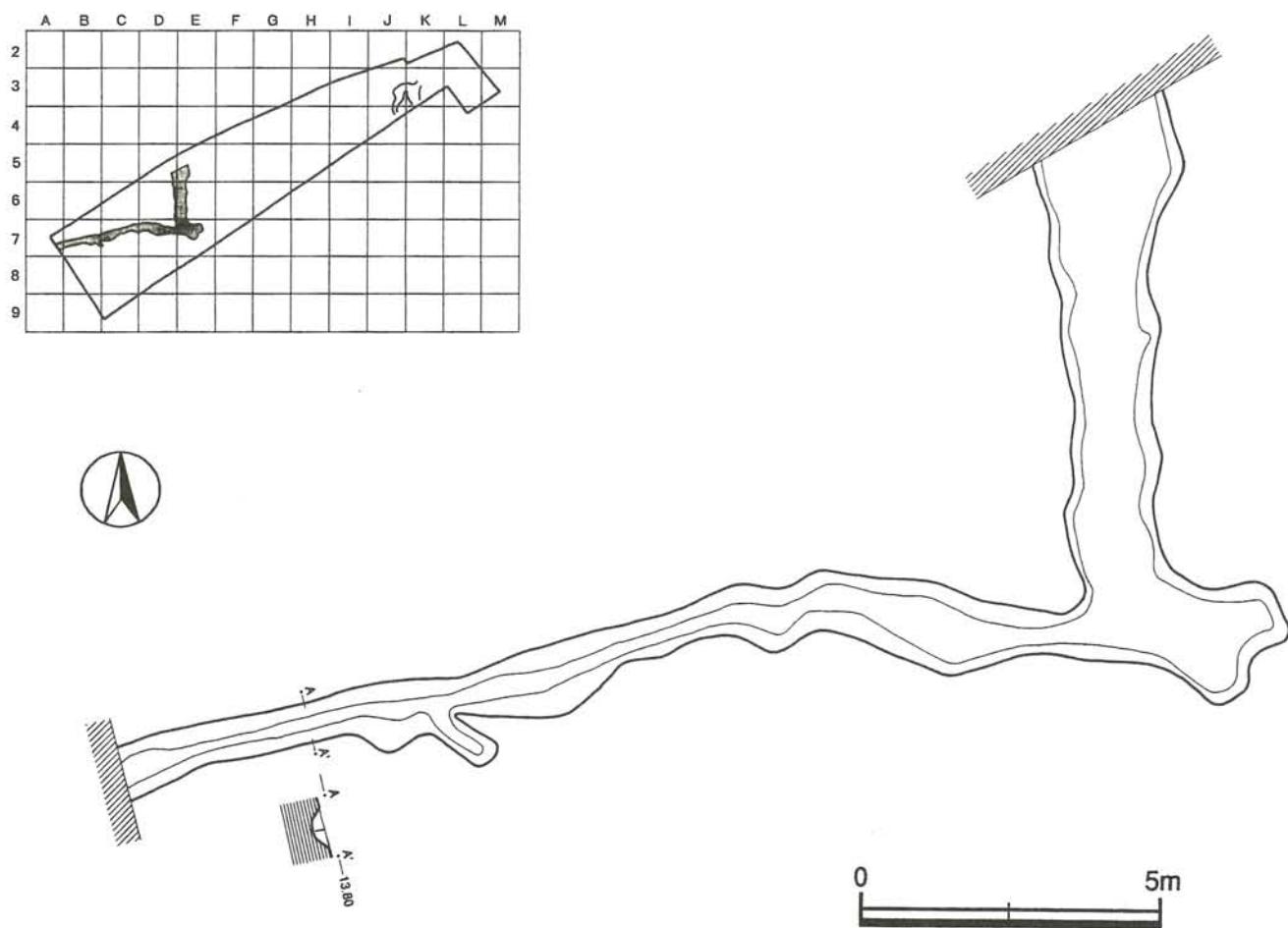
1 (遺物No5284.1+5285.1) は鉢(遺物No5284.3+5287.4)に隣接して出土した土師器の模倣高壺である。口径は12.3cm、器高は8.3cmある。壺部は深く胴部は丸味を持ち、壺部よりも脚部が短くなっている。脚部は壺底部より「ハ」の字状に裾部が広がっている。空洞部は高い。

2 (遺物No5284.2+5285.2+5287.1) は鉢(遺物No5284.3+5287.4)と一緒に出土した土師器の甕で、推定口径は19.0cmある。頸部が「く」の字状に緩やかに屈曲し、口唇部を丸めている。口縁部から胴部は緩やかに内彎し立ち上がっている。口縁部の内面は横位のハケメ、口縁部から胴部の外面は斜位のハケメが施されている。

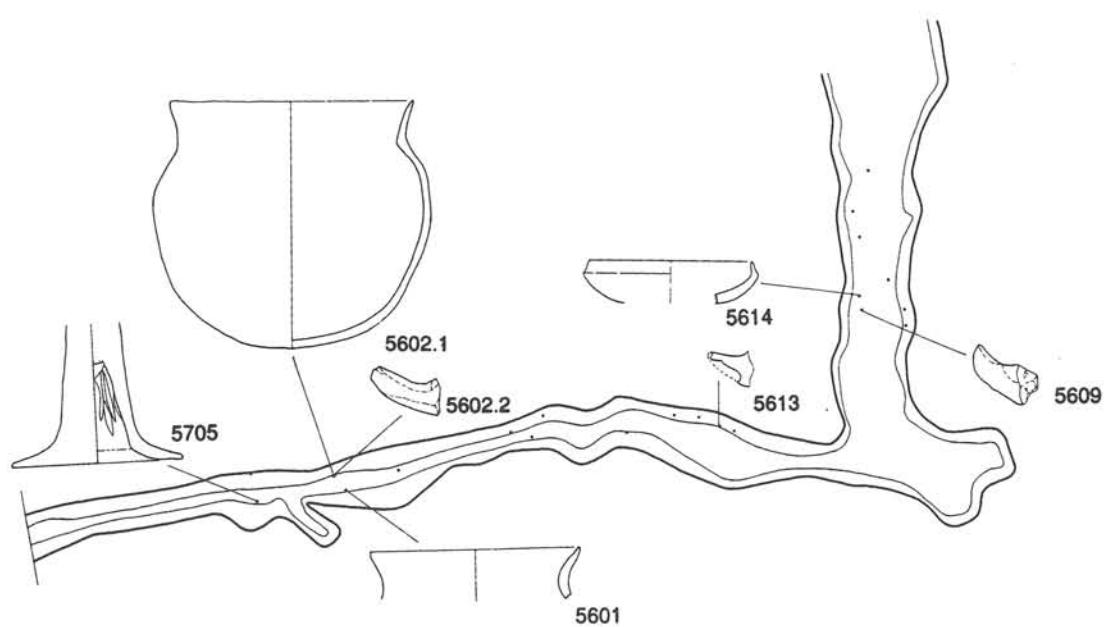
3 (遺物No5287.2) も鉢(遺物No5284.3+5287.4)と一緒に出土した土師器の甕である。口径は19.5cm、器高は22.5cm、底径は7.6cmある。底部から胴部下半までは直線的に開いて立ち上がり、口縁部からは直線的に立ち上がる直胴型に近いもので、把手は角状である。外面は縦位のハケメ、内面は横位のハケメ調整が施されている。

4 (遺物No5285.3+5287.3) も鉢(遺物No5284.3+5287.4)に隣接して出土した土師器の壺である。口径は13.6cm、器高は15.3cmある。やや丸味を帯びた底部から内彎して立ち上がり、肩部で内彎を強めている。肩部に最大径を有し、頸部から口縁部にかけて屈曲して外反する。

5 (遺物No5284.3+5287.4) は中央部西側より出土した土師器の鉢で、口径は18.3cm、器高は7.2cm、底径は9.5cmある。平底の底部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で直立気味となり、端部をやや尖らせている。



図IV-2-74 第11号溝の平面および断面図



図IV-2-75 第11号溝の遺物分布図

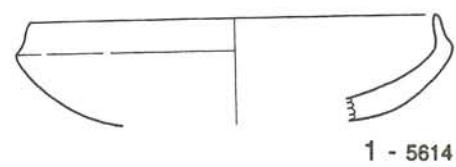
(3) 溝状遺構

①第11号溝

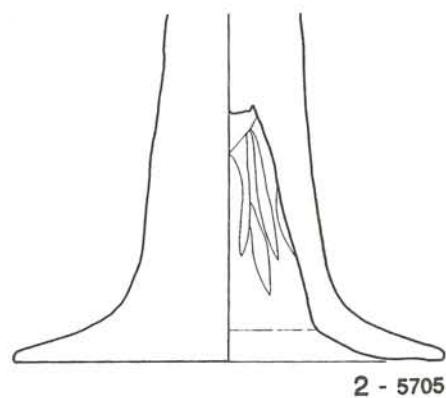
発掘区の西側に位置し、A-7グリッドからE-7グリッドまで東方向に延び、さらにE-7グリッドでD-5、E-5グリッド方向に北上している。A-7グリッドより西側およびD-5、E-5グリッドより北側は発掘対象区域外に延びている。平面形状はほぼ直線状を呈し、確認された溝の長さは東西方向が1,980.0cm、幅70.0～140.0cm、深さ18.0cm、南北方向の長さは940.0cm、幅125.0～250.0cm、深さ12.0cmで、確認できた溝の総延長は2,920.0cmである。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。溝の方向はN-83°-E、N-8°-Wを指している。

覆土は青灰色土が1層で、炭化物を少量含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。

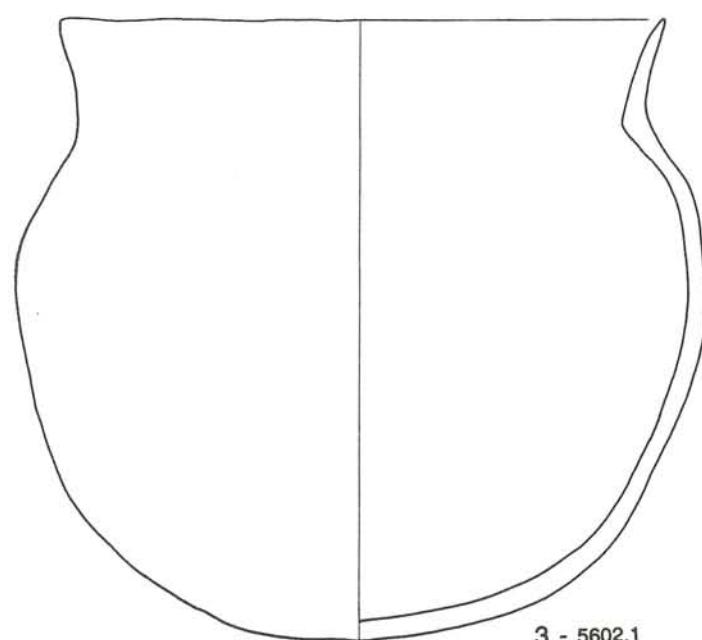
遺物は溝全体に散布しており、いずれも溝底から土師器が19点出土している。そのうち遺物No5602.2、遺物No5609、遺物No5613は土師器の甌の把手、遺物No5614は土師器の模倣坏、遺物No5705は土師器の高坏の脚部、遺物No5602.1は土師器の甌、遺物No5601は土師器の甌の口縁部である。



1 - 5614



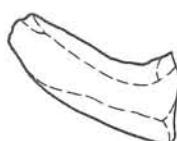
2 - 5705



3 - 5602.1



4 - 5601



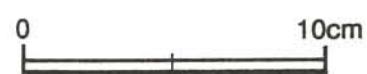
5 - 5602.2



6 - 5613



7 - 5609



図IV-2-76 第11号溝から出土した土器

1（遺物No5614）は土師器の模倣坏の口縁部で、推定口径は13.3cm、推定最大径は14.3cmある。弓張り状と思われる底部から立ち上がり、口縁部に稜を有してやや内傾している。

2（遺物No5705）は土師器の高坏の脚部で、裾端部の径は14.1cmある。胴部は僅かに膨らみ気味となるもののほぼ直線的に下り、裾部で大きくラッパ状に引き出している。空洞部はヘラ削り痕が明瞭に残っている。

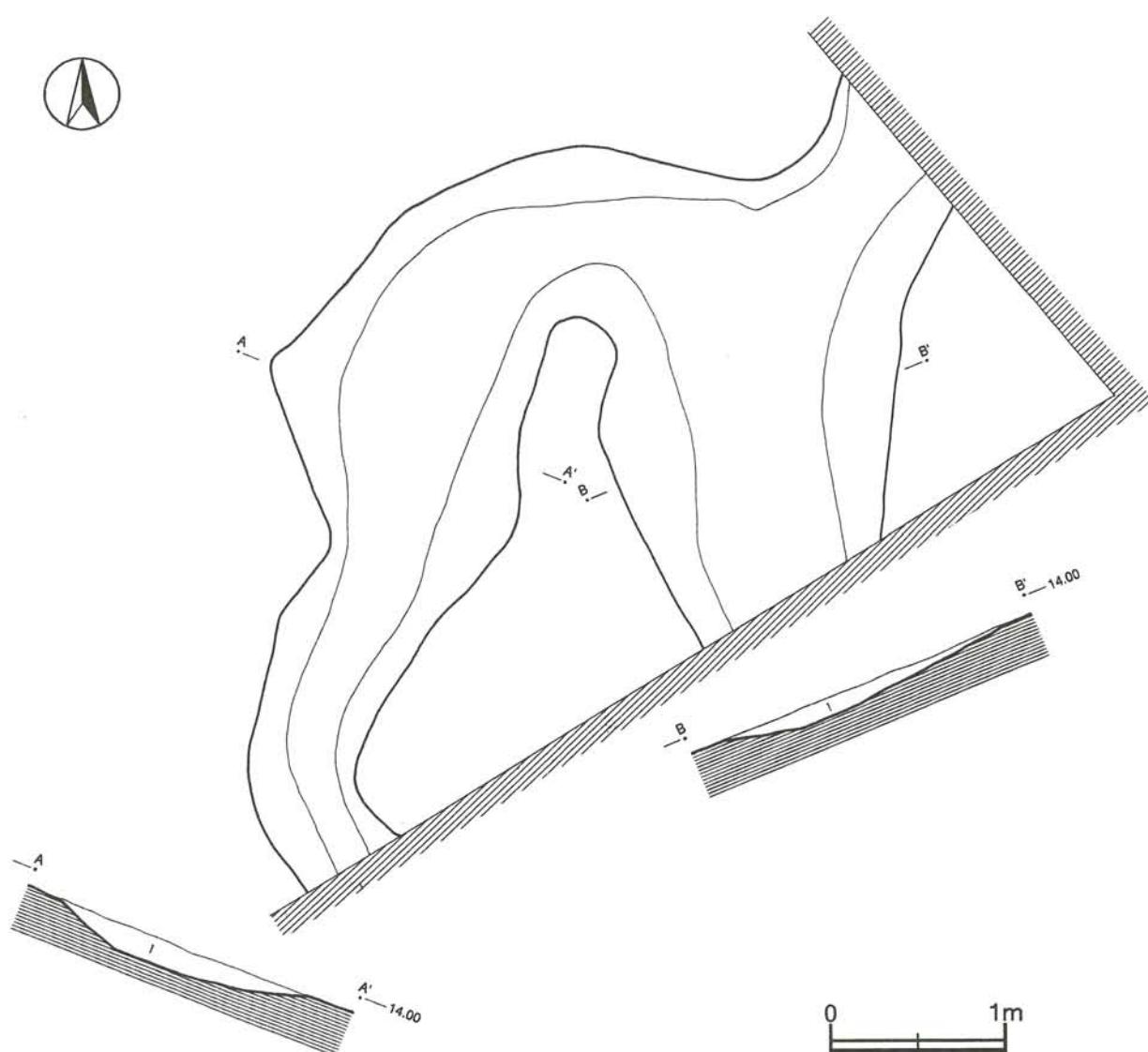
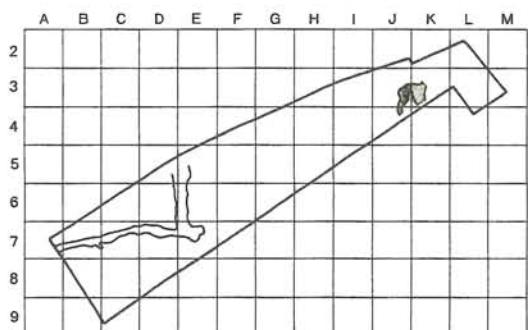
3（遺物No5602.1）は土師器の甕で、口径は20.0cm、器高は20.4cmある。丸味のある底部から球形状に立ち上がり、最大径は胴部中位にある。頸部で「く」の字状を呈し、口縁部は開き気味となっている。

4（遺物No5601）は土師器の甕の口縁部で、推定口径は17.0cmある。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がり、端部は直立するようにやや細く丸めている。

5（遺物No5602.2）は土師器の把手である。断面の形状は扁平な円形を呈している。

6（遺物No5613）も土師器の把手である。断面は角状を呈する。上面は比較的大きく窪んでいる。

7（遺物No5609）も土師器の把手である。断面は扁平な円形を呈すると思われる。接合面にヘラの刺突痕が残っている。

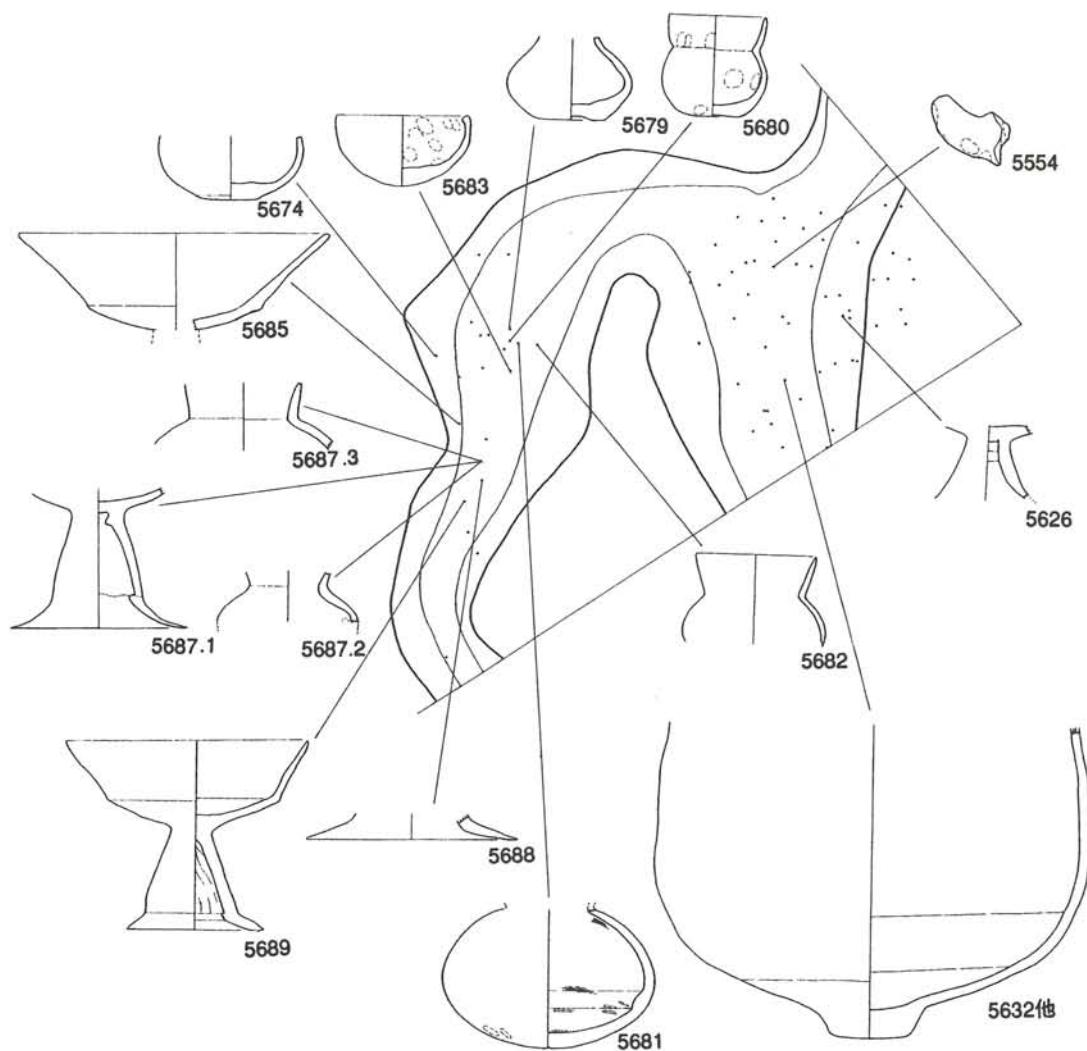


図IV-2-77 第12号溝の平面および断面図

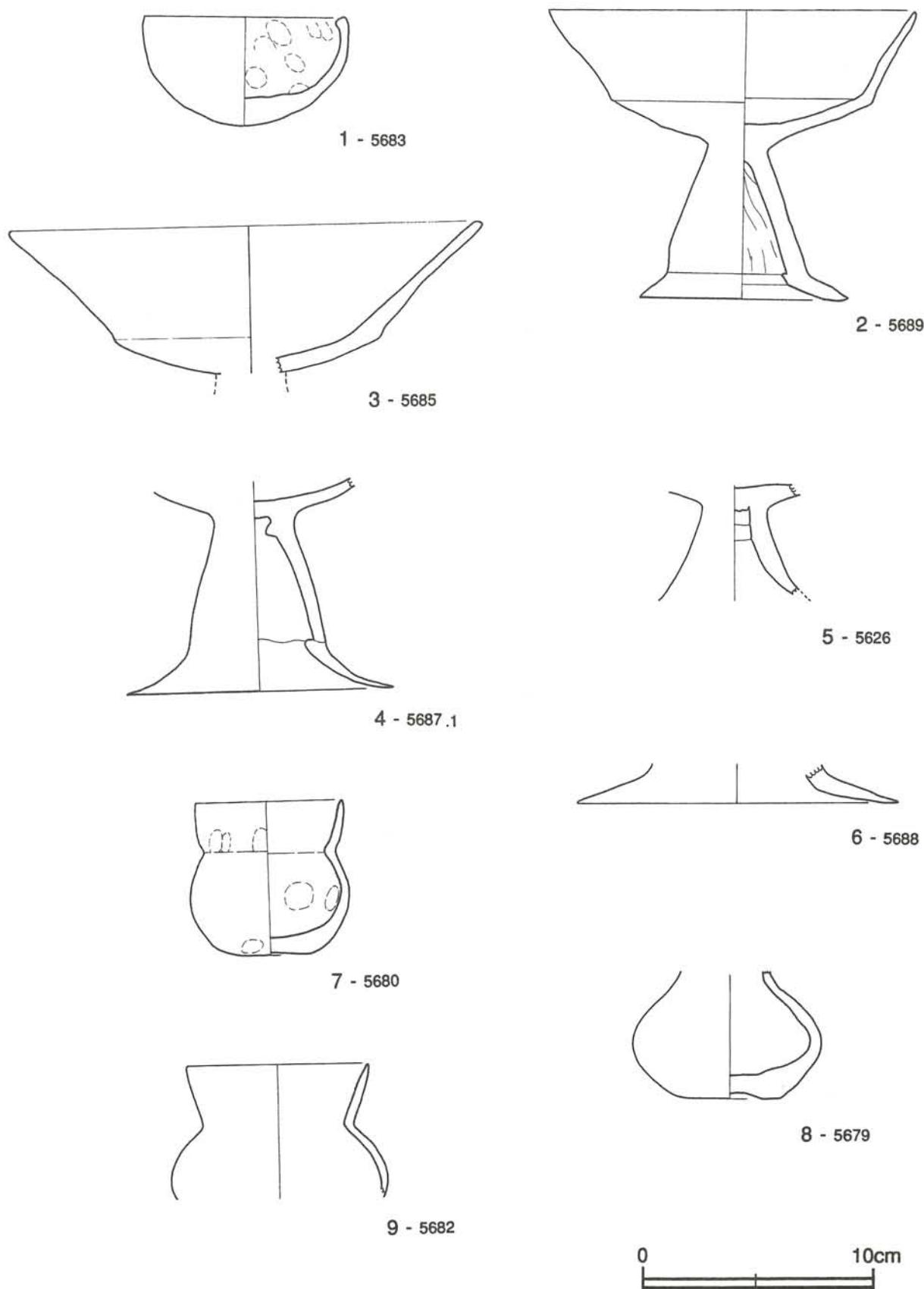
②第12号溝

溝の状況と弥生土器については第IV章第1節で述べてあるので、ここでは同じ第12号溝から出土した土師器について述べる。

弥生土器が東側の溝底に流れ込んでいるような状態で壊れて出土しているのに対し、土師器は西側の溝にまとまって比較的良好な状態で出土している。出土した器種は土師器の埴、高坏、小型壺など祭祀に関連する土器がセットで出土している。



図IV-2-78 第12号溝の遺物分布図



図IV-2-79 第12号溝から出土した土器（1）

1（遺物No5683）は土師器の手捏ねの壺で、推定口径は8.8cm、器高は4.7cmある。底部から半円球状を呈し、口唇部で僅かに肥厚している。底部内面を中心に指頭痕が、また外面に黒斑が認められる。

2（遺物No5689）は土師器の高壺で、口径は15.8cm、器高は12.5cm、裾部径は9.0cmある。壺部下半で稜をつくって折れ曲がり、僅かに外反し、斜めに立ち上がっている。脚部は僅かに膨らみを持って開き、下半は屈曲して大きく広がる、いわゆるエンタシス状となっている。内面にはしづり目が認められる。

3（遺物No5685）は土師器の高壺の壺部で、推定口径は20.3cmある。壺部下半で稜をつくって折れ曲がり、僅かに外反し、斜めに大きく立ち上がっている。

4（遺物No5687.1）は土師器の高壺の脚部で、裾部の推定径は11.7cmある。胴部は僅かに膨らみを持って開き下半は屈曲して大きく広がるエンタシス状となっている。空洞部は高く、内面にしづり目は認められない。

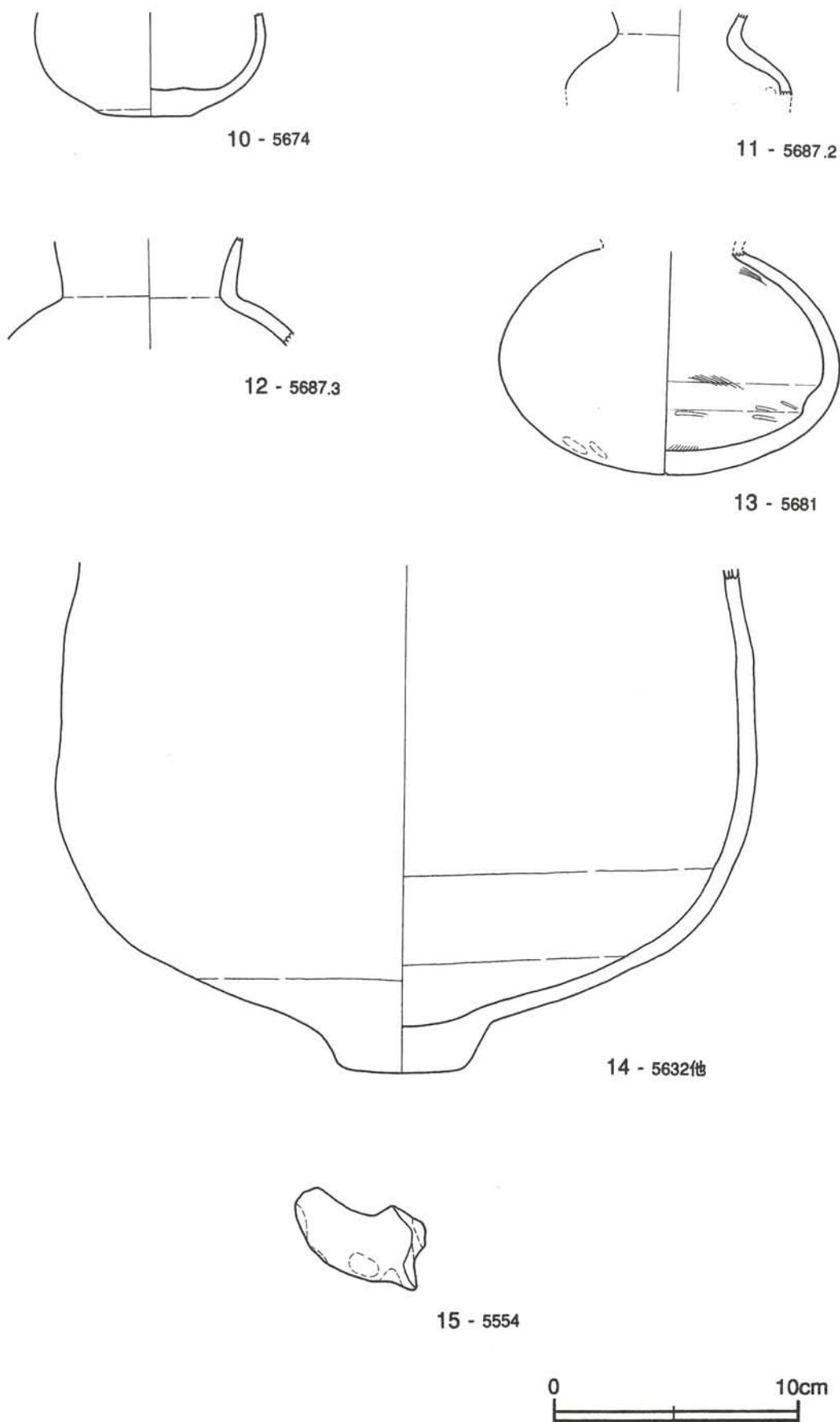
5（遺物No5626）は土師器の高壺の脚部で、短めの脚部は裾部にかけて「ハ」の字状に開いている。空洞部は高い。

6（遺物No5688）は土師器の高壺の脚裾部で、裾部の推定径は14.0cmある。裾部を外に大きく引き出している。

7（遺物No5680）は土師器の小型の壺で、口径は6.4cm、器高は6.7cm、底径は3.1cm、胴部の最大径は7.0cmある。胴部半ばに最大径を持つ球形で、口縁部は逆「ハ」の字状に開いている。内外面に指頭による調整痕が認められる。また胴部下半に黒斑がある。

8（遺物No5679）は土師器の小型の壺で口縁部を欠いている。底径は4.2cm、胴部最大径は8.2cmある。胴部半ばに最大径を持つ球形で、底部の外面は指頭による調整によってあげ底状となっている。

9（遺物No5682）は土師器の小型の壺の口縁部から胴部上半で、推定口径は7.8cm、最大径は9.4cmある。胴部半ばに最大径を持つ球形で、口縁部は逆「ハ」の字状に開いて立ち上がっている。



図IV-2-80 第12号溝から出土した土器（2）

10（遺物No5674）は土師器の小型の壺の底部で、底径は4.0cm前後、推定最大径は9.4cmある。底部は厚みを持たせた平底を呈し、胴部は球形状と思われる。底部の内面に指頭痕が認められる。

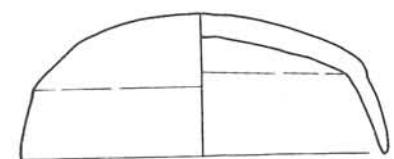
11（遺物No5687.2）は土師器の小型の壺の頸部から胴部上半で、胴部の最大径は9.5cm前後ある。胴部半ばに最大径を持つ球形を呈すると思われる。胴部の内面に指頭痕が認められる。

12（遺物No5687.3）は土師器の小型の壺の頸部で、頸部の推定径は7.0cmある。口縁部はやや直線的にやや外に開き、胴部は球形を呈すると思われる。

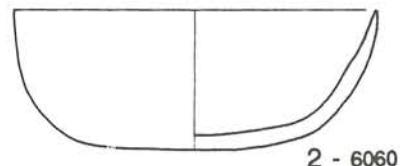
13（遺物No5681）は土師器の小型の壺で口縁部を欠いている。胴部の半ばに最大径を持つ球形を呈しており、胴部の下半外面には指頭痕、内面はハケメ調整が施されている。

14（遺物No5632他）は土師器の甕で、高台状の底径は5.7cm、胴部の推定最大径は28.5cm前後と大型である。丸味を帯びた底部から球形状を呈し、底部の外面は凸状の高台状となる。内外面に輪積み痕が認められる。

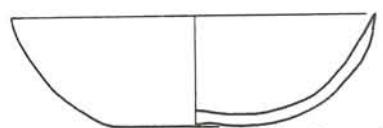
15（遺物No5554）は土師器の甕の把手で、形状は角状である。



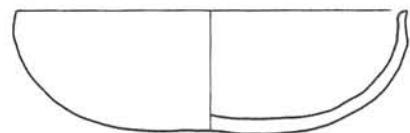
1 - 6059



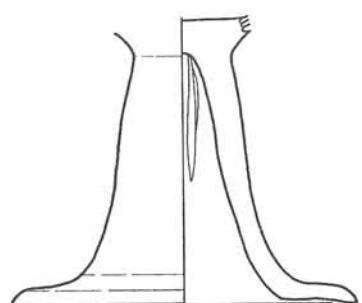
2 - 6060



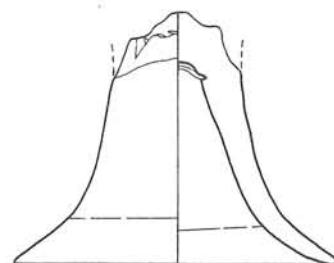
3 - 6061



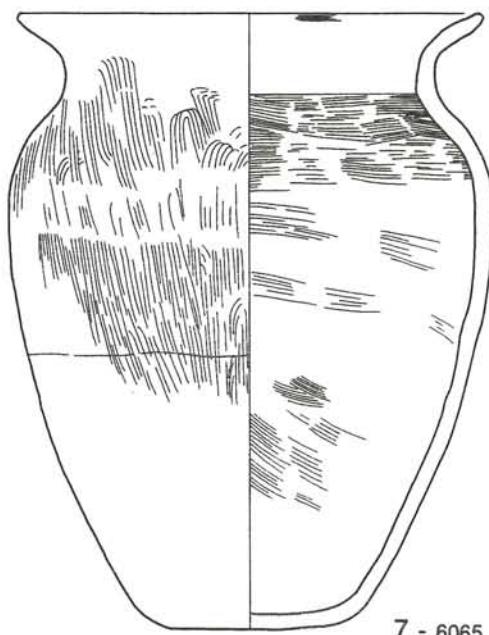
4 - 6062



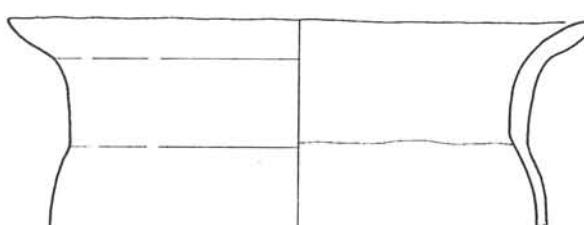
5 - 6063



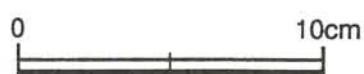
6 - 6064



7 - 6065



8 - 6066



図IV-2-81 第8号溝から出土した土師器（1）

③第8号溝から出土した古墳時代の遺物

第8号溝は旧河川と思われ、弥生土器と土師器が混ざった状態で出土している。遺構の状況と弥生土器については第IV章第1節すでに述べてあるので、ここでは同じ第8号溝から出土した土師器について述べることとする。

1（遺物No6059）は土師器の模倣壺の蓋で、口径は12.0cm、器高は4.7cmある。全体に半円球を呈し、僅かな稜を設けている。

2（遺物No6060）は土師器の壺で、口径は12.0cm、器高は4.5cmある。平底気味の底部から緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は直立している。

3（遺物No6061）は土師器の壺で、推定口径は12.0cm、器高は3.5cmある。やや丸味を帯びた底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は直立気味になり端部を尖らせている。

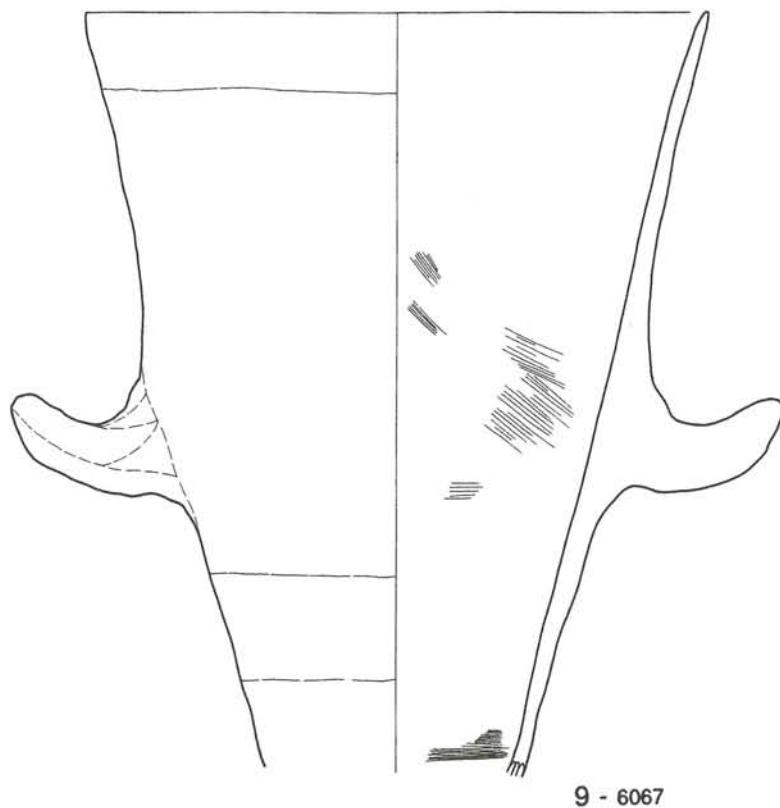
4（遺物No6062）は土師器の壺で、推定口径は12.8cm、推定器高は4.0cmある。やや丸味を帯びた底部から内彎して立ち上がり、口縁部は直立している。

5（遺物No6063）は土師器の高壺の脚部で、裾部径は11.4cm、残存部の器高は9.4cmある。長脚で直線的に下り、裾部で大きく外へ引き出している。空洞部は高く、ヘラ削りの痕が見られる。

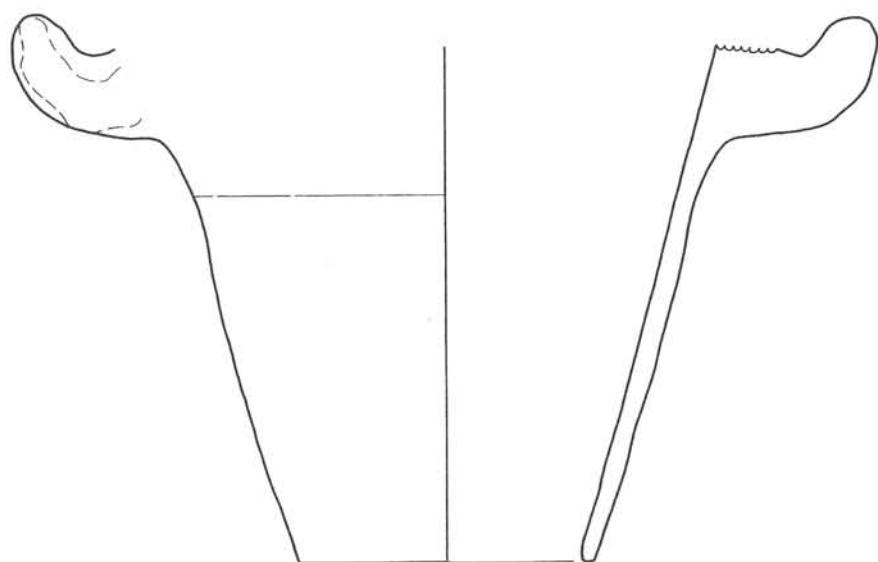
6（遺物No6064）は土師器の高壺の脚部で、裾部の推定径は10.8cmある。直線的に下り裾部で「ハ」の字状に開いている。壺部との接合部には籠状施具による刺突が見られ接合時の方法を読みとることができる。

7（遺物No6065）は土師器の甕で、推定口径は15.6cm、器高は20.2cm、底径は6.0cmある。平底の底部からほぼ直線的に立ち上がり、最大径が肩部にある直胴型である。頸部から口縁部は「コ」の字状を呈している。胴部の中位に輪積み痕や指頭痕が認められる。外面は縦位のハケメ、内面は横位・斜位の細いハケメが施されている。

8（遺物No6066）は土師器の甕の口縁部で、推定口径は19.0cmある。頸部から口縁部は「コ」の字状を呈している。口縁部に最大径を有する直胴型と思われる。胴部の器壁は0.3～0.4cmと薄い。外面に僅かにススが付着している。



9 - 6067



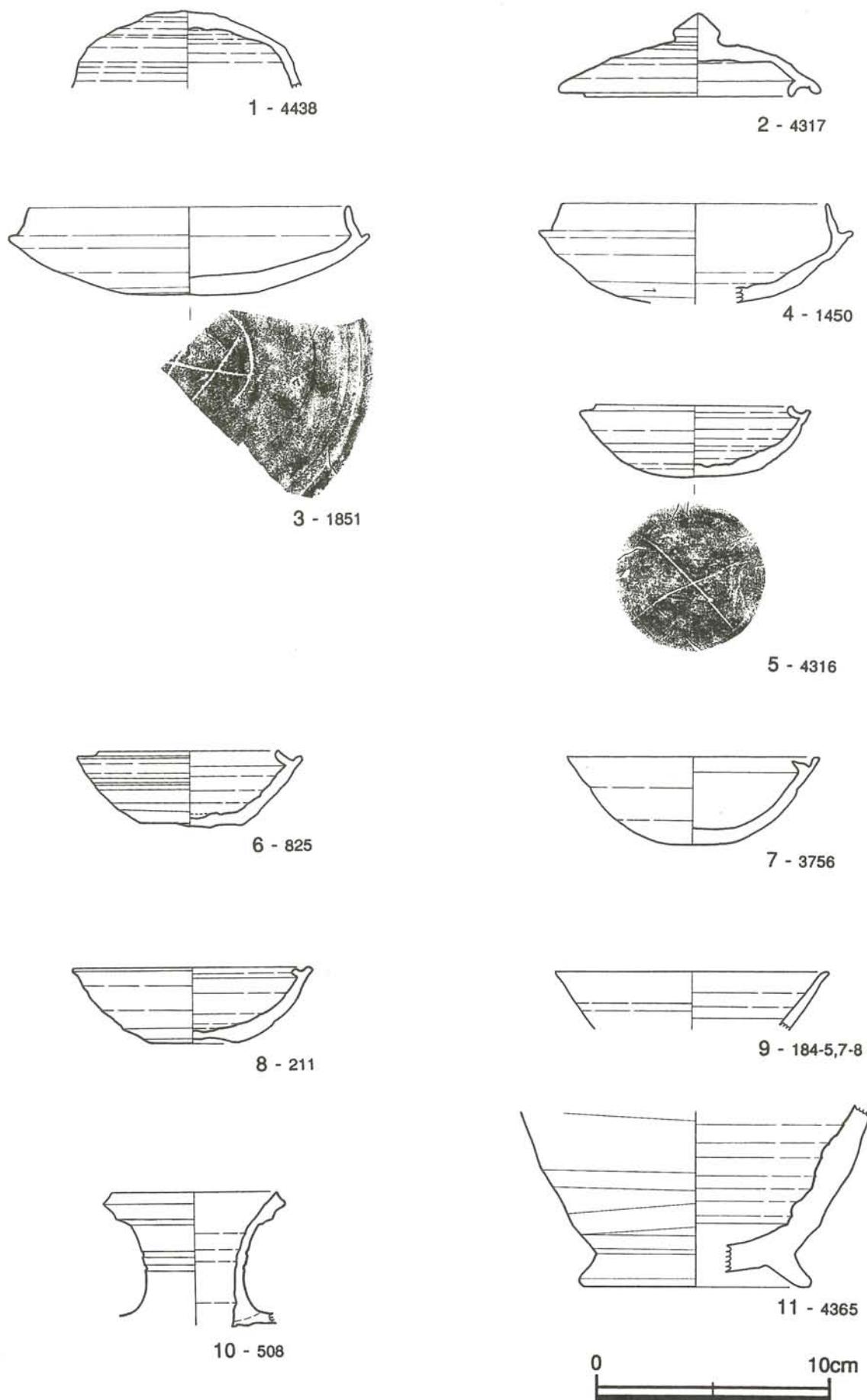
10 - 6068



図IV-2-82 第8号溝から出土した土師器（2）

9（遺物No6067）は土師器の甌で、推定口径は20.4cm、残存する器高は25.0cmある。直線的に口縁部まで立ち上がる直胴型で、把手は断面が台形状である。内面は斜位・横位のハケメ調整が施されている。外面には輪積み痕が見られる。

10（遺物No6068）は土師器の甌の胴部下半で、推定底径は9.6cmある。底部から直線的に立ち上がる直胴型で、把手は断面が台形状である。胴部の外面に輪積み痕が認められる。また底部の内面にススが付着している。



図IV-2-83 グリッドから出土した土器（1）

(4) 遺構以外から出土した遺物

①各グリッドから出土した遺物

遺構以外で出土した須恵器と土師器のうち、特徴のあるものをここに示す。

1 (遺物No4438) はG-5グリッドから出土した須恵器の壺蓋である。天井部から丸味を持ち口縁部との境に僅かに沈線化した稜がある。天井部の外面は1/2ほどにヘラ削りが施されて、内面は渦巻き状のヘラ削りの後にナデ調整が施されている。

2 (遺物No4317) はB-7グリッドから出土した須恵器の壺蓋で宝珠状のつまみが付いている。最大径は11.3cm、口径は8.8cm、器高は3.5cm、つまみの径は2.0cmある。天井部を弓張り状にし、渦巻き状に左回転のヘラ削り調整を施している。かえり付である。

3 (遺物No1851) はH-5グリッドから出土した須恵器の壺身で、推定口径は13.8cm、推定最大径は15.5cm、器高は3.8cmある。弓張り状の底部から口縁部は直立気味に立ち上がり、端部を丸めている。外面は1/2がヘラ削りにナデ調整が施されている。ヘラ記号「サ」がみられる。

4 (遺物No1450) はK-3グリッドから出土した須恵器の壺身である。推定口径は11.5cm、推定最大径は13.5cmある。弓張り状の底部から口縁部は僅かに内彎気味となり、端部を丸めている。外面は1/2がヘラ削りにナデ調整が施されている。ノタ目が認められる。

5 (遺物No4316) はB-7グリッドから出土した須恵器の壺身で、最大径は10.0cm、口径は8.5cm、器高は3.1cmある。底部はやや丸味を帯びた弓張り状となり、口縁部は内傾して立ち上がっているが受部よりほんの少し高いだけである。端部は丸めている。ヘラ記号「×」がみられる。

6 (遺物No825) はB-7グリッドから出土した須恵器の壺身で、最大径は9.7cm、口径は7.7cm、器高は3.2cmある。底部は弓張り状となり、口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部は丸めている。渦巻き状に左回転のヘラ削り調整を施している。

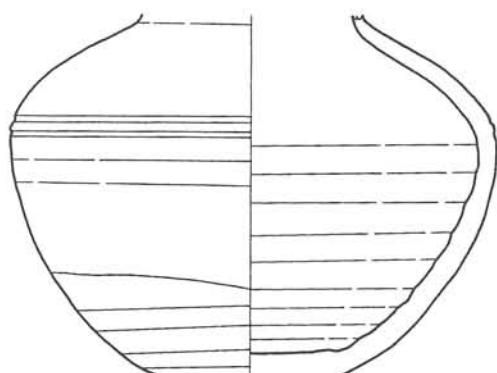
7 (遺物No3756) はF-5グリッドから出土した須恵器の壺身で、口径は8.5cm、最大径は11.0cm、器高は3.8cmある。底部がやや丸味を帯びた弓張り状を呈し、口縁部は内傾して立ち上がっているが受部より低くなっている。

8 (遺物No211) はB-9グリッドから出土した須恵器の壺身で、最大径は10.4cm、口径は8.6cm、器高は4.0cmある。底部は弓張り状となり、口縁部は内傾しているが、受部より低くなっている。端部は丸めている。ヘラ記号「-」が見られる。

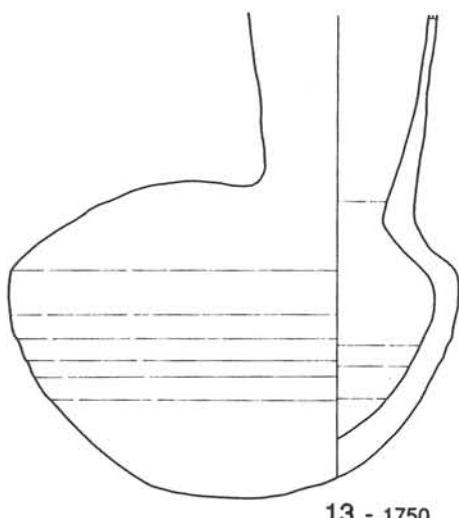
9 (遺物No184+185+187+188) はE-8グリッドから出土した須恵器の壺身で、推定口径は11.8cmある。胴部から口縁部は直線的に開きながら立ち上がっている。端部は僅かに外反気味につまんで細く丸めている。ミズビキ成形で丁寧な作りとなっている。

10 (遺物No508) はD-8グリッドから出土した須恵器の壺の口縁部で、口径は7.0cm、現存する器高は5.7cmある。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、端部は三角形状の断面となっている。頸部には横位に2条の沈線が施されている。内外面に自然釉が掛かっている。

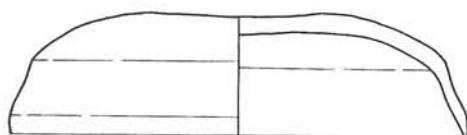
11 (遺物No4365) はD-6グリッドから出土した須恵器の壺の底部で、高台部の推定径は9.7cmある。「ハ」の字状に突き出るように高台が付いており、胴部はほぼ直線的にやや開いて立ち上がっている。器壁は0.8~1.0cmとやや厚い。胴部の外面はヘラ削りがやや粗く施されている。内外面に自然釉が見られる。



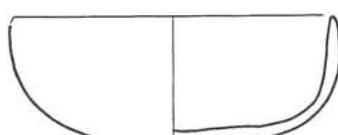
12 - 1505



13 - 1750



14 - 3576



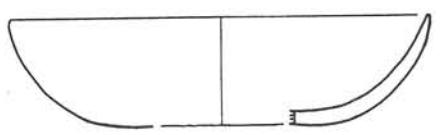
15 - 4313



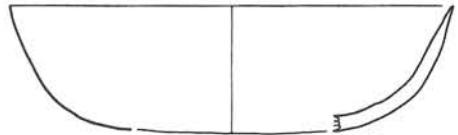
16 - 1594



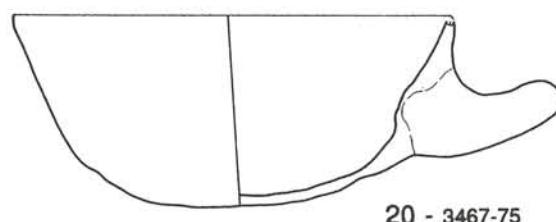
17 - 3109



18 - 3107



19 - 3479



20 - 3467-75



図IV-2-84 グリッドから出土した土器（2）

12（遺物No1505）はK-3グリッドから出土した須恵器の短頸壺で、最大径は16.0cmある。平底の底部から内彎気味に開きながら立ち上がり、肩部から頸部にかけて内傾し「く」の字気味に屈曲している。底部の外面から胴部の1/3までヘラ削り、他はナデ調整が施されている。肩部に2条の沈線紋が施されている。

13（遺物No1750）はI-4グリッドから出土した須恵器の平瓶で、胴部の最大径は14.8cm、残存部の器高は16.0cmある。底部は丸味を帯びて緩やかに内彎して立ち上がり、肩部は緩やかに丸味を帯びて頸部から直線的に直立気味に立ち上がっている。肩部に自然釉が見られる。

14（遺物No3576）はC-8グリッドから出土した土師器の模倣壺の蓋で、推定口径は15.0cm、器高は4.2cmある。天井部は弓張り状を呈し緩やかに湾曲しながら口縁部に下り、弱い稜を有している。

15（遺物No4313）はB-7グリッドから出土した土師器の壺で、口径は10.5cm、器高は4.3cmある。やや丸味のある底部からほぼ直立気味に口縁部が立ち上がっている。

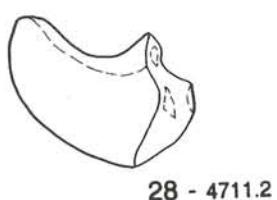
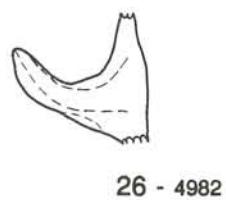
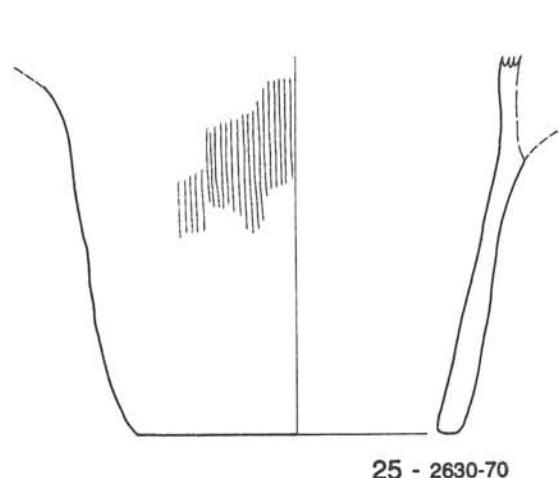
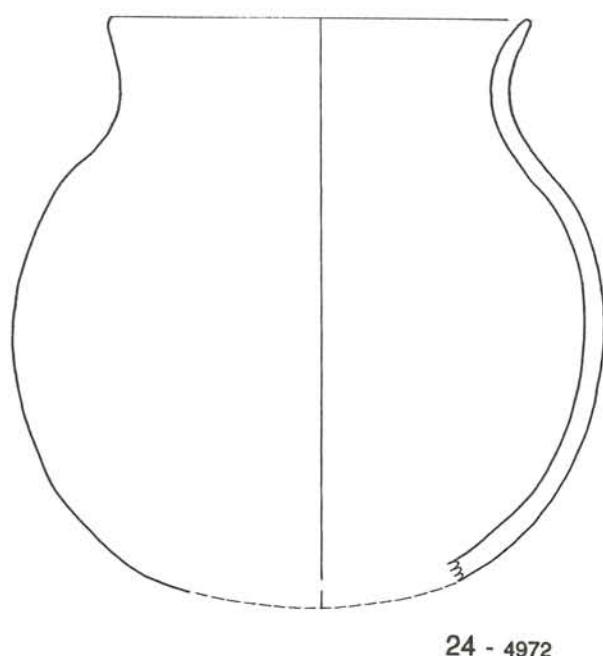
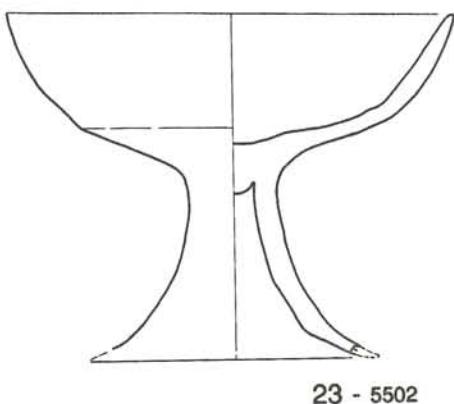
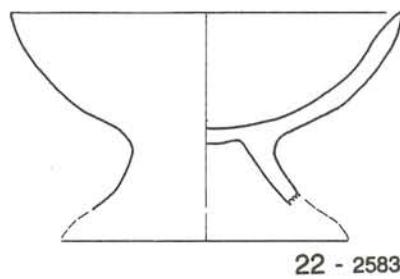
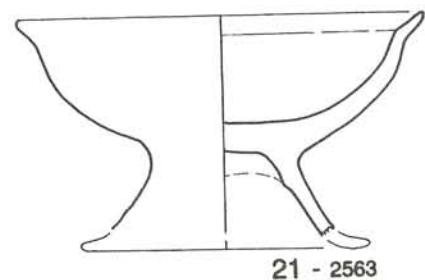
16（遺物No1594）はK-3グリッドから出土した土師器の壺で、推定口径は12.2cm、器高は4.2cmある。やや丸味を帯びた底部から緩やかに湾曲し口縁部で直立している。

17（遺物No3109）はE-7グリッドから出土した土師器の壺で、推定口径は13.0cm、器高は3.9cmある。平底気味の底部から緩やかに湾曲して開きながら口縁部となっている。

18（遺物No3107）はE-7グリッドから出土した土師器の壺で、推定口径は14.0cm、器高は3.7cmある。平底気味の底部から緩やかに湾曲した後に口縁部で直立気味となっている。

19（遺物No3479）はD-7グリッドから出土した土師器の壺で、推定口径は14.6cmある。緩やかに湾曲した後に口縁部で直立気味となり、箱形に近い形状を呈している。

20（遺物No3467～3475）はH-5グリッドから出土した土師器の把手付鉢で、推定口径は14.5cm、器高は6.3cmある。丸味を帯びた底部から胴部下半に僅かに屈曲部を有して直線的に開いて立ち上がっている。把手は扁平な橢円形の断面を呈している。



図IV-2-85 グリッドから出土した土器（3）

21（遺物No2563）はK-3グリッドから出土した土師器の模倣高坏で、推定口径は13.4cm、推定器高は8.0cmある。坏部は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁部を外反させた碗型を呈している。脚部は坏部よりも短く、「ハ」の字状に裾部が開いている。

22（遺物No2583）はJ-3グリッドから出土した土師器の模倣高坏で、推定口径は13.0cm、推定器高は7.0cm、裾部径は9.0cmある。坏部はやや丸味を帯びた底部から緩やかに湾曲して口縁部で直立している。脚部は坏部から直接開きながら裾部で「ハ」の字状を呈している。

23（遺物No5502）はK-4グリッドから出土した土師器の高坏で、口径は14.7cm、推定器高は11.0cm前後、裾部の推定径は10.0cm前後ある。坏部は稜を有し、口縁部はやや内彎気味に立ち上がっている。脚部は直線的に開き、裾部は「ハ」の字状に引き出している。空洞部が高く、接合部は円球状に突起している。外面はミガキ調整が施されていたと思われる。また、外面には黒斑が見られる。

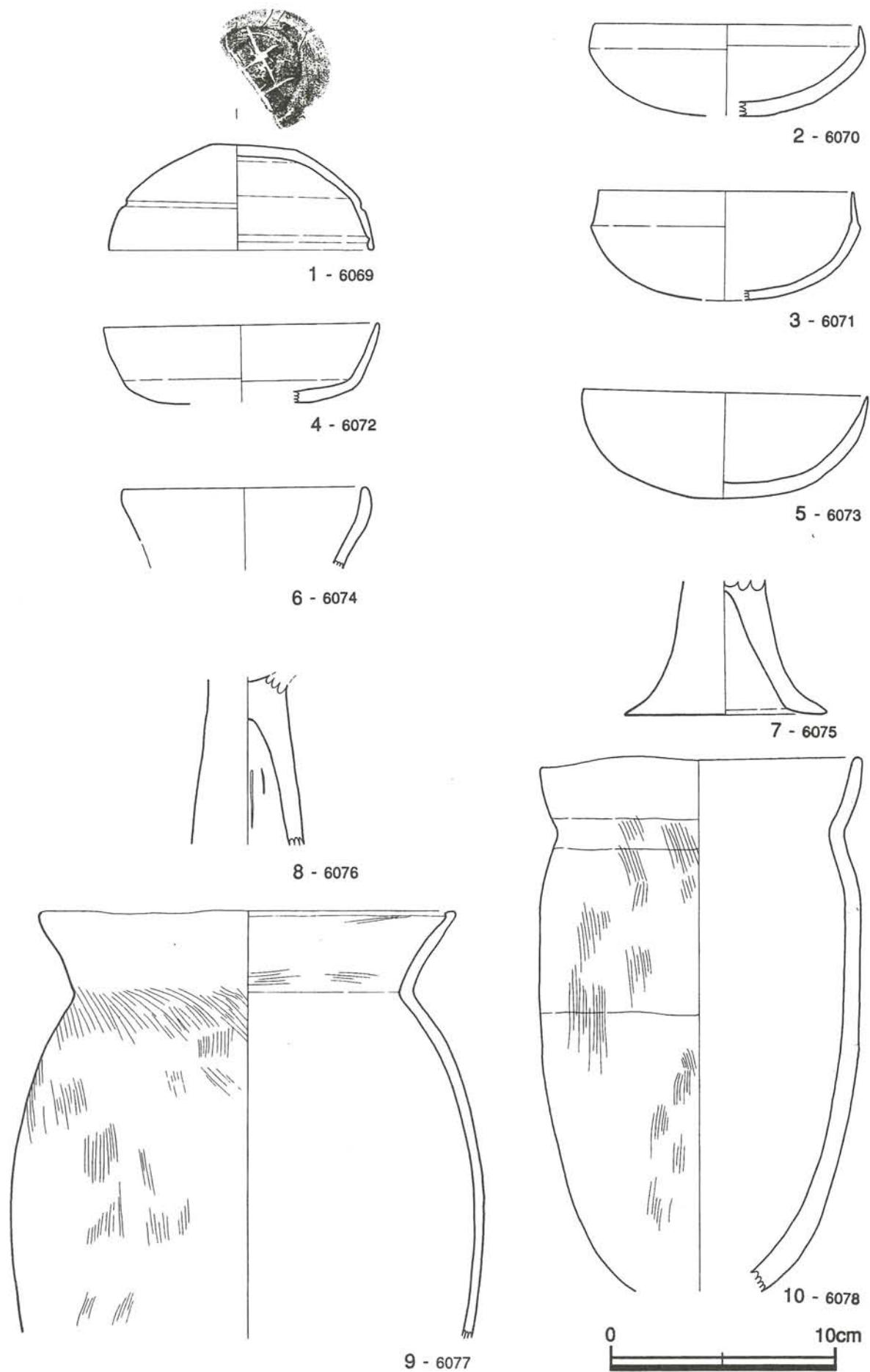
24（遺物No4972）はB-8グリッドから出土した土師器の壺で、口径は13.3cm、器高は19.4cmある。最大径は胴部中位にあり、丸味のある底部から球胴形を呈し、頸部で緩やかに外反して立ち上がっている。

25（遺物No2630～2670）はH-4グリッドから出土した土師器の甌で、底径は10.5cmで、底部から直線的にやや開いて立ち上がる直胴型を呈している。外面は縦位のハケメ、内面は横位・斜位のハケメが施される。把手が左右で異なる位置(?)に付いている。

26（遺物No4982）はB-8グリッドから出土した土師器の把手である。断面は台形状を呈し、比較的小型である。先端が斜め上方へ引き出されている。

27（遺物No4711.1）はC-9グリッドから出土した土師器の把手である。断面は台形状を呈し、比較的小型である。先端が斜め上方へ引き出されている。

28（遺物No4711.2）はC-9グリッドから出土した土師器の把手である。断面は台形状を呈している。



図IV-2-86 排水溝から出土した土器（1）

②排水溝から出土した遺物

調査用の排水溝から出土した遺物のうち特徴のあるものを示す。

1（遺物No6069）は須恵器の坏蓋で、推定口径は12.0cm前後、器高は4.7cmある。全体が半円球状を呈し、天井部と口縁部の境に沈線が施され、口縁部は垂直に下りている。端部の内面にも沈線が施されている。ヘラ記号「井」が見られる。

2（遺物No6070）は土師器の模倣坏で、推定口径は12.0cm、器高は4.0cmある。弓張り状の底部から稜を有し、口縁部で僅かに内傾している。

3（遺物No6071）は土師器の模倣坏で、推定口径は11.4cm、器高は5.0cmある。やや丸味のある弓張り状の底部から稜を有し、口縁部で僅かに内傾している。

4（遺物No6072）は土師器の坏で、推定口径は12.4cm、器高は3.8cmある。平底の底部から僅かな稜を有し、口縁部は直線的にやや開いている。

5（遺物No6073）は土師器の坏で、推定口径は12.8cm、器高は4.8cmある。半円球状に底部から口縁部まで立ち上がり、端部は細く尖っている。外面は磨きが施されている。

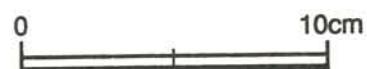
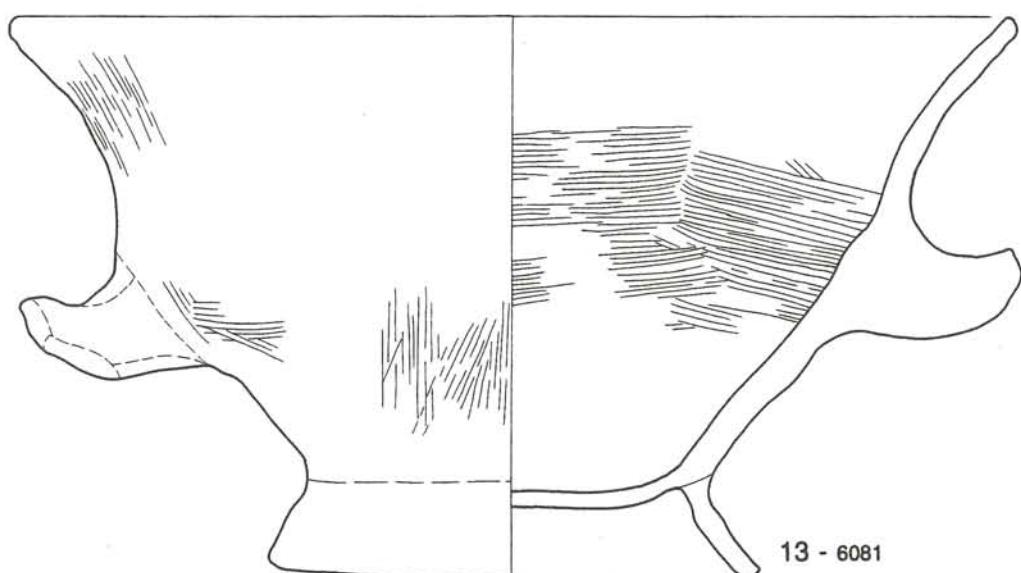
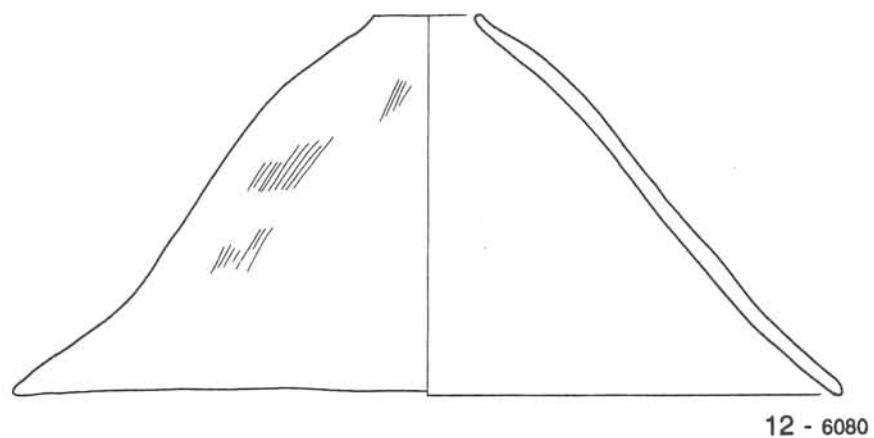
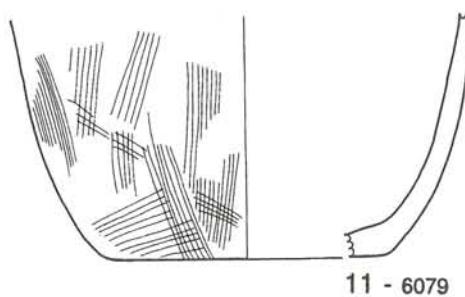
6（遺物No6074）は土師器の坏の口縁部と思われ、口径は10.3cmある。直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で直立から内傾気味となっている。

7（遺物No6075）は土師器の高坏の脚部で、裾部の推定径は9.0cm、残存部の器高は6.0cmある。直線的にやや開きながら裾部で「ハ」の字状を呈し、外に引き出している。空洞部は高い。

8（遺物No6076）も土師器の高坏の脚部で、接合部径は3.5cmある。直線的に下りて長脚となる。空洞部は高くヘラ削り痕が見られる。

9（遺物No6077）は土師器の甕で、口径は18.6cmある。胴部は緩やかに内彎して、頸部が「く」の字状を呈し、直線的に開いて立ち上がっている。口唇部は僅かに肥厚して内側は沈線化している。外面は縦位・斜位のハケメ、内面は横位のハケメが施されている。

10（遺物No6078）は土師器の甕で、口径は10.5cmある。最大径は口縁部にあり底部は丸底に近く、ほぼ直線的に立ち上がる直胴型で、頸部で弱い「く」の字状となり口縁部で直立気味となっている。胴部下位の器壁は1.0cmとやや厚い。外面は縦位のやや粗いハケメが施されている。

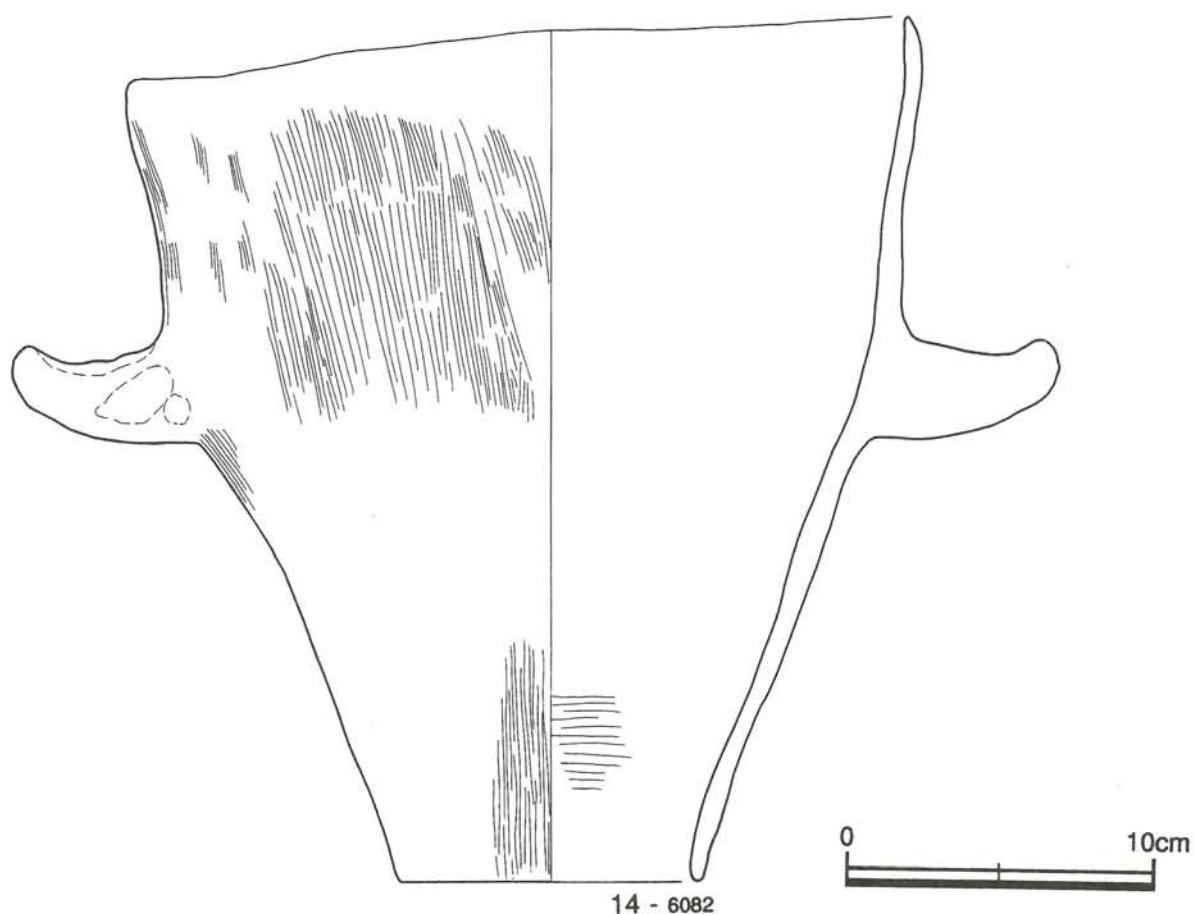


図IV-2-87 排水溝から出土した土器（2）

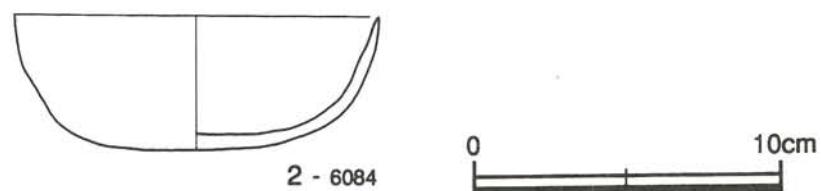
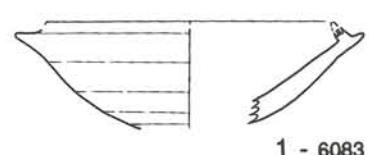
11（遺物No6079）は土師器の甕の底部から胴部下まで、平底の底部からほぼ直線的に立ち上がる直胴型を呈していると思われる。胴部の外面は縦位・斜位のハケメが一部で格子状に施されている。

12（遺物No6080）は土師器の逆鉢型をした蓋と思われる。口径は27.0cm、器高は12.5cm、把手部径は3.5cmある。ほぼ直線的に斜めに「ハ」の字状に開き、口縁部で僅かに外反している。外面は斜位のハケメが施されている。

13（遺物No6081）は土師器の高台把手付鉢(仮称)で、口径は32.7cm、器高は19.0cm、高台径は16.3cmある。丸味を帯びた底部から直線的に逆「ハ」の字状に開いて立ち上がり、口縁部で僅かに肥厚させ端部は外傾している。把手はやや丸味のある角状を呈し、台部は接合部から「ハ」の字に開いている。



図IV-2-88 排水溝から出土した土器（3）



図IV-2-89 テスト・ピットから出土した土器

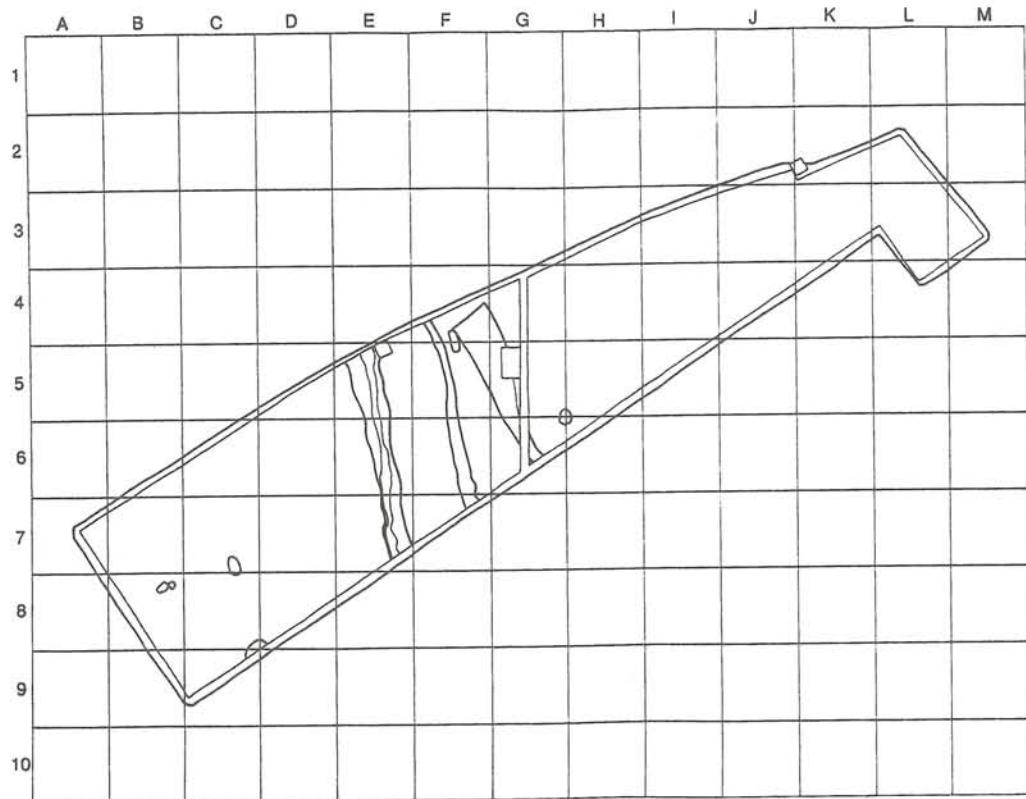
14（遺物No6082）は土師器の甌で、口径は25.5cm、器高は28.4cm、底径は10.0cmある。底部から直線的に立ち上がる直胴型で、口縁部で僅かに内彎気味となり、端部をやや細く尖らせている。把手は角状である。胴部の外面は縦位のハケメ、内面は横位のハケメが施されている。

③テスト・ピットから出土した遺物

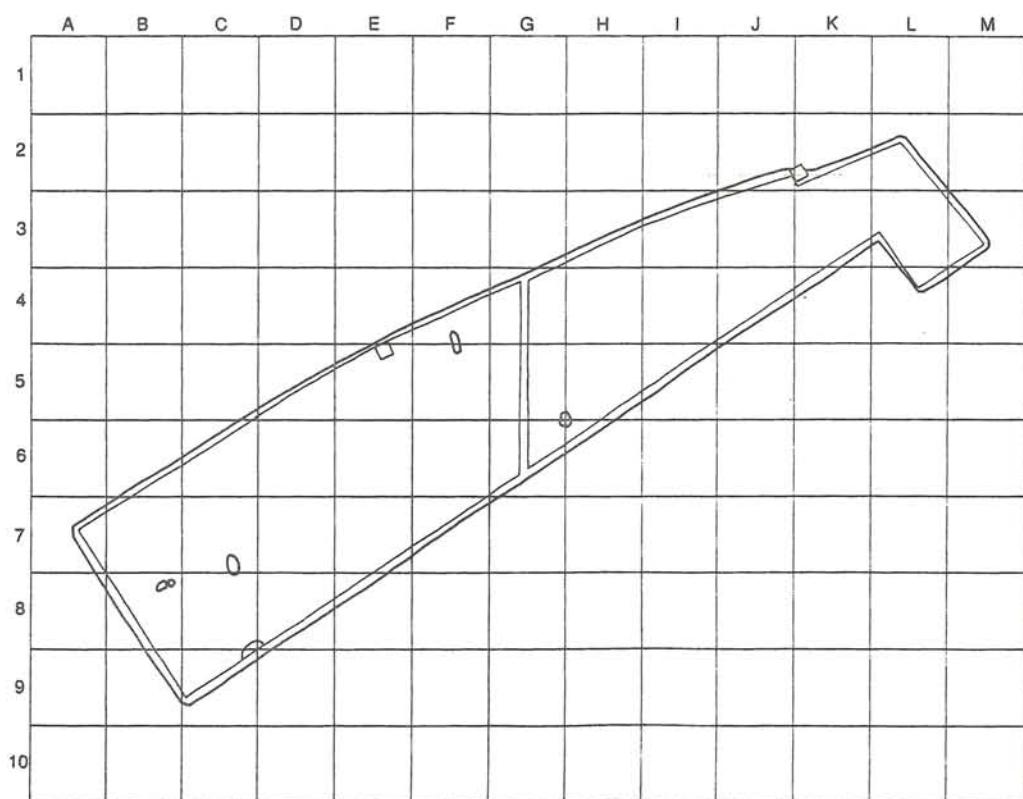
K-4グリッドに層序を確認するために入れたテスト・ピットから出土した遺物のうち、特徴のあるものを示す。

1（遺物No6083）は須恵器の坏身の破片で、推定最大径は11.4cm、推定口径は9.4cmある。弓張り状の底部から短い口縁部へと立ち上がっている。外面のヘラ削りは狭い。内面は回転ナデ調整が施されてる。

2（遺物No6084）は土師器の坏で、推定口径は12.0cm、器高は4.3cmある。やや丸味を帯びた底部から湾曲して立ち上がり、口縁部を直立気味にして端部を尖らせている。底部の外面に指頭痕が認められる。



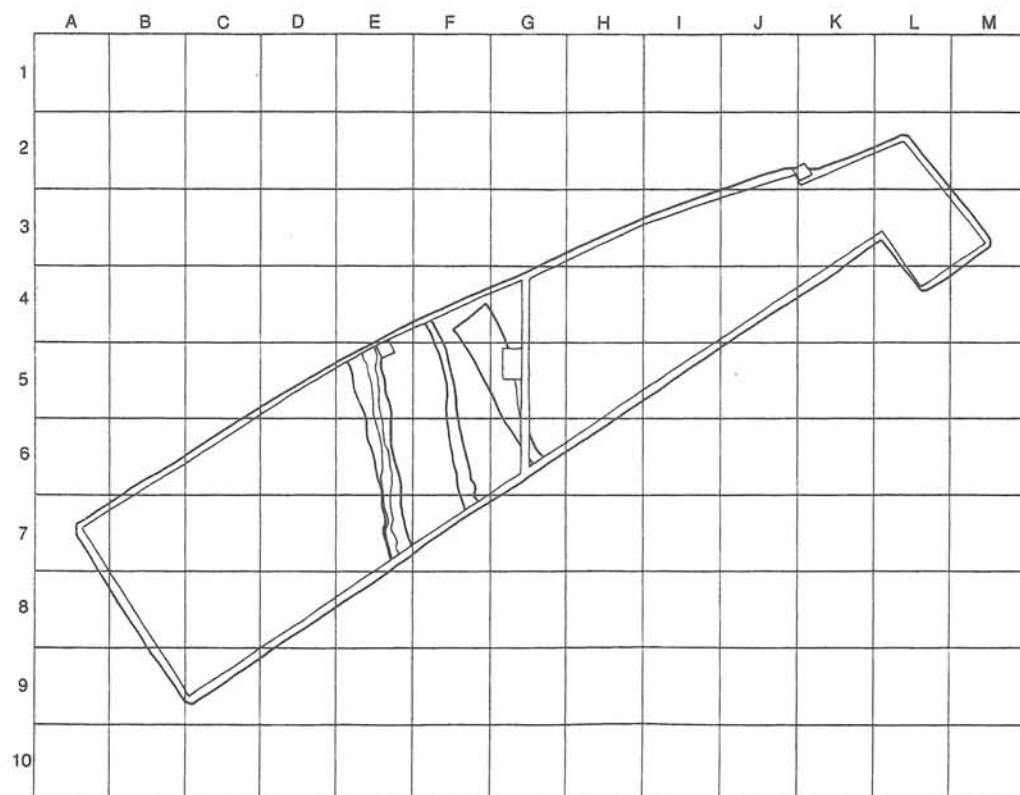
図IV-3-1 奈良・平安時代の遺構分布図（全体）



図IV-3-2 奈良・平安時代の遺構分布図（土坑）

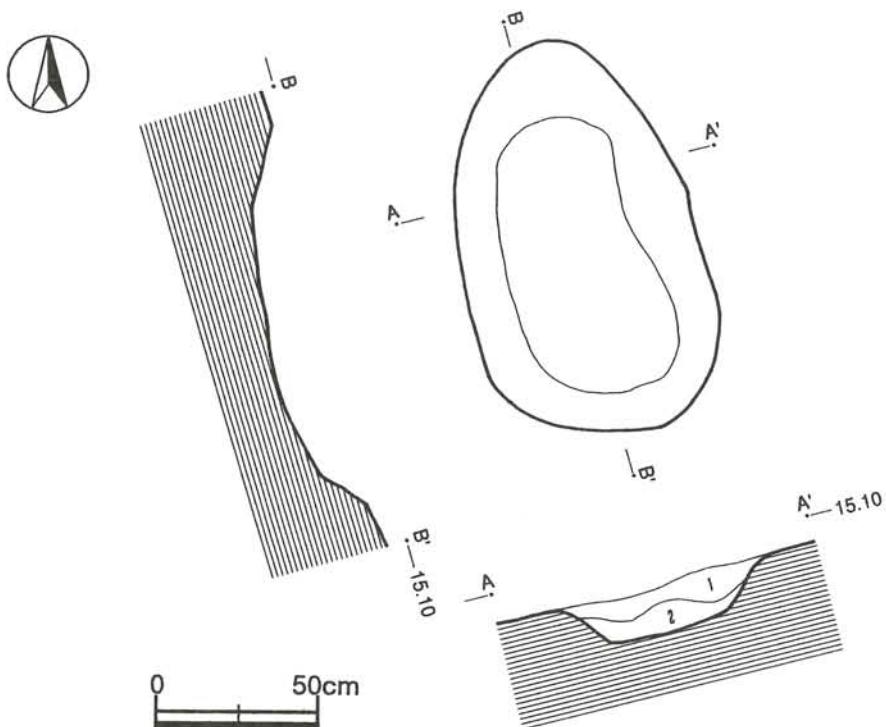
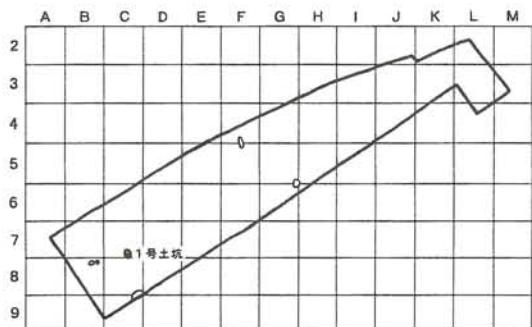
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代に相当する遺構は土坑が6基と溝状遺構が3条ほぼ同じレベルで確認されている。なお、第9号土坑は第2号住居址を掘り込んでおり、第10号溝は第7号住居址を掘り込んでいる。



図IV-3-3 奈良・平安時代の遺構分布図（溝状遺構）

(1) 土坑



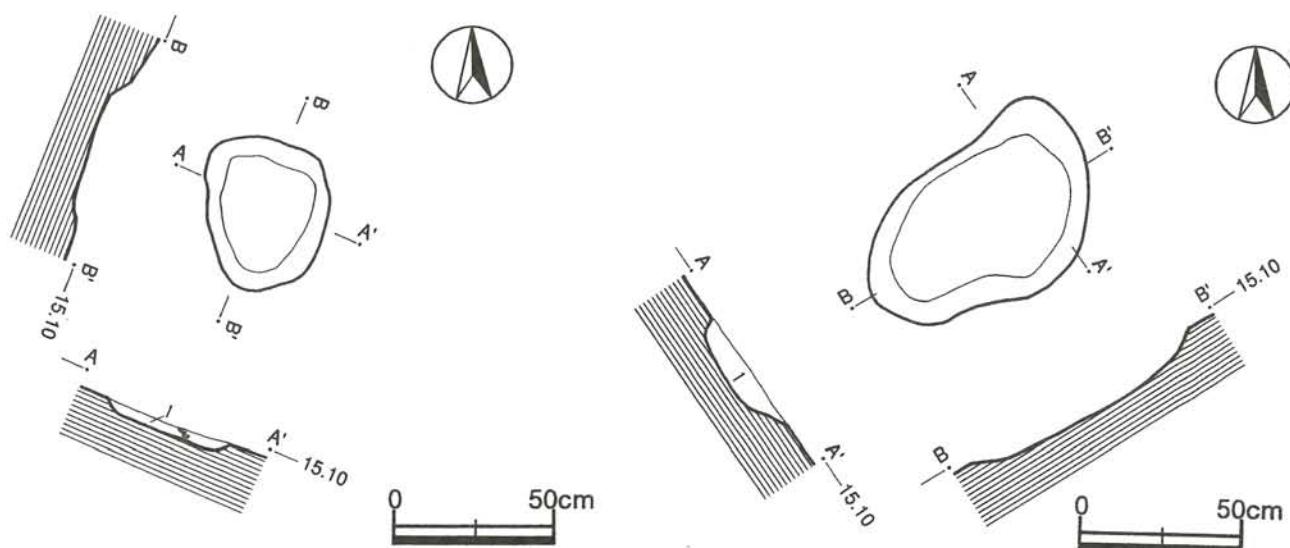
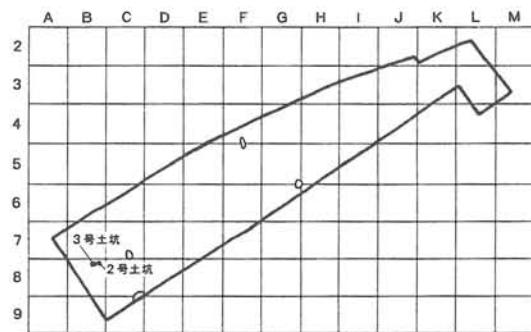
図IV-3-4 第1号土坑の平面および断面図

①第1号土坑

C-7グリッドの標高15.00mに位置し、平面形状は長楕円形で、長径は126.0cm、短径は72.5cm、深さは15.0cmあり、主軸はN-14°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は茶褐色土で粘性は弱く、締まりは強い。第2層は赤茶褐色土で粘性はやや弱く、締まりはやや強い。

遺物は確認されなかった。



図IV-3-5 第2号土坑の平面および断面図 図IV-3-6 第3号土坑の平面および断面図

②第2号土坑

B-8グリッドの標高15.05mに位置し、平面形状は不整な楕円形で、長径は45.8cm、短径は40.0cm、深さは最深部が3.1cmあり、主軸はN-19°-Eを指している。断面形状は皿状を呈しているが、南西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は青赤茶褐色土が1層で、炭化物・焼土を多く含んでいる。粘性は弱く、締まりは強い。

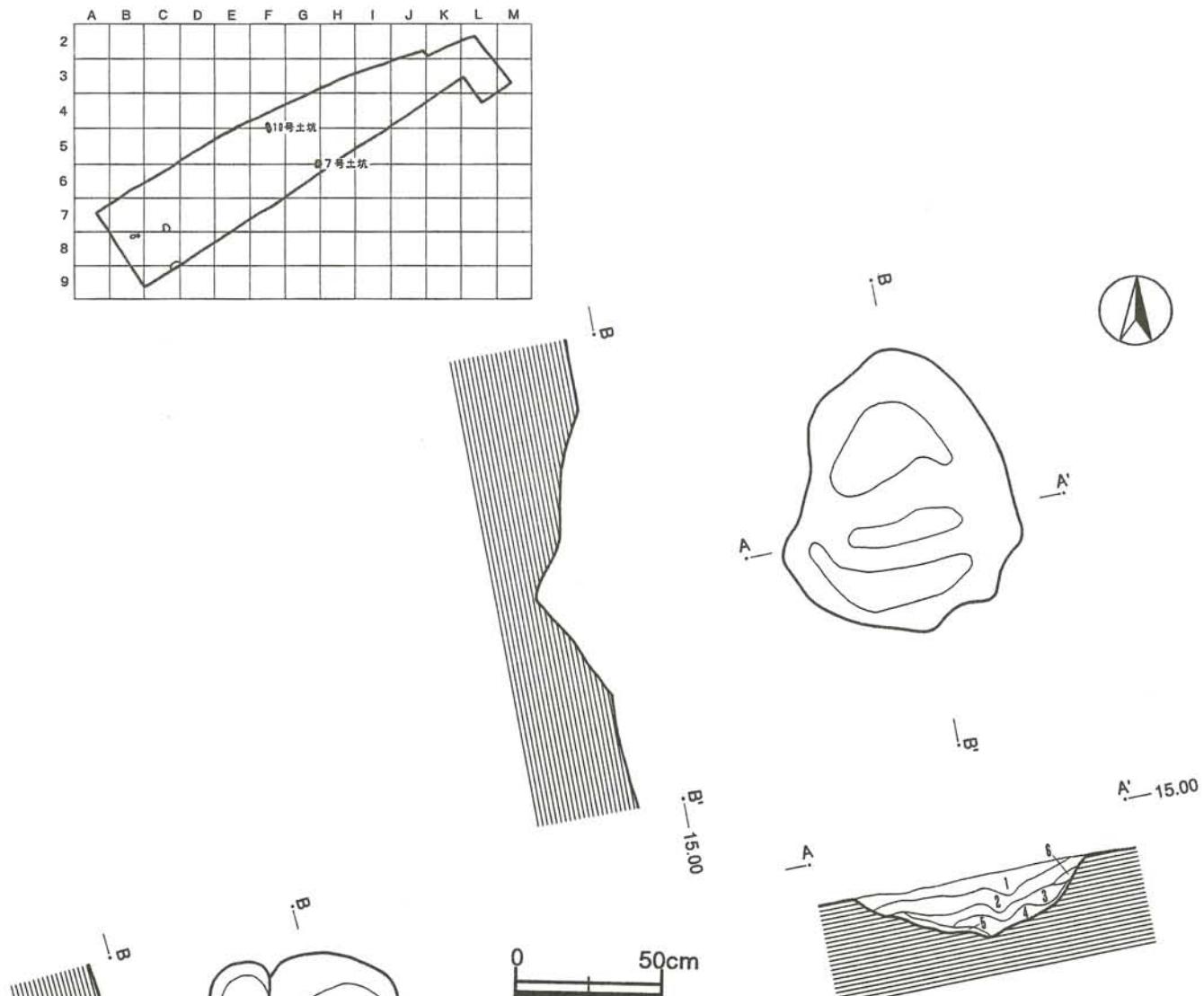
遺物は覆土から土師器の細片が2点出土している。

③第3号土坑

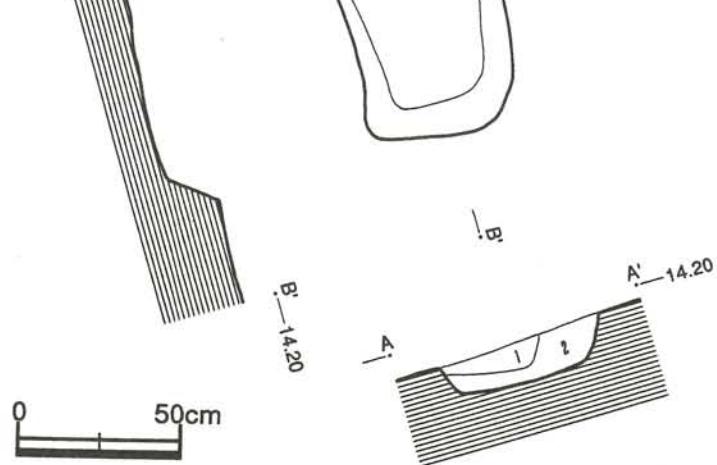
B-8グリッドの標高15.05mに位置し、平面形状は長楕円形で、長径は77.1cm、短径は49.2cm、深さは最深部が7.8cmあり、主軸はN-57°-Eを指している。断面形状は皿状を呈しているが、南西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は青赤茶褐色土が1層で、炭化物・焼土を多く含み、粘性は弱く、締まりは強い。第2号土坑と同じ覆土であるが、第2号土坑より焼土を多く含んでいる。

遺物は土坑の中央部から土師器の細片が4点出土している。



図IV-3-7 第7号土坑の平面および断面図



図IV-3-8 第10号土坑の平面および断面図

④第7号土坑

G-5・6、H-5・6グリッドの標高14.85mに位置し、平面形状は不整な楕円形で、長径は97.0cm、短径は81.1cm、深さは最深部が21.5cmあり、主軸はN-12°-Wを指している。断面形状は上に広く開くV字状を呈している。

覆土は6層に分けられ、第1層は淡黄褐色土で粘性は弱く、締まりはやや強い。第2層は淡黄褐色土で炭化粒を少量含み、粘性は弱く、締まりはやや強い。第3層は黒茶褐色土で、炭化粒・炭化物を多く含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第4層は暗茶褐色土で、炭化粒を少量含み、粘性も締まりもやや強い。第5層は暗茶褐色土で、炭化粒・炭化物を含み、粘性はやや強く、締まりはやや弱い。第6層は赤褐色の焼土で、粘性は弱く、締まりは強い。

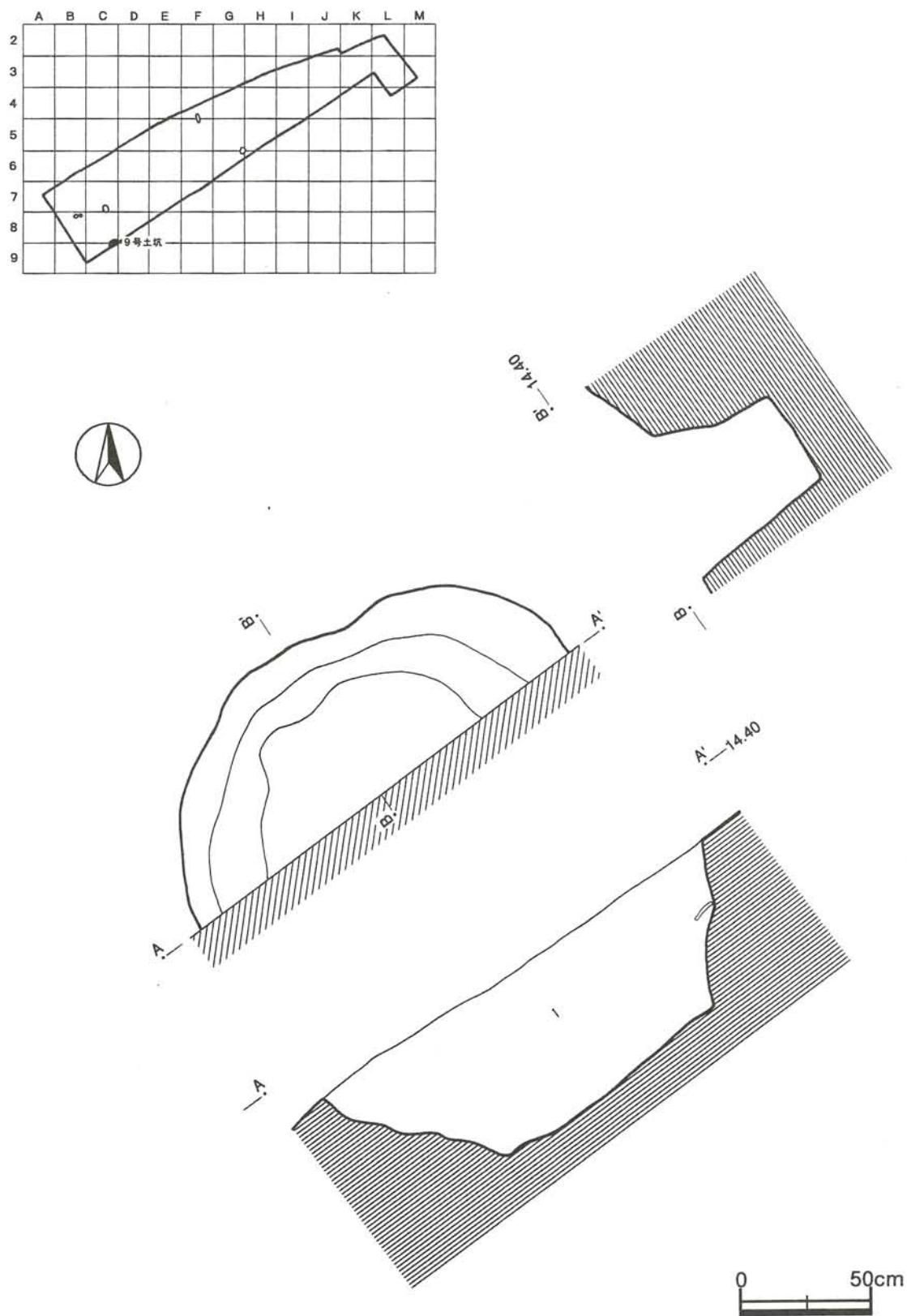
遺物は南側から土師器の細片が1点出土している。

⑤第10号土坑

F-4・5グリッドの標高14.1mに位置し、平面形状は長楕円形で、長径は141.5cm、短径は50.5cm、深さは最深部が14.0cmあり、主軸はN-15°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

覆土は2層に分けられ、第1層は暗灰褐色土で青灰色土がブロック状に混入し、粘性も締まりも強い。第2層は暗褐色土でブロック状の黄褐色土を少量含み、炭化粒を少量含んでいる。粘性も締まりもやや強い。

遺物は確認されなかった。



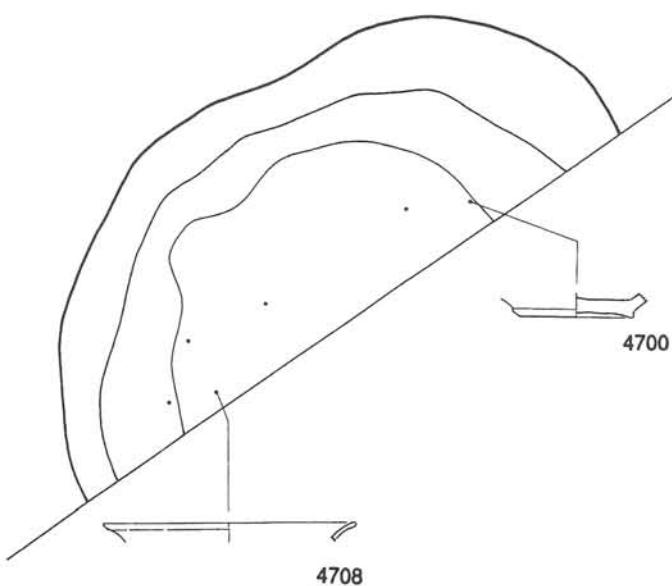
図IV-3-9 第9号土坑の平面および断面図

⑥第9号土坑

C-8・9、D-8グリッドの標高14.25mに位置し、南側は発掘対象区域外に広がっているが、平面形状は不整な円形を呈していると思われる。東西方向の長さは170.5cm、残存している南北方向の最大長は61.9cm、深さは最深部が58.8cmあり、主軸はN-34°-Wを指している。断面形状は平底で上に広く開くU字形を呈している。

覆土は青灰色土が1層で、粘性も締まりも強い。

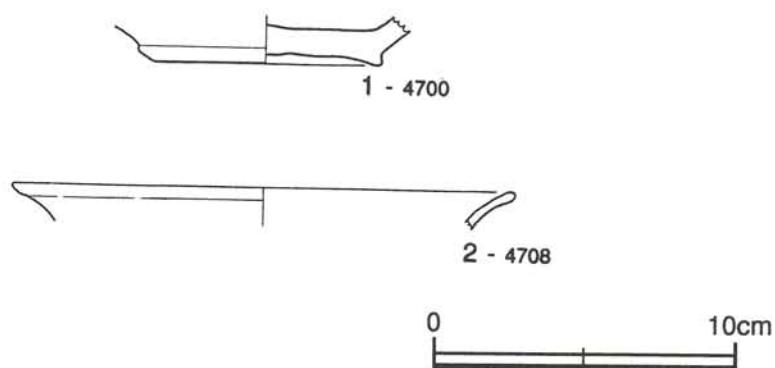
遺物は覆土中から須恵器の破片が5点、陶器の破片が1点出土しており、そのうちの2点は須恵器の碗の底部と口縁部である。



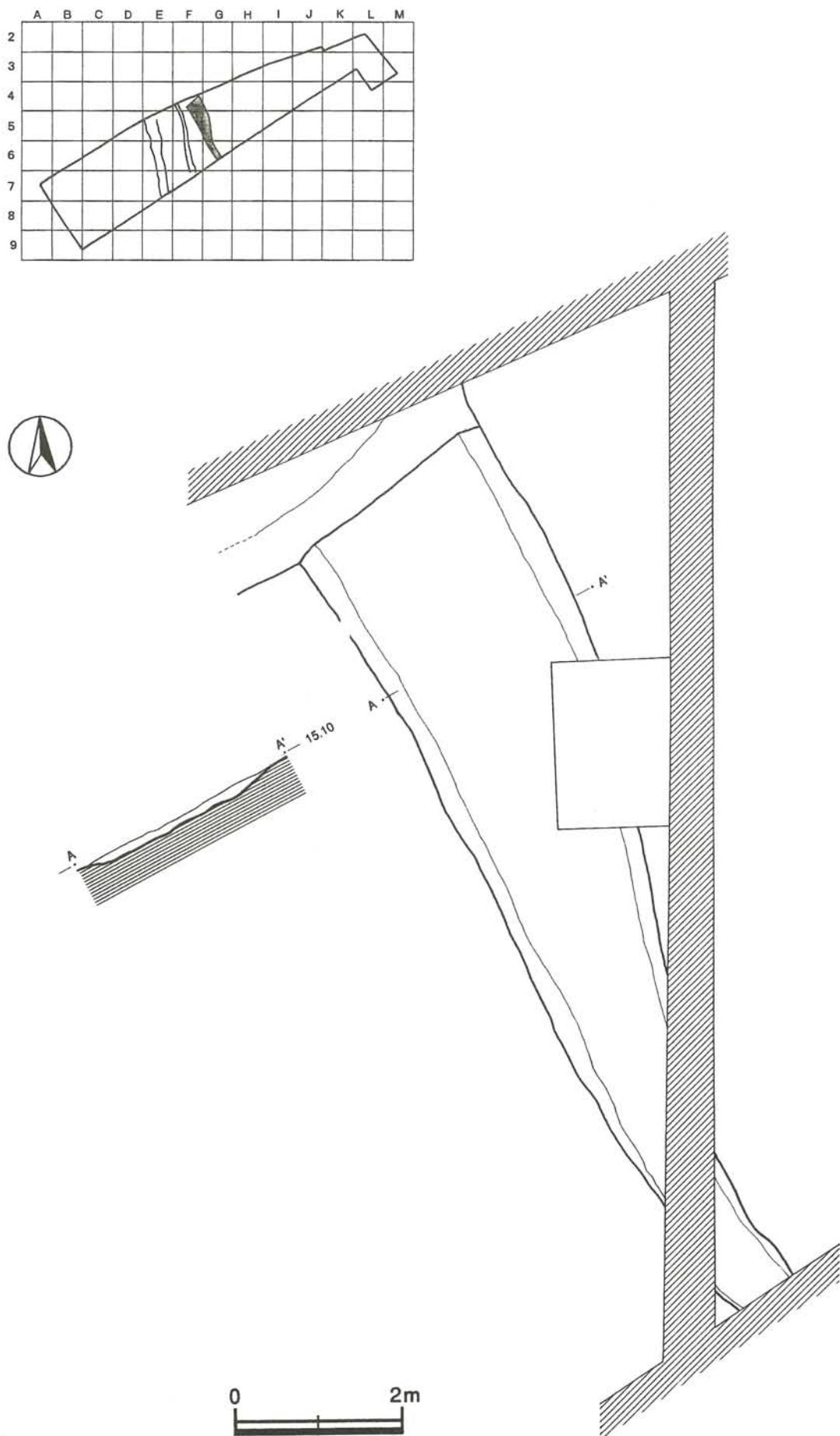
図IV-3-10 第9号土坑の遺物分布図

1（遺物No4700）は須恵器の碗の底部で、底部径は7.8cmある。平底から大きく開いて立ち上がると思われる。高台部は僅かに作り出している。外面はヘラ削りの後にナデ調整、内面はナデ調整が施されている。

2（遺物No4708）は須恵器の碗の口縁部で、推定口径は16.5cmある。口縁部は大きく開き、端部は丸めている。



図IV-3-11 第9号土坑から出土した土器



図IV-3-12 第6号溝の平面および断面図

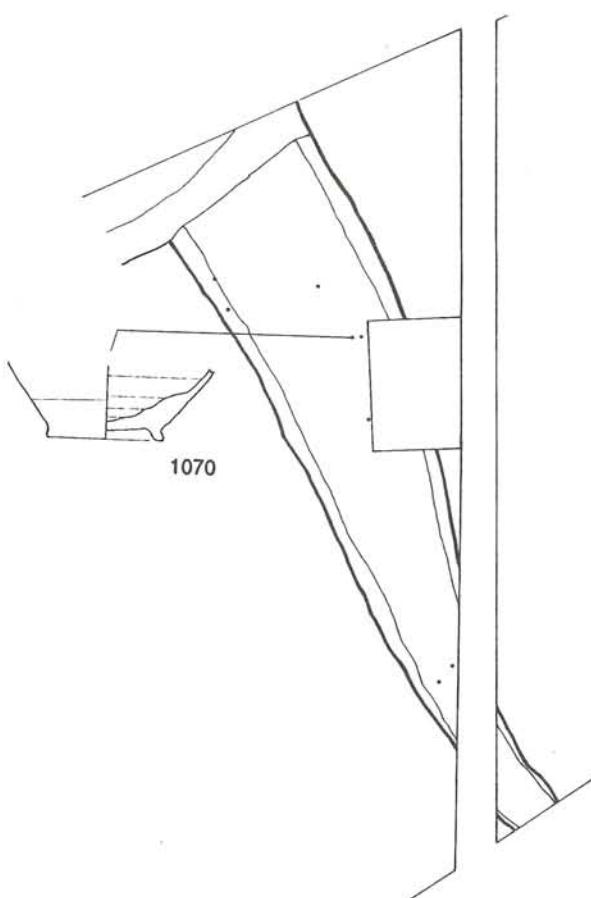
(2) 溝状遺構

①第6号溝

F-4・5、G-4・5・6グリッドの標高15.05mに位置し、北側は途中で第5号溝に切られているが、南北とも発掘対象区域外に延びている。平面形状はほぼ直線状を呈し、確認された溝の長さは1130.0cm、最大幅265.0cm、深さ8.0cmで、溝の方向はN-28°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

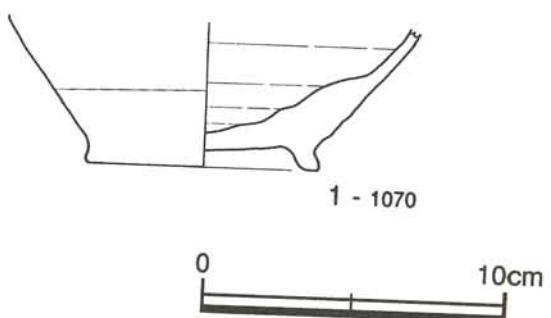
覆土は青灰色土が1層で、粘性も締まりもやや強い。

遺物は溝全体に散在し、いずれも溝の底から須恵器の破片が2点と土師器の細片が7点出土している。そのうち遺物No1070は須恵器の鉢の底部である。

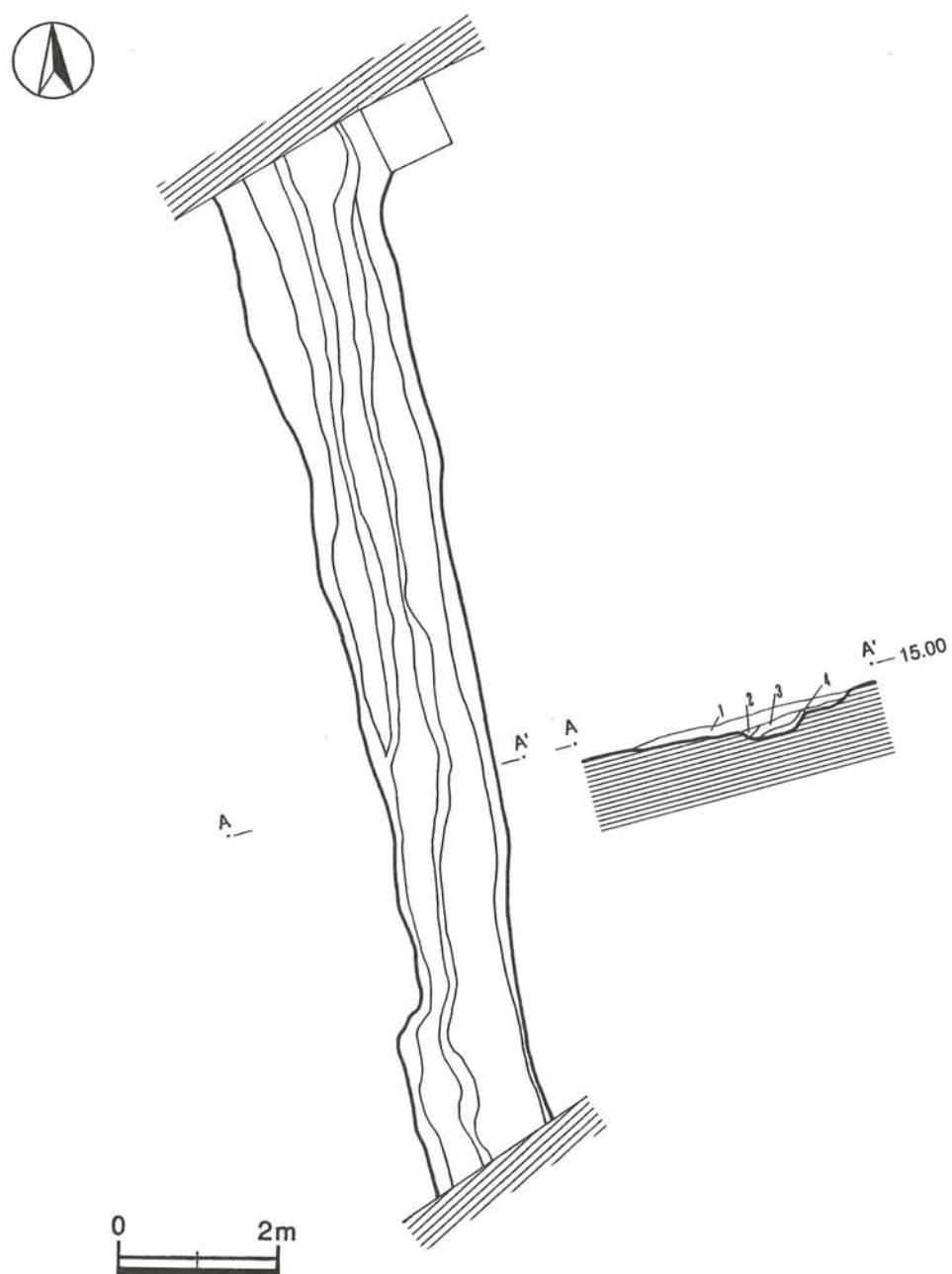
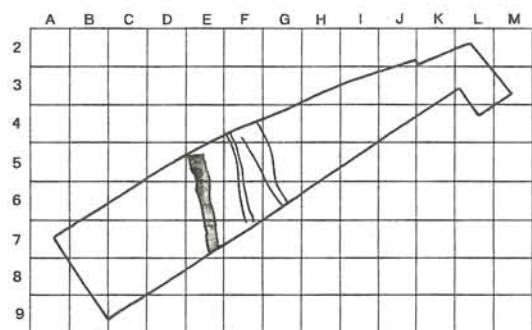


図IV-3-13 第6号溝の遺物分布図

1（遺物No1070）は須恵器の鉢の底部と思われる。底部径は7.7cmある。平底に「ハ」の字状の高台をつけ、胴部は直線的に斜めに開きながら立ち上がっている。外面はヘラ削り、高台部分はナデ調整、内面は左回転のヘラ削りにナデ調整が施されている。底部の内面に自然釉が認められる。



図IV-3-14 第6号溝から出土した土器



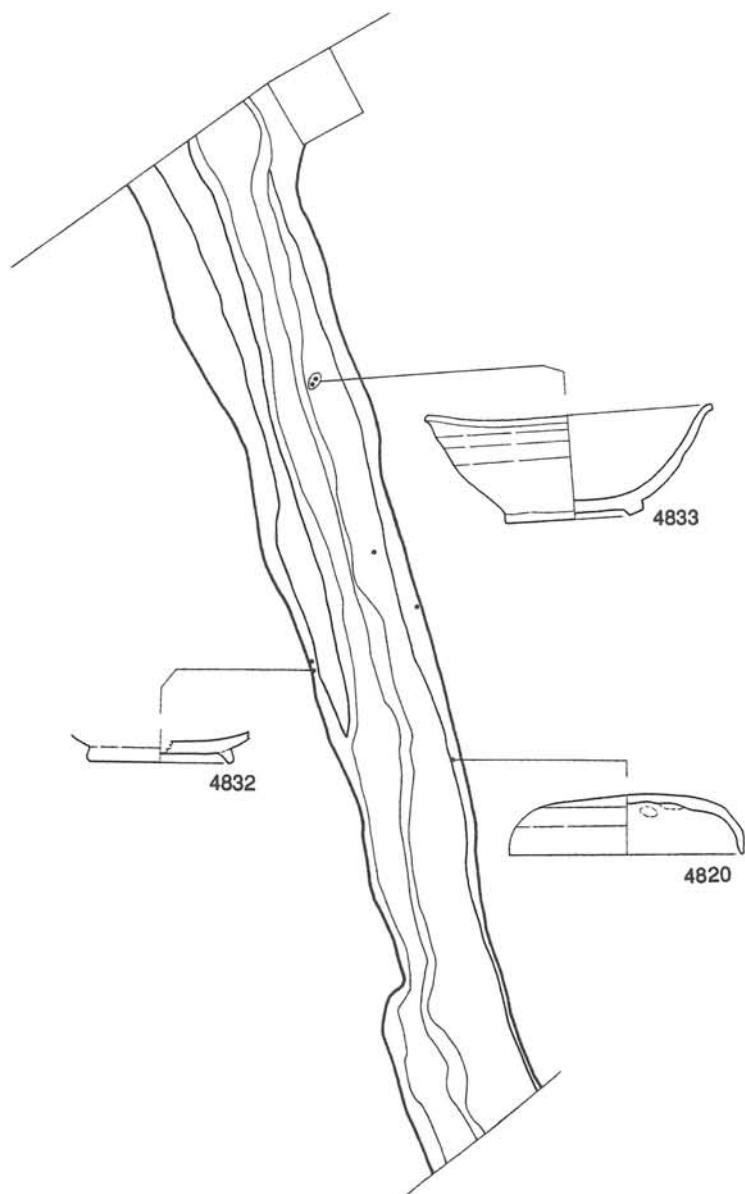
図IV-3-15 第9号溝の平面および断面図

②第9号溝

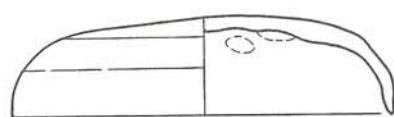
E-5・6・7グリッドの標高14.9mに位置し、南北はさらに発掘対象区域外に延びている。平面形状は直線状を呈し、確認された溝の長さは1328.0cm、最大幅368.0cm、深さ36.0cmで、溝の方向はN-14°-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈している。

覆土は4層に分けられ、第1層は茶褐色土で青灰色土のブロックを含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は褐色土で青灰色土のブロックを含み、粘性も締まりもやや弱い。第3層は褐色土で粘性は強く、締まりはやや強い。第4層は暗黄褐色土で粘性はやや強く、締まりは強い。

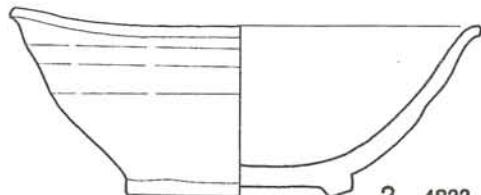
遺物は溝の中央部の緩やかな壁面から須恵器が6点と土師器の破片が1点出土している。そのうち遺物No4820は須恵器の壺蓋、遺物No4833は山茶碗、遺物No4832は灰釉陶器の高台付碗の底部である。



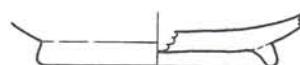
図IV-3-16 第9号溝の遺物分布図



1 - 4828



2 - 4833



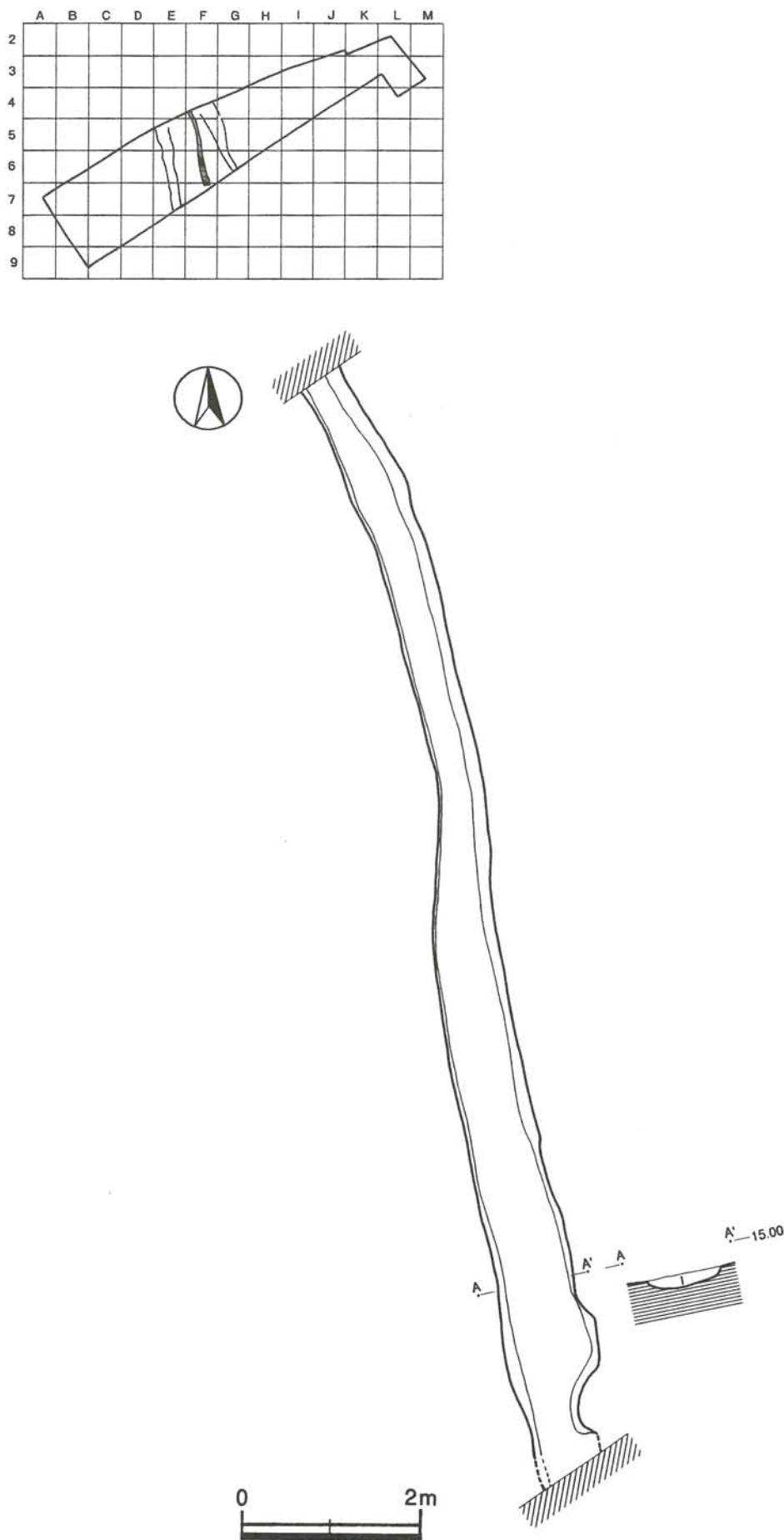
3 - 4832

図IV-3-17 第9号溝から出土した土器

1（遺物No4828）は須恵器の壺の蓋で、推定口径は12.6cm、器高は3.2cmある。弓張り状の天井部から口縁部をほぼ垂直に下ろし、天井部と口縁部の境には何も施していない。天井部の外面はヘラ削り、内面はナデ調整に指頭痕が認められる。

2（遺物No4833）は山茶碗で、口径は15.4cm、器高は6.2cm、高台径は7.4cmある。平底に断面が台形状の高台を付けている。胴部は緩やかに内彎して開き、口唇部にかけて外反して端部を丸めている。

3（遺物No4832）は灰釉陶器の高台付碗の底部で、高台部の推定径は7.6cmある。平底に「ハ」の字状の断面の高台を付けている。底部の外面には回転糸切り痕が認められる。



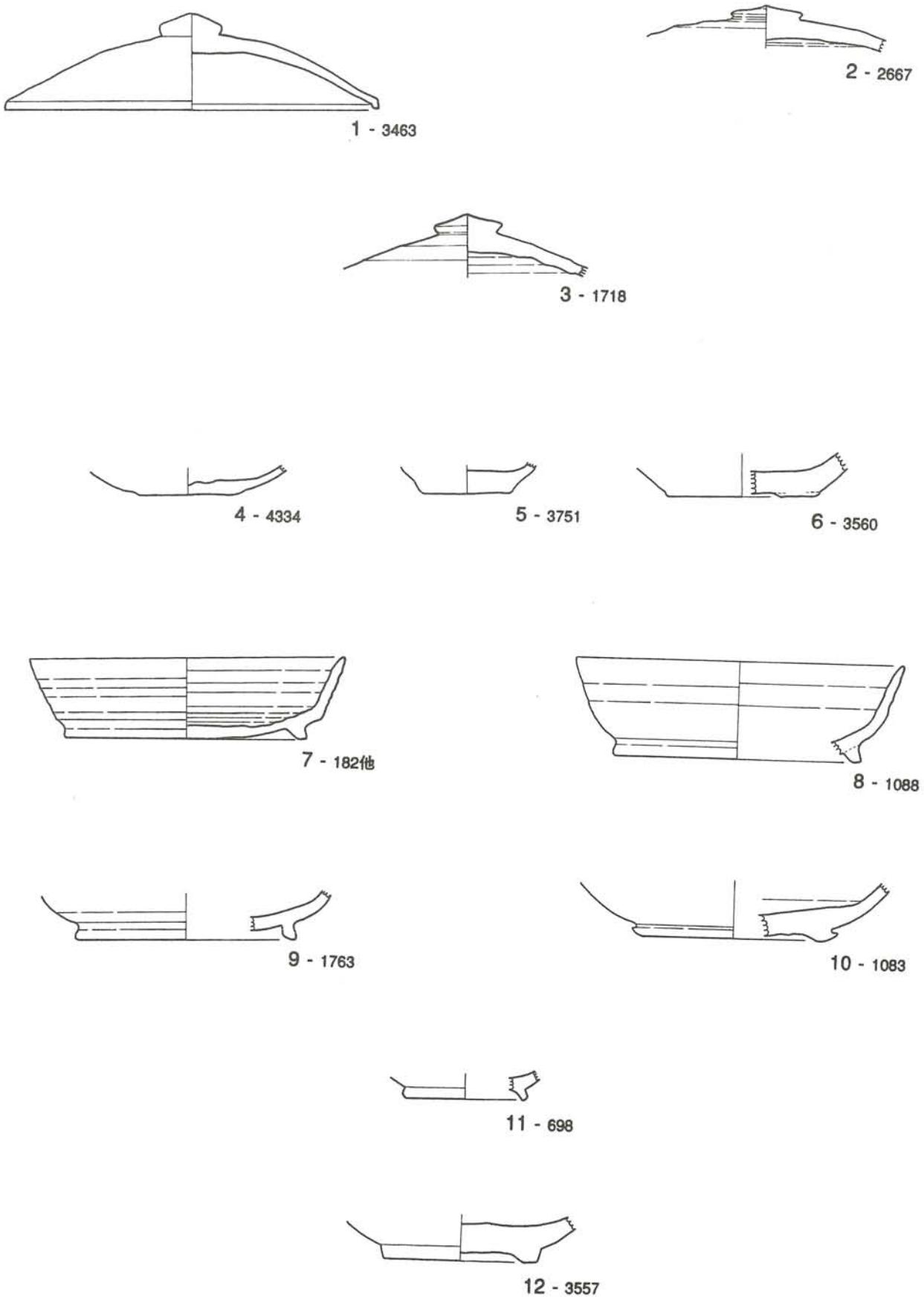
図IV-3-18 第10号溝の平面および断面図

③第10号溝

F-4・5・6・7グリッドの標高14.8mに位置し、南北はさらに発掘対象区域外に延びている。平面形状は直線状を呈し、確認された溝の長さは1224.0cm、最大幅104.0cm、深さ14.0cmで、溝の方向はN-12°-Wを指している。断面形状は皿状を呈している。

覆土は暗茶褐色土が1層で、ブロック状の青灰色土を含み、粘性は強く、締まりはやや強い。

遺物は南側の底面から土師器の細片が1点出土したのみである。



図IV-3-19 遺構外から出土した土器—グリッド(1)

(3) 遺構以外から出土した遺物

①各グリッドから出土した遺物

1 (遺物No3463) はH-4グリッドから出土した須恵器の壺蓋で、推定口径は16.6cm、器高は4.3cmある。径が2.8cmの扁平な宝珠状のつまみが付き、天井部は弓張り状を呈し、端部を明瞭に折り曲げて受部を作っている。

2 (遺物No2667) はH-4グリッドから出土した須恵器の壺蓋の天井部で、径が3.1cmの扁平な宝珠状のつまみが付いている。天井部は同心円状のヘラ削りが施されている。

3 (遺物No1718) はI-4グリッドから出土した須恵器の壺蓋で、径が3.0cmの扁平な宝珠状のつまみが付いている。内面は渦巻き状のナデ調整、外面はヘラ削りが施されている。

4 (遺物No4334) はD-7グリッドから出土した須恵器の壺身の底部で、推定底径は4.4cmある。平底から僅かに内彎して大きく開いて立ち上がっている。

5 (遺物No3751) はF-6グリッドから出土した須恵器の壺身の底部で、底径は4.0cmある。平底の底部から内彎気味に立ち上がっている。底部の器壁は1.0cmある。

6 (遺物No3560) はC-8グリッドから出土した須恵器の碗の底部と思われる。平底の底部に僅かに薄い高台が付いている。高台の推定径は6.4cmある。

7 (遺物No182,236) はE-8グリッドから出土した須恵器の高台付壺身で、口径は14.0cm、器高は3.8cm、高台径は10.7cmある。底部は平底で、口縁部が外傾して開き気味の箱形壺部に「ハ」の字状に開く断面が四角形の高台が付いている。底部と口縁部は明瞭な稜があり屈曲している。

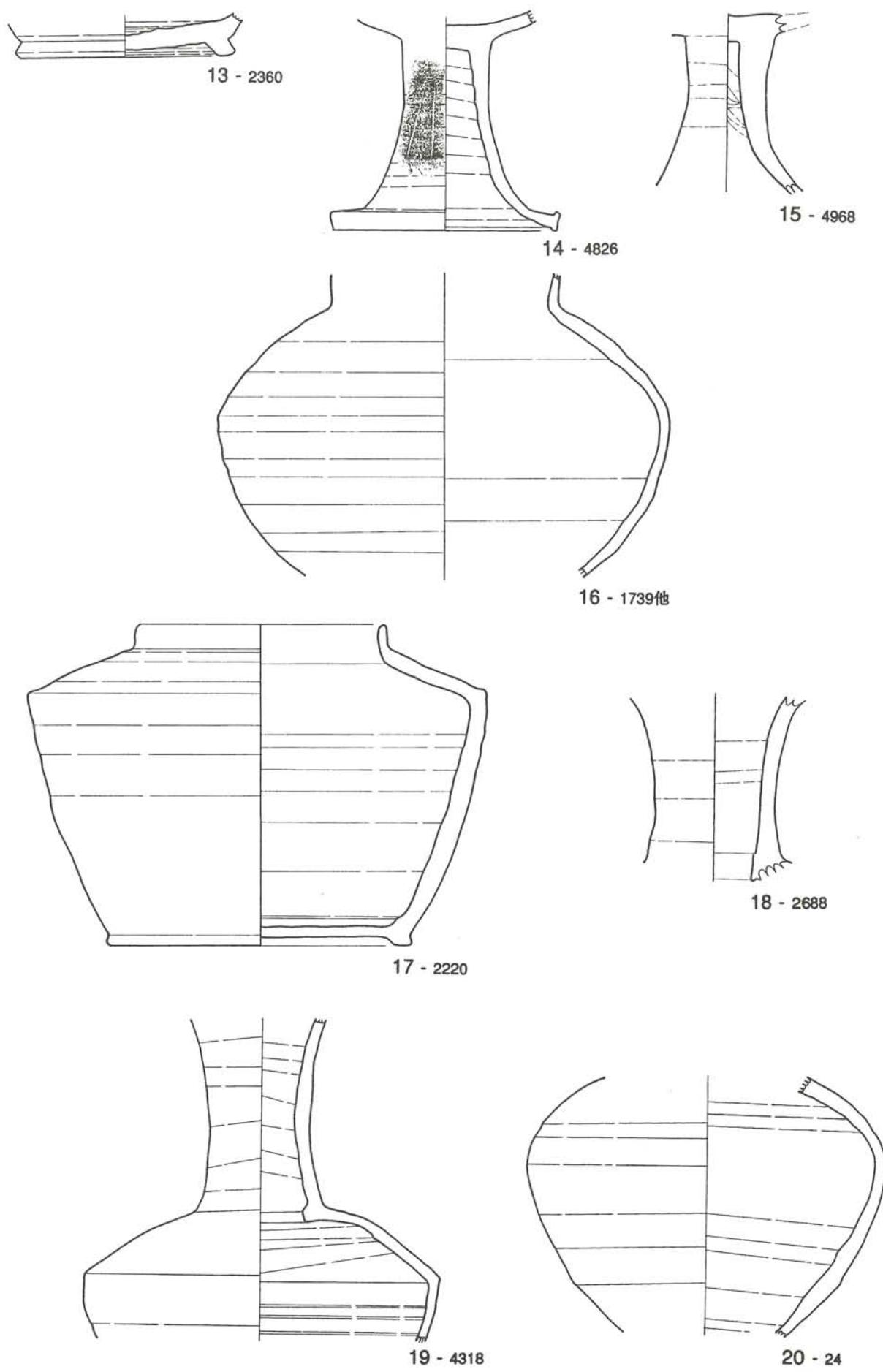
8 (遺物No1088) はI-4グリッドから出土した須恵器の高台付壺身で、高台の推定径は14.4cm、器高は4.3cm、推定底径は10.8cmある。底部から口縁部にかけての屈曲は緩やかで丸味を帯び、端部は丸めている。高台は断面が四角形でやや高くなっている。内外面ともにナデ調整が施されている。

9 (遺物No1763) はI-4グリッドから出土した須恵器の高台付壺身で、高台の推定径は9.8cmある。底部から緩やかに丸味を帯びて立ち上がっている。高台は断面が四角形でやや高くなっている。内外面ともにナデ調整が施されている。

10 (遺物No1083) はI-4グリッドから出土した須恵器の高台付壺身の底部で、高台の推定径は5.5cmある。胴部へは緩やかに開いて立ち上がっている。高台は「ハ」の字状に開き端部を丸めている。

11 (遺物No698) はF-7グリッドから出土した灰釉陶器の高台付壺身の底部で、高台の推定径は8.0cmある。平底の底部から緩やかに開いて立ち上がっている。高台は「ハ」の字を押しつぶしたように付いている。底部の外面はヘラ削り、他はナデ調整が施されている。

12 (遺物No3557) はC-8グリッドから出土した須恵器の碗の底部と思われ、高台部の径は6.8cmある。平底の底部は器壁が1.0cmとやや厚く、外面は静止ヘラ削りの後に断面が台形の高台を付けた後に回転ナデ調整、内面は丁寧なナデ調整が施されている。



図IV-3-20 遺構外から出土した土器一グリッド(2)

13（遺物No2360）はJ-2グリッドから出土した須恵器の碗の底部と思われ、高台部の径は9.2cmある。高台は断面が四角形を呈し「ハ」の字状に開いている。底部の外面はヘラ切りが未調整に近い状態でヘラ削りし、内面は渦巻き状のヘラ削りにナデ調整が施されている。

14（遺物No4826）はD-7グリッドから出土した須恵器の高壺の脚部で、裾部径は10.0cmある。ほぼ直線的に下りて裾部で「ハ」の字状に開き、端部は三角形を呈している。内外面共にヘラ削りにナデ調整が施されている。外面にはノタ目、ヘラ記号が見られる。

15（遺物No4968）はB-6グリッドから出土した須恵器の高壺の脚部で、接合部径は4.0cmある。僅かに内彎気味に下りて裾部で「ハ」の字状に開いている。外面は回転のヘラ削りにナデ調整が施され、内面は絞り状のヘラ削りにナデ調整が施されている。

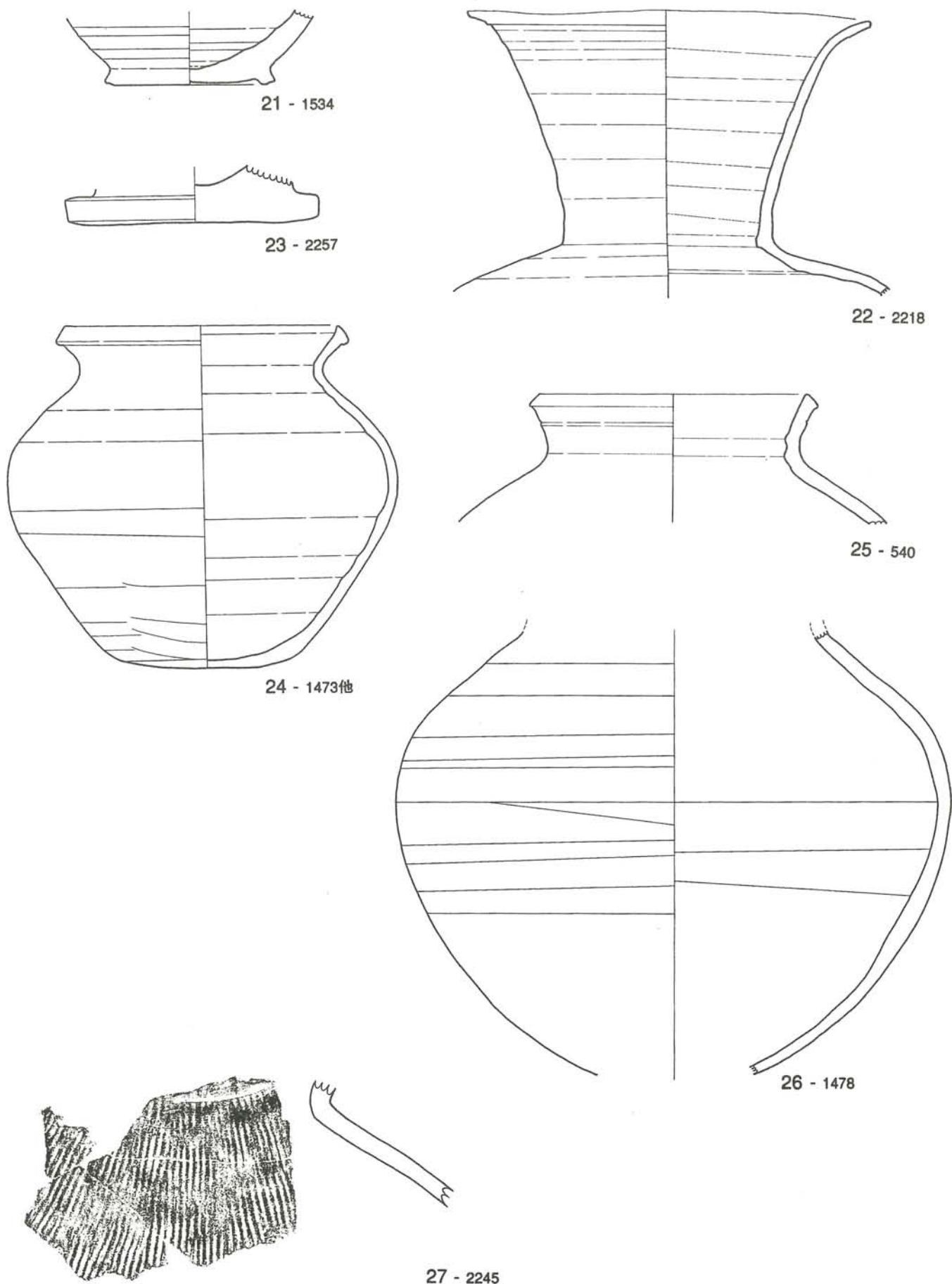
16（遺物No1739+1740+1785+1742+1744+3334+3341+3343）はI-3・4グリッドから出土した須恵器の短頸壺の頸部から胴部で、胴部の推定最大径は20.0cmある。胴部は偏球状に立ち上がり、頸部で直立している。胴部の1/3下半までヘラ削り、胴部中位にはノタ目が認められる。また、胴部の上位には自然釉が掛かっている。

17（遺物No2220）はJ-3グリッドから出土した須恵器の有蓋短頸壺で、推定口径は11.0cm、器高は14.6cm、底径は13.6cmある。平底に断面が台形の高台が付き、胴部は直線的に立ち上がり、肩部は緩やかに下がり張りを持っている。口縁部は短く直立して端部を内傾させている。胴部は内外面ともにヘラ削りにナデ調整が施されている。

18（遺物No2688）はI-4グリッドから出土した須恵器の長頸壺で、頸部接合部の径は5.8cm、胴部の最大径は16.0cmある。頸部は緩やかに外反して立ち上がっている。胴部上半は直立気味に立ち上がり、肩部で屈曲して内傾し緩やかに立ち上がっている。接合部はナデ調整によって丁寧に仕上げられている。頸部の外面に自然釉が見られる。

19（遺物No4318）はB-7グリッドから出土した須恵器の長頸壺の頸部で、頸部径は5.5cmある。緩やかに外反して立ち上がっている。外面はナデ調整が、内面はヘラ削りにナデ調整が施されている。内外面に自然釉が見られる。

20（遺物No24）はK-3グリッドから出土した須恵器の長頸壺の胴部で、胴部の推定最大径は16.0cmある。直線的に開きながら立ち上がり、胴部上位の最大径で湾曲して頸部へ内傾している。胴部の1/3にヘラ削りが施され、上半にはノタ目が見られる。



図IV-3-21 遺構外から出土した土器一グリッド（3）

21（遺物No1534）はJ-4グリッドから出土した須恵器の壺の底部と思われ、推定底径は7.9cmある。平底の底部から緩やかに内彎して立ち上がっている。高台部は断面が四角形で、やや開き気味に付けている。胴部の器壁は0.9~1.3cmとやや厚めである。

22（遺物No2218）はJ-3グリッドから出土した須恵器の広口の壺で、口径は18.6cm、頸部の接合部径は9.7cmある。頸部は直線的に開いて立ち上がり口縁部でやや大きく外反し、端部を丸めている。肩部は緩やかに下がっている。口縁部の外面に沈線化した稜が1条施されている。

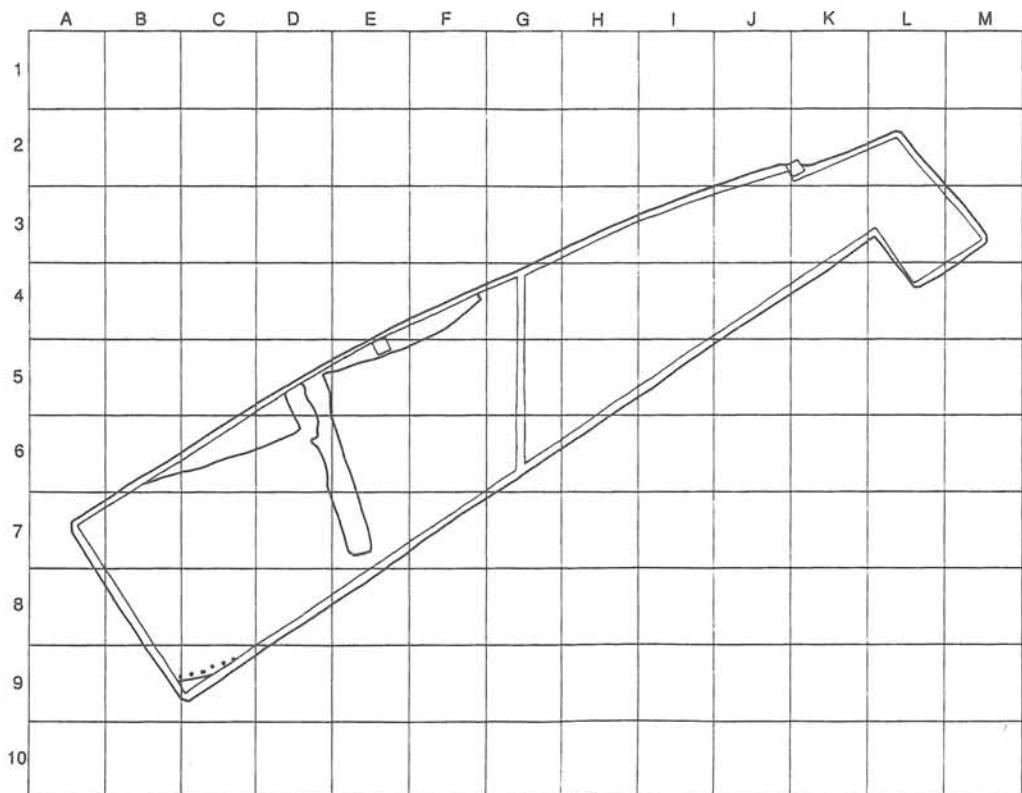
23（遺物No2257）はG-4グリッドから出土した須恵器の擂り鉢の底部で、底径は11.3cmある。底部の厚みは1.3cmあり、平底の底部から直線的に開いて立ち上がると思われる。底部の外面はヘラ削りの後にナデ調整が施されている。指頭痕も見られる。

24（遺物No1473+1474+1476+1500）はK-3グリッドから出土した須恵器の短頸壺で、推定口径は12.6cm、器高は16.0cmある。やや丸味を帯びた底部から直線的に立ち上がり、肩部で球状に内傾し、頸部から口縁部は「く」の字状を呈し、端部は断面が三角形となっている。胴部の外面の1/2下半にヘラ削り、上半にナデ調整が施されている。

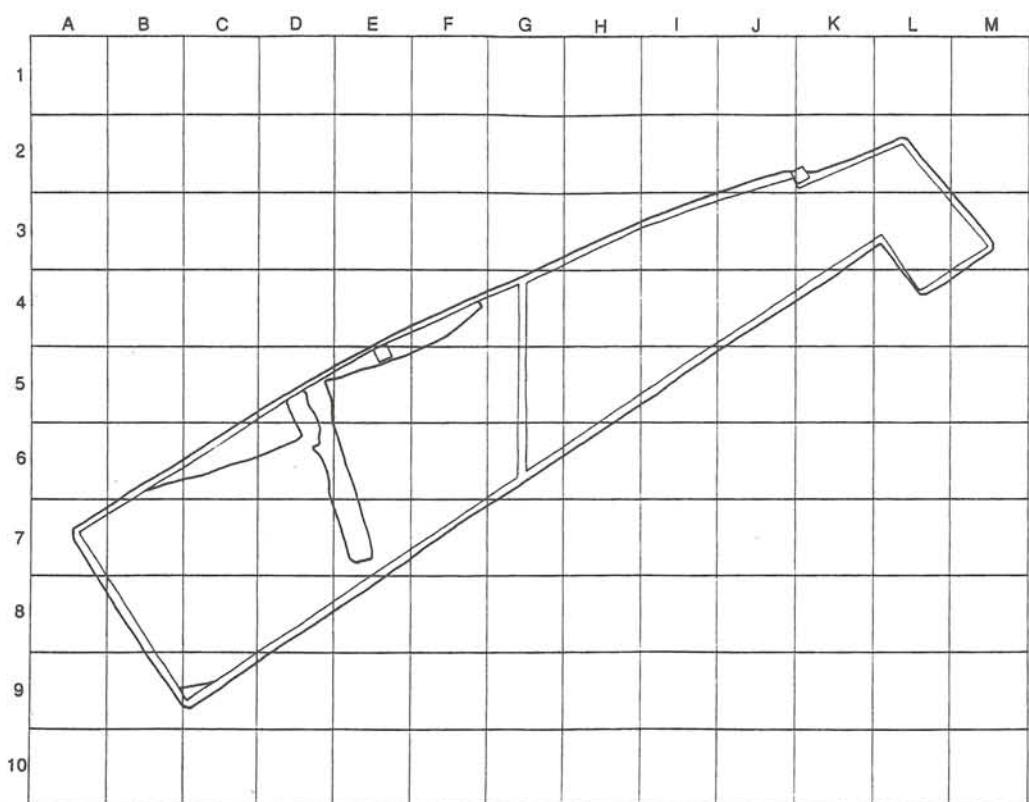
25（遺物No540）はL-2グリッドから出土した須恵器の甕の口縁部で、推定口径は12.4cmある。頸部から口縁部にかけて直線的に開いて立ち上がり、口縁部下に沈線を1条施して稜状にしている。肩部に自然釉が見られる。

26（遺物No1478）はK-3グリッドから出土した須恵器の甕と思われ、胴部の推定最大径は25.8cmある。丸底と思われる底部から胴部中位に最大径を持つ球形状に立ち上がっている。胴部下半にはタタキ目に丁寧なナデ調整が、上半にはヘラ削りが施されている。内面は斜位のヘラ削りが施されている。

27（遺物No2245）はJ-2グリッドから出土した須恵器の甕の胴部上で、頸部の推定径は17.2cmある。直線的に内傾して立ち上がり、頸部で「く」の字状を呈している。外面にはタタキ目が施されている。



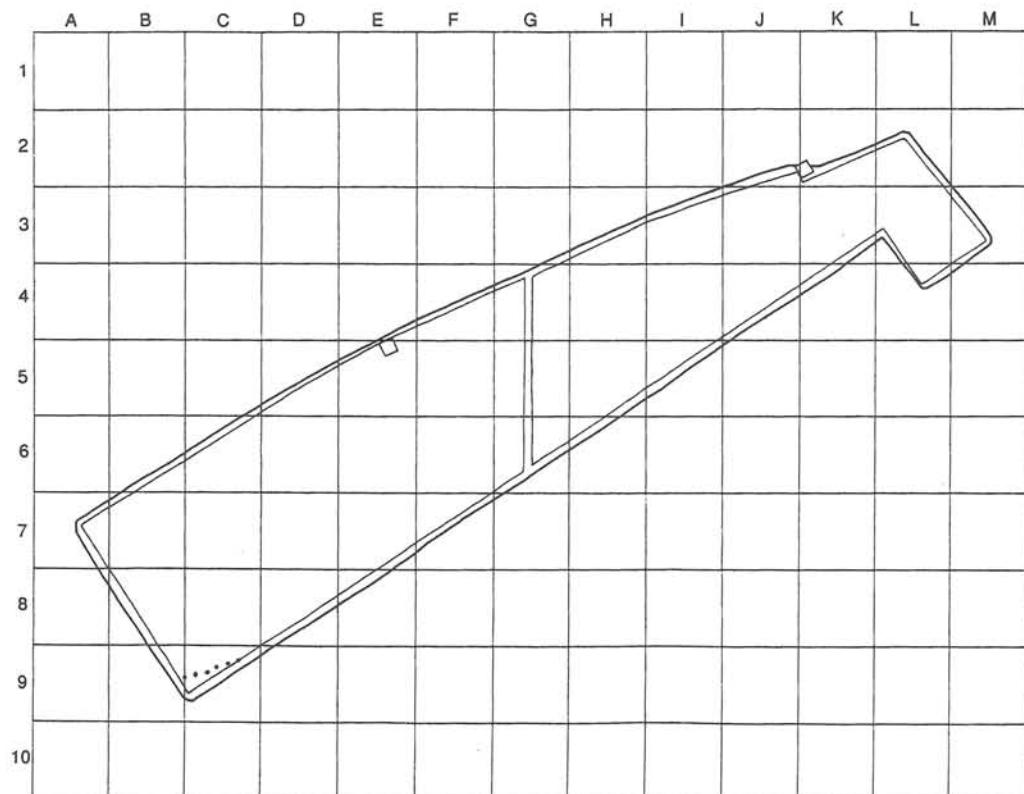
図IV-4-1 その他の遺構分布図（全体）



図IV-4-2 その他の遺構分布図（溝状遺構）

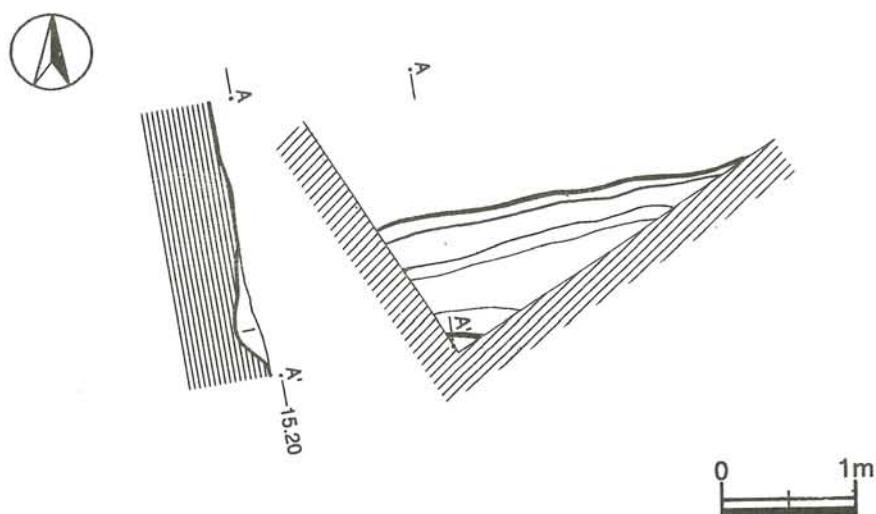
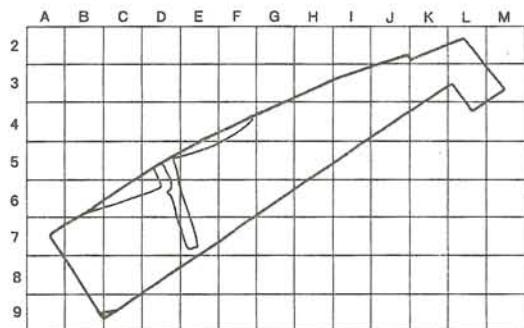
第4節 その他の遺構

奈良・平安時代の遺構確認面より上位面で確認された遺構であるが、出土遺物から特定できない遺構として、溝状遺構が4条、柱穴状遺構（ピット）が6基確認されている。いずれもほぼ同じレベルである。



図IV-4-3 その他の遺構分布図（ピット）

(1) 溝状遺構



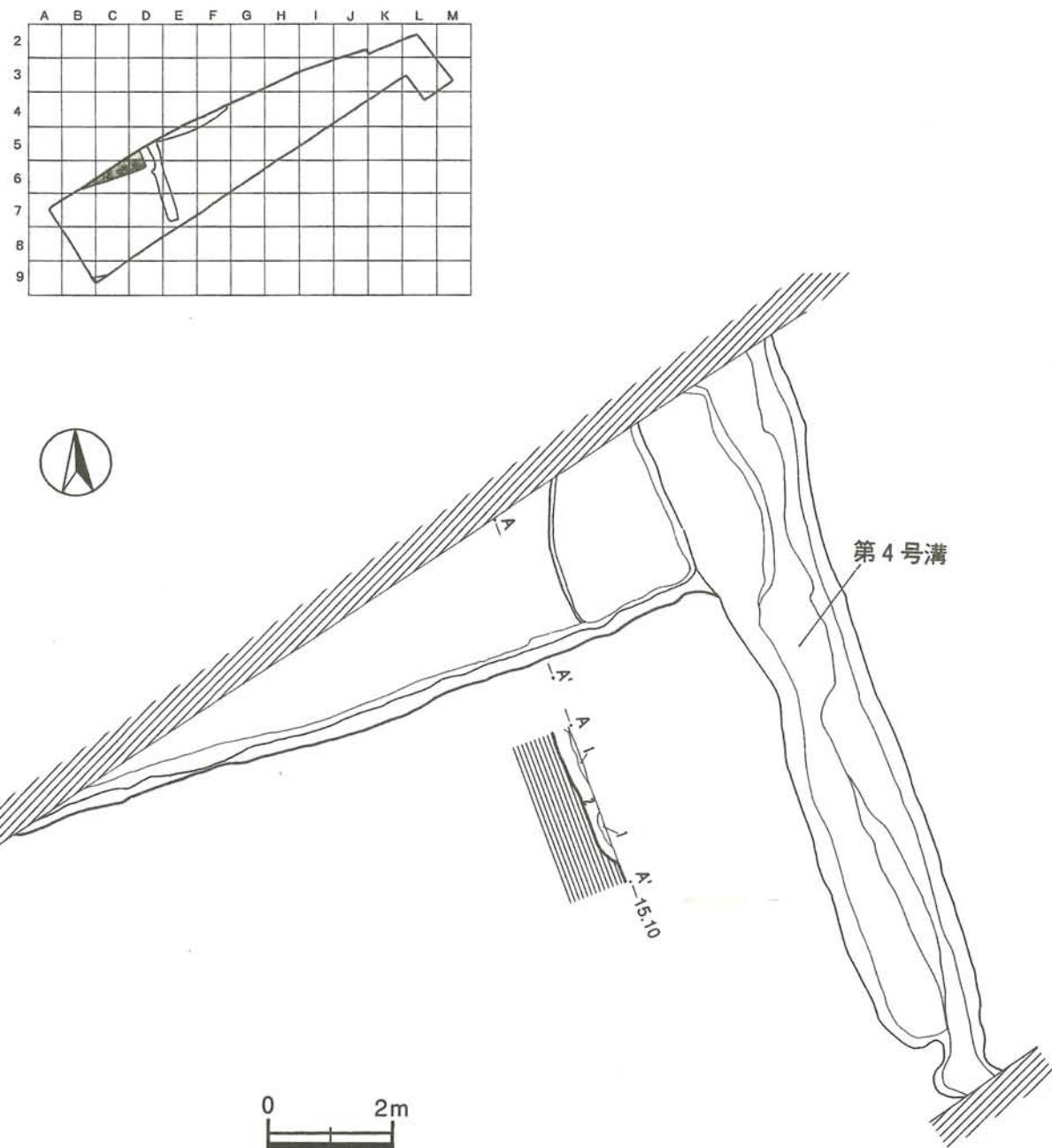
図IV-4-4 第1号溝の平面および断面図

①第1号溝

B-9、C-9グリッドに位置し、大部分は発掘対象区域外に伸びているため不明なところもあるが、平面形状はほぼ直線状を呈していると思われ、確認された溝の長さは266.0cm、最大幅は93.0cm、深さは12.0cmで、溝の方向はN-80°-Eを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈しており、北側の壁面は非常に緩やかに立ち上がっている。

覆土は青茶褐色土が1層で、粘性も締まりもやや強い。

遺物は確認されなかった。



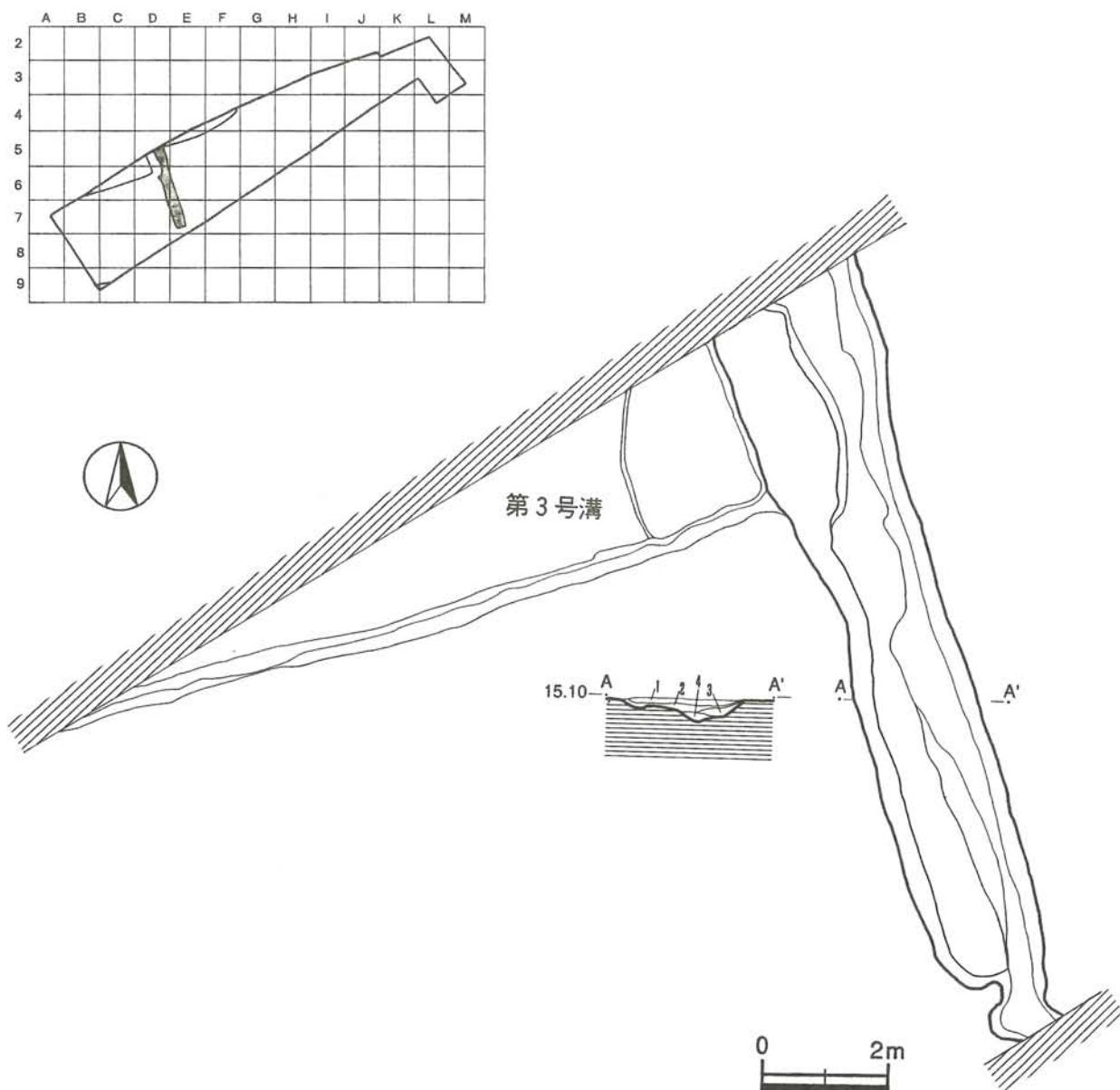
図IV-4-5 第3号溝の平面および断面図

②第3号溝

B-6、C-6、D-5・6グリッドの標高15.1mに位置し、東側は第4号溝に切れられ、北西側は発掘対象区域外に延びている。平面形状は直線状を呈していると思われ、確認された溝の長さは1395.0cm、最大幅は365.0cm、深さは31.0cmで、溝の方向はN-64°-Eを指している。断面形状は皿状を呈していると思われる。

覆土は2層に分けられ、第1層は青茶褐色土で、黄茶褐色の粒子を含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は青茶褐色土で第1層に比べて黄茶褐色の粒子を多く含み、粘性は強く、締まりはやや強い。

遺物は溝の東側と西側から須恵器の細片が2点、土師器の細片が5点、陶器の細片が2点出土している。



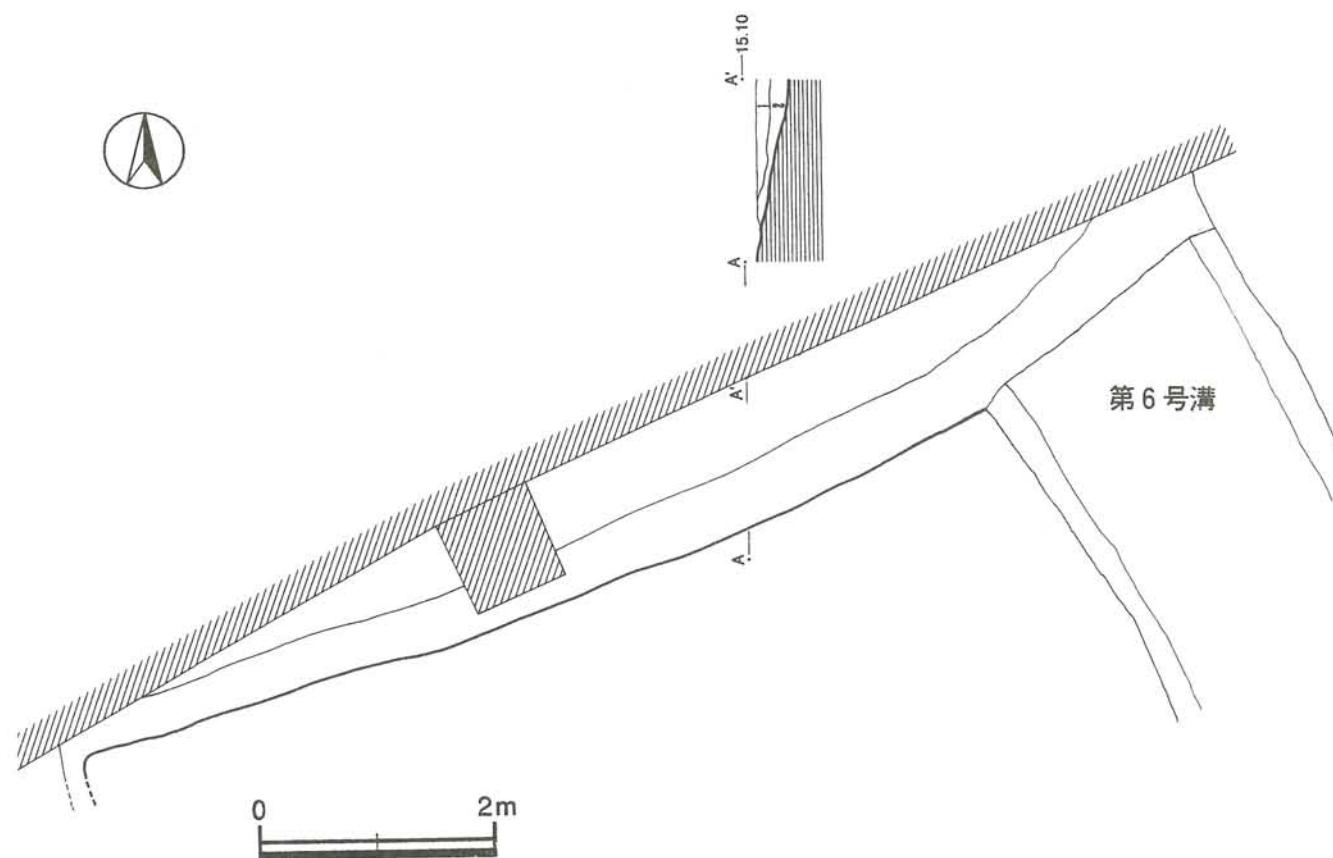
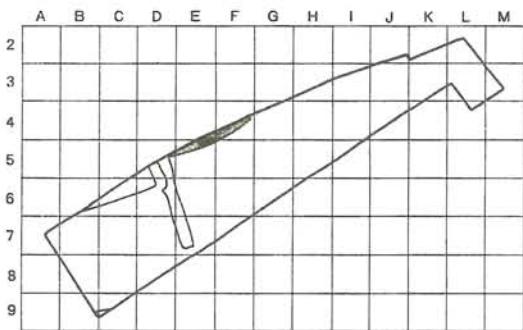
図IV-4-6 第4号溝の平面および断面図

③第4号溝

D-5・6・7、E-6・7グリッドに位置し、南北は発掘対象区域外に延びている。平面形状は直線状を呈し、確認された溝の長さは1308.0cm、最大幅は170.0cm、深さは35.5cmで、溝の方向はN-20°-Wを指している。断面形状は上に広く開くU字形を呈しており、西側の壁面は緩やかに立ち上がっている。

覆土は4層に分けられ、第1層は青茶褐色土で、黄茶褐色の粒子を含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は青茶褐色土で第1層に比べて黄茶褐色の粒子が多い。粘性は強く、締まりはやや強い。第3層は暗青茶褐色土で粘性は弱く、締まりは強い。第4層は暗青茶褐色土で第3層に比べ青灰色が薄い。粘性はやや弱く、締まりはやや強い。なお、第3・4層は第4号溝より古い溝の覆土と考えられる。

遺物は溝全体に広がり、緩やかな壁面と底面から須恵器の細片が2点、土師器の細片が19点、陶器の細片が1点出土している。



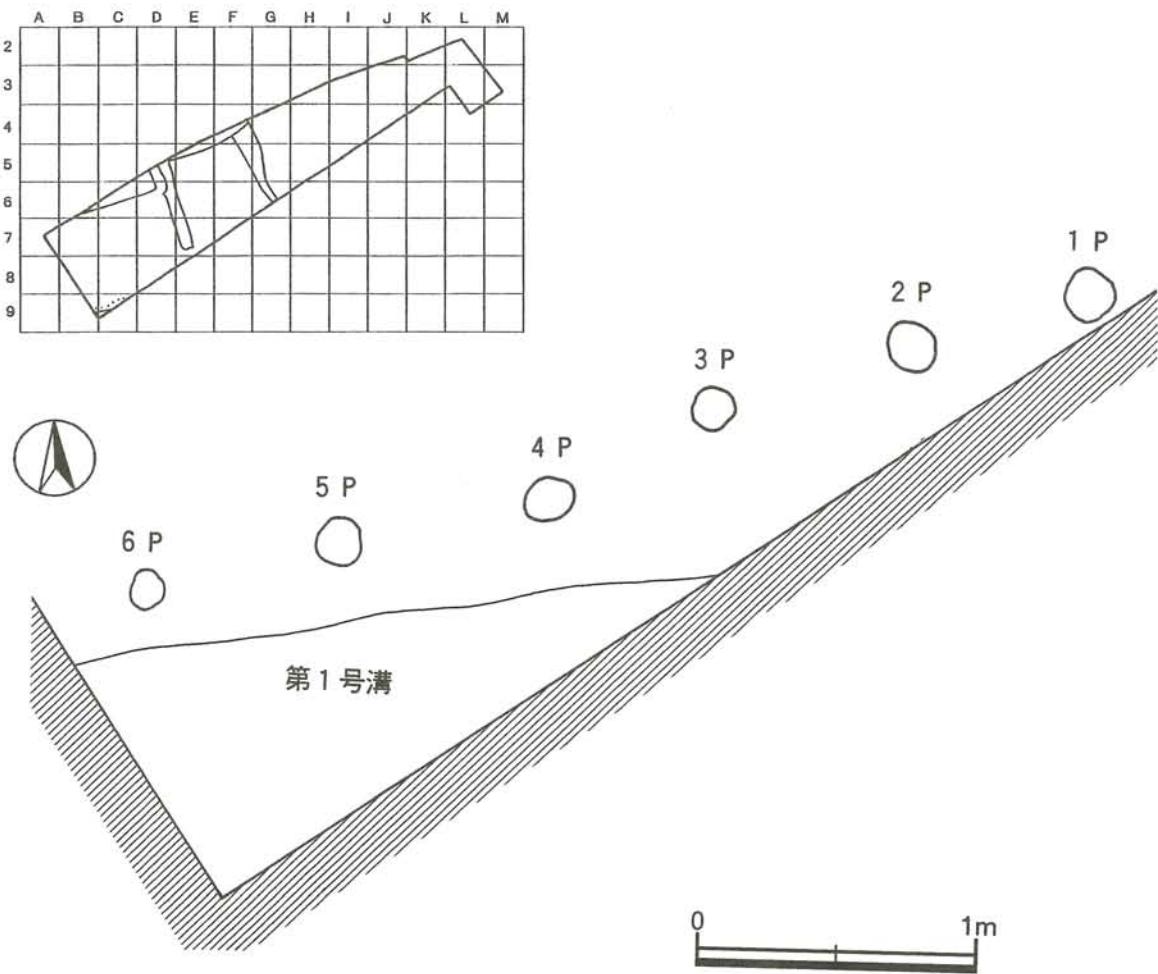
図IV-4-7 第5号溝の平面および断面図

④第5号溝

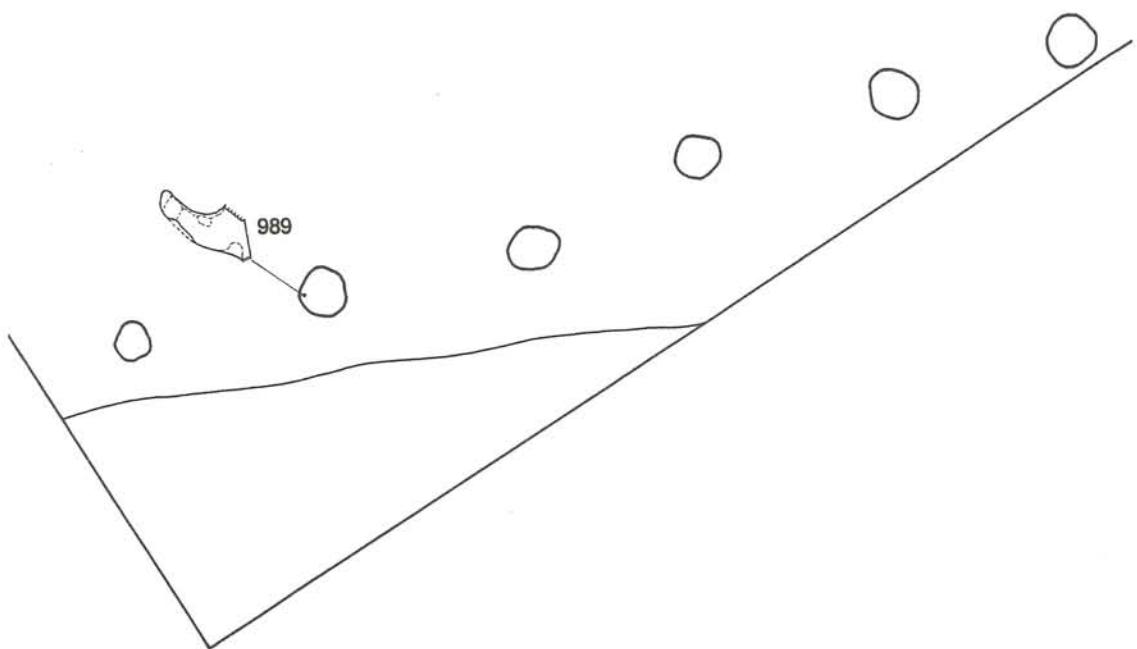
D-5、E-4・5、F-4 グリッドの標高15.0mに位置し、北側が発掘対象区域外に延びているため不明なところもあるが、平面形状は直線状を呈していると思われ、確認された溝の長さは1161.0cm、最大幅は119.0cm、深さ27.5cmで、溝の方向はN-64°-Wを指している。断面の形状は上に広く開くU字形を呈していると思われる。

覆土は2層に分けられ、第1層は青茶褐色土で、黄茶褐色の粒子を含み、粘性はやや弱く、締まりはやや強い。第2層は青茶褐色土で第1層に比べて黄茶褐色の粒子を多く含み、粘性は強く、締まりはやや強い。

遺物は溝底から土師器の細片が2点出土している。



図IV-4-8 第1号～6号ピットの平面図



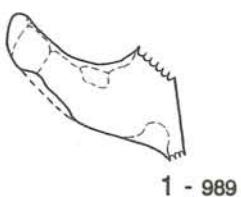
図IV-4-9 第1号～6号ピットの遺物分布図

(2) 柱穴状遺構

①第1～6号ピット

C-9グリッドの標高15.00mに位置し、第1号溝に沿うように、東西にほぼ一列に等間隔で並んでいる。ただし第1号溝との関連性は確認できない。平面形状はすべて円形を呈しており、第1号ピット(東から西に)は長軸19.7cm、短軸18.0cm、第2号ピットは長軸19.4cm、短軸17.8cm、第3号ピットは径16.5cm、第4号ピットは長軸19.6cm、短軸15.9cm、第5号ピットは長軸18.3cm、短軸16.9cm、第6号ピットは長軸14.2cm、短軸13.1cmで、断面形状はいずれもU字形を呈している。

遺物は第5号ピットの覆土から土師器の把手(遺物No989)が1点出土している。把手の断面形状は丸味を帯びた台形である。

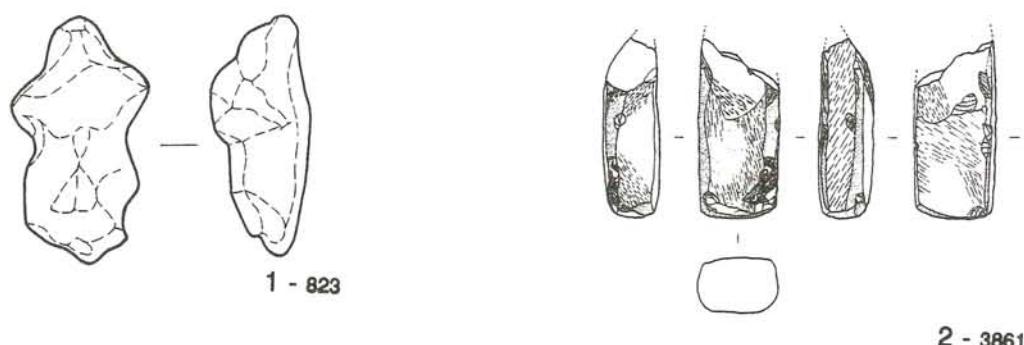


図IV-4-10 第5号ピットから出土した遺物

(3) 遺構以外から出土した遺物

1 (遺物No823) はB-7グリッドから出土した土製人形である。残存部の長さは8.1cmで、女性を模していると思われる。

2 (遺物No3861) はL-3グリッドから出土した安山岩製の小型磨製石斧で、残存部の最大長は7.9cm、最大幅は3.6cm、最大厚は2.4cmある。上端部が欠損のために刃部の詳細は不明であるが、片刃と思われる。研磨面は4面ともに丁寧に施されているが、側縁部には部分的に自然面を残している。



図IV-4-11 遺構以外から出土した遺物

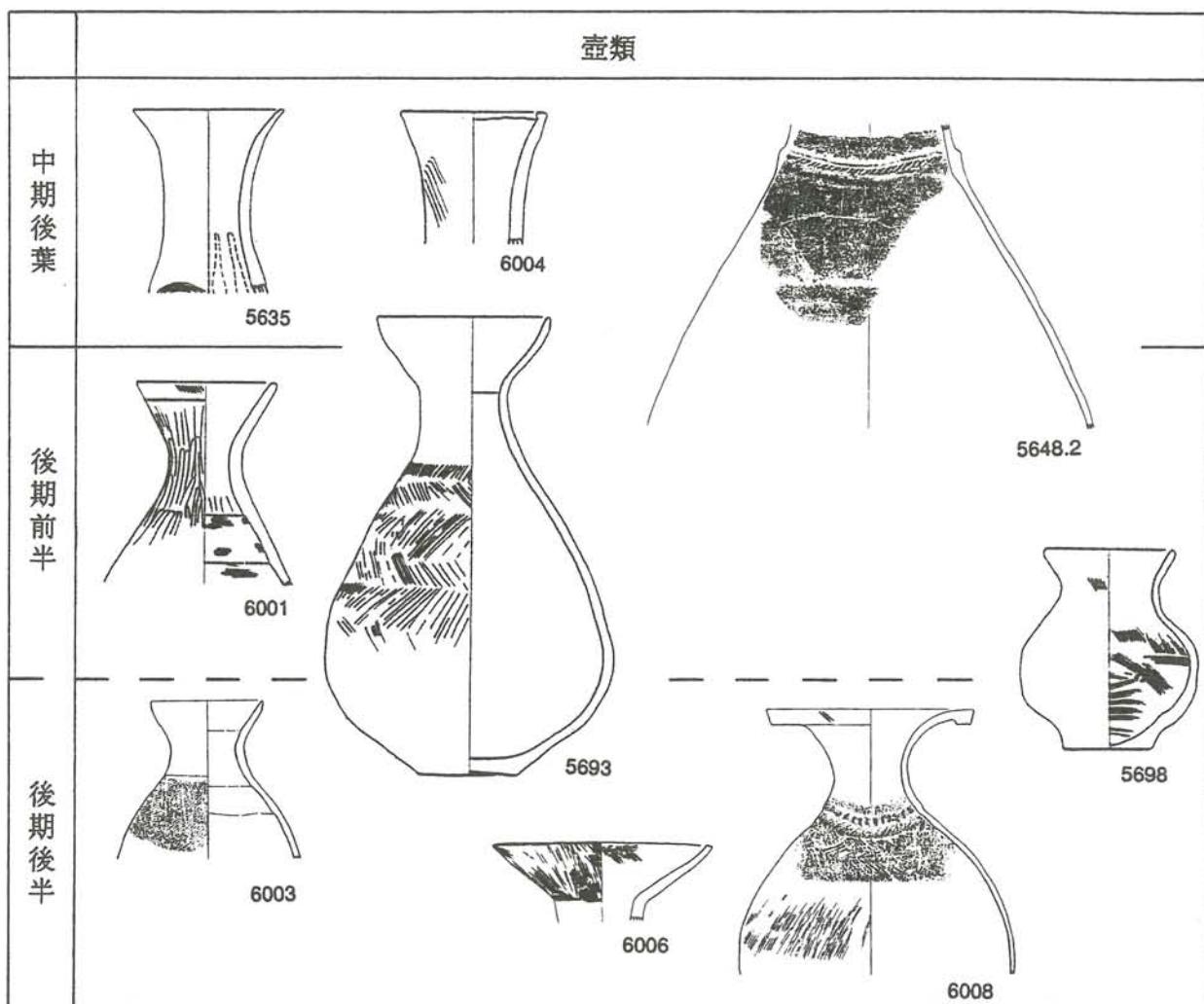
第V章 調査の成果と課題

今回の発掘調査において、弥生時代中期から平安時代にいたる遺構と遺物が確認された。弥生時代の遺構は溝状遺構が3条、古墳時代の遺構は住居址が12軒、土坑が7基、溝状遺構が3条、奈良時代から平安時代にかけての遺構は土坑が6基、溝状遺構が3条、そのほか溝状遺構が4条、柱穴状(ピット)遺構が6基である。また、これらの遺構に伴う遺物のほかに、調査用の排水溝と層序を確認するためのテスト・ピットからも遺物が出土しており、出土した遺物の総点数は7,750点余に及んでいる。

1. 弥生時代の遺構と遺物

①溝状遺構

弥生時代の遺構はいずれも溝状遺構で、調査区の東側から3条(第8号・第12号・第13号溝)確認された。このうち第8号溝と第12号溝は平面形状が環状を呈し、覆土から弥生時代中・後期の土器片と古墳時代後期の土師器片が多く出土しており、遺物の出土状況から自然流下のいわゆる旧河川と考えられる。また、土器片の出土状況や出土量とその内容から、南東側に集落が存在した可能性を示している。

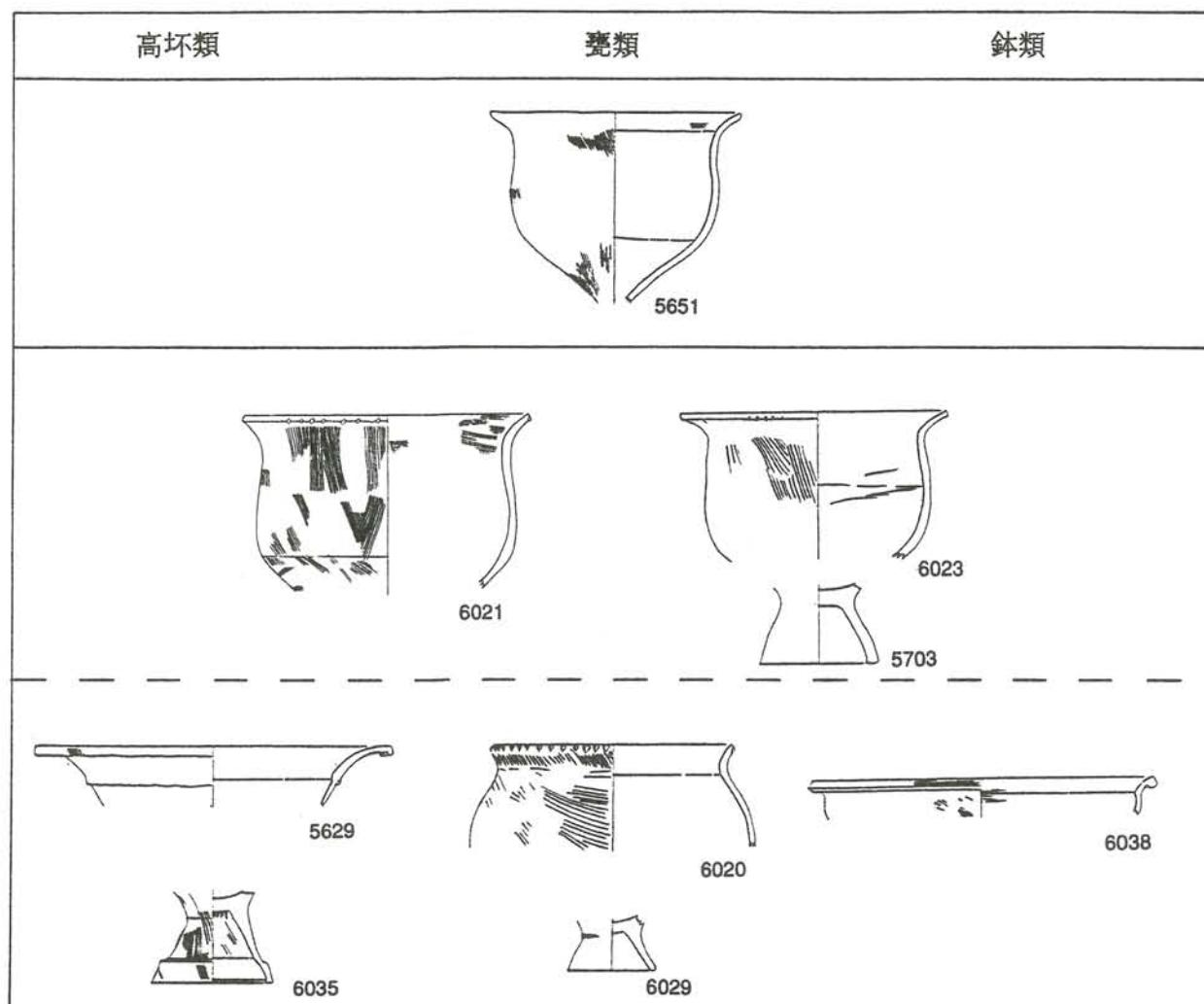


第8号溝から出土した弥生土器は長頸の壺が2点、受口口縁の壺、広口口縁の壺、複合口縁の壺、台付甕、高坏、鉢など、第12号溝から出土した弥生土器は長頸の壺が2点、台付甕、高坏などで、これらは弥生時代中期後葉の白岩式土器、弥生時代後期の菊川式土器に相当する土器類と考えられる。

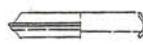
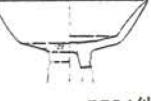
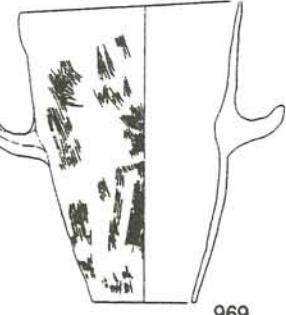
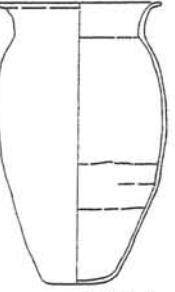
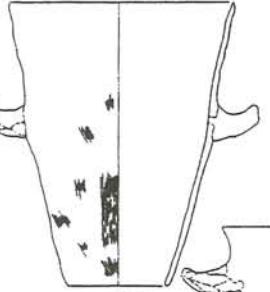
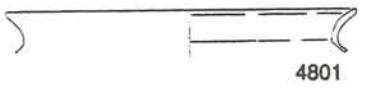
第13号溝は平面形状が直線状を呈し、溝の緩やかな壁面と溝底から出土した弥生土器は小型・中型の壺、台付甕の台部などで、弥生時代後期の菊川式土器に相当する土器類と考えられる。

②遺構以外から出土した遺物

遺構以外から出土した弥生時代の遺物は、層序を確認するために掘ったテスト・ピットから長頸の壺・台付甕の口縁部・高坏の接合部・ドーナツ状の底部など、調査用の排水溝から長頸の壺・台付甕の口縁部・高坏・上げ底の底部など弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土している。



図V-1-1 弥生時代の溝状遺構から出土した土器の集成図

| 住居址 NO. | 須恵器 | 土 師 器 | | | |
|------------|---|---|--|---|---|
| | | 坏 | 甕 | 甑 | その他 |
| 6 |  5289  4289-90 | | | |  4285他 |
| 4 |  5410  5189 | | | | |
| 5 | | |  5554 |  5524他 | |
| 3 |  5293.1  5297  5293.2 |  5298  5292  969 | | | |
| 2 |  4836他  5545  4256  4952 |  5147.1  5523  4949 | | | |
| 1 |  4805 |  4801 | | |  4806 |

図V-2-1 古墳時代の第1群住居址より出土した土器の集成図

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は住居址が12軒(第1号～第12号住居址)、土坑が7基(第4号・第5号・第6号・第8号・第11号・第12号・第13号土坑)、溝状遺構が3条(第8号・第11号・第12号溝。ただし、第8号・第12号溝は弥生時代と重複)確認された。

①住居址

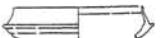
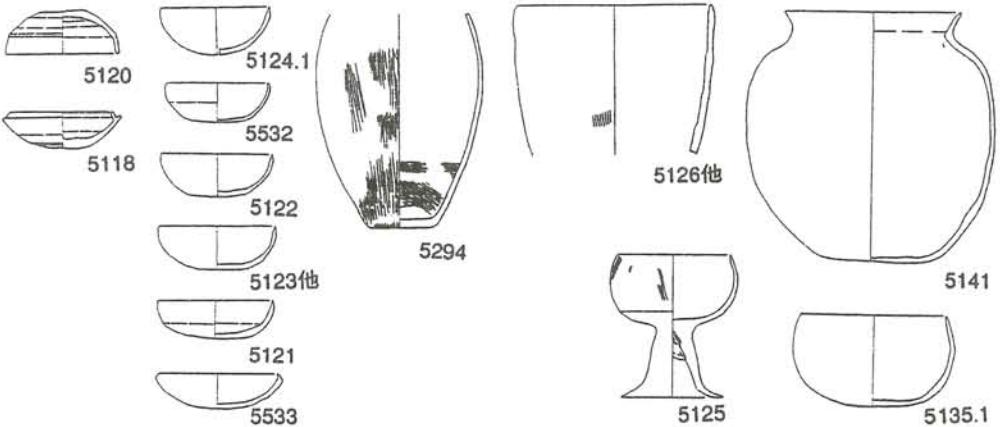
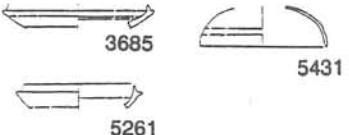
確認された12軒の住居址はその分布状況から3群に分けられる。第1群は調査区域の西側で確認された第1号住居址から第6号住居址までの6軒、第2群は調査区域の中央部で確認された第7号住居址から第10号住居址までの4軒、第3群は調査区域の東側で確認された第11号住居址と第12号住居址の2軒である。この12軒の住居址の内、第4号・第6号住居址以外の住居址からは北側中央部において竈が確認されているが、遺存状態は悪く竈の原形を十分に知ることはできなかった。

第1群の住居址の切り合い関係は第4号(旧)→第3号→第2号→第1号(新)と第6号→第5号が南北で切り合い、第6号→第5号→第3号→第2号が東西で切り合う関係にある。

また、それぞれの住居址から出土した須恵器を見ると、第1号住居址から出土した坏身(遺物No4805)は法量が最も小型化した時期のもので、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅳ期前半(7世紀中葉)に相当すると思われる。第3号住居址から出土した坏蓋(遺物No 5293.1、遺物No 5293.2、遺物No 5297)は法量が次第に小型化する時期のもので、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期末葉(7世紀前半)に相当すると思われる。第4号住居址から出土した坏身(遺物No 5189、遺物No 5410)は法量が小型化する初期のもので、口縁部の端に弱い段の名残があり、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期中葉(6世紀後半)に相当すると思われる。なお、遺物No 5189は端部を丸めしており、遺物No 5410よりもやや新しい時期の要素を示している。第6号住居址から出土した坏身(遺物No 5289)は口縁部の立ち上がりが低いことやヘラ削りの範囲が2/3と広いことから、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期前葉から中葉(6世紀前半～後半)に相当すると思われる。また、無蓋の高坏(遺物No 4289+4290)は第Ⅲ期前葉(6世紀前半)に相当すると思われる。

第2号住居址から須恵器は1点も出土しなかったが、土師器の模倣坏が1点(遺物No 4256)、坏が3点(遺物No 4836+4837、遺物No 4952、遺物No 5545)、甕が3点(遺物No 5147.1、遺物No 5147.2、遺物No 4950)、把手付甕が1点(遺物No 5523)、把手付鉢が1点(遺物No 4949)と、器種がセットで出土している。これらは古墳時代後期後半の住居址における土師器の組成を示している。なお、坏は胴部に丸味を持つものと丸味がなく偏平気味のものも見られるが、法量の分化は認められない。また、竈の中から坏が出土したことや床面から瑪瑙製の勾玉が出土したことは、住居内祭祀を示唆するものと考えられる(註1)。

竈については、第1号・第2号・第3号・第5号住居址は北側で確認されたが、第4号・第6号住居址は確認されなかった。第4号・第6号住居址は共に東側を切り合い関係によって欠如しており、当初より竈を持たない住居であったとは言い切れないが、少なくとも住居の北側中央に竈を据えなかつたことは確かである。なお、第2号・第3号住居址の竈の掛口に近い所から甕が横倒しの状態で出土している。

| 住居址 NO. | 須恵器 | | | | その他 |
|------------|---|---|---|---|-----|
| | | 壺 | 甕 | 甑 | |
| 11 |  | | | | |
| 10 |  | | | | |
| 9 |  | | | | |
| 7 | |  | | | |

図V-2-2 古墳時代の第2・3群住居址より出土した土器の集成図

以上のことから第1群の住居址は第6号(旧)→第4号→第5号→第3号→第2号→第葉から中葉(6世紀前半～後半)に相当する住居址は、少なくとも北側中央に竈を据えていないことから、この地における生活様式に何等かの変化があったと推定される。

第2群は第7号住居址と第10号(旧)→第9号住居址(新)、竈だけが確認された第8号住居址の4軒であるが、第8号住居址は床面が確認できなかったため、第10号住居址との平面的な切り合い関係を明確にすることはできなかった。ただし、第8号住居址の竈の面は第10号住居址の床面より上にあるので第10号(旧)→第8号住居址(新)の関係が推察される。

また、それぞれの住居址から出土した須恵器を見ると、第9号住居址から出土した壺(遺物No3685)は形態から見て遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期後葉～末葉(7世紀初頭～前半)に相当し、もう一つの壺(遺物No5261)は形態から見て遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期前葉～中葉(6世紀前半～後半)に相当すると思われる。第10号住居址から出土した壺(遺物No5118)と壺の蓋(遺物No5120)は形態などから、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期末葉(7世紀前半)に相当すると思われる。

さらに、第10号住居址からは土師器の模倣壺が1点(遺物No5533)、壺が5点(遺物No5121、遺物No5122、遺物No5123+5124.1、遺物No5124.2、遺物No5532)、脚付碗が1点(遺物No5125)、碗が1点(遺物No5424)、甕が1点(遺物No5294)、甌が1点(遺物No5126+5127)、甌の把手が2点(遺物No5135.1、遺物No5135.2)、壺が1点(遺物No5141)と、器種がセットで出土している。また、第7号住居址からは土師器の甕の底部(遺物No5014)が出土しているが、これは古墳時代後期の土師器と思われる。

以上のことから、第2群の住居址はいずれも北側に竈が据えてあり、第10号(旧)→第9号住居址(新)、第10号(旧)→第8号住居址(新)の切り合い関係が推察されるが、出土した遺物の時期からそれらの切り合い関係を十分に補足することはできない。これは第7号住居址との関係も同様である。

第3群は第12号(旧)→第11号住居址(新)の切り合い関係にある。第11号住居址から出土した須恵器の壺身(遺物No5329)は形態から見て遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期前葉(6世紀前半)に相当するものと思われ、本遺跡の住居址から出土した須恵器の壺身の中では最も古い時期のものである。第12号住居址からは土師器の細片が3点出土したのみである。

以上のことから、第3群の住居址はいずれも北側に竈が据えてあり、第12号(旧)→第11号住居址(新)の切り合い関係にある。第11号住居址から出土した須恵器の時期から考えると、第1群の第6号住居址より古い時期に想定されるが、竈の有無からみると、土器の年代とに相違がみられる。

本遺跡で確認された12軒の住居址は第4号・第6号住居址が古墳時代後期前半、それ以外の住居址はいずれも古墳時代後期後半に相当する時代の住居址で、しかも連続して営まれていたことが判る。

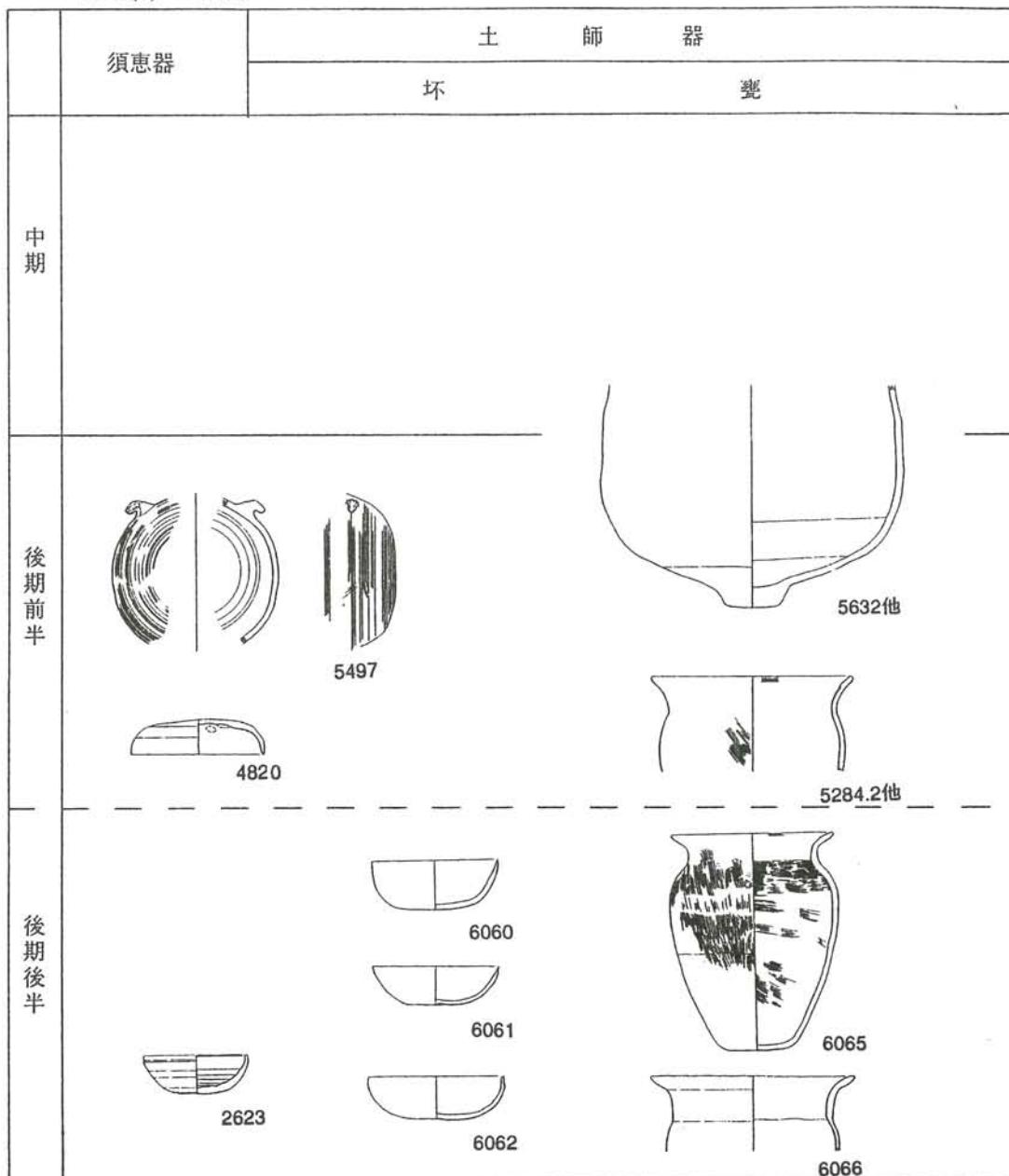
②土坑

古墳時代の土坑は調査区の西側から第4号・第11号土坑が、調査区の中央から第5号・第6号・第13号土坑が、中央よりやや東側から第8号・第12号土坑が確認されている。

表V-2-1 古墳時代の土坑一覧表

| 番号 | グリッド | 平面形状 | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 深さ (cm) | 主軸の方向 | 断面形状 | 出土遺物 |
|------|---------|-------|------------|------------|------------|----------|------|-------------|
| 第4号 | B-9 C-9 | 椭円形 | 99.5 | 73.5 | 18.5 | N-12° -W | 皿状 | 土師器片 |
| 第5号 | G-5 H-5 | 不整方形 | 41.0 | 31.5 | 9.5 | N-10° -W | U字形 | 須恵器片 |
| 第6号 | G-5 | 不整椭円形 | 77.5 | 68.0 | 11.5 | N-17° -E | 皿状 | 土師器片 |
| 第8号 | I-5 | 椭円形 | 50.0 | 32.5 | 5.0 | N-7° -W | 皿状 | 土師器片 |
| 第11号 | D-8 | 円形 | 60.0 | | 4.0 | | 皿状 | |
| 第12号 | I-4 | 不整円形 | 186.1 | 156.0 | 23.0 | N-34° -W | 皿状 | 須恵器片 土師器 |
| 第13号 | G-6 | (椭円形) | 80.0 | 66.0 | 21.6 | N-40° -W | 皿状 | 土師器 |

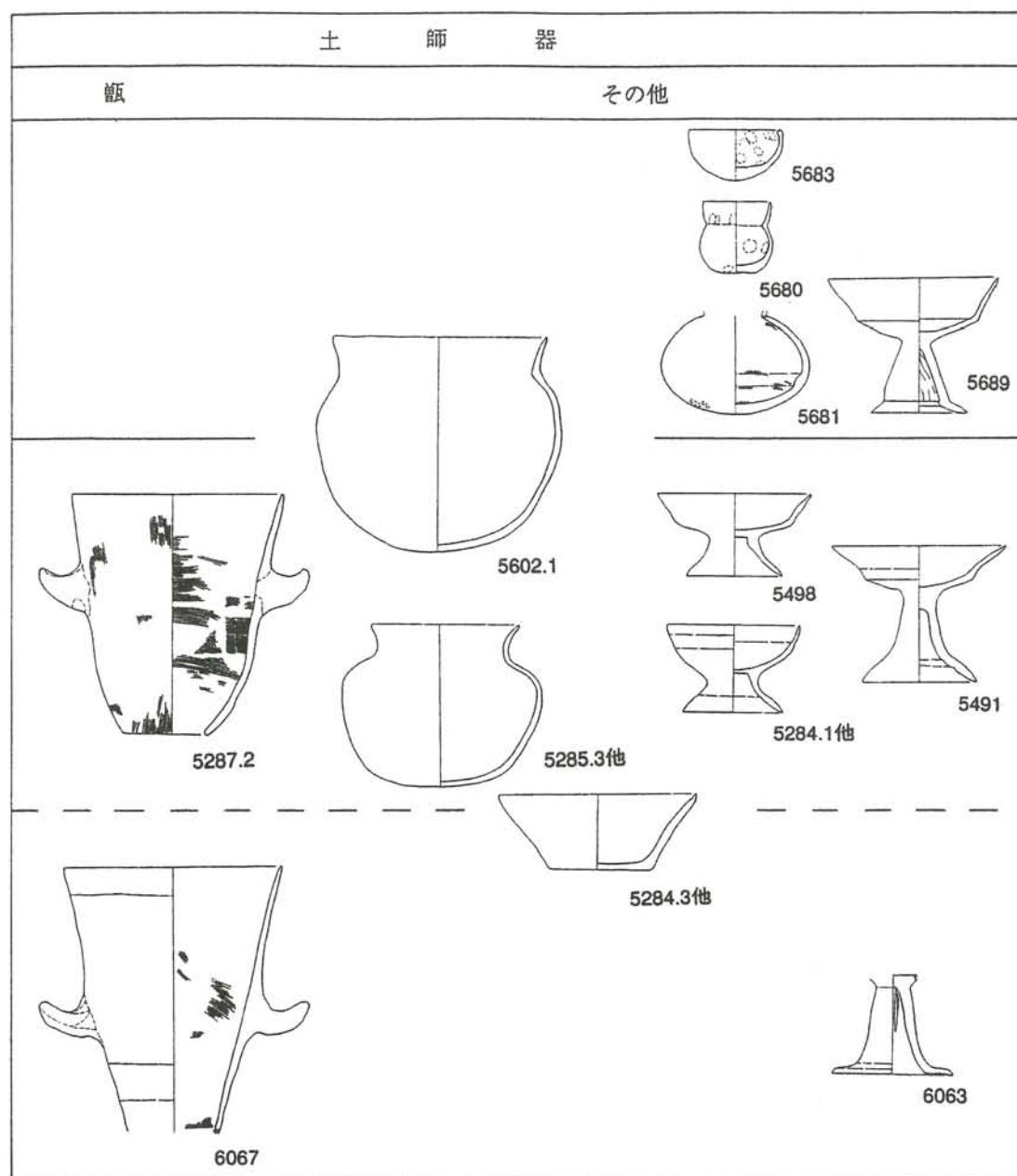
註：() は推定



このうち第12号土坑はその他の土坑に比べ規模が大きく、出土した土器も須恵器の提瓶が1点（遺物No 5497）、土師器の壺が1点（遺物No 5493）・高壺が2点（遺物No 5491、遺物No 5577）・模倣高壺が4点（遺物No 5498、遺物No 5494+5496.1、遺物No 5500、遺物No 5496.2）・甌の把手が1点（遺物No 5576）と、高壺が大半を占めており、同時期（古墳時代後期前半）の住居址から出土する土器類の組成と異なっている。さらに、これらの土器の出土状況は一括廃棄したように重なり合って出土している。したがって、出土した土器と出土状況から、祭祀に関連する土坑と考えられるが、集落内における祭祀のあり方とは形態も立地条件も異なっている。

③溝状遺構

古墳時代の溝状遺構は調査区の西側から第11号溝、調査区の東側から第8号・第12号溝が確認されている。ただし、第8号・第12号溝は弥生時代と重複している。第8号溝から出土した古墳時代の土器は土師器の模倣壺の蓋・壺・高壺の脚部・甌などで、古墳時代後期の土器である。第11号溝から出土した土器は土師器の模倣壺・高壺の脚部・



図V-2-3 古墳時代の土坑・溝状遺構より出土した土器の集成図

| | 須恵器 | 土 師 器 | | | |
|------|-----|----------|----------|----------|-----------|
| | | 壺 | 甕 | 甑 | その他 |
| 中期 | | | | | |
| 後期前半 | | 1851 | 3576 | 6078 | 6081 |
| | | 1450 | 6071 | 6077 | 5502 |
| 後期後半 | | 4316 | 4313 | 6080 | 3467他 |
| | | 211 | 4317 | 1750 | 6082 |

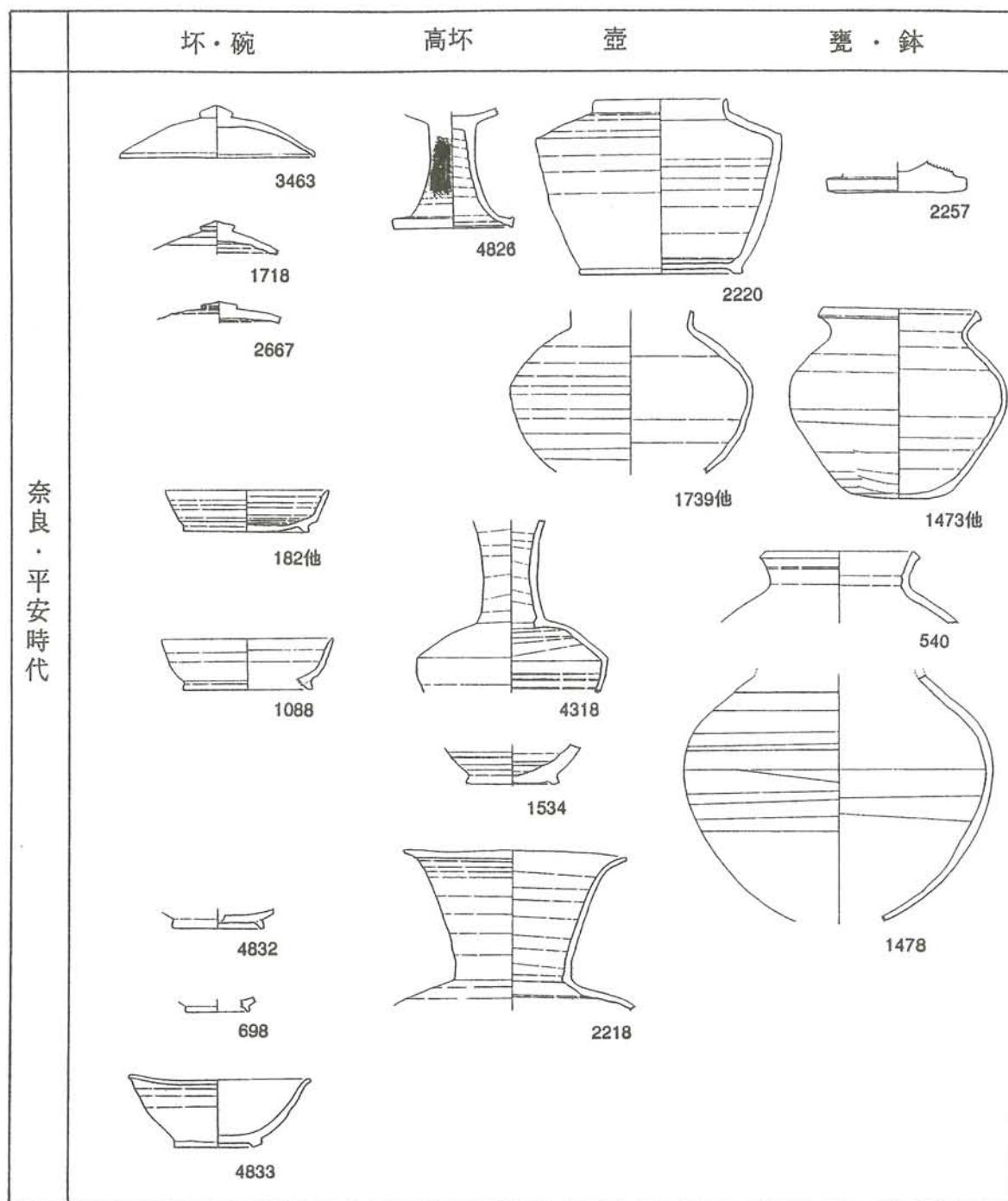
図V-2-4 遺構以外から出土した古墳時代の土器の集成図

甕・甑のものと思われる把手などで、模倣坏(遺物No.5614)や甕および高坏(遺物No.5705)の坏部と脚部の形態から古墳時代中期後半から後期にかけての土器と考えられる。第12号溝から出土した古墳時代の土器は西側溝の緩やかな斜面に集中して分布しており、土師器の坏(手捏ね)が1点、高坏が5点(このうちエンタシス状の脚部を持つものが2点)、小型の壺が3点、小型の壺が3点、甕が1点、甑の把手が1点など古墳時代中期の土器である。また、これらの土器の出土状況は他の場所で祭祀に使用したものと廃棄したかのように見える。

④遺構以外から出土した古墳時代の遺物

遺構以外から出土した古墳時代の遺物はグリッドから須恵器の坏身と坏蓋・長頸の壺・短頸の壺・平瓶など古墳時代後期前半(遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅲ期前半～第Ⅳ期後半に相当)の土器と、土師器の模倣坏・坏・高坏・把手付鉢・甕・甑など古墳時代後期前半から後半にかけての土器が出土している。

また、テスト・ピットからは須恵器の坏(古墳時代後期後半・遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅳ期前半に相当)と、土師器の坏(古墳時代後期後半)が、調査用の排水溝からは須恵器の坏蓋(古墳時代後期後半・遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅳ期前半に相当)と、土師器の模倣坏・坏・直胴型の甑・鉢型の甑・高台把手付鉢・直胴型の甕など古墳時代中期から後期にかけての土器が出土している。



図V-3-1 奈良・平安時代の土器集成図

3. 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良時代から平安時代にかけての遺構は土坑6基（第1号・第2号・第3号・第7号・第9号・第10号土坑）、溝状遺構が3条（第6号・第9号・第10号溝）確認されている。

①土坑

土坑は調査区域内に散在しており、第1号・第2号・第3号・第9号土坑は調査区の西側、第7号・第10号土坑は調査区の中央に分布している。

表V-3-1 奈良・平安時代の土坑一覧表

| 番号 | グリッド | 平面形状 | 長径 (cm) | 短径 (cm) | 深さ (cm) | 主軸の方向 | 断面形状 | 出土遺物 |
|------|---------|--------|------------|------------|------------|----------|------|-------------|
| 第1号 | C-7 | 長楕円形 | 126.0 | 72.5 | 15.0 | N-14° -W | 皿状 | |
| 第2号 | B-8 | 不整楕円形 | 45.8 | 40.0 | 3.1 | N-19° -E | 皿状 | 土師器片 |
| 第3号 | B-8 | 長楕円形 | 77.1 | 49.2 | 7.8 | N-57° -E | 皿状 | 土師器片 |
| 第7号 | G-H-5-6 | 不整楕円形 | 97.0 | 81.1 | 21.5 | N-12° -W | V字状 | 土師器片 |
| 第9号 | C-8-9 | (不整円形) | 170.5 | (61.9) | 58.8 | N-34° -W | U字状 | 須恵器片 陶器片 |
| 第10号 | F-4-5 | 長楕円形 | 141.5 | 50.5 | 14.0 | N-15° -W | 皿状 | |

註：() は残存部

6基の内、第9号土坑は調査対象区域外に広がっており、遺構の正確な規模は不明であるが、覆土から須恵器の碗の底部と口縁部など5点と陶器片1点が出土している。第2号・第3号・第7号土坑はいずれも土師器の細片が数点出土しているにすぎないが、確認面から奈良・平安時代にかけての遺構と考えられる。また、第1号土坑と第10号土坑は遺物を伴わないが確認面から奈良・平安時代にかけての遺構と考えられる。

②溝状遺構

第6号・第9号・第10号溝はいずれも調査区の中央部からやや西側にかけて南北方向に並行している。

第6号溝からは須恵器の鉢の底部（奈良時代、遠江考古学研究会による須恵器の編年の第V期に相当）が出土しており、第9号溝の覆土の下位から山茶碗（平安時代末期）と灰釉陶器の高台付壺の底部などが出土している。また、第10号溝は古墳時代の第7号住居址を切っており、溝の確認面から奈良・平安時代の遺構と考えられる。

③遺構以外から出土した奈良・平安時代の遺物

遺構以外から出土した奈良・平安時代の遺物は須恵器の壺蓋・高台付壺身・高壺の脚部・短頸壺・有蓋短頸壺・長頸壺の頸部から胴部・広口壺・甕・灰釉陶器などが出土している。

④奈良・平安時代以降の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構確認面より上位面で確認された溝状遺構が4条（第1号・第3号・第4号・第5号溝）と柱穴状（ピット）遺構が6基（第1号～第6号ピット）ある。

第1号溝は調査区の南西端、第3号・第5号溝は調査区の北西側で東西方向に、第4号溝は第3号溝と第5号溝の間を南北方向に走っている。第3号・第4号・第5号溝からは須恵器・土師器・陶器の細片が出土しているが、それらの出土遺物から遺構の時期を特定することはできない状況である。

柱穴状(ピット)遺構は第1号溝に沿って東西方向に一列に並んで6基(第1号～第6号ピット)確認され、第5号ピットの覆土から土師器の把手が出土しているが、溝状遺構と同様に、それらの出土遺物から遺構の時期を特定することはできない状況である。

4. 今後の課題

今回の調査により確認された遺構と遺物は古墳時代前期の一時期を除き弥生時代中期後葉から平安時代末期までのものである。

弥生時代の溝状遺構は遺物の出土状況から自然流下のいわゆる旧河川と考えられ、土器片の出土状況や出土量とその内容から、少なくとも東～南東側に弥生時代中期後半から後期後半にかけての集落が存在した可能性を示しており、今後は周辺の遺跡と比較検討する必要がある。

第12号溝から確認された祭祀用と思われる土器群は、古墳時代中期の集落が調査対象区の周辺に存在していたことを示唆している。

古墳時代後期の住居址群は連続して営まれていたことが判明しただけでなく、調査対象区域より南東側にさらに広がる様相を示しており、集落の一部であると言える。なお、第11号・第12号住居址は第11号住居址から出土した須恵器の壊の形態から見れば古墳時代後期前半に該当するが、住居址のプランや竈の有無から見れば古墳時代後期後半に該当すると思われ、今後類似する遺構との詳細な比較検討が必要である。

また、本遺跡から出土した須恵器の内、近接する原川遺跡(註2)や坂尻遺跡では出土しなかった須恵器(遠江考古学研究会による須恵器の編年の第Ⅳ期後半：中村編年の第Ⅲ型式)が出土しており、周辺の遺跡とは異なる様相を呈している。

本遺跡の周辺の低地には古墳時代の集落跡が、さらにその周辺の丘陵・段丘上には古墳時代後期の古墳・横穴群が多く分布しており、それらの関連について統合した解析が必要であり、『先代旧事本紀』の「国造本紀」に見られる“素賀国”を解明する時期にきていると思われる。

註1 宮本達希「静岡県における奈良・平安時代の祭祀」『地域と考古学』 1994

註2 鈴木基之『原川遺跡Ⅱ』 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989

参考文献

- | | |
|-----------|---|
| 向坂鋼二・辰巳均 | 『伊場遺跡遺物編3(本文編)』 浜松市教育委員会 1982 |
| 漆畠敏 | 『伊場遺跡遺物編4』 浜松市教育委員会 1987 |
| 中島郁夫 | 「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機2号』 1988 |
| 鈴木基之・平野吾郎 | 『原川遺跡Ⅰ』 静岡県埋蔵文化財研究所 1988 |
| 鈴木基之 | 『原川遺跡Ⅱ』 静岡県埋蔵文化財研究所 1989 |
| 後藤建一 | 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡 本文編』 静岡県教育委員会 1989 |

- 松井一明 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡 本文編』 静岡県教育委員会 1989
- 漆畠敏 「伊場遺跡遺物編5」 浜松市教育委員会 1990
- 鈴木基之・佐藤達雄 「原川遺跡Ⅲ」 静岡県埋蔵文化財研究所 1990
- 田辺昭三 「弥生時代の重要遺物 弥生土器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 川江秀孝 「古墳時代の重要遺物 須恵器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 佐藤達雄 「古墳時代の重要遺物 土師器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 佐藤達雄 「古墳時代の重要遺物 祭祀具」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 八木勝行 「歴史時代の重要遺物 須恵器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 辰巳均・佐野五十三 「歴史時代の重要遺物 土師器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 平野吾郎 「歴史時代の重要遺物 灰釉陶器の編年」『静岡県史資料編3』 静岡県 1992
- 佐藤達雄 「古墳時代集落における祭祀の変遷—静岡県日説遺跡を中心として—」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』 1993
- 佐藤由起男 「長頸壺の出現とその意義」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』 1993
- 鈴木敏則 「城山遺跡V」 浜松市文化協会 1993
- 中島郁夫 「東海地方東部における後期弥生土器の「移動」・「模倣」—「菊川様式」編ー」『転機4号』 1993

付表 土器觀察表

土器観察表の記載方法

番号

番号は遺物番号で発掘時に記録した順番に付してある。

遺構

遺構は遺物が出土した遺構名または出土した位置をいう。

法量

口縁部の径（口径）・器高・底部の径（底径）についての計測値で、単位はcmである。
ただし推定値は（ ）に、計測が不可能なものは「-」で示してある。

器種・形態

器種については明確なものだけを記した。

形態については特徴的なものだけを記した。

調整方法

調整方法・施紋方法の特徴的なものを記した。（R）は右回転、（L）は左回転を示す。

胎土

砂粒・雲母・長石・石英・赤色粒等が含まれているものについて記した。なお、砂粒等をほとんど含まないものについては「精製」と記した。焼成は良好・やや良の2段階で表現した。

色調

「新版標準土色帖」を判断の参考とした。

備考

接合情報・型式等を記した。

1. 弥生土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量 (cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|------|------|---------------------|--------------------|---|---------------------------------------|----------------------------|--------------|-----------------|
| | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 6001 | 第8号溝 | 長頸壺 (口縁部～胴部上半) | (8.3) - - | 直線的に内傾して立ち上がり、頸部で直立し口縁部で直線的に開き口唇部は丸める。 | 外面は斜位の細い櫛描紋 横位の区画紋、胴部内面横ナデ、頸部ヘラ削り。 | 砂粒少量 径0.5～3.0 | 良好 灰白色 | |
| 6002 | 第8号溝 | 受口口縁壺 | 8.6 21.0 7.8 | 平底の底部から下膨れする無花果形。頸部から口縁部は直線的に開いてから僅かに直立気味。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒多量 径0.5～4.0 | 良好 灰白色 | |
| 6003 | 第8号溝 | 受口口縁壺 (口縁部～胴部上半) | (9.2) - - | 内骨気味に内傾して立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲して直線的に短く開いている。 | 外面は頸部に磨きによる無紋帶、下位にRL単節の繩紋。内面に輪積痕。 | 砂粒やや多い 径0.5～2.0 赤色粒含 | 良好 にぶい橙色 | |
| 6004 | 第8号溝 | 長頸壺 (口縁部) | (8.8) - - | 僅かに外反気味に立ち上がり、口唇部を平坦に僅かに外傾させ、内側は肥厚している。 | 外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りにナデ調整が施される。 | 砂粒微量 径0.2～0.5 | 良好 灰白色 | |
| 6005 | 第8号溝 | 壺 (頸部) | - - - | 緩やかに外反し、器壁は10mmと厚い。 | 外面は上位から下位へ縱位のヘラ磨き、櫛状施具の横位・縱位の波状紋。 | 砂粒微量 径0.3～2.0 | 良好 褐色 | 頸部の最小径 6.3cm |
| 6006 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部) | 18.2 - - | 頸部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で僅かに内傾気味になり端部は平坦となる。 | 外面細いハケメ、頸部に横位の区画紋、内面羽状紋に横位の兜形沈繩紋。 | 砂粒やや多い 径0.5～4.0 | 良好 淡黄色 | |
| 6007 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部) | (18.8) - - | 外反して大きく開いて折返し口縁となる。 | 口縁部外側に櫛刺突羽状紋を連続して施し、内面横・斜位の細いハケメ。 | 砂粒やや多い 径0.5～1.5 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6008 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部～胴部上半) | 16.8 - - | 胴部は内傾して立ち上がり、頸部で緩やかに外反。口縁部は大きく開いて折返しとなる。 | 口縁部内面に羽状紋とボタン状円形浮紋、外面は頸部～胴部、連續刺突紋。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 6009 | 第8号溝 | 広口口縁壺 | (10.2) - - | 頸部が緩やかに外反し、口縁部にかけて大きく直線的に開いて折返しとなる。 | 口唇部は縱位の兜形沈繩紋、頸部は縱位のヘラ磨き、横位の連續刺突紋。 | 砂粒やや多い 径0.5～2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 6010 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部) | (15.6) - - | 内面に段を有し、大きく外反して端部を折返している。 | 端部はキザミと直線紋、外面は斜位、内面は横位のハケメ状直線紋。 | 砂粒微量 径0.5～2.0 | 良好 灰白色 | |
| 6011 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部) | - - - | 端部は折返し。 | 棒状浮紋が施されている。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | 良好 淡黄色 | |
| 6012 | 第8号溝 | 広口口縁壺 (口縁部) | - - - | 折返し口縁。 | 口唇部の下位に棒状施具によるキザミ。外面は櫛描き紋。内面はヘラ磨き。 | 砂粒やや多い 径0.5～2.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 6013 | 第8号溝 | 複合口縁壺 (口縁部) | (28.0) - - | 直線的に僅かに開いて立ち上がる | II縁部の外面に縱位の棒状浮紋を施す。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 灰白色 | |
| 6014 | 第8号溝 | 壺 (底部～頸部) | - - 6.7 | ややあげ底の底部から下膨れする無花果型の胴部、頸部は緩やかに外反している。 | 外面は斜位のハケメ、下位は横位のヘラ磨き。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 黄灰色 | 胴部最大径 21.0cm |
| 6015 | 第8号溝 | 壺 (胴部上半) | - - - | 直線的に内傾している。 | 外面は横・縱・斜位方向の沈線紋、内面は横位のハケメ。 | 砂粒微量 径0.5～7.0 | 良好 灰色 | |
| 6016 | 第8号溝 | 壺 (底部脇) | - - - | 直線的にやや開いて立ち上がる。 | 内面は櫛描きによる直線と刺突状の施紋がやや粗く見られる。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6017 | 第8号溝 | 壺 (胴部) | - - - | 下膨れする無花果形を呈すると思われる。 | 外面は斜位・縱位のハケメ、内面はナデ調整。黒斑が見られる。 | 砂粒やや多い 径1.0～3.0 | 良好 浅黄橙色 | 推定最大径 14.0cm |
| 6018 | 第8号溝 | 小型壺 (口縁部～胴部上半) | (9.0) - - | 球形と思われ、胴部から短い頸部で「く」字に屈曲、端部を折返している。 | 端部の下位はキザミ、外側は縱位のハケメ、内面は横ナデ調整。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 淡黄色 | |
| 6019 | 第8号溝 | 小型短頸壺 (口縁部) | (10.0) - - | 最大径が胴部にあり内骨気味に内傾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲、外反、端部は折返し | 端部に丸棒状施具によるキザミ。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 灰白色 | |
| 6020 | 第8号溝 | 台付壺 (口縁部～胴部上半) | (19.5) - - | 胴部から緩やかに内傾・内傾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに屈曲して外反している。 | 端部はキザミ、外面は斜位の粗いハケメ調整。 | 砂粒やや多い 径0.2～3.0 | 良好 浅黄橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量 (cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|------|-------|-----------------------|------------------|--|--|--------------------|--------------|-----------------------------------|
| | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 6021 | 第8号溝 | 台付甕 (口縁部～ 胴部上半) | (23.5) - - | 最大径は口縁部に有り、胴部は緩 やかに内彎した後、頸部で外反し て立ち上がる。 | 口唇部はキザミ、外面は 継・斜位のやや粗いハケ メ、内面は横位のハケメ。 | 砂粒少量 径0.5～5.0 | 良好 灰白色 | |
| 6022 | 第8号溝 | 台付甕 (口縁部～ 胴部) | (25.0) - - | 最大径は胴部中位に有り、内彎し て頸部で屈曲し、直線的に開いて 立ち上がる。 | 端部はキザミ、胴部は斜 位のやや粗いハケメ、頸 部は笠描の横位の直線紋。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6023 | 第8号溝 | 台付甕 (口縁部～ 胴部) | (22.0) - - | 胴部は内彎して立ち上がり、頸部 で屈曲して直線的に斜めに開いて いる。 | 端部はキザミ、外面は斜 位のハケメ、内面は横位 のヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒微量 0.5～1.0 | 良好 灰白色 | |
| 6024 | 第8号溝 | 甕 (口縁部) | (15.6) - - | 頸部から口縁部にかけて「く」字 に屈曲、端部は平坦で外傾してい る。頸部の内面に段を有す。 | 外面は直線紋帶、内面は 頭部にヘラ削り、口縁部 に横位のハケメ。 | 砂粒やや多い 径0.5～1.0 | 良好 灰黄色 | |
| 6025 | 第8号溝 | 小型甕 (口縁部) | (16.0) - - | 直線的な立ち上がりから頸部で「 く」字に屈曲して大きく外反。端 部は丸く僅かに肥厚している。 | 外面は斜位のやや粗いハ ケメ、内面は横位のハケ メが施される。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | 良好 橙色 | |
| 6026 | 第8号溝 | 甕 (口縁部) 破片 | - - - | 外反して開く。 | 端部は笠描き紋の下位に キザミ、外面は横・継位 の内面は横位の笠描き紋。 | 砂粒少量 径0.5～5.0 | 良好 灰白色 | |
| 6027 | 第8号溝 | 甕 (口縁部) 破片 | (19.6) - - | 頸部から口縁部にかけて「く」字 を呈し、端部は平坦。 | 外面は上位より横・斜・ 横位の櫛描紋、内面は横 位に笠描紋。 | 砂粒やや多い 径1.0～2.5 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 6028 | 第8号溝 | 台付甕 (台部) | - - - | ほぼ直線的に開いて据端部まで下 りている。空洞部は高い。 | 外面は継位の磨きが施さ れている。 | 砂粒やや多い 径0.5～3.0 | 良好 灰白色 | 据部径8.2cm |
| 6029 | 第8号溝 | 台付甕 (台部) | - - - | 直線的に開いている。 | 外面は継位のハケメ、内 面はナデが施されている。 | 砂粒少量 径0.5～3.0 | 良好 淡橙色 | 据部径7.0cm |
| 6030 | 第8号溝 | 台付甕 (接合部) | - - - | | 継位に棒状施具による押 引きの凹線が推定26条施 されている。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | やや良好 灰白色 | 接合部径6.2cm 使用時のススの付 着は見られない。 |
| 6031 | 第8号溝 | 台付甕 (台部) | - - - | 直線的にやや開いている。 | 外面は磨きが施されてい る。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | 良好 灰色 | |
| 6032 | 第8号溝 | 高坏 (脚部) | - - - | ほぼ直線的に開いて下りている。 | 接合部外面は櫛刺突羽状 紋に櫛刺突の区画紋、脚 部外面は継位のヘラ磨き。 | 砂粒少量 径0.5～3.0 | 良好 橙色 | |
| 6033 | 第8号溝 | 高坏 (脚部) | - - - | 直線的に開いて端部まで下りる。 | 据部の内・外面に指頭痕 が認められる。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | 良好 赤橙色 | 据部径7.0cm |
| 6034 | 第8号溝 | 高坏 (坏部) (脚部上半) | (19.8) - - | 坏部はほぼ直線的に開いて立ち上 がり、頸部で開きをやや強くし、 口縁部を折返す。 | 口唇部に櫛刺突のキザミ 外面は斜位の櫛描紋、内 面は磨き。 | 砂粒やや多い 径0.5～4.0 | 良好 灰白色 | 接合部径5.0cm |
| 6035 | 第8号溝 | 高坏 (脚部) | - - - | 直線的に開いて下り、脚端部を折 り曲げて段を付けている。 | 外面は継位のハケメ、内 の接合部にヘラ削り、下 位に磨き?が施される。 | 砂粒やや多い 径0.3～1.0 | 良好 淡赤橙色 | 据端部径10.0cm 残存部の器高 7.0cm |
| 6036 | 第8号溝 | 高坏 (脚部) | - - - | 空洞部高い。 | 横位に2条の細かい突帯 が走り、櫛刺突羽状繩紋 が施され、内面ナデ調整。 | 砂粒やや多い 径0.5～2.0 | 良好 灰白色 | 接合部下位径 4.7cm |
| 6037 | 第8号溝 | 高坏 (口縁部) | (29.0) - - | 突帯状の稜を有し大きく開いて外 反し、端部は折返し、いわゆる鶴 状口縁となっている。 | 端部には継位に連続刺突 紋?が施される。 | 砂粒 径0.5～3.0 | 良好 灰黄色 | |
| 6038 | 第8号溝 | 鉢 (頸部～ 口縁部) | (28.4) - - | 胴部上位の内彎気味から頸部で屈 曲して外反気味に開き、口縁部は 複合口縁となっている。 | 端部は櫛描直線紋、胴部 外面は斜位櫛描紋、内面 横位の櫛描紋にナデ調整。 | 砂粒少量 径0.5～2.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6039 | 第8号溝 | 有孔付鉢 | - - - | 緩やかに彎曲して立ち上がり、頸 部で僅かに外反気味となる。また 頸部に径5mm程の孔。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5～3.0 | 良好 橙色 | |
| 5635 | 第12号溝 | 長頸甕 (口縁部～ 頸部) | (9.2) - - | 頸部から口縁部にかけて緩やかに 外反して立ち上がる。 | 頸部外面に櫛齒状施具に よる連弧紋、頸部の内面 はヘラ削り後ナデ調整。 | 砂粒多い 径0.3～1.0 | 良好 橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量 (cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|--------------|-------|-----------------------|----------------------|--|--|--------------------|-------------|----------------------------------|
| | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 5642 | 第12号溝 | 長頸壺 (頸部) | 13.0 - - | 口縁部にかけて徐々に外反を強くして立ち上がっている。 | 内面の上部に指頭痕が認められる。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 淡黄色 | |
| 5648.1 | 第12号溝 | 小型壺 (底部~ 胴部下半) | - - 5.0 | 底部はあげ底となり胴部下半が膨れる無花果形を呈すると思われる | 内外面に横位のヘラ磨きが施される。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 灰色 | |
| 5636 | 第12号溝 | 壺 (底部) | - - (8.3) | 平底の底部から直線的に大きく開いて立ち上がっている。 | 内面はハケメ、外面は横位のナデが施されている | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 浅黄色 | |
| 5648.2 | 第12号溝 | 大型壺 | - - - | 胴部下半から直線的に内傾して頸部へ立ち上がっている。 | 頸部は突帯が横位に走りその上に櫛刺突が連続、細かいハケメを施す。 | 砂粒少量 径0.2~1.0 | 良好 橙色 | 推定最大径36.0cm 全体の1/2にスス? 付着 |
| 5630 | 第12号溝 | 台付壺 (台部) | - - - | ほぼ直線的に開いている。 | 内外面ともに斜位のやや粗いハケメ調整が施される。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 黄褐色 | 据部推定径8.0cm |
| 5625 | 第12号溝 | 台付壺 (台部) | - - - | ほぼ直線的に矧めに開いている。 | 外面に斜位のやや粗いハケメ、内面に横位のハケメ調整が施される。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 浅黄色 | 据部推定径7.7cm 外面に黒斑 |
| 5660 | 第12号溝 | 壺 (口縁部~ 胴部上半) | (26.6) - - | 胴部上半に最大径を持つ。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部はやや開いている。 | 口唇部はキザミ、外面は斜位のハケメ、内面は横・斜位のハケメに磨き。 | 砂粒少量 径0.6~3.0 | 良好 にぶい黄色 | |
| 5651 | 第12号溝 | 台付壺 | 20.4 - - | 胴部は直線的に開き、やや膨らみをもって彎曲し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し開く。 | 外面に継・斜位のハケメ、砂粒多い 内面は横位のハケメを施す。 | 砂粒多い 径0.5~4.0 | 良好 灰白色 | |
| 5640 | 第12号溝 | 壺 (口縁部~ 胴部上半) | (15.5) - - | 内彎して立ち上がり、頸部で緩やかに屈曲し、口縁部は斜めに開いて端部を丸めている。 | 摩滅のため不明。- | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 灰白色 | |
| 5629 | 第12号溝 | 高坏 (坏部) | (28.0) - - | 斜めに大きく開いて立ち上がり、口唇部で折り返している。 | 端部は連続のキザミとやや粗いハケメ、外面は横位に突帯と斜位のハケメ。 | 砂粒微量 径0.5~3.0 | 良好 灰白色 | |
| 5682 | 第12号溝 | 高坏 (柜部) | - - - | 脚部は柜部を屈折させている。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | 据部推定径12.2cm |
| 5641 5668 | 第12号溝 | 台付壺 (口縁部~ 胴部上半) | (27.0) - - | 緩やかに彎曲しながら立ち上がり頸部から口縁部にかけて屈曲気味に外反している。 | 口唇部は連続のキザミ、外面は継・斜位のハケメ 内面は横位のハケメ調整。 | 砂粒やや多い 径0.5~4.0 | 良好 灰白色 | 胴部推定最大径 29.0cm |
| 5698 | 第13号溝 | 壺 | (7.2) 11.2 5.0 | 平底の底部から張りのある胴部、頸部は緩やかにくびれ口縁部に向かってほぼ直線的に開く。 | 内面は横位・斜位のハケメ整、全体にナデ調整を施している。 | 砂粒多い 径0.5~3.0 | 良好 灰黄色 | |
| 5693 | 第13号溝 | 中型壺 | 10.2 26.7 5.8 | 底部はあげ底氣味で、胴部下位に最大径があり、口縁部はやや内彎氣味である。 | 外面に斜位のハケメ調整 胴部下位の一帯と頸部に磨きが施されている。 | 砂粒多い 径0.5~3.0 | 良好 暗灰黄色 | |
| 5703 | 第13号溝 | 台付壺 (台部) | - - - | 柜部が僅かに内彎して開き、端部は平坦に面取りしている。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~5.0 | 良好 赤褐色 | 据部径10.0cm 器壁0.8~1.0cmと 厚い。 |
| 6040 | 排水溝 | 長頸壺 (頸部) | (6.5) - - | やや細い頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がっている。 | 外面は継位のヘラ磨きが施されている。 | 砂粒やや多い 径0.5~4.0 | 良好 灰白色 | 頸部径3.5cm |
| 6041 | 排水溝 | 壺 (口縁部) | (10.3) - - | 緩やかに外反して開き、直線的な口縁部となっている。 | 外面は継、内面は斜位のハケメ、口縁部横ナデ調整、頸部は円形の刺突紋。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 灰色 | |
| 6042 | 排水溝 | 広口口縁壺 | (24.4) - - | 外反して大きく開き、口縁部は折返しとなっている。 | 端部は継位のキザミが施されていたと思われる。 | 砂粒多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | |
| 6043 | 排水溝 | 広口口縁壺 | (19.0) - - | 外反気味に大きく開き、折返し口縁となっている。 | 端部はキザミ、内面は櫛書き波状紋が施される。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6044 | 排水溝 | 壺 (底部) | - - 6.0 | あげ底の底部から外反気味に胴部下半が立ち上がっている。 | 底部の外面は丁寧な磨き 胴部の外面はハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.2~0.5 | 良好 灰色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|------|-------|---------------------|------------------|--|--|--------------------------------|-------------|--------------------------------------|
| | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 6045 | 排水溝 | 壺 (底部) | - - 6.8 | あげ底の底部から直線的に胴部下半が立ち上がっている。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒 径0.2~1.0多い 径5.0~7.0少量 | 良好 灰黄色 | |
| 6046 | 排水溝 | 壺 (底部) | - - 7.5 | 平底の底部から直線的に大きく開きながら胴部が立ち上がっている。 | 摩滅のため不明。 | 赤色粒や多い 径0.5~1.5 | 良好 浅黄褐色 | 胴部器壁3~4mm 底部外面に黒斑 |
| 6047 | 排水溝 | 台付壺 (口縁部~ 胴部) | (26.8) - - | 胴部から僅かに内彎気味に立ち上がり、頸部から緩やかに外反して直線的にやや開く口縁部となる。 | 胴部外面は斜位の直線紋 頸部~胴部内面はヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒やや多い 径0.2~1.5 | 良好 灰白色 | |
| 6048 | 排水溝 | 壺 (口縁部) | (19.0) - - | 直線的にやや開いて立ち上がり口縁部で外反している。 | 端部下位にキザミ、外面は斜位のハケメ状の施紋 内面は横位の施紋にナデ。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.5 | 良好 灰黃褐色 | |
| 6049 | 排水溝 | 壺 (台部) | - - - | 直線的に開き、空洞部は高い。 | 外面は継位のハケメに磨きが施され、内面は継・斜位のハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 にぶい橙色 | 据部推定径6.2cm |
| 6050 | 排水溝 | 台付壺 (接合部) | - - - | | 継位に丸棒状施具による押引きの凹線が26条施されている。 | 砂粒やや多い 径0.3~2.0 | 良好 明黄褐色 | 接合部径7.2cm 器壁1.0cmと厚い。 ススの付着なし。 |
| 6051 | K4-TP | 壺 (頸部) | - - - | 僅かに内彎気味に立ち上がっている。 | 外面に竹管による円形の連続刺突紋が1条横位に施されている。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 灰白色 | |
| 6052 | K4-TP | 壺 (胴部上半) | - - - | | 継位にハケメを施した後に、横位に5条の沈線紋が施されている。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 灰白色 | |
| 6053 | K4-TP | 壺 (底部) | - - 5.8 | ややあげ底気味の底部から外反気味に胴部下半が立ち上がるところから下膨れしていると思われる。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.2~1.0 | 良好 灰色 | |
| 6054 | K4-TP | 壺 (底部) | - - 6.0 | 平底の底部から直線的に立ち上げている。 | 外面は継位のハケメにナデ調整、内面は(L)のヘラ削りに横位のハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 6055 | K4-TP | 壺 (底部) | - - 7.0 | 底部の外面の中央部が扁平な半円状に窪んでいる。(ドーナツ形の底部) | 外面にはヘラ削りが施され、指頭痕が残っている。 | 砂粒 径0.2~1.5多い 径3.0~5.0少量 | 良好 灰黃褐色 | |
| 6056 | K4-TP | 壺 (口縁部) | (17.9) - - | 胴部から内彎して「く」字に頸部が屈曲している。 | 端部下位にキザミ、胴部外面に斜、頸部は継、口縁部内面は横位のハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~1.5 | 良好 灰黄色 | |
| 6057 | K4-TP | 高坏 (接合部) | - - - | | 外面は櫛刺突か櫛描きによる羽状紋、その中間に隆脊が1条横位に走る。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 浅黄褐色 | 接合部径4.5cm |
| 6058 | K4-TP | 高坏 (脚部) | - - - | 直線的に下りて裾部で「ハ」字に開いている。裾部の一部に片口状に返りが見られる。空洞部は高い。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.2~1.5 | 良好 浅黄褐色 | 据部推定径12.5cm |

2. 古墳時代の土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|--------|--------|-----|--------------------|-------------------------|--|------------------------------------|----------------------------|-----------------------|--------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 4805 | 第1号住居址 | 須恵器 | 壺身 | (7.8) (3.0) - | 底部からやや丸味を帯びた弓張り状となり、口縁部を内傾させ低く立ち上がる。 | 底部外面はヘラ切り未調整。全体にナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 青灰色 | |
| 4824 | 第1号住居址 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (13.3) - - | 頸部から外反して立ち上がる。頸部の内面に段を有す。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~2.0 雲母含む | 良好 淡赤橙色 | |
| 4801 | 第1号住居址 | 土師器 | 台付壺 (口縁部) | (34.0) - - | 「く」の字に屈曲する頸部から外反して立ち上がる。口縁部で直立気味で、口唇部を丸める。 | 全体に丁寧な調整を施す。 | 砂粒・金雲母 石英多い 径0.5~3.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 4806 | 第1号住居址 | 土師器 | 台付壺 (台部) | - - - | 裾はほぼ直線的に外に開く。 | 全体に丁寧な調整を施す。 | 砂粒・金雲母 石英多い 径0.5~3.0 | 良好 にぶい橙色 | 台部付け根径 9.2cm。 スス付着 |
| 4836 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 | 10.6 | 底部は丸味を帯びる半円球を呈す。 | 外面に指頭痕が残る。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 | |
| 4837 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 | 4.8 | | | | 橙色 | |
| 5545 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 | 12.2 3.8 - | 丸味を帯びた底部から内傾して立ち上がる。端部をやや細く丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 赤色含む | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 4256 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 | (12.0) 4.4 - | 底部からやや丸味を帯びて立ち上がる。口唇部をやや細く丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 4952 | 第2号住居址 | 土師器 | 模倣壺 | (12.0) 5.0 - | 平底気味の底部から弓張り状を呈し、口縁部は内傾して立ち上がる。端部はやや細く尖る。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 5147.1 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 | 16.8 28.5 5.5 | 頸部から口縁部は「コ」字状。頸部の内面に稜を有す。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 浅黄色 | 胴部下半にスス付着。 胴部に輪積痕。 |
| 5147.2 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 (底部~胴部下半) | - - 5.6 | 僅かに内傾気味に開きながら立ち上がる。長胴型と思われる。 | 胴部外面に継位のハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 金雲母含む | 良好 灰黄褐色 | 胴部下半にスス付着。 |
| 5523 | 第2号住居址 | 土師器 | 把手付壺 | (23.0) 29.0 10.3 | 底部から口縁部にかけて直線的に開きながら立ち上がる長胴型。把手は角状。 | 胴部の外面に継位・斜位のハケメ調整を施す。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 底部脇の内外面にスス付着。 |
| 4949 | 第2号住居址 | 土師器 | 把手付鉢 (口縁部~胴部上半) | (15.2) - - | 胴部は直線的に開きながら立ち上がる。口縁部で僅かに開きを強くす。端部は細く尖る。 | 丁寧なナデ調整と思われる。 | 砂粒微量 径0.5~1.5 | 良好 橙色 | |
| 4950 | 第2号住居址 | 土師器 | 壺 (胴部下半) | - - - | 緩やかに内傾し開きながら立ち上がる。底部はやや丸味を帯びた平底状を呈す。器壁やや厚。 | 外面は継位のやや粗いハケメ、底部はナデ、内面は横位のハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 にぶい橙色 | 器壁0.8cm |
| 5293.1 | 第3号住居址 | 須恵器 | 壺蓋 | 12.1 4.1 - | 全体に半円球を呈す。口縁部を垂直に下ろす。端部を丸める。天井部と口縁部の境に沈線の稜。 | 天井部の外面の1/3がヘラ削りされ、他はナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5 | 良好 明青灰色 | |
| 5293.2 | 第3号住居址 | 須恵器 | 壺蓋 | (12.0) (4.0) - | 天井部は弓張状。口縁部を垂直気味に下ろす。天井部と口縁部の境に沈線。 | 天井部外面にヘラ切り痕有。1/2がヘラ削り。他はナデ調整。ヘラ記号X | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 オリーブ灰色 | |
| 5297 | 第3号住居址 | 須恵器 | 壺蓋 | 12.1 4.1 - | やや丸味のある弓張り状の天井部 口縁部で垂直に下り、端部をやや細く丸める。 | ヘラ切り未調整な天井部 はヘラ削りが1/2。残りはナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~4.0 | 良好 灰白色 | |
| 5298 | 第3号住居址 | 土師器 | 壺 | 12.0 4.5 - | 丸味を帯びた底部から内傾しながら立ち上がる。口縁部で直立気味 端部を尖らせる。 | わずかに内面に赤彩を施した痕跡。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5292 | 第3号住居址 | 土師器 | 壺 | 19.2 31.1 5.6 | 最大径を口縁部に持つ長胴型。頸部外面に横位のヘラ調整。胴部外面は継位のやや粗いハケメ。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.5 | やや良好 にぶい黄橙色 | 外面全体にスス付着。 胴部に輪積痕。 | |
| 5294 | 第3号住居址 | 土師器 | 壺 | 14.0 (22.0) (7.0) | 最大径が胴部上半にある長胴型。頸部から口縁部は「く」字を呈し端部は肥厚気味み丸める。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | やや良好 にぶい黄橙色 | 胴部に輪積痕。 | |
| 5150 | 第3号住居址 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (15.0) - - | 胴部は内傾・内傾して立ち上がる 頸部内面に僅かな稜を有して屈曲 口縁部は僅かに外反。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 黄橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|-----------------------|--------|-----|-------------|----------------------|--|---------------------------------|-------------------------------|--------------|-------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 969 | 第3号住居址 | 土師器 | 把手付瓶 | 22.6 30.6 10.5 | 底部から直線的に立ち上がる長胴型。把手は角状。 | 外面は縦位・斜位のハケメ調整。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 黄橙色 | |
| 5395 5396 | 第3号住居址 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 脚部は直線的に開き、据部は「ハ」字状。空洞部は高い。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 5295 | 第3号住居址 | | 土製支脚 | - - | | 磨滅のため不明。 | 鐵錫質含む。 | 良好 浅黄色 | |
| 5410 | 第4号住居址 | 須恵器 | 坏身 | (12.0) 4.5 - | 底部はやや丸味を帯びた弓張り状 口縁部は内傾し、口縁部上半を直立気味に立ち上げる。 | 底部外面はヘラ切り未調整で、1/2にヘラ削りを施す。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | 最大径14.0cm |
| 5189 | 第4号住居址 | 須恵器 | 坏身 | (12.0) - - | 口縁部は内傾する。 | 外面にヘラ削り。 | 砂粒微量 径0.5 | 良好 暗青灰色 | 最大径15.0cm 器壁薄い。 |
| 5190 | 第4号住居址 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 坏部は平底状。脚部は空洞部が高く坏部まで達する。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5524 5469 5484他 | 第5号住居址 | 土師器 | 高坏 | (16.2) - - | 坏部は稜を有す。口縁部は直線的に開きながら立ち上がる。 | 底部外面に指頭痕。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 坏部器高5.3cm |
| 5554 | 第5号住居址 | 土師器 | 瓶 (胴部下半) | - - (10.0) | ほぼ直線的に立ち上がる直胴型。 | 外面にナデ調整。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 内面全体にスス |
| 5012 | 第5号住居址 | 土師器 | 壺 (底部) | - - (7.0) | ややあげ底気味の底部から直線的に大きく開いて立ち上がる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 明黄褐色 | |
| 5574 | 第5号住居址 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (16.5) - - | 頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部にかけて器壁が薄くなる。 | 内面にナデ調整。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | |
| 5547 | 第5号住居址 | 土師器 | 壺 (胴部下半) | - - - | 胴部はほぼ直線的に立ち上がる。 | 外面は縦位・斜位のやや粗いハケメ、内面は横位のやや粗いハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5575 | 第5号住居址 | 土師器 | 壺 (底部) | - - - | 把手根元を僅かに凸状にして胴部と接合させている。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒微量 径0.5 | 良好 黄橙色 | |
| 5419 | 第5号住居址 | 土師器 | 瓶 (把手) | - - - | やや丸味を帯びた底部から僅かに内畠気味に立ち上がる。胴部は球状を呈する。 | 外面に斜位のハケメ調整 | 砂粒微量 径0.5~5.0 | 良好 橙色 | |
| 5289 | 第6号住居址 | 須恵器 | 坏身 | (12.5) 4.2 - | 底部は丸味を帯びた弓張り状。口縁部は内傾してやや低い立ち上がりとなる。端部は丸くなる。 | 外面は2/3がやや粗いヘラ削り調整。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 灰色 | 推定最大径 14.5cm |
| 4289 4290 | 第6号住居址 | 須恵器 | 無蓋高坏 | (13.0) - - | 外反が大きく、きわめて浅い。2条の稜線の間に櫛描波条紋。脚部胴部に三方向のすかし窓。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 暗青灰色 | |
| 5288 | 第6号住居址 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 据部は「ハ」字状に開く。脚部の空洞部は高くなる。 | 胴部外面に赤彩痕。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | 据端部径11.8cm |
| 4285 5160 | 第6号住居址 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 脚部は「ハ」字状に開く。脚部の端部はつまむように引き出している。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | 脚部高4.0cm |
| 5014 | 第7号住居址 | 土師器 | 壺 (底部) | - - (5.0) | 胴部が直線的に立ち上がる長胴型を呈す。 | 胴部外面は縦位・斜位のハケメ調整、内面は斜位のハケメ調整。 | 砂粒やや多い 金雲母・赤色粒 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | 胴部に輪積痕。 外側に黒斑状にスス付着。 |
| 5585 | 第8号住居址 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (18.0) - - | 僅かに外反気味に開いて立ち上がる。口縁部を丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 口縁部に黒斑。 |
| 5261 | 第9号住居址 | 須恵器 | 坏身 | (11.0) - - | 口縁部の立ち上がりが低く、内傾し、受部は水平に伸びる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 青灰色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|----------------|---------|-----|------------|------------------------|---|--------------------------------|----------------------------|---------------|---------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 3685 | 第9号住居址 | 須恵器 | 壺身 | - - - | 底部は弓張り状を呈す。口縁部は内傾し、受部は上方へ短く伸ばしている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 傾0.5 | 良好 青灰色 | 推定最大径 15.5cm |
| 5431 | 第9号住居址 | 土師器 | 壺 | 13.0 - - | 底部は弓張り状を呈し、内傾して立ち上がり、僅かな移を持つ。口縁部は直立気味である。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 4658 | 第9号住居址 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (19.5) - - | 頸部は「く」字状。口縁部は直線的に開く。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 3655 | 第9号住居址 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面は扁平な指円形で、上面は凹状。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5120 | 第10号住居址 | 須恵器 | 壺蓋 | 11.6 4.3 - - | 底部はやや弓張り状だが全体は半円球。口縁部をやや内傾気味に下ろす。天井部と口縁部境に稜。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~5.0 | 良好 暗オリーブ灰色 | 全体的にススけている。 |
| 5118 | 第10号住居址 | 須恵器 | 壺身 | 10.4 3.7 - - | 底部はやや弓張り状で、口縁部は内傾し低く立ち上がる。端部は丸くおさめる。 | 天井部の1/3にヘラ削り。 | 砂粒微量 径0.5~3.0 | 良好 暗オリーブ灰色 | |
| 5124.1 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 11.2 5.0 - - | 丸味を帯びた底部から半円球に立ち上がり、口縁部を直立させ端部を尖らせる。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 5532 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 10.2 4.0 - - | やや丸味を帯びた底部。口縁部をやや内傾気味に下ろしている。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶色砂粒 やや多い 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 5122 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 11.4 4.4 - - | 底部はやや弓張り状だが全体は半円球。口縁部をやや内傾気味に下ろす。天井部と口縁部境に稜。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5123 5124.2 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 11.8 4.0 - - | 底部はやや弓張り状だが全体は半円球。口縁部をやや内傾気味に下ろす。天井部と口縁部境に稜。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 5121 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 11.8 4.0 - - | やや丸味を帯びた底部から内傾しながら立ち上がり、口縁部で直立気味となり端部を尖らせる。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 5533 | 第10号住居址 | 土師器 | 横倣壺 | 12.0 3.6 - - | やや丸味を帯びた底部から内傾しながら立ち上がり、口縁部を内傾させて端部を尖らせる。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 5294 | 第10号住居址 | 土師器 | 甕 | - - - - | ほぼ直線的に立ち上がる長胴型。 | 胴部外面は継位・斜位のハケメ、内面は横位・斜位のハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 金雲母含む | 良好 にぶい黄橙色 | 胴部最大径17.0cm 胴部外面にスス付着。 |
| 5126 5127他 | 第10号住居址 | 土師器 | 瓶 (口縁部) | (20.0) - - - | 直線的に立ち上がる直胴型。 | 外面は継位のハケメ調整。 | 赤色粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 黄橙色 | |
| 5135.1 | 第10号住居址 | 土師器 | 碗 | 15.0 9.5 - - | やや丸味を帯びた底部から内傾しながら立ち上がり、口縁部で内傾して端部を細く丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 赤色粒含む | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5125 | 第10号住居址 | 土師器 | 脚付碗 | 11.5 14.2 - - | 壺部は丸味を帯びて内傾し立ち上がる。脚部は胴部にやや膨らみを持ち根の端部を水平に引き出す。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶色砂粒 やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | |
| 5141 | 第10号住居址 | 土師器 | 壺 | 18.0 25.2 - - | やや丸味を帯びた底部から内傾しながら立ち上がり、頸部が「く」字を呈す。口縁部を細く丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~5.0 | 良好 黄橙色 | |
| 5135.2 | 第10号住居址 | 土師器 | 瓶 (把手) | - - - - | 形態は角状。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 黄橙色 | |
| 5135.3 | 第10号住居址 | 土師器 | 瓶 (把手) | - - - - | 形態は角状。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5424 | 第10号住居址 | | 土製支脚 | - - - - | 原形は長方体と思われる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 繊維を含む。 | 良好 にぶい黄橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) 口径 器高 底径 | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|----------------------------|---------|-----|--------------|---------------------------|---|--------------------------------|----------------------------|--------------|-------------------|
| | | | | | | | | | |
| 5329 | 第11号住居址 | 須恵器 | 壺身 | (13.0) - - | 口縁部を内傾させ、上半を垂直に高く立ち上げて端部を少し屈曲させ段の名残を示して丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5 | 良好 明青灰色 | |
| 1255 | 第4号土坑 | 土師器 | 甕 (口縁部) | (21.0) - - | 頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がり、端部は僅かに肥厚して直立気味となる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 1168 | 第4号土坑 | 土師器 | 甕 (口縁部) | (21.0) - - | 頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がり、端部は僅かに肥厚して直立している。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~1.0 | 良好 にぶい褐色 | 器壁0.2~0.3cm |
| 2623 | 第5号土坑 | 須恵器 | 壺身 | 9.8 3.6 - | 底面がやや平底気味であるがほぼ半円球を呈し、口縁部は垂直に立ち上がる。 | 口縁部は横ナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 暗緑灰色 | |
| 5497 | 第12号土坑 | 須恵器 | 提瓶 | - - - | 肩に鉤形の把手を付ける。 | 胴部は同心円の細いカキメとヘラ削り調整が施される。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 青灰色 | 胴部の推定径 15.0cm |
| 5493 | 第12号土坑 | 土師器 | 壺 | (13.0) 4.3 - | 底部は丸味を帯びた弓張り状、口縁部で直立し、端部は内傾させている。 | 外面は回転のヘラ削りによる稜線状の沈線が残る。 | 砂粒少量 径0.5~6.0 | 良好 灰白色 | |
| 5491 | 第12号土坑 | 土師器 | 高壺 | (16.2) 12.7 10.0 | 壺部は浅く、稜を有し、外反して大きく開く。脚部は長脚で、直線的に「ハ」字に開く。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5498 | 第12号土坑 | 土師器 | 模倣高壺 | (14.3) 7.2 - | 壺部はやや浅い碗形を呈し、口縁部はやや外反気味。脚部は接合部から「ハ」字に開く。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 5494 5496.1 | 第12号土坑 | 土師器 | 模倣高壺 | (13.0) 6.8 - | 壺部はやや浅く、口縁部は僅かに外反気味。脚部は接合部から「ハ」字に開く。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 橙色 | |
| 5500 | 第12号土坑 | 土師器 | 模倣高壺 (脚部) | (14.0) - - | 壺部はやや浅い碗形を呈し、口縁部はやや外反気味。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 黄橙色 | |
| 5496.2 | 第12号土坑 | 土師器 | 模倣高壺 (底部) | - - - | 脚部は接合部から「ハ」字状に開く。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | |
| 5577 | 第12号土坑 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 壺部の接合部から直線的に下り、据部で「ハ」字状を呈す。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 大粒少量 | 良好 黄橙色 | 据端部の推定径 10.0cm |
| 5576 | 第12号土坑 | 土師器 | 甕 (把手) | - - - | | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | |
| 5284.1 5285.1 | 第13号土坑 | 土師器 | 模倣高壺 | 12.3 8.3 - | 壺部は深く胴部は丸味を持つ。据部は壺底部より「ハ」字に広がる空洞部高い。 | 磨滅のため不明。 | 黒色砂粒 やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5284.2 5285.2 5287.1 | 第13号土坑 | 土師器 | 甕 | (19.0) - - | 頸部は「く」字に緩やかに屈曲。口軒部は丸める。胴部は緩やかに内擣し立ち上がる。 | 口縁部内面は横位のハケメ調整、胴部外表面は斜位のハケメ調整。 | 砂粒多い 径0.5~1.0 | 良好 明赤褐色 | |
| 5287.2 | 第13号土坑 | 土師器 | 甕 | 19.5 22.5 7.6 | 底部～胴部下半まで直線的に開き立ち上がる。口縁部からは直線的に立ち上がる。把手は角状。 | 外面は縱位のハケメ調整、内面は横位のハケメ調整。 | 黒・茶色砂粒 やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | |
| 5284.3 5287.3 | 第13号土坑 | 土師器 | 鉢 | 18.3 7.2 9.5 | 半底の底部から直線的に開き立ち上がる。口縁部は直立気味で、端部を尖らせる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5285.3 5287.4 | 第13号土坑 | 土師器 | 甕 | 13.6 15.3 - | やや丸味を帯びた底部から内擣して立ち上がる。頸部から口縁部にかけて屈曲して外反する。 | 磨滅のため不明。 | 黒・白色粒 やや多い 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5614 | 第11号溝 | 土師器 | 模倣壺 (口縁部) | (13.3) - - | 弓張り状と思われる底部から立ち上がり、口縁部に稜を有してやや内傾している。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.5~4.0 | 良好 橙色 | 推定最大径14.3cm |
| 5705 | 第11号溝 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 脚部は僅かに膨らみ気味となるがほぼ直線的に下り、据部で大きくラッパ状に引き出している。 | 空洞部はヘラ削り痕が明瞭に残る。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | 据端部径14.1cm |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|--------|-------|-----|-------------------|-------------------|---|----------------------------|---------------------|--------------|-------------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 5602.1 | 第11号溝 | 土師器 | 壺 | 20.0 20.4 - | 丸味のある底部から球形状に立ち上がり、最大径は胸部中位。頸部で「く」字、口縁部は開き気味。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5601 | 第11号溝 | 土師器 | 壺 (口縁部) | (17.0) - - | 頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がり、端部は直立するようにやや細く丸めている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5602.2 | 第11号溝 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面形状は扁平な円形。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 5613 | 第11号溝 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面形状は角状。上面は比較的大きく窪んでいる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 5609 | 第11号溝 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面形状は扁平な円形。 | 接合面にヘラの刺突痕が残る。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 5683 | 第12号溝 | 土師器 | 手捏ね坏 | (8.8) 4.7 - | 底部から半円球状を呈し、口唇部で僅かに肥厚する。 | 底部内面を中心に指頭痕が、外面には黒斑が認められる。 | 砂粒少量 形0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 5689 | 第12号溝 | 土師器 | 高坏 | 15.8 12.5 - | 坏部下半で稜を作つて折れ曲がり僅かに外反し、斜めに立ち上がる。脚部はエンタシス状。 | 内面にしほり目が認められる。 | 赤色粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | 裾部径9.0cm |
| 5685 | 第12号溝 | 土師器 | 高坏 (坏部) | (20.3) - - | 坏部下半で稜を作つて折れ曲がり僅かに外反し、斜めに大きく立ち上がっている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 浅黄色 | |
| 5687.1 | 第12号溝 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 胸部はエンタシス状、空洞部は高い。 | 内面にしほり目は認められない。 | 砂粒少量 径0.5~4.0 | 良好 黄橙色 | 裾部推定径11.7cm |
| 5626 | 第12号溝 | 土師器 | 高坏 (脚部) | - - - | 短めの脚部は裾部にかけて「ハ」字に開く。空洞部は高い。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5688 | 第12号溝 | 土師器 | 高坏 (脚据部) | - - - | 裾部を外に大きく引き出す。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 裾部推定径14.0cm |
| 5680 | 第12号溝 | 土師器 | 小型埴 | 6.4 6.7 3.1 | 胸部半ばに最大径を持つ球形、口縁部は逆「ハ」字に開いている。 | 外面に指頭による調整痕。胸部下半に黒斑。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 にぶい橙色 | 胸部最大径7.0cm |
| 5679 | 第12号溝 | 土師器 | 小型埴 | - - 4.2 | 胸部半ばに最大径を持つ球形、底部はあげ底状。 | 底部の外面は指頭による調整。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 明赤褐色 | 胸部最大径8.2cm |
| 5682 | 第12号溝 | 土師器 | 小型埴 (口縁部~胸部上半) | (7.8) - - | 胸部半ばに最大径を持つ球形、口縁部は逆「ハ」字に開き立ち上がっている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5 | 良好 にぶい橙色 | 胸部最大径9.4cm |
| 5674 | 第12号溝 | 土師器 | 小型壺 (底部) | - - 4.0 | 底部は厚みを持たせた平底、胸部は球形状。 | 底部内面に指頭痕。 | 赤色粒やや多い 径0.2~1.5 | 良好 橙色 | 推定最大径9.4cm |
| 5687.2 | 第12号溝 | 土師器 | 小型壺 (頸部~胸部上半) | - - - | 胸部半ばに最大径を持つ球形。 | 胸部内面に指頭痕。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 にぶい黄橙色 | 胸部最大径9.5cm |
| 5687.3 | 第12号溝 | 土師器 | 小型壺 (頸部) | - - - | 口縁部は直線的にやや外に開き、胸部は球形。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 浅黄橙色 | 頸部推定径7.0cm |
| 5681 | 第12号溝 | 土師器 | 小型壺 | - - - | 胸部半ばに最大径を持つ球形。 | 胸部下半外面に指頭痕、内面はハケメ調整。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 5632 | 第12号溝 | 土師器 | 壺 | - - - | 大型の壺で、丸味を帯びた底部から球形状を呈し、底部の外面は凸状の高台状となる。 | 外面に輪積み痕。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 にぶい橙色 | 高台状の底径5.7cm 胸部の推定最大径28.5cm |
| 5554 | 第12号溝 | 土師器 | 瓶 (把手) | - - - | 断面形状は角状。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|--------------------|------|-----|-------------|-----------------------|---|--|-----------------------------|--------------|------------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 6059 | 第8号溝 | 土師器 | 模倣壺蓋 | 12.0 4.7 - | 全体に半円球を呈し、僅かな稜を設けている。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶砂粒多い 径0.1~1.0 | 良好 にぶい赤褐色 | |
| 6060 | 第8号溝 | 土師器 | 壺 | 12.0 4.5 - | 平底気味の底部から緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は直立している。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶砂粒少量 径0.2~1.0 | 良好 にぶい黄褐色 | |
| 6061 | 第8号溝 | 土師器 | 壺 | (12.0) 3.5 - | やや丸味を帯びた底部から湾曲して立ち上がり、口縁部は直立気味になり端部を尖らせる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.2~1.5 | 良好 橙色 | |
| 6062 | 第8号溝 | 土師器 | 壺 | (12.8) (4.0) - | やや丸味を帯びた底部から内彎して立ち上がり、口縁部は直立している。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒や多い 径0.1~1.0 | 良好 にぶい橙色 | |
| 6063 | 第8号溝 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 長脚で直線的に下り、裾部で大きく外へ引き出している。空洞部は高い。 | 空洞部にヘラ削り痕。 | 砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | 裾部径11.4cm 残存部器高9.4cm |
| 6064 | 第8号溝 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 直線的に下り裾部で「ハ」字に開く。 | 壺部と接合部に斂状施具による刺突が見られる。 | 砂粒少量 径0.2~1.0 | 良好 灰色 | 裾部推定径10.8cm |
| 6065 | 第8号溝 | 土師器 | 甕 | (15.6) 20.2 6.0 | 平底の底部からほぼ直線的に立ち上がり、最大径が肩部にある直胴形。頸部～口縁部は「コ」字状。 | 外面は対位のハケメ、内面は横・斜位の細かいハケメ。 | 黒砂粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 にぶい橙色 | 胴部中位に輪積痕・指痕。 |
| 6066 | 第8号溝 | 土師器 | 甕 (口縁部) | (19.0) - - | 頸部～口縁部は「コ」字状を呈し口縁部に最大径を有する直胴形。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 浅黄色 | 胴部器壁 0.3~0.4cm 外面にスス付着 |
| 6067 | 第8号溝 | 土師器 | 瓶 | (20.4) - - | 直線的に口縁部まで立ち上がる直胴形。把手の断面は台形状。 | 内面は斜・横位のハケメ 調整、外面には輪積痕。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 にぶい橙色 | 残存する器高 25.0cm |
| 6068 | 第8号溝 | 土師器 | 瓶 (胴部下半) | - - (9.6) | 底部から直線的に立ち上がる直胴形で、把手の断面は台形状。 | 胴部外面に輪積痕。 | 砂粒やや多い 径0.2~1.5 赤色粒含む | 良好 にぶい黄褐色 | 底部内面にスス付着 |
| 4438 | G-5 | 須恵器 | 壺蓋 | - - - | 天井部から丸味を持ち口縁部との境に僅かに沈線化した稜がある。 | 天井部の外面1/2にヘラ削り、内面は渦巻き状のヘラ削りの後ナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | |
| 4317 | B-7 | 須恵器 | 壺蓋 | 8.8 3.5 - | 宝珠状のつまみが付く。天井部は弓張り状。 | 天井部は渦巻き状に(L)のヘラ削り調整を施す。かえり付き。 | 精製 | 良好 灰白色 | 最大径11.3cm |
| 1851 | H-5 | 須恵器 | 壺身 | (13.8) 3.8 - | 弓張り状の底部から口縁部は直立気味に立ち上がり、端部を丸めている。 | 外面は1/2がヘラ削りにナデ調整が施されている。 | 砂粒微量 径0.5~3.0 | 良好 青灰色 | 推定最大径15.5cm ヘラ記号「サ」 |
| 1450 | K-3 | 須恵器 | 壺身 | (11.5) - - | 弓張り状の底部から口縁部は僅かに内彎気味となり、端部を丸めている。 | 外面は1/2がヘラ削りにナデ調整が施されている。 ノタ目が認められる。 | 砂粒微量 径0.5~3.0 | 良好 灰色 | 推定最大径13.5cm |
| 4316 | B-7 | 須恵器 | 壺身 | 8.5 3.1 - | 底部はやや丸味を帯びた弓張り状となり、口縁部は内傾して立ち上がる。端部を丸める。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | 最大径10.0cm ヘラ記号「×」 |
| 825 | B-7 | 須恵器 | 壺身 | 7.7 3.2 - | 底部は弓張り状となり、口縁部は内傾して低く立ち上がり、端部を丸める。 | 渦巻き状に(L)のヘラ削り 調整。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 最大径9.7cm |
| 3756 | F-5 | 須恵器 | 壺身 | 8.5 3.8 - | 底部はやや丸味を帯びた弓張り状を呈し、口縁部は内傾して立ち上がっているが受部より低い。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | 最大径11.0cm |
| 211 | B-9 | 須恵器 | 壺身 | 8.6 4.0 - | 底部は弓張り状となり、口縁部は内傾しているが、受部より低い。端部を丸める。 | 摩滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | 最大径10.4cm ヘラ記号「-」 |
| 184 185 187他 | E-8 | 須恵器 | 壺身 | (11.8) - - | 胴部～口縁部は直線的に開きながら立ち上がる。端部は僅かに外反気味につまんで細く丸める。 | ミズビキ成形で丁寧な作り。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | |
| 508 | D-8 | 須恵器 | 甕 (口縁部) | 7.0 - - | 頸部～口縁部にかけて緩やかに外し、端部は三角形状の断面となっている。 | 頸部には横位に2条の沈線が施されている。 | 砂粒微量 径0.5~3.0 | 良好 灰白色 | 残存する器高5.7cm 内外面に自然釉 |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|---------------|------|-----|-----------|----------------------|--|-------------------------------------|-----------------------------|--------------|---------------------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 4365 | D-6 | 須恵器 | 壺 (底部) | - - - | 「ハ」字状に突き出るよう高台が付いている。胴部はほぼ直線的に開いて立ち上がる。 | 胴部の外面はヘラ削りがやや粗く施されている。 | 砂粒少量 径0.5~3.0 | 良好 灰白色 | 高台部推定径9.7cm 内外面に自然釉 器壁0.8~1.0cm |
| 1505 | K-3 | 須恵器 | 短頸壺 | - - - | 平底の底部から内縁気味に開きながら立ち上がり、肩部~頸部にかけて内傾し「く」字気味に屈曲。 | 底部外面~胴部の1/3までヘラ削り、他はナデ調整。肩部に2条の沈線紋。 | 砂粒緻密 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | 最大径16.0cm |
| 1750 | I-4 | 須恵器 | 平瓶 | - - - | 底部は内彎して立ち上がり、肩部は緩やかに丸味を帯び、頸部から直線的に直立気味に立ち上がる。 | 外面は胴部下半にヘラ削り。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 オリーブ灰色 | 胴部最大径14.8cm 残存部器高16.0cm 肩部に自然釉 |
| 3576 | C-8 | 土師器 | 模倣壺蓋 | (15.0) 4.2 - | 天井部は弓張り状を呈し緩やかに湾曲しながら口縁部に下り、弱い稜を有している。 | 磨滅のため不明。 | 赤・黒色粒 やや多い 径0.2~2.0 | 良好 橙色 | |
| 4313 | B-7 | 土師器 | 壺 | 10.5 4.3 - | やや丸味のある底部からほぼ直立気味に口縁部が立ち上がっている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 1594 | K-3 | 土師器 | 壺 | (12.2) 4.2 - | やや丸味を帯びた底部から緩やかに湾曲口縁部で直立している。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶色粒 やや多い 径0.2~1.0 | 良好 にぶい褐色 | |
| 3109 | E-7 | 土師器 | 壺 | (13.0) 3.9 - | 平底気味の底部から緩やかに湾曲して開きながら口縁部となる。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 橙色 | |
| 3107 | E-7 | 土師器 | 壺 | (14.0) 3.7 - | 平底気味の底部から緩やかに湾曲した後には口縁部で直立気味となっている。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.2~1.0 | 良好 にぶい褐色 | |
| 3479 | D-7 | 土師器 | 壺 | (14.6) - - | 緩やかに湾曲した後に口縁部で直立気味となり、箱形に近い形状を呈している。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.5~2.0 | 良好 明褐色 | |
| 3467~ 3475 | H-5 | 土師器 | 把手付鉢 | (14.5) 6.3 - | 丸味を帯びた底部~胴部下半に屈曲部を有して直線的に開き立ち上がる。把手の断面は扁平な楕円形。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 赤色粒含む | 良好 橙色 | |
| 2563 | K-3 | 土師器 | 模倣高壺 | (13.4) (8.0) - | 壺部は底部から内彎して立ち上がり、口縁部を外反させた碗形、裾部は「ハ」字状に開く。 | 磨滅のため不明。 | 茶色粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 2583 | J-3 | 土師器 | 模倣高壺 | (13.0) (7.0) - | 壺部はやや丸味を帯びた底部から緩やかに湾曲して口縁部で直立。裾部は「ハ」字状。 | 磨滅のため不明。 | 茶色粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | 裾部径9.0cm |
| 5502 | K-4 | 土師器 | 高壺 | 14.7 (11.0) - | 壺部は稜を有し、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。裾部は「ハ」字状。空洞部は高い。 | 外面はミガキ調整。 | 砂粒緻密 径0.5 | 良好 橙色 | 裾部径10.0cm 外面に黒斑。 |
| 4972 | B-8 | 土師器 | 壺 | 13.3 19.4 - | 最大径は胴部中位にあり、丸味のある底部から球胴形を呈し、頸部で緩やかに外反して立ち上がる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~5.0 | 良好 橙色 | |
| 2630~ 2670 | H-4 | 土師器 | 甌 | - - 10.5 | 底部から直線的にやや開いて立ち上がる直胴形。 | 外面は継位のハケメ、内面は横・斜位のハケメ。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 明黃褐色 | |
| 4982 | B-8 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面は台形状で、比較的小型。先端が斜め上方へ引き出されている。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒少量 径0.5 | 良好 浅黄橙色 | |
| 4711.1 | C-9 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面は台形状で、比較的小型。先端が斜め上方へ引き出されている。 | 磨滅のため不明。 | 暗赤色粒少量 径0.5~1.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 4711.2 | C-9 | 土師器 | (把手) | - - - | 断面は台形状。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒多い 径0.3~1.0 | 良好 浅黄橙色 | |
| 6069 | 排水溝 | 須恵器 | 壺蓋 | (12.0) 4.7 - | 全体が半円球状を呈し、天井部と口縁部の境と端部内面に沈線が施され、「口縁部は垂直に下りる。」 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | ヘラ記号「井」 |
| 6070 | 排水溝 | 土師器 | 模倣壺身 | (12.0) 4.0 - | 弓張り状の底部から稜を有し、口縁部で僅かに内傾している。 | 磨滅のため不明。 | 黒砂粒少量 径0.2~1.0 | 良好 橙色 | |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量 (cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|------|-------|-----|-------------------|----------------------|--|----------------------------|---------------------|--------------|---------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 6071 | 排水溝 | 土師器 | 模倣壺身 | (11.4) 5.0 - | やや丸味のある弓張り状の底部から稜を有し、口縁部で僅かに内傾している。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶色粒少量 径0.2~1.3 | 良好 橙色 | |
| 6072 | 排水溝 | 土師器 | 壺身 | (12.4) 3.8 - | 平底の底部から僅かな稜を有し、口縁部は直線的にやや開く。 | 磨滅のため不明。 | 赤色粒やや多い 径0.2~1.0 | 良好 橙色 | |
| 6073 | 排水溝 | 土師器 | 壺身 | (12.8) 4.8 - | 半円球状に底部から口縁部まで立ち上がり、端部は細く尖っている。 | 外面はミガキが施されている。 | 赤色粒やや多い 径0.1~1.5 | 良好 にぶい橙色 | |
| 6074 | 排水溝 | 土師器 | 壺 (口縁部) | 10.3 - - | 直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で直立から内傾気味となっている。 | 磨滅のため不明。 | 黒・茶色粒 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | |
| 6075 | 排水溝 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 直線的に開きながら据部で「ハ」字状を呈し、外に引き出している。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.2~1.5 | 良好 にぶい橙色 | 裾部推定径9.0cm 残存部の器高6.0cm |
| 6076 | 排水溝 | 土師器 | 高壺 (脚部) | - - - | 直線的に下りて長脚となる。空洞部は高い。 | 空洞部にヘラ削り痕。 | 砂粒やや多い 径0.3~0.7 | 良好 橙色 | 接合部径3.5cm |
| 6077 | 排水溝 | 土師器 | 甕 | 18.6 - - | 胴部は緩やかに内彎して、頸部が「く」字状を呈し、直線的に開き立ち上がる。 | 外面は斜・縦位のハケメ 内面は横位のハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 淡橙色 | |
| 6078 | 排水溝 | 土師器 | 甕 | 10.5 | 最大径は口縁部に有り、底部は丸底に近く、直胴形。頸部で弱い「く」字状。口縁部で直立気味。 | 外面は縦位のやや粗いハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~5.0 | 良好 橙色 | 胴部下位の器壁は1.0cmとやや厚い。 |
| 6079 | 排水溝 | 土師器 | 甕 (底部~胴部下半) | - - - | 平底の底部からほぼ直線的に立ち上がり直胴形を呈していると思われる。 | 胴部外面は縦・斜位のハケメが一部で格子状に施される。 | 砂粒やや多い 径0.2~3.0 | 良好 にぶい黄橙色 | |
| 6080 | 排水溝 | 土師器 | 逆鉢形の蓋 | 27.0 12.5 - | ほぼ直線的に斜めに「ハ」字状に開き、口縁部で僅かに外反している。 | 外面は斜位のハケメ。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 橙色 | 把手部径3.5cm |
| 6081 | 排水溝 | 土師器 | 高台把手付鉢形土器 (仮称) | 32.7 19.0 - | 底部から直線的に逆「ハ」字状に開いて立ち上がり、口縁部で肥厚させ端部は外傾。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~3.0 | 良好 橙色 | 高台径16.3cm |
| 6082 | 排水溝 | 土師器 | 甕 | 25.5 28.4 10.0 | 直胴形で、口縁部で僅かに内彎気味となり、端部をやや細く尖らせる。把手は角状。 | 胴部外面は縦位のハケメ 内面は横位のハケメ。 | 赤色粒多い 径0.5~2.0 | 良好 黄橙色 | |
| 6083 | K4-TP | 須恵器 | 壺身 | (9.4) - - | 弓張り状の底部から短い口縁部へ立ち上がっている。 | 外面のヘラ削りは狭い。 内面は回転ナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5 | 良好 灰色 | 推定最大径11.4cm |
| 6084 | K4-TP | 土師器 | 壺 | (12.0) 4.3 - | やや丸味を帯びた底部から湾曲して立ち上がり、口縁部を直立気味にして端部を尖らせる。 | 底部の外面に指頭痕。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.5 | 良好 橙色 | |

3. 奈良・平安時代の土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|------------|-------|------|---------------|-------------------------|--|------------------------------------|--------------------|-----------|-------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 4700 | 第9号土坑 | 須恵器 | 碗 (底部) | - - 7.8 | 平底から大きく開いて立ち上がると思われる。高台部は僅かに作り出している。 | 外面はヘラ削りの後にナデ調整、内面はナデ調整。 | 黒色粒微量 径0.2~1.0 | 良好 灰白色 | |
| 4708 | 第9号土坑 | 須恵器 | 碗 (口縁部) | (16.5) - - | 口縁部は大きく開き、端部は丸めている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5 | 良好 灰白色 | |
| 1070 | 第6号溝 | 須恵器 | 鉢 (底部) | - - 7.7 | 平底に「ハ」字状の高台。胴部は直線的に斜めに開き立ち上がる。 | 外面はヘラ削り、高台部はナデ調整、内面は(L)のヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | |
| 4828 | 第9号溝 | 須恵器 | 坏蓋 | (12.6) 3.2 - | 弓張り状の天井部から口縁部をほぼ垂直に下ろし、天井部と口縁部境には何も施していない。 | 天井部の外面はヘラ削り 内面はナデ調整に指頭痕が認められる。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | |
| 4833 | 第9号溝 | 陶器 | 山茶碗 | 15.4 6.2 - | 平底に断面が台形状の高台、胴部は緩やかに内彎して開き、口唇部にかけて外反、端部を細く丸める。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 高台径7.4cm |
| 4832 | 第9号溝 | 灰釉陶器 | 高台付碗 | 12.2 3.8 - | 平底の「ハ」字状の断面の高台を付けている。 | 底部の外面には回転糸切り痕。 | 砂粒繊密 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 高台部推定径7.6cm |
| 3463 | H-4 | 須恵器 | 模倣坏蓋 | (16.6) 4.3 - | 径2.8cmの扁平な宝珠状のつまみが付き、天井部は弓張り状。端部を明瞭に折り曲げ受部を作る。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5 | 良好 灰色 | |
| 2667 | H-4 | 須恵器 | 坏蓋 (天井部) | - - - | 径3.1cmの扁平な宝珠状のつまみが付く。 | 天井部は同心円のヘラ削り。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | |
| 1718 | I-4 | 須恵器 | 坏蓋 | - - - | 径3.0cmの扁平な宝珠状のつまみが付く。 | 内面は渦巻き状のナデ調整、外表面はヘラ削り。 | 砂粒繊密 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | |
| 4334 | D-7 | 須恵器 | 坏身 (底部) | - - (4.4) | 平底から僅かに内彎して大きく開いて立ち上がる。 | 磨滅のため不明。 | 精製 | 良好 灰白色 | |
| 3751 | F-6 | 須恵器 | 坏身 (底部) | - - 4.0 | 平底の底部から内彎気味に立ち上っている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | |
| 3560 | C-8 | 須恵器 | 碗 (底部) | - - - | 平底の底部に僅かに薄い高台が付いている。 | 磨滅のため不明。 | 精製 | 良好 灰白色 | |
| 182 236 | E-8 | 須恵器 | 高台付坏 | 14.0 3.8 - | 底部は平底で、口縁部が外傾して開き気味の箱形坏部に「ハ」字状に開く高台が付く。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒やや多い 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | |
| 1088 | I-4 | 須恵器 | 高台付坏身 | (14.4) 4.3 (10.8) | 底部から口縁部にかけての屈曲は緩やかで丸味を帯び、端部は丸めている。高台は断面が四角形。 | 内外面ともにナデ調整。 | 砂粒繊密 径0.5 | 良好 灰白色 | |
| 1763 | I-4 | 須恵器 | 高台付坏身 | - - - | 底部から緩やかに丸味を帯びて立ち上がっている。高台は断面が四角形でやや高くなっている。 | 内外面ともにナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 高台推定径9.8cm |
| 1083 | I-4 | 須恵器 | 高台付坏身 (底部) | - - - | 胴部へは緩やかに開いて立ち上がっている。高台は「ハ」字状に開き端部を丸めている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒繊密 径0.5 | 良好 灰白色 | 高台推定径5.5cm |
| 698 | F-7 | 灰釉陶器 | 高台付坏 (底部) | - - - | 平底の底部から緩やかに開いて立上がりっている。高台は「ハ」字を押しつぶしたように付いている。 | 底部外面はヘラ削り、他はナデ調整。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 高台推定径8.0cm |
| 3557 | C-8 | 須恵器 | 碗 (底部) | - - - | 平底の底部は器壁が1.0cmとやや厚い。 | 外面は静止ヘラ削り後高台を付け、後に回転ナデ調整、内面は丁寧なナデ。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | 高台部径6.8cm |
| 2360 | J-2 | 須恵器 | 碗 (底部) | - - - | 高台は断面が四角形を呈し「ハ」字状に開く。 | 外面はヘラ切り未調整でヘラ削り、内面は渦巻き状のヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 高台部径9.2cm |
| 4826 | D-7 | 須恵器 | 高坏 (脚部) | - - - | ほぼ直線的に下りて裾部で「ハ」字状に開き、端部は三角形。 | 内外面にヘラ削りにナデ調整。外面にはノタ目、ヘラ記号。 | 砂粒少量 径0.2~0.3 | 良好 灰白色 | 接合部径10.0cm |

付表 土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|-----------------------|-------|-----|--------------------|------------------------|---|------------------------------------|------------------|-----------|----------------------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 4968 | B-6 | 須恵器 | 高壺 (脚部) | - - - | 僅かに内擣氣味に下りて裾部で「ハ」字状に開く。 | 外面は回転のヘラ削りにナデ調整、内面は絞り状のヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 接合部径4.0cm |
| 1739 1740 1785他 | I-3・4 | 須恵器 | 短頸壺 (頸部～ 胴部) | - - - | 胸部は偏球状に立ち上がり、頭部で直立している。 | 胸部の1/3下半までヘラ削り、胸部中位にはノタ目。 | 砂粒微量 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | 推定最大径20.0cm 胸部上位に自然釉 |
| 2220 | J-3 | 須恵器 | 有蓋短頸壺 | (11.0) 14.6 13.6 | 平底に断面が台形の高台が付き、胸部は直線的に立ち上がる。口縁部は短く直立して端部を内傾。 | 胸部は内外面ともにヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰色 | |
| 2688 | I-4 | 須恵器 | 短頸壺 | - - - | 頭部は緩やかに外反し、胸部上半は直立氣味に立ち上がり、肩部で屈曲し内傾して緩やかに立ち上がる。 | 接合部はナデ調整によつて丁寧に仕上げられている。 | 砂粒緻密 径0.5 | 良好 灰白色 | 頭部接合部径5.8cm 胸部最大径16.0cm |
| 4318 | B-7 | 須恵器 | 長頸壺 (頸部) | - - - | 緩やかに外反して立ち上がってい | 外面はナデ調整、内面はヘラ削りにナデ調整。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 頭部径5.5cm 内外面に自然釉 |
| 24 | K-3 | 須恵器 | 長頸壺 (胴部) | - - - | 直線的に開きながら立ち上がり、胸部上位の最大径で湾曲して頭部へ内傾している。 | 胸部の1/3にヘラ削り、上半にはノタ目。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 推定最大径16.0cm |
| 1534 | J-4 | 須恵器 | 壺 (底部) | - - (7.9) | 平底の底部から緩やかに内擣して立ち上がる。高台部は断面が四角形で、やや開き氣味に付けている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 胴部器壁 0.9~1.3cm |
| 2218 | J-3 | 須恵器 | 広口壺 | 18.6 - - | 頭部は直線的に開いて立ち上がり口縁部でやや大きく外反、端部を丸める。肩部は緩やかに下がる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 頭部接合部径 9.7cm |
| 2257 | G-4 | 須恵器 | 擂り鉢 (底部) | - - 11.3 | 平底の底部から直線的に開いて立ち上がる。 | 底部外面はヘラ削りの後ナデ調整。指痕痕有り。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 灰白色 | |
| 1473 1474 1476他 | K-3 | 須恵器 | 短頸壺 | (12.6) 16.0 - | やや丸味を帯びた底部から直線的に立ち上がり、肩部で球状に内傾し、頭部～口縁部は「く」字状。 | 胸部外面は1/2下半にヘラ削り、上半にナデ調整。 | 砂粒多い 径0.5~3.0 | 良好 灰白色 | |
| 540 | L-2 | 須恵器 | 壺 (口縁部) | (12.4) - - | 頭部～口縁部にかけて直線的に開いて立ち上がり、口縁部下に沈線を1状施して稜状にしている。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 肩部に自然釉 |
| 1478 | K-3 | 須恵器 | 壺 | - - - | 丸底と思われる底部から胸部中位に最大径を持ち球形状に立ち上がる。 | 胸部下半はタタキ目にナデ調整、上半はヘラ削り。内面は斜位のヘラ削り。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 胸部推定最大径 25.8cm |
| 2245 | J-2 | 須恵器 | 壺 (胴部上半) | - - - | 直線的に内傾して立ち上がり、頭部で「く」字状。 | 外面にタタキ目。 | 砂粒緻密 径0.5~1.0 | 良好 灰白色 | 頭部推定径17.2cm |

4. その他の土器観察表

| 番号 | 出土地点 | 種別 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 調整方法 | 胎土 (径=mm) | 焼成 色調 | 備考 |
|-----|--------|-----|------|----------------|----------------|----------|------------------|---------------|-------------|
| | | | | 口径 器高 底径 | | | | | |
| 989 | 第5号ピット | 土師器 | (把手) | - - - | 断面形状は丸味を帯びた台形。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒微量 径0.5~1.0 | 良好 暗オリーブ灰色 | |
| 823 | B-7 | | 土製人形 | - - - | 女性を模していると思われる。 | 磨滅のため不明。 | 砂粒少量 径0.5~2.0 | 良好 明黄褐色 | 残存部の長さ8.1cm |

写真図版



1. 遺跡の全景（南方上空より撮影）

2. 第8号溝 3. 第12号溝



2. 第8号溝（東から）



3. 第12号溝（南西から）



4. 第12号溝の遺物出土状況（弥生土器）（北西から）



5. 第13号溝（北から）

6. 第13号溝の遺物出土状況（遺物No.5693） 7. 第13号溝の遺物出土状況（遺物No.5698）



6. 第13号溝の遺物出土状況（遺物No.5693）（北西から）

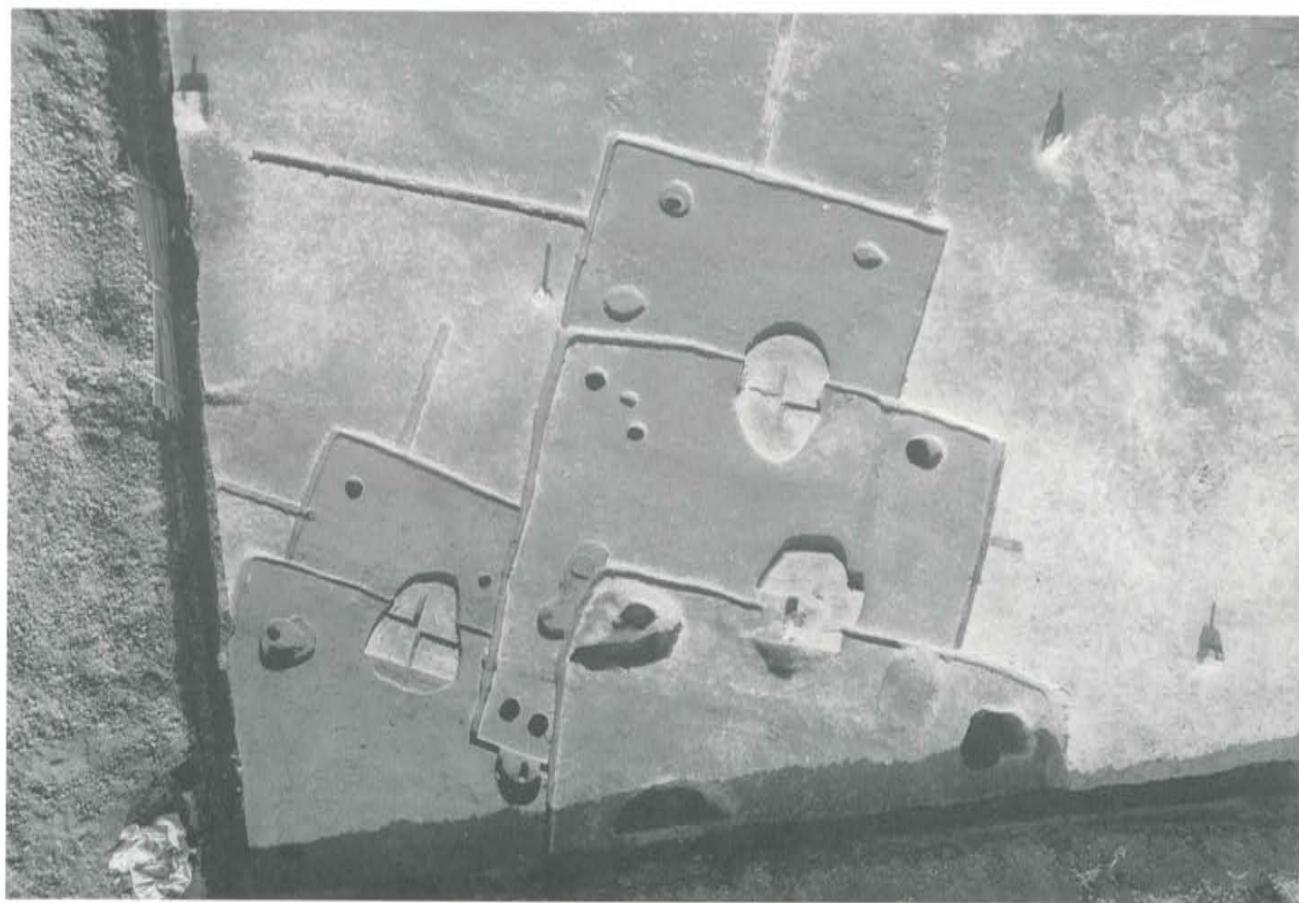


7. 第13号溝の遺物出土状況（遺物No.5698）（北西から）

8. 第1号住居址 9. 第2号から第6号住居址



8. 第1号住居址（南から）



9. 第2号から第6号住居址（南方上空から）

10. 第1号住居址の竈 11. 第1号住居址内の礫出土状況



10. 第1号住居址の竈（北から）



11. 第1号住居址内の礫出土状況（北東から）

12. 第2号住居址の竈と瓶 13. 第2号住居址の遺物出土状況

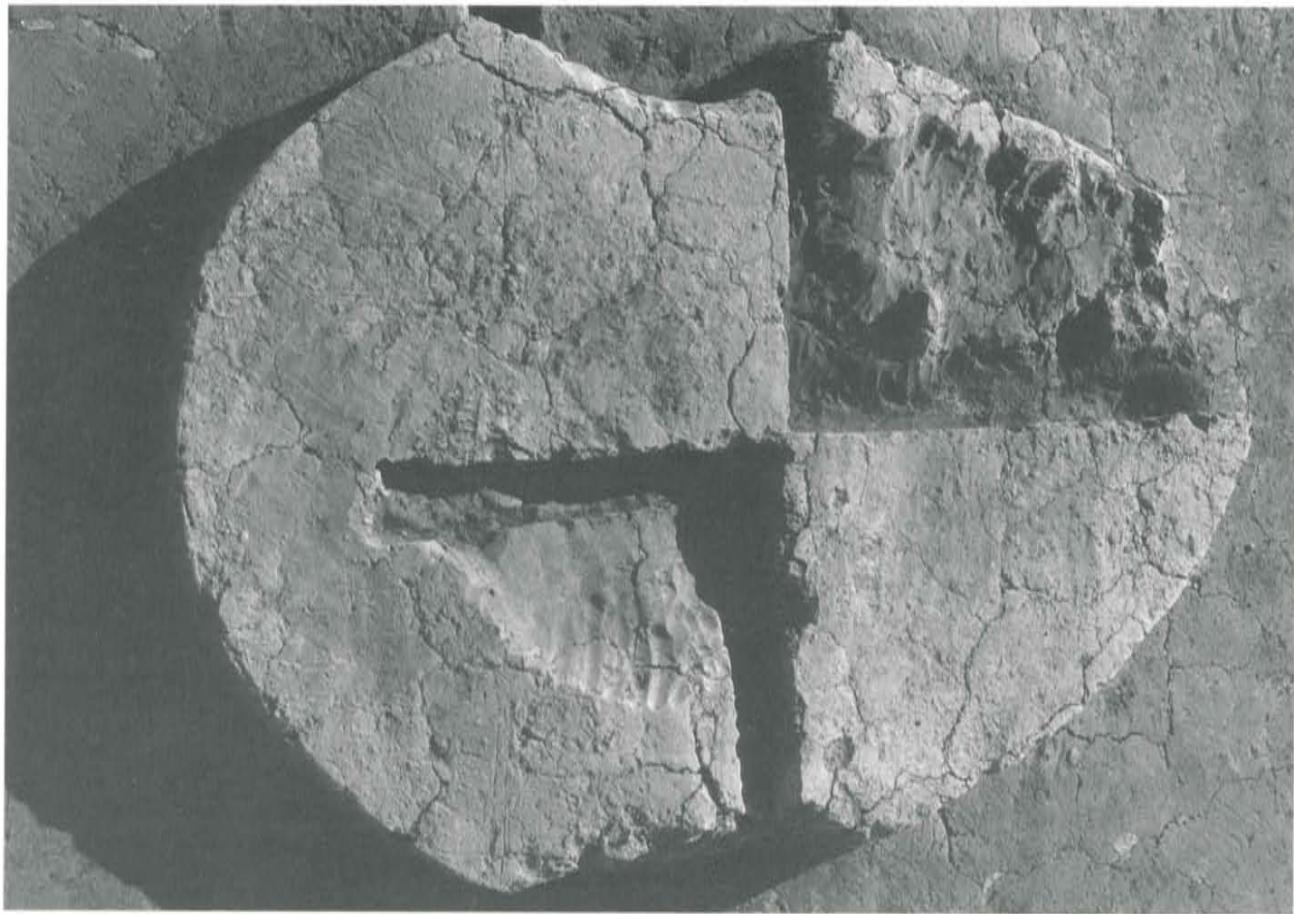


12. 第2号住居址の竈と瓶（南から）



13. 第2号住居址の遺物出土状況（南から）

14. 第3号住居址の竈 15. 第3号住居址の遺物出土状況



14. 第3号住居址の竈（西から）



15. 第3号住居址の遺物出土状況（北から）



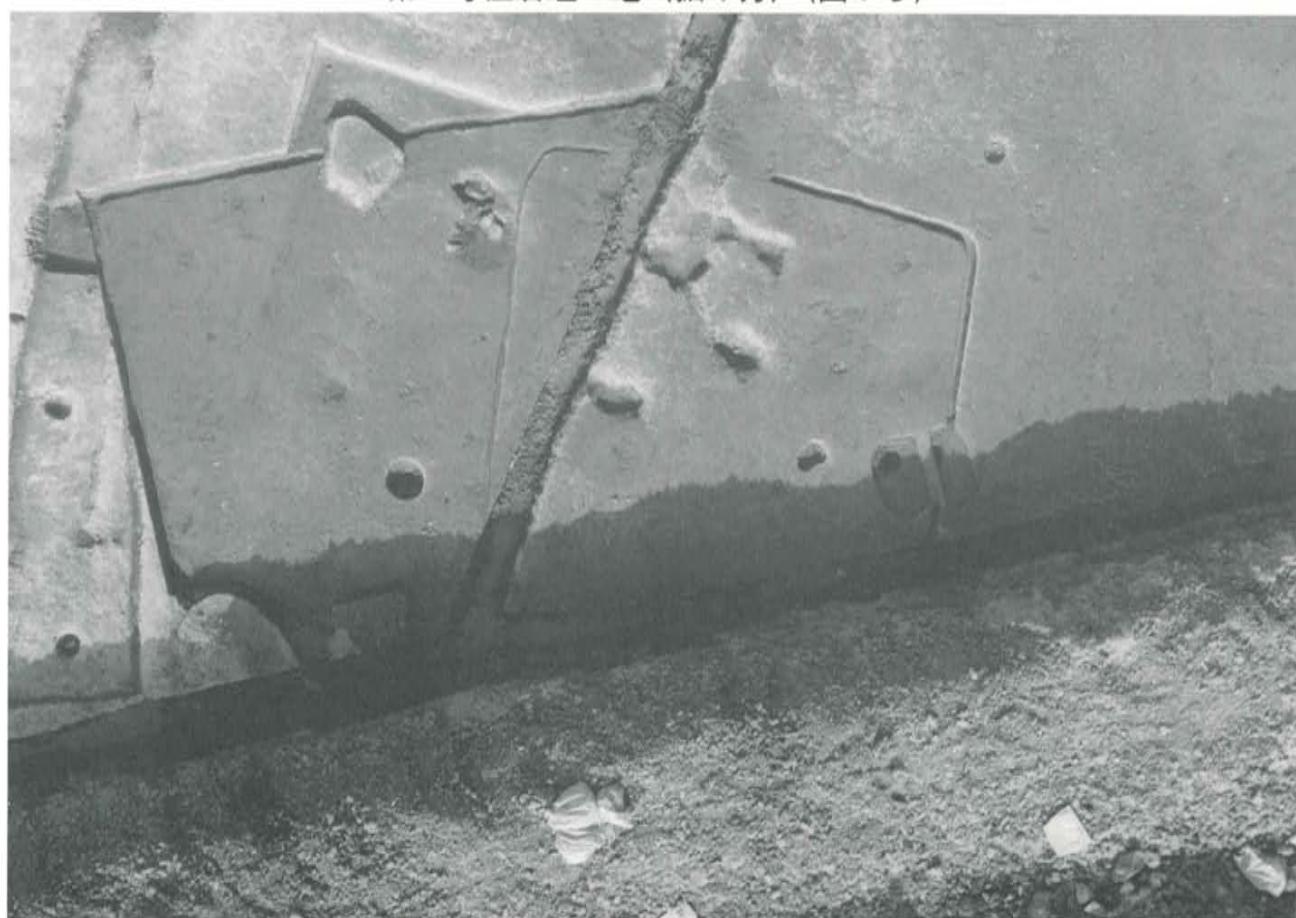
16. 第5号住居址の竈（北から）



17. 第7号住居址（南から）



18. 第7号住居址の竈（掘り方）（西から）



19. 第8号から第10号住居址（南方上空から）

20. 第8号住居址の竈 21. 第10号住居址の竈

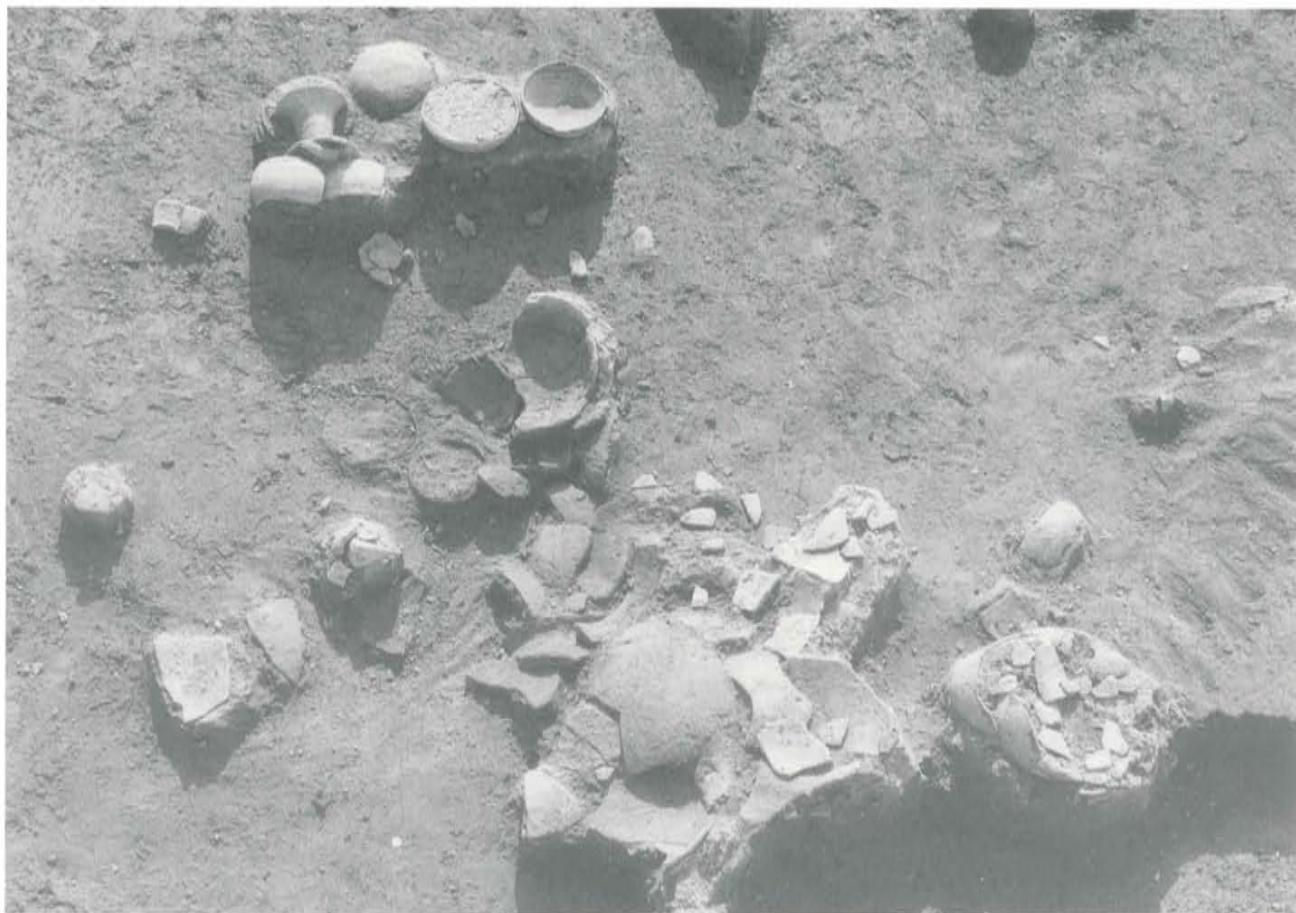


20. 第8号住居址の竈（南から）



21. 第10号住居址の竈（南から）

22. 第10号住居址の遺物出土状況（1） 23. 第10号住居址の遺物出土状況（2）

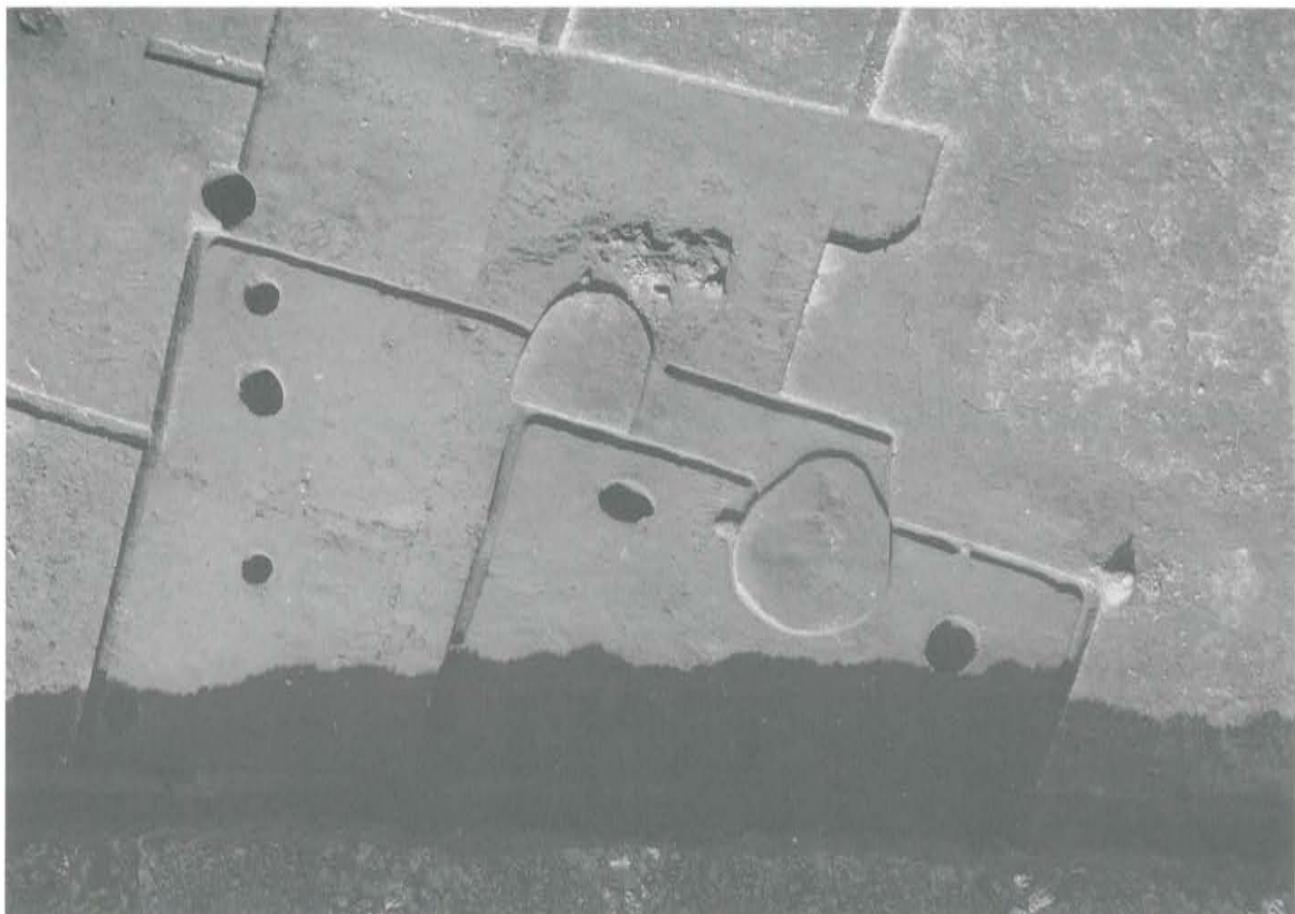


22. 第10号住居址の遺物出土状況（北から）（1）

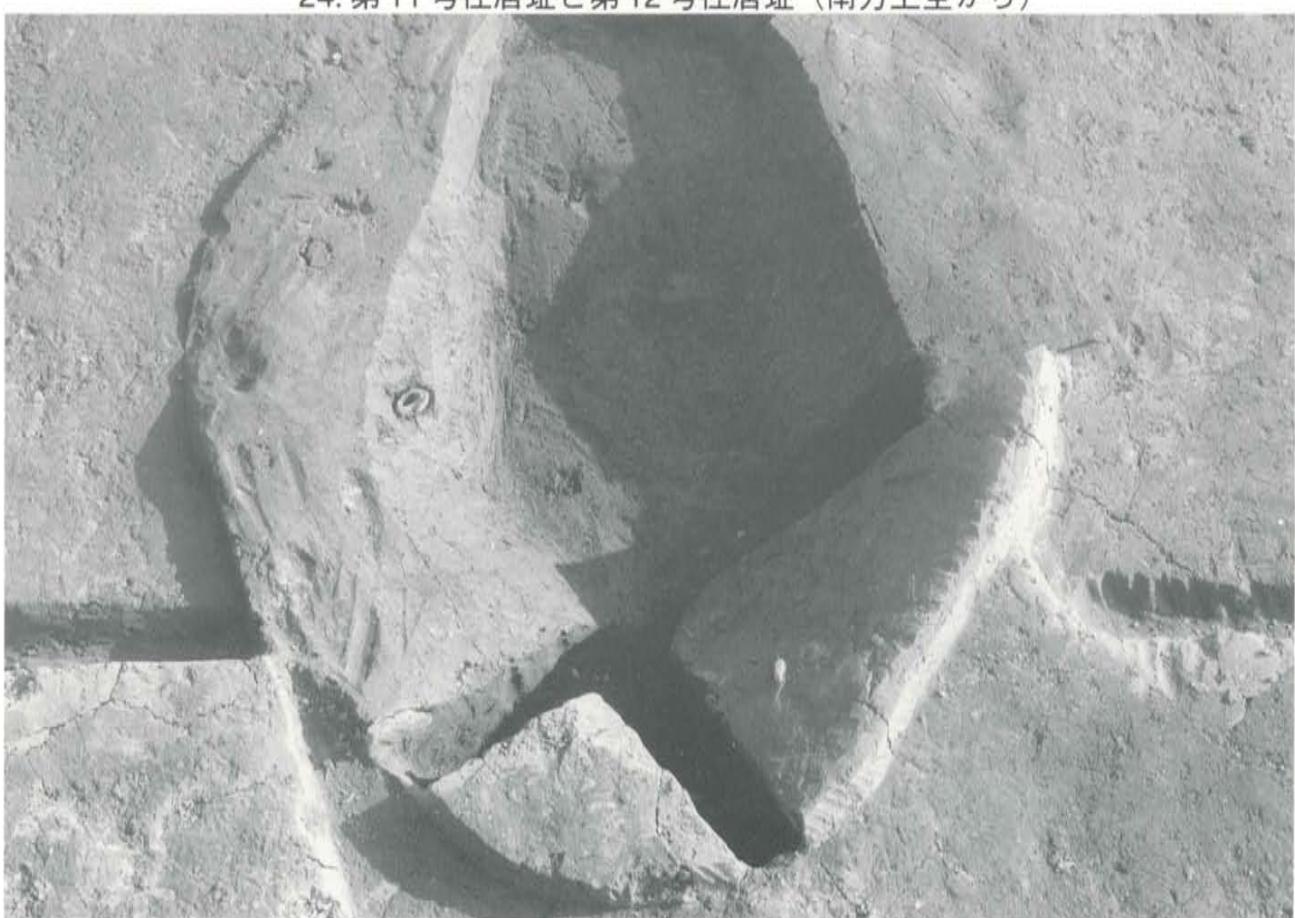


23. 第10号住居址の遺物出土状況（北から）（2）

24. 第11号と第12号住居址 25. 第11号住居址の竈



24. 第11号住居址と第12号住居址（南方上空から）



25. 第11号住居址の竈（北から）

26. 第12号住居址の竈 27. 第5号と第6号土坑

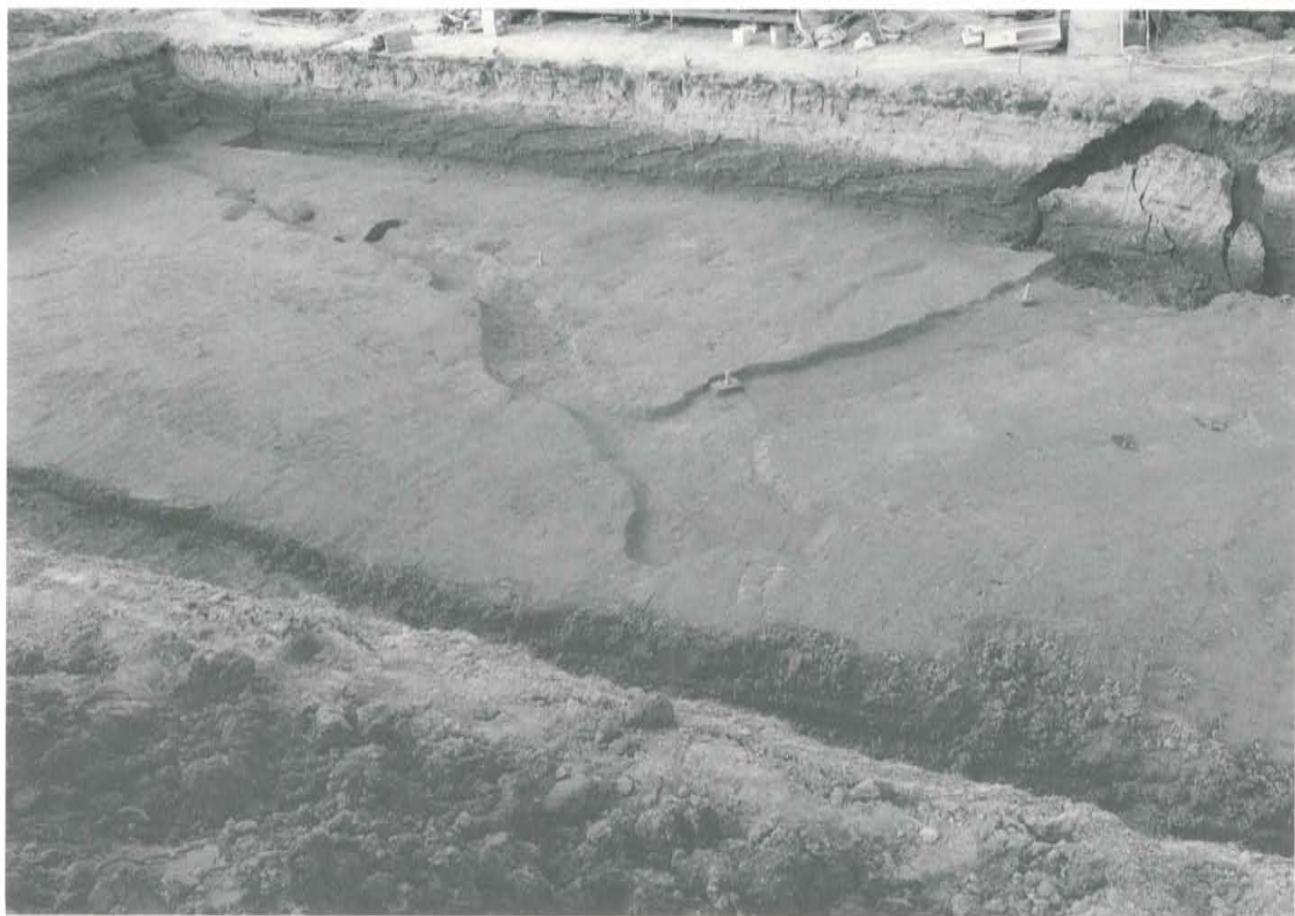


26. 第12号住居址の竈（西から）



27. 第5号（左）と第6号土坑（右）（北から）

28. 第11号溝 29. 第12号溝の遺物出土状況（土師器）



28. 第11号溝（南東から）



29. 第12号溝の遺物出土状況（土師器）（南東から）

30. 第3号溝 31. 第1号溝と第4号から第6号ピット



30. 第3号溝（北西から）



31. 第1号溝と第4号から第6号ピット（確認時プラン）

32. 溝状遺構から出土した弥生土器



8 溝一 遺物No.6001



8 溝一 遺物No.6003



8 溝一 遺物No.6004



8 溝一 遺物No.6020



8 溝一 遺物No.6021



8 溝一 遺物No.6006



8 溝一 遺物No.6008



8 溝一 遺物No.6035



12溝一 遺物No.5648.2



8 溝一 遺物No.6029



13溝一 遺物No.5693



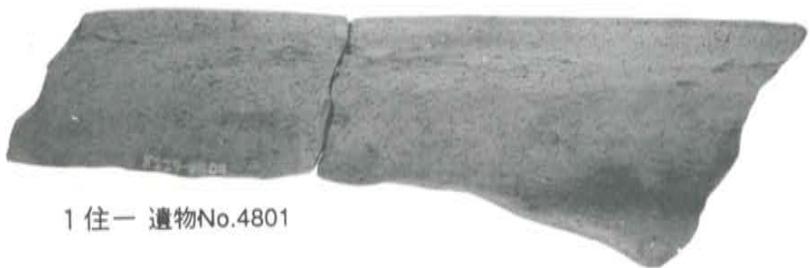
13溝一 遺物No.5698



13溝一 遺物No.5703

32. 溝状遺構から出土した弥生土器

33. 古墳時代の住居址から出土した遺物（1）



2住一 遺物No.5147.1

2住一 遺物No.5523

2住一 遺物No.5016



3住一 遺物No.5293.1



3住一 遺物No.5293.2

33. 古墳時代の住居址から出土した遺物（1）

34. 古墳時代の住居址から出土した遺物（2）



4 住一 遺物No.5410



6 住一 遺物No.5289



7 住一 遺物No.5014



6 住一 遺物No.4289他



10住一 遺物No.5532



10住一 遺物No.5122



10住一 遺物No.5123他



10住一 遺物No.5125



10住一 遺物No.5121



10住一 遺物No.5533



10住一 遺物No.5141



10住一 遺物No.5135.1



11住一 遺物No.5586

34. 古墳時代の住居址から出土した遺物（2）

35. 古墳時代の土坑・溝状遺構から出土した土器



12土一 遺物No.5497



5 土一 遺物No.2623



12土一 遺物No.5491



12土一 遺物No.5284.1



8 溝一 遺物No.5632



13土一 遺物No.5284.3



11溝一 遺物No.5602.1



13土一 遺物No.5287.2



12溝一 遺物No.5683



12溝一 遺物No.5680



12溝一 遺物No.5681



12溝一 遺物No.5491

35. 古墳時代の土坑・溝状遺構から出土した土器

36. 古墳時代の遺構以外から出土した土器



B9— 遺物No.211



B8— 遺物No.4972



B7— 遺物No.4317



K4— 遺物No.5502



I4— 遺物No.1750



H5— 遺物No.3467～75



排一 遺物No.6080



排一 遺物No.6081

36. 古墳時代の遺構以外から出土した土器

37. 奈良・平安時代の土坑・溝状遺構・遺構外から出土した土器 38. その他の遺物



9 溝一 遺物No.4833



D7— 遺物No.4826



H4— 遺物No.3463



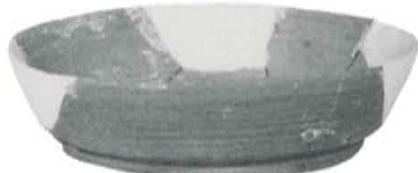
B7— 遺物No.4318



I3・4— 遺物No.1739他



H4— 遺物No.2667



E8— 遺物No.182他



J3— 遺物No.2218



K3— 遺物No.1478

37. 奈良・平安時代の土坑・溝状遺構・遺構外から出土した土器



B7— 遺物No.823



L3— 遺物No.3861

38. その他の遺物

平成6年8月31日 発行

静岡県掛川市
曾我後遺跡発掘調査報告書

編集：静岡人類史研究所

〒422 静岡市高松二丁目10-17

TEL 054-237-7637

発行：掛川市教育委員会

〒436 掛川市水垂51番地

TEL 0537-24-7773

印刷：有限会社 文書サービス

